

茅

弓振日向遺跡

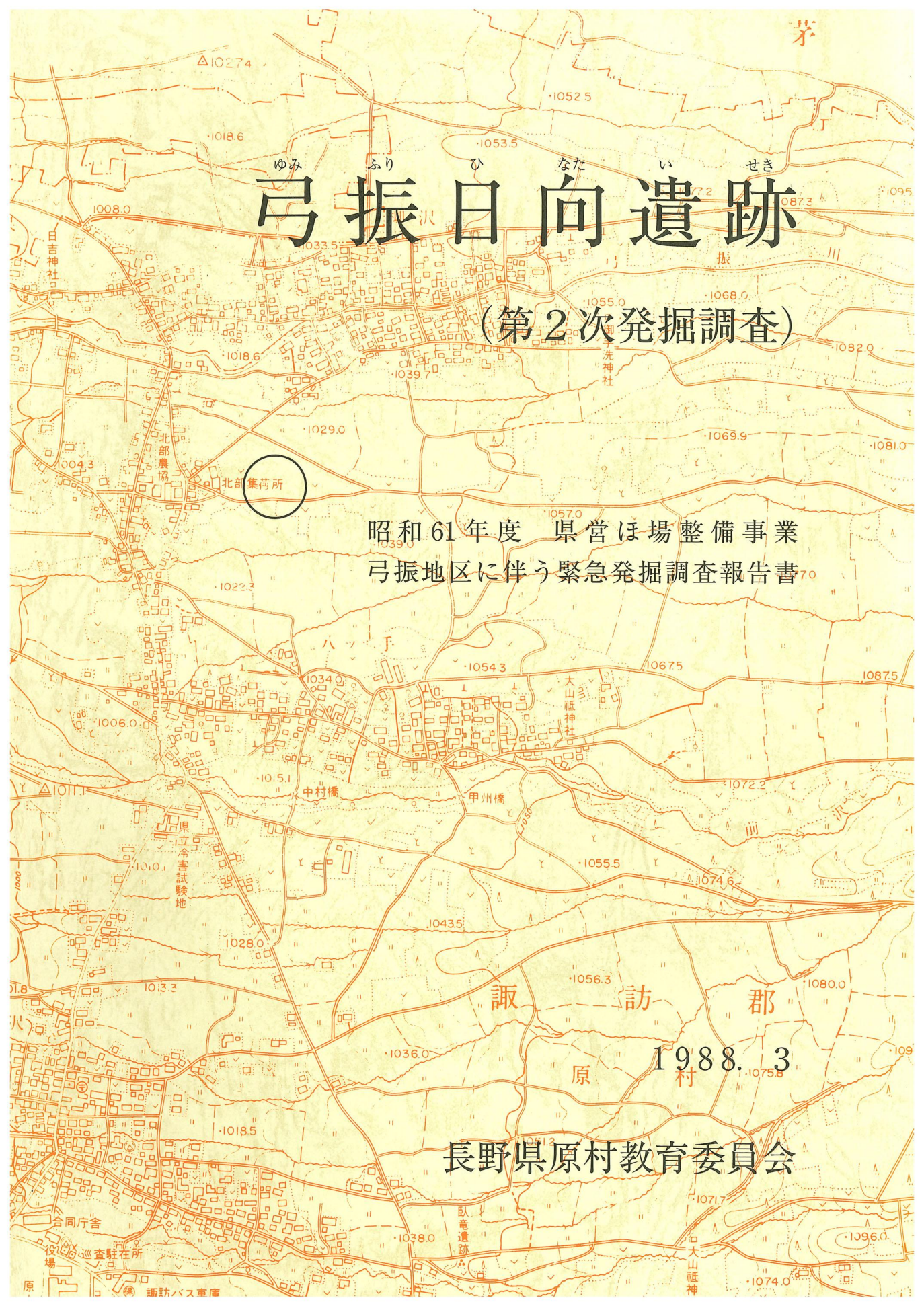
(第2次発掘調査)



昭和61年度 県営ほ場整備事業
弓振地区に伴う緊急発掘調査報告書

1988. 3

長野県原村教育委員会



茅

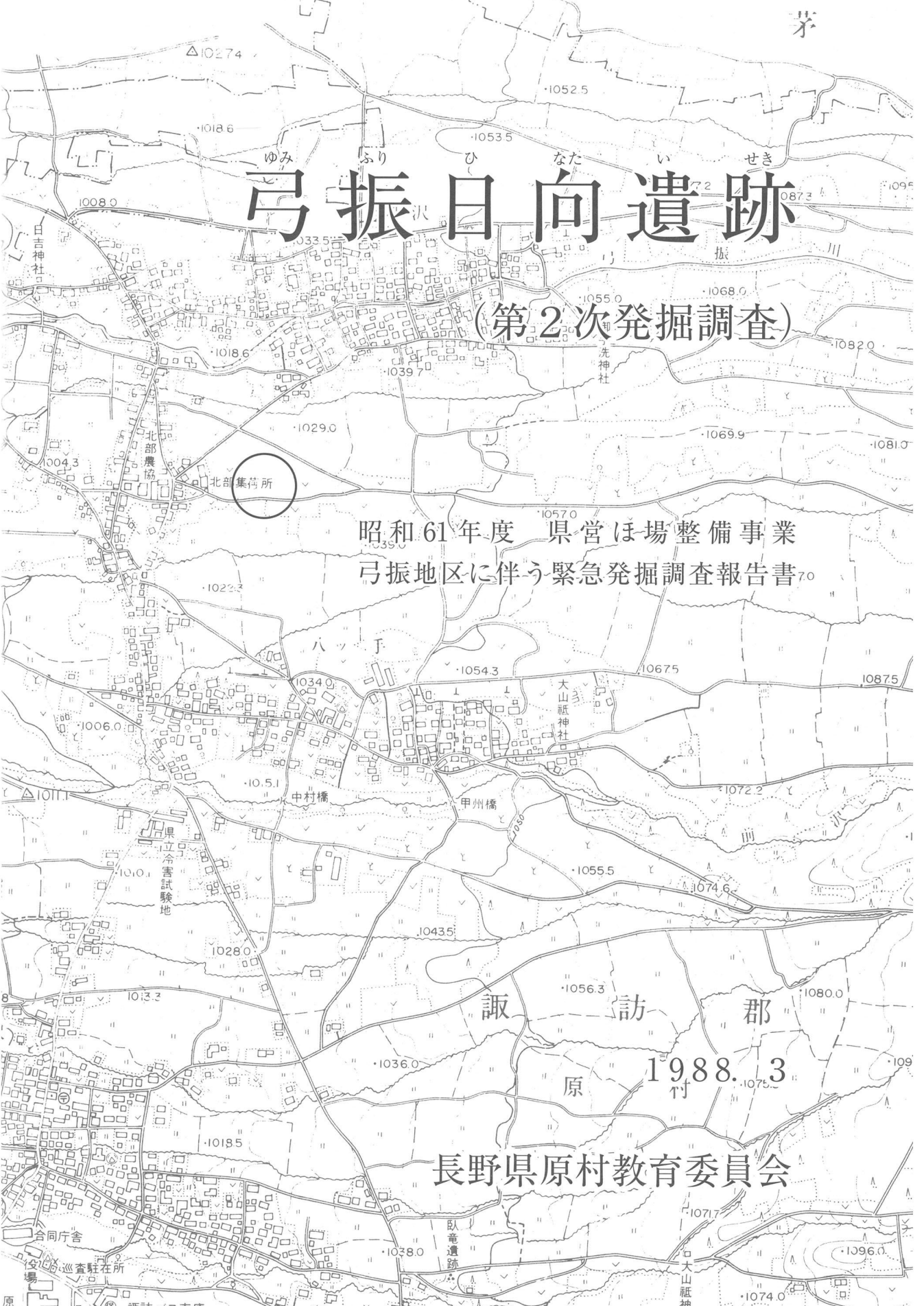
弓振日向遺跡

(第2次発掘調査)

昭和61年度 県営ほ場整備事業
弓振地区に伴う緊急発掘調査報告書⁷⁰

1988. 3

長野県原村教育委員会



表紙地図10,000分の1 ○印が弓振日向遺跡

序

このたび弓振日向遺跡の第2次緊急発掘調査報告書を刊行することになりました。発掘調査は県営ほ場整備事業弓振地区に伴うもので、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査費の補助金交付を受けた原村教育委員会が実施したものであります。

八ヶ岳西麓に展開する原村は、村の基幹産業である農業の合理化と生産性向上が求められ、大規模な県営ほ場整備事業が進められております。また、八ヶ岳西南麓地方は遺跡の宝庫・縄文のふるさととして全国的に著名であり、古くから注目を集めて来ました。このような地域にあり、遺跡をいかなる形で保護していくか、最も妥当な方法を検討しているところであります。

発掘調査は、昭和60年秋に行った遺跡範囲確認調査の成果をもとに着手し、縄文時代中期の竪穴住居址10軒、小竪穴70基、特殊遺構1箇所を発見し、それらに伴う数多い土器と石器が出土しました。

調査の終盤には思いもかけない先土器時代の石器が出土しましたが、すでに周辺の工事は進み遺跡だけが高台として残った状態でありました。そのような中で先土器時代の発掘調査に係わる協議では、諏訪地方事務所土地改良課、柳沢区および実行委員会、地元地権者の方々のご理解とご協力、明治大学文学部教授戸沢充則、文化庁天然記念物課調査官岡本東三、長野県教育委員会文化課指導主事小林孚、太田喜幸、芦部公一の諸氏には多大な指導をいただきました。ご協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場で、ご苦勞された作業員の皆様の方により、失われていく貴重な文化財を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程で、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

例 言

- 1 本報告は「昭和61年度県営ほ場整備事業弓振地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柳沢に所在する弓振日向遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけた原村教育委員会が、昭和61年5月1日から11月28日にかけて実施した。整理作業は、昭和61年11月29日から63年3月15日まで行った。
- 3 調査における記録は大竹憲昭・小菅将夫・萩幸二・平出一治・五味一郎・伊藤証・平林とし美、遺構の実測と写真撮影は平出・平林が行い、遺構のトレースは平林が行った。
- 4 テフラ層の分析は帝京大学山梨文化財研究所に委託した。
- 5 土器の実測は中央航業株式会社に委託したが、一部の実測と拓本は平林とし美・山形真理子・柳沢永子、トレースは平林・山形が行い、先土器時代の石器の実測とトレースは大竹憲昭・縄文時代の石器の実測とトレースは鶴田典昭・平林とし美が行った。
- 5 執筆はⅠ～Ⅳを平出一治、Ⅴを大竹憲昭、Ⅵ-1を平出、Ⅵ-2-(1)を山形真理子、Ⅵ-2-(2)を鶴田典昭、Ⅵ-2-(3)を山形・鶴田、Ⅶを平出が担当した。
- 6 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、78の原村遺跡番号を表記した。

目 次

例 言

目 次

I	発掘調査の経過	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	調査組織	1
3	発掘調査の経過（抄）	3
II	遺跡の立地環境	4
III	調査方法	7
1	調査区の設定	7
2	調査の方法	7
3	調査の概要	10
IV	土 層	13
V	先土器時代の遺構と遺物	15
1	遺構と遺物	15
2	遺構外出土石器	19
	弓振日向遺跡のテフラ層	40
VI	縄文時代の遺構と遺物	47
1	遺構と遺物	47
(1)	竪穴住居址	47
(2)	小竪穴	94
(3)	単独土器	114
(4)	ロームマウンド	114
(5)	遺構外出土遺物	118
2	調査の成果と課題	136
(1)	土器	136
(2)	石器	149
(3)	集落と遺物分布について	159
(4)	まとめ	172
VII	結語	173
	参考文献	174

図 版 目 次

- 第1図 原村域の地形断面模式図（宮川—弓振日向遺跡—赤岳ライン）
- 第2図 弓振日向遺跡の位置と付近の遺跡
- 第3図 発掘調査区域図・地形図
- 第4図 グリッド配置図
- 第5図 先土器時代調査範囲図
- 第6図 遺構配置図
- 第7図 土層図
- 第8図 先土器時代グリッド設定図
- 第9図 先土器時代遺物全体分布図
- 第10図 先土器時代遺物接合図
- 第11図 先土器時代遺物分布図 その1
- 第12図 先土器時代遺物分布図 その2
- 第13図 先土器時代遺物分布図 その3
- 第14図 先土器時代遺物 その1
- 第15図 先土器時代遺物 その2
- 第16図 先土器時代遺物 その3
- 第17図 先土器時代遺物 その4
- 第18図 先土器時代遺物 その5
- 第19図 先土器時代遺物 その6
- 第20図 先土器時代遺物 その7
- 第21図 先土器時代遺物 その8
- 第22図 先土器時代遺物 その9
- 第23図 先土器時代遺物 その10
- 第24図 先土器時代遺物 その11
- 第25図 弓振日向遺跡位置図
- 第26図 八ヶ岳西山麓のテフラ層柱状図
- 第27図 Aトレンチ、テフラ試料の鉱物組成
- 第28図 Bトレンチ、テフラ試料の鉱物組成
- 第29図 1/8-1/16mm砂分中のA・A'型ガラス量
- 第30図 石器実測図の表現方法

- 第31図 第1号竪穴住居址
- 第32図 第1号竪穴住居址出土土器
- 第33図 第1号竪穴住居址出土石器 その1
- 第34図 第1号竪穴住居址出土石器 その2
- 第35図 第3号竪穴住居址、小竪穴8・68
- 第36図 第3号竪穴住居址出土土器
- 第37図 第3号竪穴住居址出土石器 その1
- 第38図 第3号竪穴住居址出土石器 その2
- 第39図 第4号竪穴住居址、小竪穴3
- 第40図 第4号竪穴住居址出土土器 その1
- 第41図 第4号竪穴住居址出土土器 その2
- 第42図 第4号竪穴住居址出土土器 その3
- 第43図 第4号竪穴住居址出土土器 その4、土製品
- 第44図 第4号竪穴住居址出土土器 その5
- 第45図 第4号竪穴住居址出土石器 その1
- 第46図 第4号竪穴住居址出土石器 その2
- 第47図 第4号竪穴住居址出土石器 その3
- 第48図 第5号竪穴住居址
- 第49図 第5号竪穴住居址出土土器 その1
- 第50図 第5号竪穴住居址出土土器 その2
- 第51図 第5号竪穴住居址出土石器
- 第52図 第6号竪穴住居址、小竪穴5
- 第53図 第6号竪穴住居址出土土器
- 第54図 第6号竪穴住居址出土石器
- 第55図 第7号竪穴住居址、小竪穴7
- 第56図 第7号竪穴住居址出土土器 その1
- 第57図 第7号竪穴住居址出土土器 その2、石器
- 第58図 第8号竪穴住居址、小竪穴69・70
- 第59図 第8号竪穴住居址出土土器
- 第60図 第8号竪穴住居址出土石器 その1
- 第61図 第8号竪穴住居址出土石器 その2
- 第62図 第9号竪穴住居址
- 第63図 第9号竪穴住居址出土土器 その1
- 第64図 第9号竪穴住居址出土土器 その2

- 第65図 第9号竪穴住居址出土土器 その3、石器 その1
第66図 第9号竪穴住居址出土石器 その2
第67図 第10号竪穴住居址、出土土器
第68図 第2号竪穴住居址、出土土器、石器
第69図 小竪穴1・2・4・6・9・10・19・20
第70図 小竪穴41・42・48・49・63~67
第71図 小竪穴12~18・50~53
第72図 小竪穴11・21~36・54・55
第73図 小竪穴37~40・43~47
第74図 小竪穴56~62
第75図 小竪穴出土土器 その1
第76図 小竪穴出土土器 その2
第77図 ロームマウンド1・2、小竪穴・ロームマウンド出土石器
第78図 遺構外出土土器 その1
第79図 遺構外出土土器 その2
第80図 第9号竪穴住居址出土土器 その4、遺構外出土土器・土製品 その3
第81図 遺構外出土石器 その1
第82図 遺構外出土石器 その2
第83図 遺構外出土石器 その3
第84図 遺構外出土石器 その4
第85図 遺構外出土石器 その5
第86図 遺構外出土石器 その6
第87図 土器接合図 その1
第88図 土器接合図 その2
第89図 土器接合図 その3
第90図 土器接合図 その4
第91図 土器接合図 その5
第92図 土器接合図 その6
第93図 土器接合図 その7
第94図 土器接合図 その8
第95図 住居址出土新道式土器・器種・系統別組成グラフ
第96図 石鏃重量頻度グラフ
第97図 ピエス・エスキーユの分類
第98図 ピエス・エスキーユの打点形状模式図

- 第99図 打製石斧欠損部位とその点数
- 第100図 石核の分類
- 第101図 石器組成累積グラフ
- 第102図 包含層の遺存状態と発掘の精度
- 第103図 遺構外出土土器重量分布・中期（新道式期）の土器全体
- 第104図 遺構外出土土器重量分布・A横帯区画文系統+ B抽象文系統の土器
- 第105図 遺構外出土土器重量分布・D半隆起線区画文系統の土器
- 第106図 遺構外出土土器重量分布・E沈線文系統の土器
- 第107図 遺構外出土土器重量分布・F平出ⅢA系統の土器
- 第108図 遺構外出土土器重量分布・後期（堀之内式期）の土器全体
- 第109図 石鏃出土分布図
- 第110図 石錐・石匙Ⅰ類出土分布図
- 第111図 ピエス・エスキューユ出土分布図
- 第112図 打製石斧出土分布図
- 第113図 横刃形石器・石匙Ⅱ類出土分布図
- 第114図 磨石凹石類・石皿・磨製石斧出土分布図
- 第115図 石核・原石出土分布図
- 第116図 黒曜石剥片出土分布図
- 第117図 黒曜石以外の剥片出土分布図

表 目 次

- 表1 弓振日向遺跡と付近の遺跡一覧
- 表2 ブロック別出土層位組成表
- 表3 ブロック別器種組成表
- 表4 出土遺物属性表
- 表5 石器出土層準直下テフラ分析結果
- 表6 土器重量計測値一覧表
- 表7 遺構別石器出土点数
- 表8 ピエス・エスキューユ分類別個体数
- 表9 磨石・凹石・敲石の痕跡別個体数
- 表10 凹面数別個体数

表11 周辺遺跡の住居址内出土石器数

表12 遺構内外の石器点数と出土比率

表13 縄文時代遺構一覧表

表14 縄文時代石器一覧表

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

原村教育委員会では、県営ほ場整備事業弓振地区内における分布調査を、昭和59年10月13日に実施し、弓振日向地籍で縄文時代中期の土器破片と石器を採集した。これは新遺跡の発見であり、昭和59年10月17日に行われた長野県教育委員会の「昭和60年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議」において、長野県教育委員会文化課、南信土地改良事務所（昭和61年4月から諏訪地方事務所土地改良課）・原村役場農林課・原村教育委員会の4者で協議された。分布調査の結果だけでは資料不足のこともあり、遺跡の性格をはじめ範囲等については不明瞭な点が多く、適切な結論を導き出すことはできなかったため、早急に遺跡の範囲を明確にすることが課題として残された。

しかし、範囲確認調査ができないまま昭和60年9月6日に行われた長野県教育委員会の「昭和60年度実施予定の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議」において、上記4者で再度協議を行い前年度同様の結論となる。そこで、原村教育委員会は早急に範囲確認調査を計画し、11月20日から12月6日にわたり範囲確認調査を実施した。

その結果、遺跡の広がりには尾根上の平坦部から北斜面におよぶ径110m位であることがわかった。その後、長野県教育委員会文化課と原村教育委員会では保護に係る話し合いを、また、地元に対する説明と協議を行った。原村教育委員会は諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託を、地元負担金については国庫および県費から発掘調査補助金交付をうけて、昭和61年5月1日から11月28日にわたり弓振日向遺跡第2次緊急発掘調査を実施した。

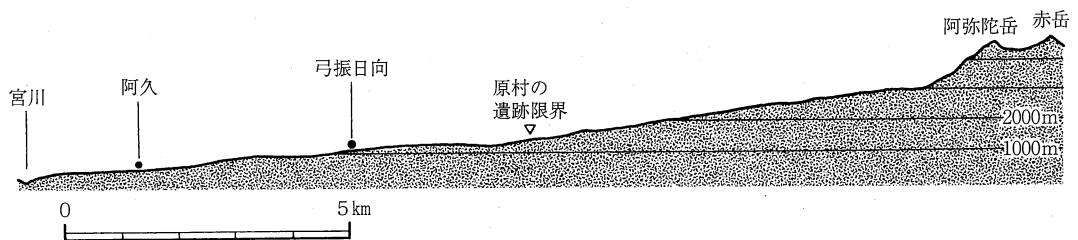
2 調査組織

弓振日向遺跡発掘調査団

昭和61年度発掘調査

団 長	平林 太尾 (原村教育委員会教育長)
調査担当者	平出 一治
調 査 員	宮坂 光昭 大竹 憲昭 小菅 将夫 萩 幸二 五味 一郎
	伊藤 証
調査補助員	平林とし美

発掘作業	今泉かめ子 五味としゑ 菊池 利光 岡本 常幸 山田ふじゑ 北原さよ子 柳沢 永子	鎌倉 長重 宮坂とし子 真道 ふき 小池一二三 日達寿美香 牛山 房子	五味かずゑ 藤原智恵子 津金 一江 角田 義雄 篠原三千雄 小林 清	阿部よし子 小林 静子 白鳥すみゑ 角田眞己枝 高橋かがり 小林 禎子	中村すずみ 中村よしの 行田 末平 牛山 雪子 菊池 卓子 牛山あや子
指導協力者	岡本 東三 小林 公明 橋本 勝雄 森山 公一 鎌倉 親喜 新倉 明彦 金山 喜昭 長崎 潤一	小林 孚 会田 進 桑月 鮮 遠藤 令仁 高見 俊樹 大木紳一郎 赤羽 義洋 鈴木 忠司	太田 敬蔵 清水 武治 山田 晃弘 川原喜重子 平林さき子 樋口 昇一 唐木 孝雄 金田 暁	戸沢 充則 樋口 誠司 保阪 康夫 鵜飼 幸雄 原 雅信 友野 良一 堀田 雄二	武藤 雄六 柳沢 士郎 三上 徹也 守屋 昌文 友廣 哲也 長崎 元廣 佐藤 宏之
整理作業	平林とし美	宮坂とし子	藤原智恵子	小林 静子	柳沢 永子
	昭和62年度発掘調査（整理作業）				
調査員	小杉 康	小菅 将夫	鶴田 典昭	相馬生奈子	
調査補助員	平林とし美				
事務局	原村教育委員会事務局	行田 竹輝（教育次長）	武田伊都子（主任）		
	邊見 茂子	佐貫 正憲	平出 一治	伊藤 証	



第1図 原村域の地形断面模式図（宮川—弓振日向遺跡—赤岳ライン）

3 発掘調査の経過（抄）

- 昭和61年5月1日 今日から発掘準備をはじめめる。
- 5月15日 土地所有者の同意がえられないため、問題解決まで作業は休み。
- 6月13日 問題の解決がないままグリッド設定をはじめめる。グリッドは昭和61年度の分布調査（第1次発掘調査）に合わせたものとする。
- 6月16日 機材の搬入とテントの設営を行う。教育長挨拶の後、E地区のグリッド発掘をはじめめる。遺物の発見はない。
- 6月18日 引き続きE地区のグリッド発掘を行う。縄文時代中期の土器破片と石器が出土する。
- 6月19日 F地区のグリッド発掘をはじめめる。
- 6月20日 グリッド発掘で住居址の埋没を確認する。昭和60年度分布調査で住居址3軒を確認していることから便宜上本址は第4号住居址と呼ぶことにする。小竪穴1・2を検出し平面発掘をはじめめる。
- 6月26日 グリッド発掘で第5号住居址を確認する。
- 6月27日 D地区のグリッド発掘をはじめめる。
- 7月2日 グリッド発掘で第6号住居址を確認する。C地区のグリッド発掘をはじめめる。
- 7月8日 第5号住居址の検出作業が終り平面発掘をはじめめる。ロームマウンドを検出し平面発掘をはじめめる。
- 7月11日 ソフトローム層から黒曜石の剥片が出土する。先土器時代との複合遺跡になるのか。
- 7月14日 第4号住居址の検出作業が終り平面発掘をはじめめる。
- 7月17日 第5号住居址の遺物取り上げを行う。EQ-78グリッドのソフトローム層から石刃が出土し、先土器時代との複合遺跡であることを確信する。
- 7月23日 ソフトローム層から尖頭器が出土する。
- 7月24日 箕手久保遺跡発掘調査のため作業は一時休み。
- 7月28日 今日から発掘調査を再開する。
- 8月7日 第6号住居址の検出作業が終り平面発掘をはじめめる。
- 8月8日 第6号住居址の遺物取り上げを行う。
- 8月19日 グリッド発掘で第7号住居址を確認する。
- 8月21日 第3号住居址（昭和60年度確認調査住居址C）の検出作業が終り平面発掘をはじめめる。

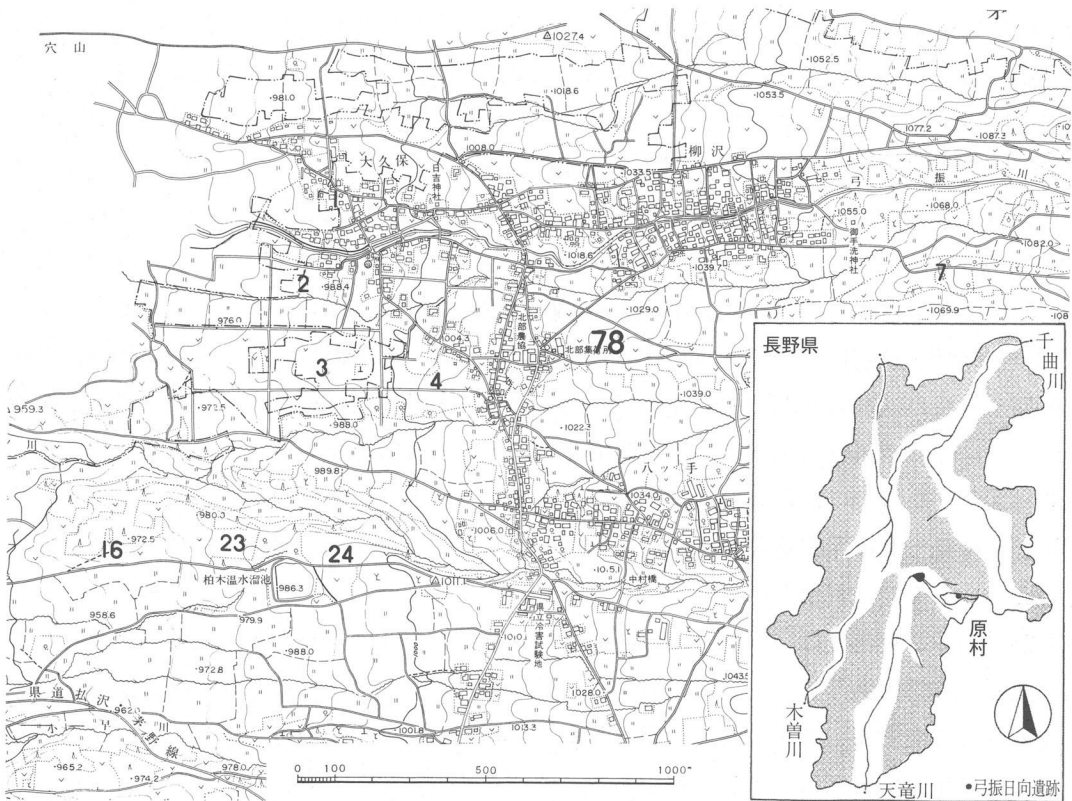
- 8月25日 第3号住居址南壁下から乳棒状石斧がまとまって出土する。
- 8月27日 第7号住居址の検出作業が終り平面発掘をはじめる。
- 8月30日 グリッド発掘で第8号住居址を確認する。
- 9月2日 土地所有者全てから同意が得られたため重機で表土剥ぎをはじめる。
- 9月5日 第8号住居址の検出作業が終り平面発掘をはじめる。
- 9月9日 第3号住居址の遺物取り上げを行う。
- 9月12日 第8号住居址の遺物取り上げを行う。
- 9月18日 グリッド発掘で第9号住居址を確認する。
- 9月26日 第1号住居址(昭和60年度確認調査住居址A)、第2号住居址(同住居址B)、第9号住居址の検出作業が終り平面発掘をはじめる。
- 9月29日 第1号住居址からミニチュア土器が出土する。
- 10月6日 耕作による攪乱は著しいが焼土を検出する。炉の火床と思われることから第10号住居址と呼ぶことにする。
小竪穴の検出作業と平面発掘が多くなる。
- 10月16日 先土器時代の平面発掘をはじめる。
- 10月21日 奈良国立文化財研究所で縄文時代住居址の写真測量を行う。
- 11月7日 ローム層中から礫が出土、近くから打製石斧が出土する。
- 11月10日 橋本勝雄・山田晃弘・桑月鮮・保阪康夫の諸氏に現地指導をいただく。
- 11月13日 先土器時代の発掘について保護協議、県教育委員会文化課・諏訪地方事務所土地改良課・原村役場農林課・原村教育委員会の4者。
- 11月16日 先土器時代の発掘について保護協議、文化庁記念物課・県教育委員会文化課・諏訪地方事務所土地改良課・原村役場農林課・原村教育委員会の5者。
- 11月17日 新に募集した作業員が今日から作業に参加する。
- 11月21日 帝京大学山梨文化財研究所で土壌(火山灰)の調査とサンプリングをはじめる。
- 11月27日 テントの撤去、機材の片付けをはじめる。
- 11月28日 機材の片付けを行い発掘調査は終了する。

II 遺跡の立地環境

弓振日向遺跡は、長野県諏訪郡原村柳沢区に位置している。遺跡が確認されたのは先に述べたように昭和60年度に原村教育委員会で実施した県営ほ場整備事業弓振地区内における分布調査である。

表1 弓振日向遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	先 土 器	縄 文					弥 生	古 墳	奈 良	平 安	中 世	近 世	備 考
			草	早	前	中	後							
1	家 裏	○				○					○		昭和59年発掘調査	
2	大久保前										○		消滅	
3	向尾根	○	○			○							昭和54年発掘調査	
4	横道下					○					○	○	昭和54年発掘調査	
5	柳 沢					○	○						地点不明	
6	前尾根							○					地点不明	
7	前 沢					○							昭和63年発掘予定	
16	恩膳南									○				
23	恩膳西		○			○							昭和62年発掘調査	
24	恩 膳		○			○	○			○			昭和62年発掘調査	
78	弓振日向	○				○	○						昭和60・61年発掘調査	



第2図 弓振日向遺跡の位置と付近の遺跡

本遺跡が所在する原村は、峻険な八ヶ岳連峰を東壁に構え、その広大な西麓の裾野に東西に細長く伸び広がっている。その地形は阿弥陀岳（2806m）を頂点とした標高1600m以上の急峻な山岳地帯、標高1200mまで続くなだらかな山林と原野地帯、そして西にゆるやかな傾斜をもって広がる標高1000m前後の平坦な台地からなる。この台地には、傾斜方向に並行して大小の幾筋もの小河川が走っており、それらはなだらかに傾斜する平坦な台地を浸蝕し、開析して東西方向に細長い尾根状の地形を残しながら西方4000m先で、フォッサマグナの西縁である糸魚川—静岡構造線の断層崖に沿って諏訪湖へ流れる宮川によって断ち切られる。

弓振日向遺跡は、JR 中央本線茅野駅の東南方約6700mの弓振川左岸にあり、弓振川との比高差は15mほどである。標高は1035m前後を測り、原村における縄文時代の遺跡高度限界が標高1200m前後であることから高所に位置していることになる。地目は普通畑で、遺跡の西側近くまで宅地化が進んでいるが遺跡の保存状態は良い。

八ヶ岳西麓には、著名な茅野市の尖石遺跡群と富士見町の井戸尻遺跡群があり、原村地籍はそのほぼ中間に位置し、やはり遺跡は多く、付近の尾根は総じて遺跡であると言っても過言ではないくらいで85遺跡が周知されている。それらは阿久遺跡群とか柏木遺跡群と呼ばれている。

それらの中で、先土器時代の遺跡は昭和54年に発掘調査した向尾根遺跡（原村遺跡番号3）が西方約800mに、やはり昭和58年に発掘調査した広原日向遺跡（同45）が西南方約3000mにある。単独資料の発見で遺跡の性格までは不明であるが、ナイフ形石器が採集されている八ヶ岳農場遺跡（同74）、昭和59年の発掘調査で尖頭器が出土した家裏遺跡（同1）、昭和51年の発掘調査では主体部を確認するまでには至らなかったが石刃・尖頭器・石核・剥片が出土した柏木南遺跡（同10）、また、尖頭器が採集された大石遺跡（同49）がある。

縄文時代の遺跡は数多く、住居址が発見された遺跡を標高別にみると、原村の西端部に位置する900～950mラインには前期～中期の阿久遺跡（同11）が、中期の柏木南（同10）・前沢（同12）・居沢尾根（同42）・大石（同49）・山の神（同50）遺跡があり、950～1000mには中期の家裏（同1）・上居沢尾根（同21）遺跡、中期～後期の恩膳（同24）・前尾根（同20）遺跡。1000mを越えると中期～後期の臥竜（同35）・山の神上（同75）・大横道上（同32）・ワナバ（同33）遺跡がある。

それらの中で、本遺跡の主体になる中期中葉の新道期の住居址が発見されている遺跡を上げると、昭和50年に集落のほぼ全域が調査された大石遺跡、村道前尾根線改良工事の事前発掘で数多い住居址を発見した前尾根遺跡、道路改良工事の折りに住居址の発見が伝えられている上居沢尾根遺跡と言うようにまだ少ない。

本遺跡における集落址は、中期中葉の新道期に短期間にのみ営まれた単一時期の集落として、また、土器と石器のあり方なども好資料を提供してくれた。本報告ではその核心に迫れる内容は微々たるものであるが、八ヶ岳西麓における中期中葉期の集落のあり方を示すことができる遺跡であり、その果たす役割は大きなものがあると確信している。

Ⅲ 調査方法

1 調査区の設定

発掘に先立ち、東西南北（磁北）に軸を合わせたグリッドを設定した。それは、昭和60年度に実施した第1次発掘調査（遺跡範囲確認調査）と同軸とした。東西方向には50mの大地区を設け、西からA区・B区・C区・D区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。地区割りも第1次調査同様であるため、遺跡範囲が明らかになった本調査対象はC～F地区となる。大地区の中をさらに2×2mの小地区（グリッド）に分割し、東西方向は西からA～Yのごとく区分し、南北方向には算用数字をふった。遺跡の中心と思われるラインを51とし、そのラインを基準に南方向は50・49・48というように南にいくにしたがい小さくなるように、北方向は52・53・54と大きくなるように振分けをしたが、遺跡の範囲は51～120となる（第4図）。

個々のグリッドの呼びかたは、たとえば第4図左下の2×2mの発掘グリッドでみると、大地区はC区であり、小地区の東西方向はRラインにあたり、南北方向は57ラインで、それは「R-57」となる。したがって小地区の前に大地区を表記した「CR-57」となる。

なお、便宜上、昭和60年度に実施した範囲確認調査を第1次発掘調査、本調査を第2次発掘調査と呼ぶことにした。

2 調査の方法

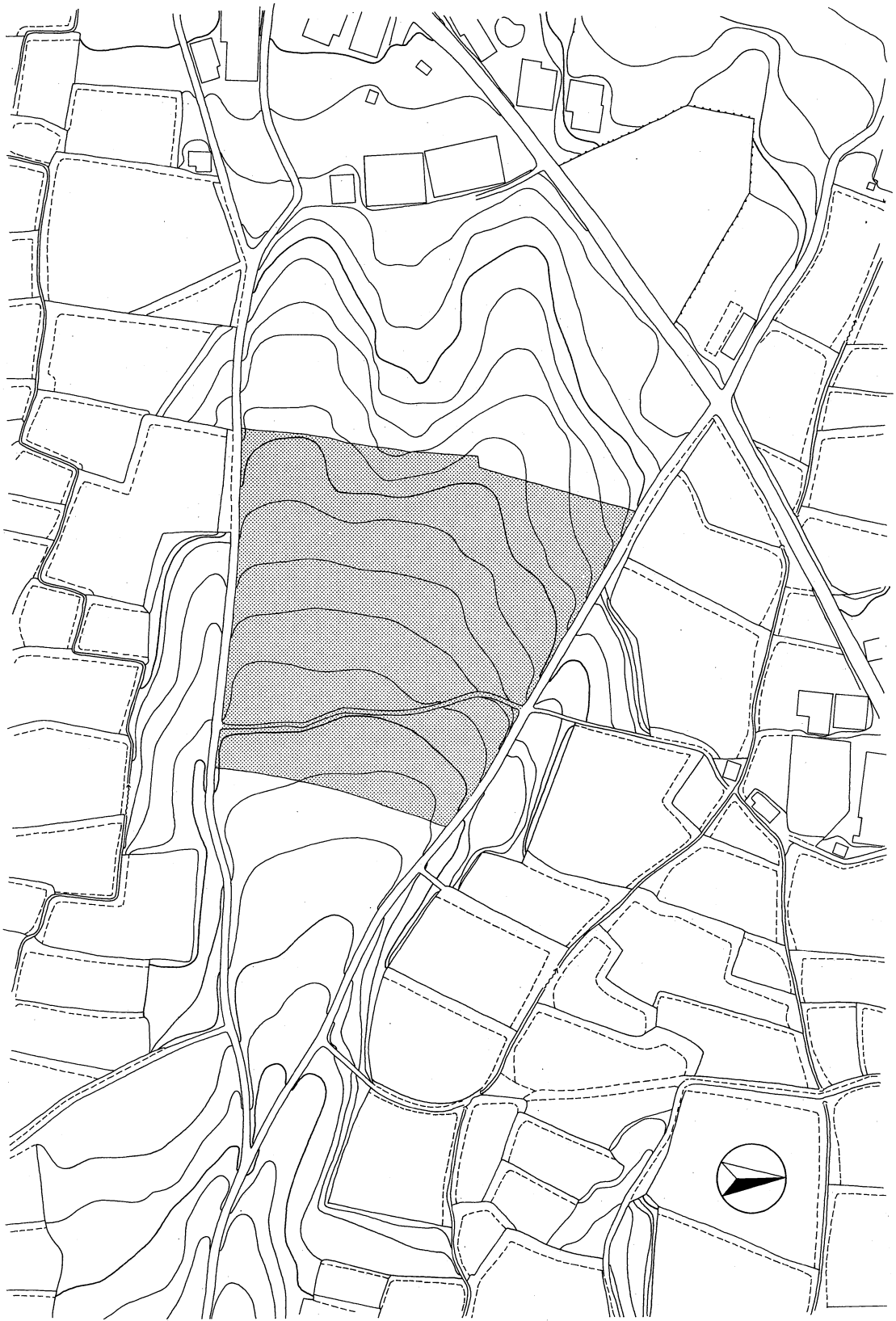
発掘調査の対象は、昭和61年度県営ほ場整備事業弓振地区の予定地にかかる弓振日向遺跡（原村遺跡番号78）の全域におよぶが、あらかじめ昭和60年度に遺跡範囲確認調査を実施したことで予想される範囲は約10,000㎡である。

ほ場整備事業に反対する人があり土地所有者全員から同意が得られなかったため、当初は同意が得られたところから手掘りで表土剥と遺構検出作業を進め、全員の同意が得られた9月2日以降は重機で行い引き続き人力で遺構検出作業を実施した。

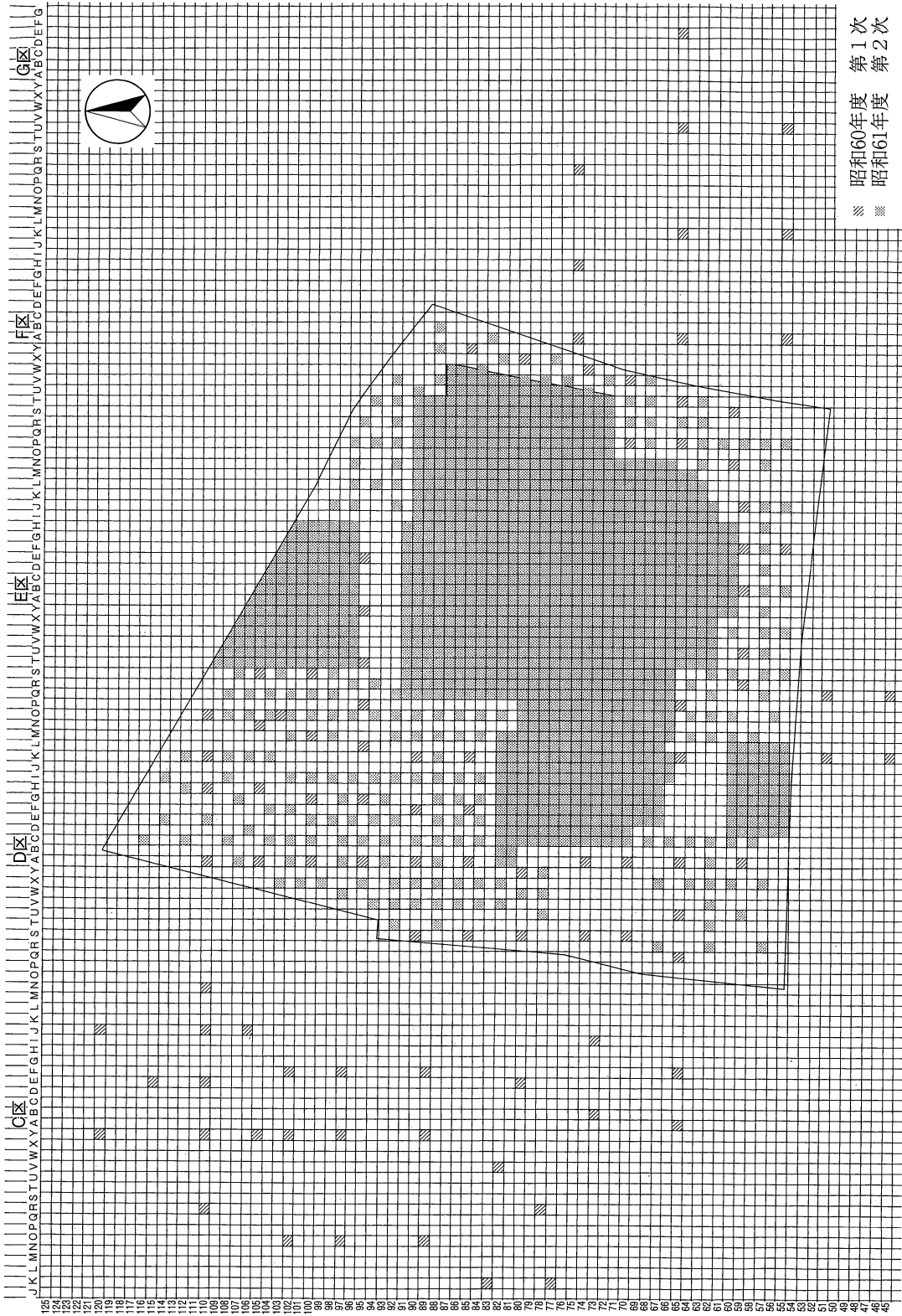
測量は、予め設定した2m四方のグリッドを基準とするやり方方式による。なお、第3号住居址と第8号住居址は奈良国立文化財研究所で写真実測も行った。

縄文時代の発掘調査は原則としてローム層の上面まで層位別に行い、遺物の取り上げは、基本的にグリッド別・層位別に行い、遺構に伴うものは遺構別に取り上げたが一部の資料は出土地点とレベルを記録した。

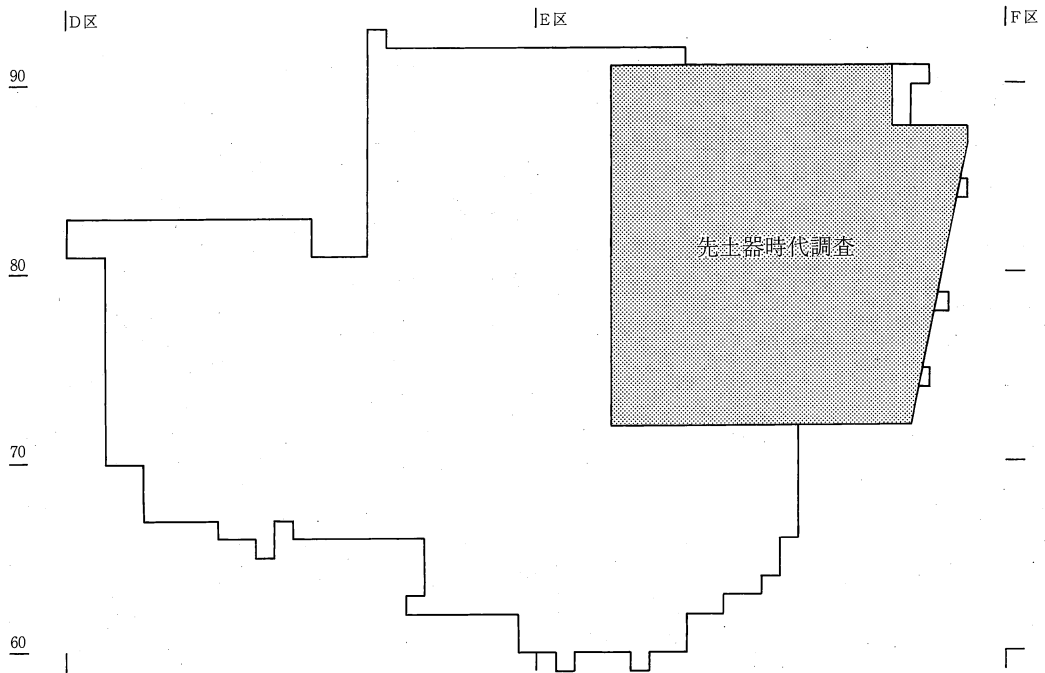
当初は縄文時代の単独遺跡と考え調査を進めたが、調査途上で先土器時代との複合遺跡である



第3図 発掘調査区域図・地形図 (1:2,000)



第4図 グリッド配置図



第5図 先土器時代調査範囲図

ことが明らかになった。縄文時代の調査終了後に先土器時代の調査を行い、遺物の取り上げは全資料の出土地点とレベルを記録した。なお、先土器時代石器取り上げは4×6mのグリッドを設定した。

3 調査の概要

本調査で検出した全遺構の分布状況は第6図の遺構配置図に示したが、それらの遺構は次の通りである。

先土器時代遺物集中箇所（ブロック）	1箇所
縄文時代中期竪穴住居址	10軒
小竪穴	70基
特殊遺構（小竪穴）	1箇所

縄文時代の竪穴住居址は全て縄文時代中期であるが、細分すると中葉の新道期が9軒、後葉の曾利Ⅱ期が1軒である。新道期の住居址の重複はみられない。各住居の使用時間と同時性を示す資料の発見はなかったがほぼ同時期のものと考えてさしつかえなからう。また遺構外から出土した縄文時代の土器破片は新道式のものほとんどである。

特殊遺構と呼んだ小竪穴は、焼土と土器を伴出する墓壇と考えられるもので、隣接する富士見町藤内遺跡の特殊遺構を小規模にしたものである。

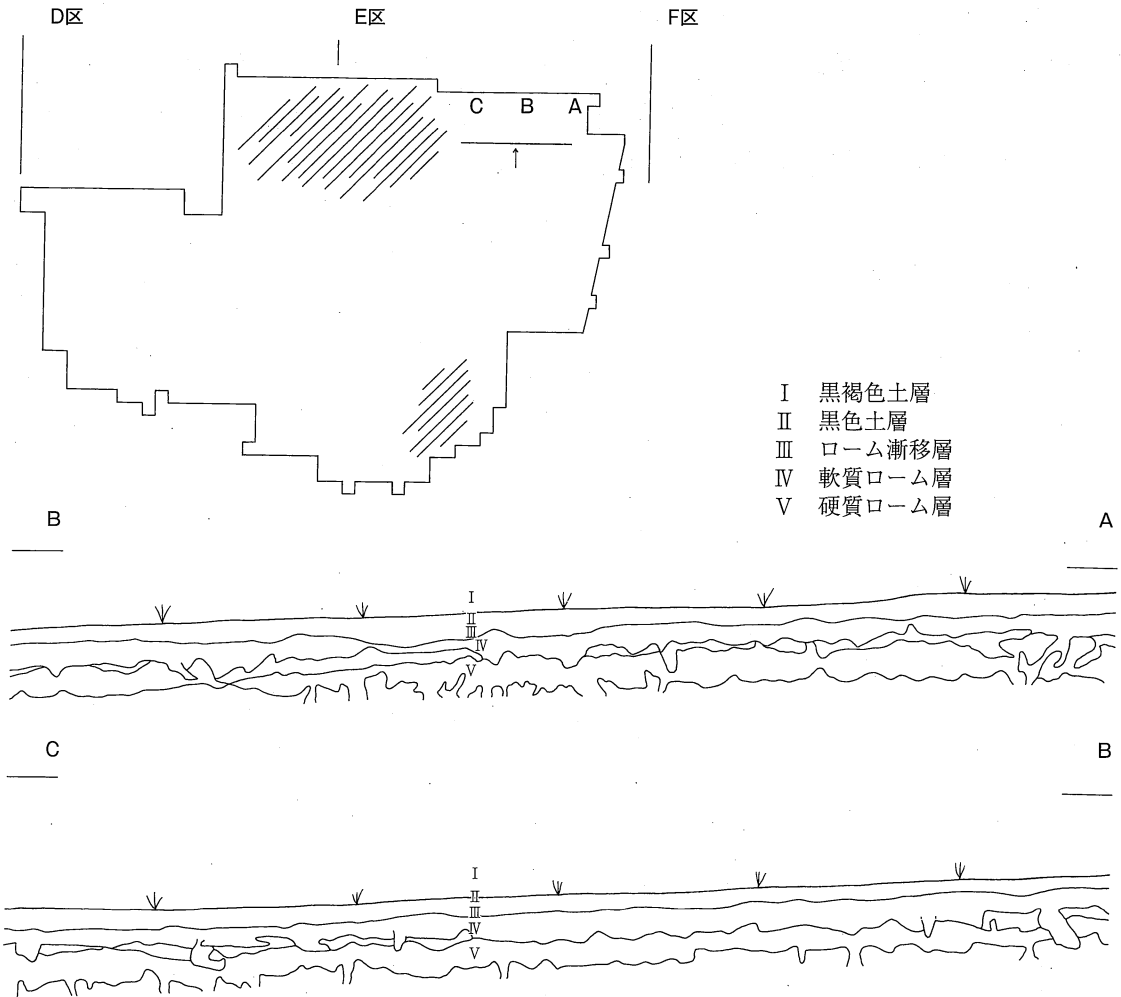


第6図 遺構配置図

IV 土層

尾根上は東西方向に緩やかに傾斜しているが尾根幅は広く、遺構を検出した範囲はD地区とE地区でその範囲は東西100m、南北60mほどである。

畑の区画により地表面に段差がみられた。これは区画内において長い期間続けてきた耕作で東の土を西に移動させ少しでも耕作地を平坦化したものである。地山のローム層までは深く耕作土中に含まれていた遺物はそれほど多くなかった。したがって、耕作の影響が遺物包含層に達する機会は少なかったようであるが、第7図の斜線部分は表土（耕作土）が浅く、直下がローム層になる箇所もみられた。また、この地が開墾されたのは昭和のはじめ頃と聞いているが、攪乱は少なく総体的には遺跡の保存状態は良好であった。



第7図 土層図

本遺跡における基本層序は次の通りである。おおまかな観察結果を記しておきたい(第7図)。

- | | | |
|-----|--------|---|
| 第Ⅰ層 | 黒褐色土層 | 表土層 畑の耕作土で10~18cmの厚さである。畑の区画によりその厚さに違いはみられたが、これは耕作者と農作物の違いによるものであろう。遺物の出土はほとんどない。 |
| 第Ⅱ層 | 黒色土層 | 10~24cmで厚さに違いがみられる。第Ⅰ層よりしまっている。基本的にはこの上半部が縄文時代の遺物包含層である。下半部では住居址のプランがおぼろげに観察できる状態である。 |
| 第Ⅲ層 | ローム漸移層 | 厚い所では12cmを計るが、薄い所が多く安定したものではなく、認められない箇所もある。 |
| 第Ⅳ層 | 軟質ローム層 | 5~20cm この上面で縄文時代の住居址と小竪穴のプランを確認した。先土器時代の遺物包含層である。 |
| 第Ⅴ層 | 硬質ローム層 | 先土器時代の遺物包含層である。 |

縄文時代の住居址を埋めていた土は、比較的単純で第Ⅱ層の黒色土が逆三角堆土として落ち込んでいたが、遺構によっては第Ⅱ層より黒味を増した漆黒色に近いものもみられた。もちろんロームや焼土の細粒、炭化物の小破片を含んでいることはいうまでもない。

V 先土器時代の遺構と遺物

弓振日向遺跡からは、先土器時代の所産と考えられる石器類が100点余出土した。石器の出土層位はⅢ層（ソフトローム）とⅣ層（ハードローム）が主体となる。

先土器時代の調査は4m×6mのグリッドを設定して行った。

1 遺構と遺物

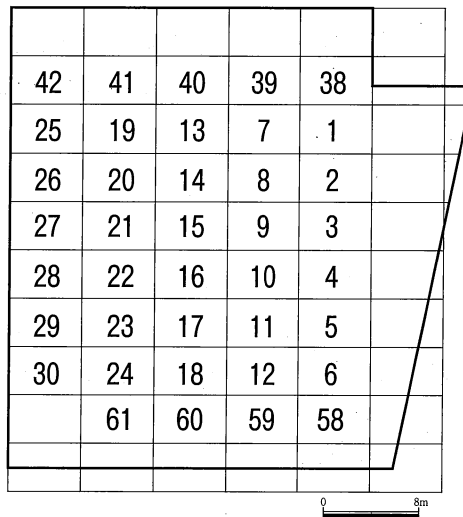
(1) ブロック

第1号ブロック

本ブロックはグリッド7を中心に、東西方向11×7mの平面的な広がりをもつ。第2号ブロックが隣接する。遺物総数は18点である。出土層位は第Ⅲ層1点、第Ⅳ層8点、第Ⅴ層8点、攪乱他1点である。器種組成は斧形石器1点、ナイフ形石器1点、ナイフ形石器破片1点、2次加工のある剥片3点、剥片8点、碎片3点、小原石1点である。石材は斧形石器の1点が緑色凝灰岩のほかはすべて黒曜石である。

第2号ブロック

本ブロックはグリッド2を中心に、東西方向6×6mの平面的な広がりをもつ。第1号ブロックが隣接する。遺物総数は8点である。出土層位は第Ⅳ層3点、第Ⅴ層3点、攪乱他2点である。



第8図 先土器時代グリッド設定図

器種組成はナイフ形石器 1 点、微細剥離痕のある剥片 1 点、剥片 3 点、碎片 3 点である。石材はすべて黒曜石である。

第 3 号ブロック

本ブロックはグリッド 8 を中心に、東西方向 2.5 × 2 m の平面的な広がりをもつ。第 2・6 号ブロックが隣接する。遺物総数は 4 点である。出土層位は第 V 層 3 点、攪乱他 1 点である。器種組成は微細剥離痕のある剥片 1 点、剥片 2 点、碎片 1 点である。石材はすべて黒曜石である。

第 4 号ブロック

本ブロックはグリッド 20 を中心に、南北方向 5 × 4 m の平面的な広がりをもつ。第 5 号ブロックが隣接する。遺物総数は 6 点である。出土層位は第 IV 層 2 点、第 V 層 1 点、攪乱他 3 点。器種組成は台形石器 1 点、2 次加工のある剥片 1 点、微細剥離痕のある剥片 1 点、剥片 3 点である。石材はすべて黒曜石である。

第 5 号ブロック

本ブロックはグリッド 22 を中心に、北東-南西方向 7.5 × 4 m の平面的な広がりをもつ。第 4 号ブロックが隣接する。遺物総数は 7 点である。出土層位は第 IV 層 3 点、第 V 層 1 点、攪乱他 3 点。器種組成はナイフ形石器 1 点、2 次加工のある剥片 1 点、微細剥離痕のある剥片 1 点、剥片 3 点である。石材はすべて黒曜石である。

第 6 号ブロック

本ブロックはグリッド 10 を中心に、北西-南東方向 9 × 5 m の平面的な広がりをもつ。第 7 号ブロックが隣接する。遺物総数は 16 点である。出土層位は第 IV 層 11 点、第 V 層 2 点、攪乱他 3 点。器種組成は微細剥離痕のある剥片 3 点、剥片 10 点、碎片 3 点である。石材はすべて黒曜石である。

第 7 号ブロック

本ブロックはグリッド 5 を中心に、北東-南西方向 6.5 × 5 m の平面的な広がりをもつ。第 6 号ブロックが隣接する。遺物総数は 32 点である。出土層位は第 IV 層 6 点、第 V 層 25 点、攪乱他 1 点。器種組成は 2 次加工のある剥片 3 点、微細剥離痕のある剥片 1 点、石核 2 点、剥片 17 点、碎片 8 点、小原石 1 点である。石材はすべて黒曜石である。

第 8 号ブロック

本ブロックはグリッド 18 を中心に、南北方向 4 × 2.5 m の平面的な広がりをもつ。遺物総数

は5点である。出土層位は第Ⅲ層2点、第Ⅳ層2点、第Ⅴ層1点。器種組成はナイフ形石器1点、台形石器1点、剥片2点、碎片1点である。石材はすべて黒曜石である。

第9号ブロック

本ブロックはグリッド60を中心に、北西-南東方向2×1mの平面的な広がりをもつ。遺物総数は3点である。出土層位は第Ⅲ層1点、第Ⅳ層1点。器種組成は剥片3点である。石材はすべて黒曜石である。

(2) 石 器

1 ナイフ形石器

第14図1は寸詰まりの先細りの縦長剥片を素材として基部両側縁にややえぐり込むように細部加工(剥離長<4mm)を施して全体を菱形に作り出している。基部裏面の加工は右から左方向へ大きく平坦な剥離が抜けている。基部端の素材剥片の打面のように見える平坦面は、打面ではなく、基部側縁の加工を行った後に形成されている。その後、頭部調整のような剥離も見られる(剥離長<2mm)。

基部の形状を厚さを含め、かなり丹念に整えているといえよう。上半部の両側縁には刃こぼれが見られる。

第14図2は石器の主軸が縦長になるナイフ形石器であるが、打面は基部右側縁にあり、横長の剥片が素材となっている。右側縁からの細部加工が大きく、結果として左側縁の先端部まで剥離が抜け、左側縁上半部は折れ面のような面を形成し、刃部としては使えない。基部の両側縁とも表裏から平坦剥離が施される。先端わずかに欠損。線状痕は先端刃部に、刃部に平行して見られる。

第15図3は先細りの縦長剥片を素材としている。基部加工の程度は微細で左側縁が裏面から表面に、右側縁は表面から裏面側にそれぞれ施されている。素材剥片の頭部調整が顕著に見られるが、これも基部端を整える細部加工かもしれない。左先端は90度近い素材の剥離面が残り刃部としては適さず、右側縁が刃部であったと考えられる。かなりの使用があったと思われ、刃部に平行する線状痕と刃こぼれ状の微細剥離が顕著に見られる。

第15図4は節理により破損したと思われる。大形の部厚い横長剥片を素材としている。横長剥片の端部の鋭角な箇所を石器の先端に据え、右側縁基部に微細な細部加工を施している。あまり全体の形状を整えておらず、ナイフ形石器と判別するかを迷った石器である。先端刃部周辺には刃こぼれ等は特に認められない。基部の加工中に節理で割れたため廃棄されたものかもしれない。

第24図30は先端を欠損する。基部の両側縁に主に表面から裏面に平坦な細部加工が施され基部を整形している。剥離長は8mmの比較的大きなものもある。グリッドで取り上げられたもので

詳細な出土層位等不明であるが、基部の平坦加工から AT 降灰以前のナイフ形石器・台形石器であると考えられる。

2 台形石器

第16図5は方形状の剥片を素材として打面を基部側に設ける。打面は自然面で残置している。基部を中心に細部加工が施されている右側縁はまず表面から裏面に大きな平坦剥離を施した後、裏面から剥離長が13mmほどの比較的大きな平坦剥離が施されるのに対し、左側縁はやや急斜な剥離が裏面から施され剥離長も6mm程度のもが主体をなす。右側縁の剥離角70度、左側縁は85度と急である。裏面は左からの大きな平坦剥離が見られる。先端は開き、刃こぼれ状の微細剥離が顕著に認められる。線状痕は表裏共に刃部に平行するもの、直交するものの両者が認められる。

第16図6は先端が開くやや縦長の剥片を素材として打面を基部側に設ける。打面は残置。右側縁は剥離角80度前後の平坦剥離（剥離長9mm）と折れ面のような急斜な面で校正されている。左側縁は顕著な細部加工はないが素材の剥離面がなす角度が80度を測り細部加工と同様な角をなしている。先端左寄りには折れによる欠損。右寄りの刃部に刃こぼれ状の微細剥離が認められる。線状痕は方向性をもたない短いものが認められる程度である。

3 斧形石器

第17図7は緑色凝灰岩製。自然面は認められず、剥片を素材としているが、素材剥片の形状は不明である。2次加工はあまり側縁からは行われていない。上下両端からの剥離が顕著である。研磨は素材の稜上を中心に表裏とも認められるが刃部を両面に研磨するほど顕著ではない。全体的に形状が整えられていないので、リダクションの結果であるかもしれない。

4 2次加工のある剥片

第18図12は打面付近の右側縁に表面から裏面にかけて2次加工がある。下半部が欠損しているため全体の形状が不明であるが、上下を反転すればナイフ形石器もしくは台形石器の基部と捕えることも出来る。製作途上で何らかのアクシデントで破損、廃棄されたか。

第18図13は縦長剥片の裏面基部端に階段状の剥離が見られる。台石の使用によるはじけか。

第18図11は打面の厚い方形状剥片の端部に急斜な剥離が直線状に施されている。あたかもナイフ形石器の刃潰し加工のようにもみえるが、刃部に相当する部分がなく、2次加工部が機能部のスクレイパー的な石器であろうか。

第19図14は右側縁および先端は折れ面、左側縁の打面寄りに剥離長2.5mmほどの他の微細剥離に比べやや大きめな平坦剥離が認められる。折れ面があるため、全体形状がわからないが、ナイフ形石器・台形石器の可能性もある。

第18図12は端部がステップした横長剥片の左側縁の先端部側に裏面からの細部加工がみられる。

第17図9は横長剥片端部左半に微細な剥離が認められる（微細剥離痕のある剥片に変更したほうが良いか）。

第17図8は縦長剥片の端部にやや急斜な剥離が認められる。剥離は小さめだが搔器状の刃部を呈す。

5 微細剥離痕のある剥片

第19図16は横長剥片の端部に顕著な刃こぼれ状の微細剥離が認められる。打面周辺に形状を整えるような細部加工を行えば第14図2と同形態のナイフ形石器になる。表面には局所的に刃部に直交する線状痕が著しい個所がある。

第18図10は右側縁打面寄りにやや急斜な微細剥離が認められる。

第20図17は寸詰まり先細りの縦長剥片の両側縁に微細な剥離がみられ、縁辺が細かい鋸歯状になる。打面周辺の両側縁には特に細部加工がみられないため、基部調整のナイフ形石器にならないが、形状は類似する。

第20図18は捩れが生じている縦長剥片の左側縁には裏面側、右側縁には表面側に連続的な微細剥離がみられる。

6 石核

写真7は石核に残る剥離面から縦長剥片というよりは方形の剥片が剥離されたことが観察される剥離面は正面と両側面および上面で、他の面は自然面であることからあまり剥離進行していない。本遺跡で比較的縦長剥片は出土しているのと整合性がない。また剥離の稜線は著しく磨耗している。この磨耗が移動搬入の際についていたものと推定すると遺跡内で剥離が行われなかったとも取れる。つまり、素材として遺跡に持ち込まれ、剥離されることなく廃棄されたものかもしれない。

2 遺構外出土石器

(1) 石器

1 ナイフ形石器

第24図31は縦長剥片を素材とし、打面を基部に置き、基部および先端に細部加工を施し全体形状を木葉形に整形している。細部加工は側縁の形状を整える程度で、周縁調整の槍先形尖頭器に近い。

2 槍先形尖頭器

第23図28は槌状剥離を有する尖頭器。先端を僅かに欠く。裏面に自然面を残す。形状は左右対称の木葉形。

第23図29は先端欠、右側縁が肩を張る、左右非対称の槍先形尖頭器。渋川遺跡にみられる。ファシットはみられない。裏面にボジ面が観察されるので、剥片素材か。

3 石刃

第24図32は両側縁に微細な剥離が断続的にみられる。

表2 ブロック別出土層位組成表

遺構番号	褐色土 (Ⅲ層)	軟質ローム (Ⅳ層)	硬質ローム (Ⅴ層)	攪乱他
BL 1	1	8	8	1
BL 2		3	3	2
BL 3			3	1
BL 4		2	1	3
BL 5		3	1	3
BL 6		11	2	3
BL 7		6	25	1
BL 8	2	2	1	
BL 9	1	2		
ブロック外	1	1		3
計	5	38	44	17

表3 ブロック別器種組成表

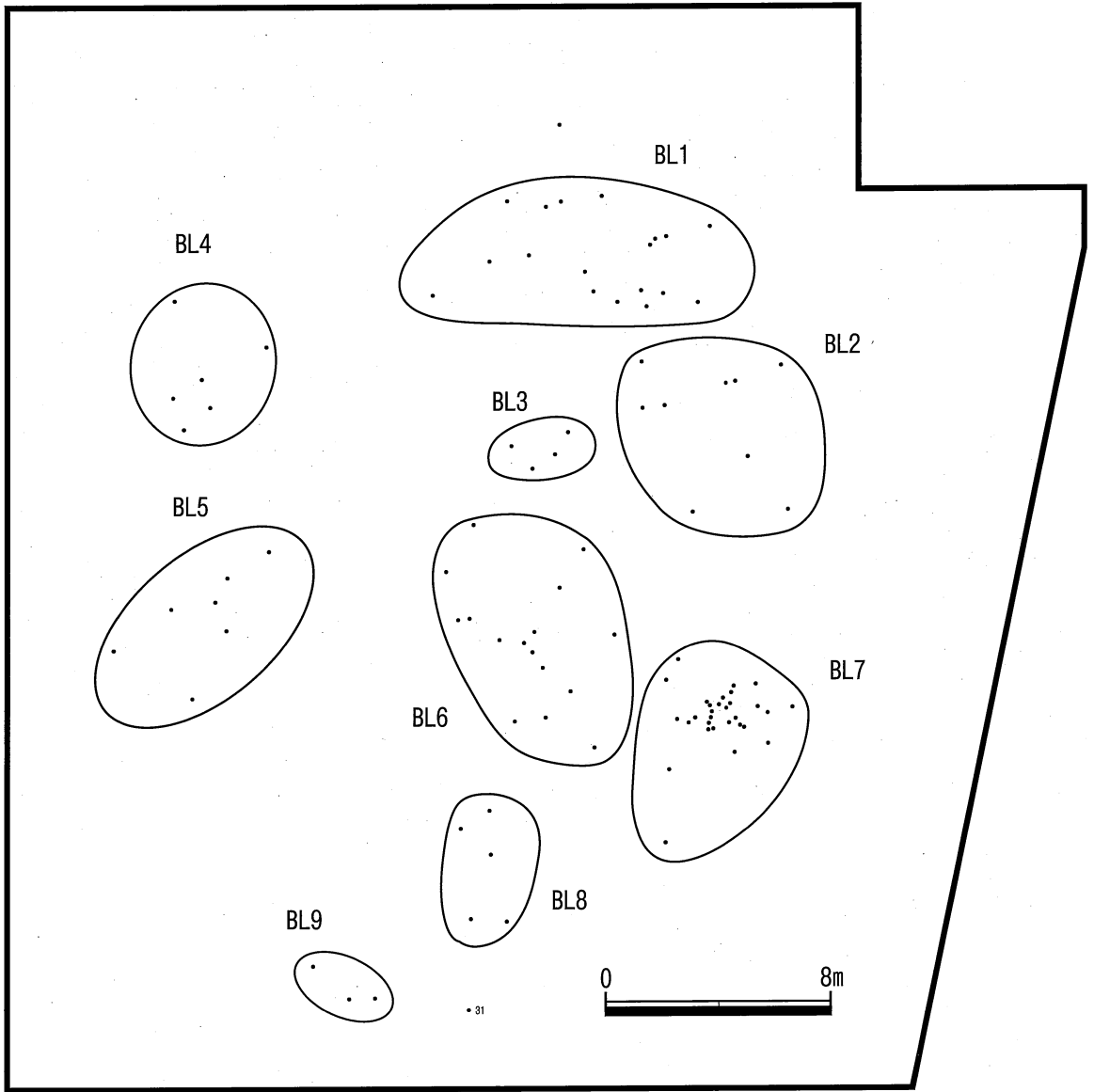
遺構番号	ナイフ形石器	ナイ石器 フ破 形片	台形 石器	斧形 石器	槍先形尖頭器	石 刃	2あ 次る 加工 剥 の片	微細 ある 剥離 痕片	石 核	剥 片	碎 片	小原石 (ズリ)	合 計
BL 1	1	1		1			3			8	3	1	18
BL 2	1							1		3	3		8
BL 3								1		2	1		4
BL 4			1				1	1		3			6
BL 5	1						1	1		3	1		7
BL 6								3		10	3		16
BL 7							3	1	2	17	8	1	32
BL 8	1		1							2	1		5
BL 9										3			3
ブロック外	2				2	1							5
計	6	1	2	1	2	1	8	8	2	51	20	2	104

表4 出土遺物属性表

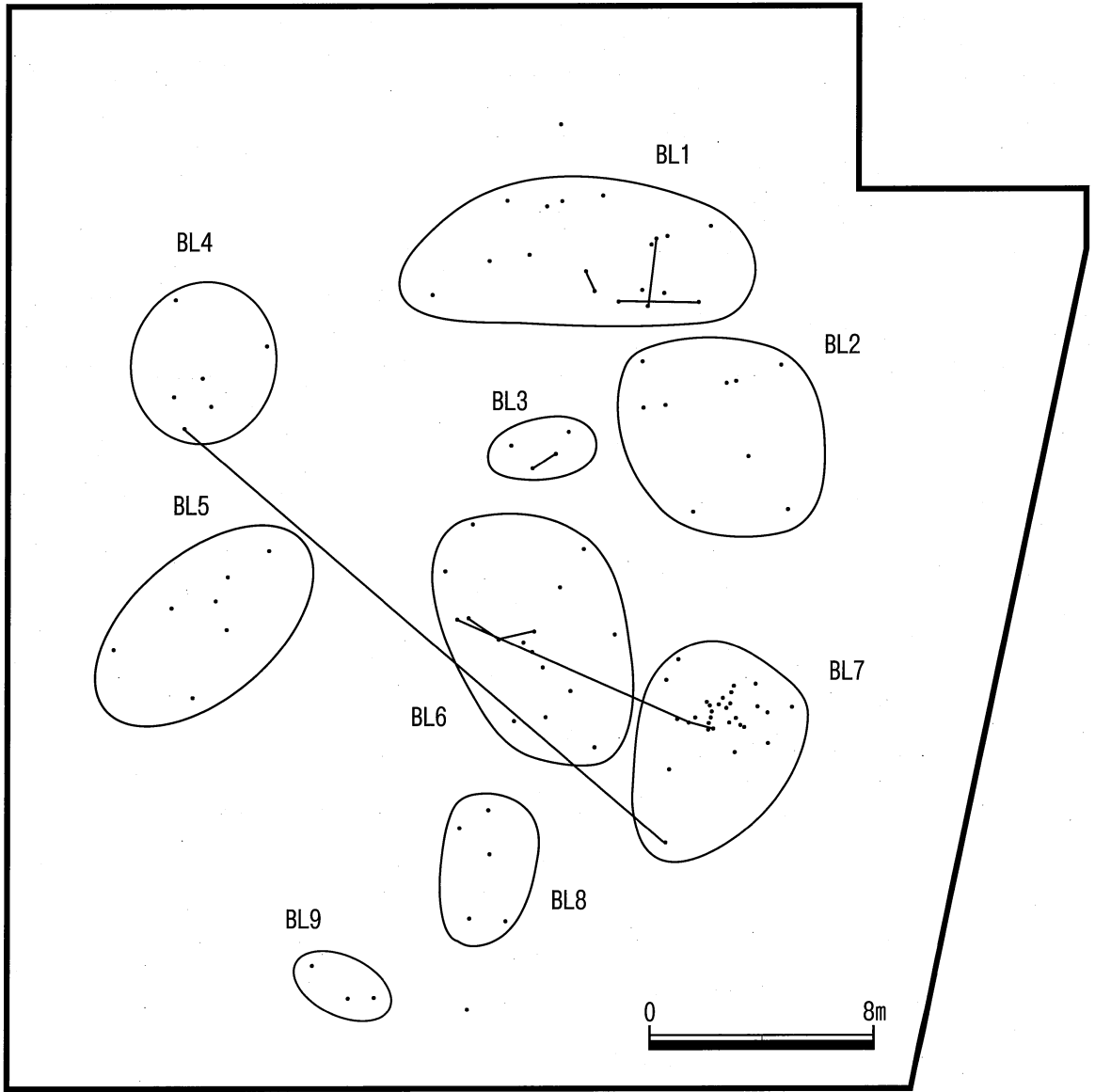
整理番号	遺構の種類	遺構番号	グリッド	遺物番号	出土層位	器種	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	報告番号
3	BL	1	1	3	V	剥片	33	47	18	18.1	
6	ブロック外		2	1	IV	槍先形尖頭器	76	32	11	19.6	28
7	BL	2	2	2	IV	微細剥離痕のある剥片	48	34	5	6.8	17
8	BL	2	2	3	V	ナイフ形石器	68	26	8	10.6	2
9	BL	2	2	4	V	剥片	47	54	13	23.2	
11	BL	2	3	1		剥片	14	16	3	0.6	
12	BL	2	3	2	IV	剥片	23	46	14	11.1	
13	BL	7	4	1		剥片	52	51	9	23.1	
14	BL	7	4	2	V	2次加工のある剥片	22	32	7	4.3	9
15	BL	7	5	1	IV	剥片	63	24	6	5.6	
16	BL	7	5	2	IV	石核	34	51	19	28.3	
17	BL	7	5	3	IV	微細剥離痕のある剥片	30	25	5	2.7	10
18	BL	7	5	4	IV	剥片	38	47	13	17.1	
19	BL	7	5	5	V	剥片	36	45	8	7.7	
20	BL	7	5	6	V	剥片	12	14	3	0.3	
21	BL	7	5	7	V	剥片	12	19	1	0.3	
22	BL	7	5	8	IV	剥片	7	24	5	1.4	
23	BL	7	5	9	V	剥片	11	16	1	0.2	
24	BL	7	5	10	V	碎片				0.2	
25	BL	7	5	11	V	剥片	58	47	18	29.5	
26	BL	7	5	12	V	石核	60	86	44	293.1	写真7
27	BL	7	5	13	V	剥片	46	39	17	23.8	
28	BL	7	5	14	V	碎片				0.3	
29	BL	7	5	15	V	剥片	78	29	23	54.8	
30	BL	7	5	16	V	小原石	16	17	5	0.9	
31	BL	7	5	17	V	碎片				0.05	
32	BL	7	5	18	V	碎片				0.1	
33	BL	7	5	19	V	碎片				0.05	
34	BL	7	5	20	V	碎片				0.3	
35	BL	7	5	21	V	剥片	16	16	4	0.6	
36	BL	7	5	22	V	剥片	16	18	4	0.6	
37	BL	7	5	23	V	剥片	16	13	2	0.4	
38	BL	7	5	24	V	剥片	21	27	6	3.0	
39	BL	1	7	1		剥片	32	23	4	3.5	
41	BL	1	7	3	IV	2次加工のある剥片	41	21	8	6.1	8
42	BL	1	7	4	IV	ナイフ形石器破片	-	-	-	-	4
43	BL	1	7	5	IV	剥片	56	27	15	19.6	

整理番号	遺構の種類	遺構番号	グリッド	遺物番号	出土層位	器種	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	報告番号
44	BL	1	7	6	IV	碎片				0.4	
45	BL	1	7	7	IV	小原石	28	17	8	2.6	
46	BL	1	7	8	V	ナイフ形石器	87	53	19	71.0	4
47	BL	1	7	9	V	剥片	11	19	5	0.7	
48	BL	1	7	10	V	剥片	14	18	5	0.7	
49	BL	1	7	11	V	碎片				0.3	
50	BL	2	8	1	IV	碎片				0.4	
51	BL	2	8	2		碎片				0.3	
52	BL	3	8	3		碎片				0.6	
53	BL	2	8	4	V	碎片				0.6	
54	BL	3	8	5	V	剥片	67	37	18	41.0	
55	BL	6	9	1	IV	剥片	24	14	5	1.4	
56	BL	3	9	2	V	剥片	52	14	14	13.6	
57	BL	6	10	1		剥片	15	22	4	0.8	
58	BL	7	10	2	IV	微細剥離痕のある剥片	40	30	7	6.5	
59	BL	6	10	3	IV	微細剥離痕のある剥片	17	28	3	0.8	
60	BL	6	10	4	IV	微細剥離痕のある剥片	18	11	3	0.6	
61	BL	6	10	5	IV	剥片	15	29	6	2.7	
62	BL	6	10	6	IV	剥片	14	20	6	1.1	
63	BL	6	10	7	IV	剥片	16	15	5	0.7	
64	BL	7	10	8	V	碎片				0.4	
65	BL	6	11	1		剥片	23	27	6	2.0	
66	BL	6	11	2	V	剥片	43	24	7	6.6	
67	BL	6	11	3	V	剥片	21	15	4	0.6	
68	BL	7	11	4	V	碎片				0.3	
69	BL	7	11	5	V	剥片	19	16	5	1.2	
70	BL	7	11	6	V	剥片	17	18	3	0.7	
71	BL	7	12	1	V	2次加工のある剥片	23	31	5	20.7	12
72	BL	1	13	1	IV	剥片	15	6		0.2	
73	BL	1	13	2	IV	剥片	43	21	6	4.3	
74	BL	3	14	1	V	微細剥離痕のある剥片	46	64	15	19.6	16
75	BL	6	15	1	IV	剥片	21	28	4	1.7	
76	BL	6	15	2	IV	微細剥離痕のある剥片	9	22	8	1.8	
77	BL	6	16	1	かく乱	剥片	31	17	12	4.6	
78	BL	6	16	2	IV	碎片				1.5	
79	BL	6	16	3	IV	碎片				0.7	
80	BL	6	17	1	IV	碎片				0.05	

整理番号	遺構の種類	遺構番号	グリッド	遺物番号	出土層位	器種	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	報告番号
81	BL	8	18	1	Ⅲ	剥片	32	16	12	3.5	
82	BL	8	18	2	Ⅴ	ナイフ形石器	53	34	9	11.3	1
83	BL	8	18	3	Ⅳ	碎片				0.4	
84	BL	4	19	1	Ⅳ	剥片	50	28	9	12.1	
85	BL	4	20	1		台形石器	60	38	12	27.2	6
86	BL	4	20	2		2次加工のある剥片	51	34	7	9.3	14
87	BL	4	20	3	Ⅴ	剥片	68	37	14	21.3	
88	BL	5	21	1	Ⅳ	2次加工のある剥片	22	31	5	3.1	12
89	BL	5	22	1	Ⅳ	剥片	41	35	7	8.3	
90	BL	5	22	2	Ⅳ	剥片	52	40	17	30.0	
91	BL	5	22	3	Ⅴ	碎片				0.2	
92	BL	5	23	1		微細剥離痕のある剥片	12	14	3	0.5	
93	BL	4	25	1		剥片	24	31	12	63	
94	BL	4	26	1	Ⅳ	微細剥離痕のある剥片	63	18	7	5.0	18
96	BL	5	28	1		ナイフ形石器	52	24	7	7.2	3
97	BL	5	28	2		剥片	14	11	2	0.4	
98	BL	1	38	1	Ⅳ	2次加工のある剥片	30	21	13	6.0	11
99	ブロック外		39	1		槍先形尖頭器	64	32	13	26.3	29
100	BL	1	39	2	Ⅴ	剥片	15	16	5	0.7	
101	BL	1	39	3	Ⅴ	9次加工のある剥片	64	42	18	39.7	13
103	BL	1	39	5	Ⅴ	斧形石器	148	50	13	184.1	7
105	BL	1	40	1	Ⅲ	碎片				0.2	
106	BL	8	60	1	Ⅲ	剥片	32	20	8	5.0	
107	ブロック外		60	2	Ⅲ	ナイフ形石器	39	16	6	2.9	31
108	BL	9	60	3	Ⅲ	剥片	16	23	4	1.1	
109	BL	9	60	4	Ⅳ	剥片	29	17	4	2.9	
110	BL	8	60	5	Ⅳ	台形石器	63	46	13	28.8	5
111	BL	9	61	1	Ⅳ	剥片	20	11	6	0.9	
112	ブロック外		EN	85		ナイフ形石器	43	35	8	10.6	30
113	ブロック外	9住				石刃	53	23	6		32

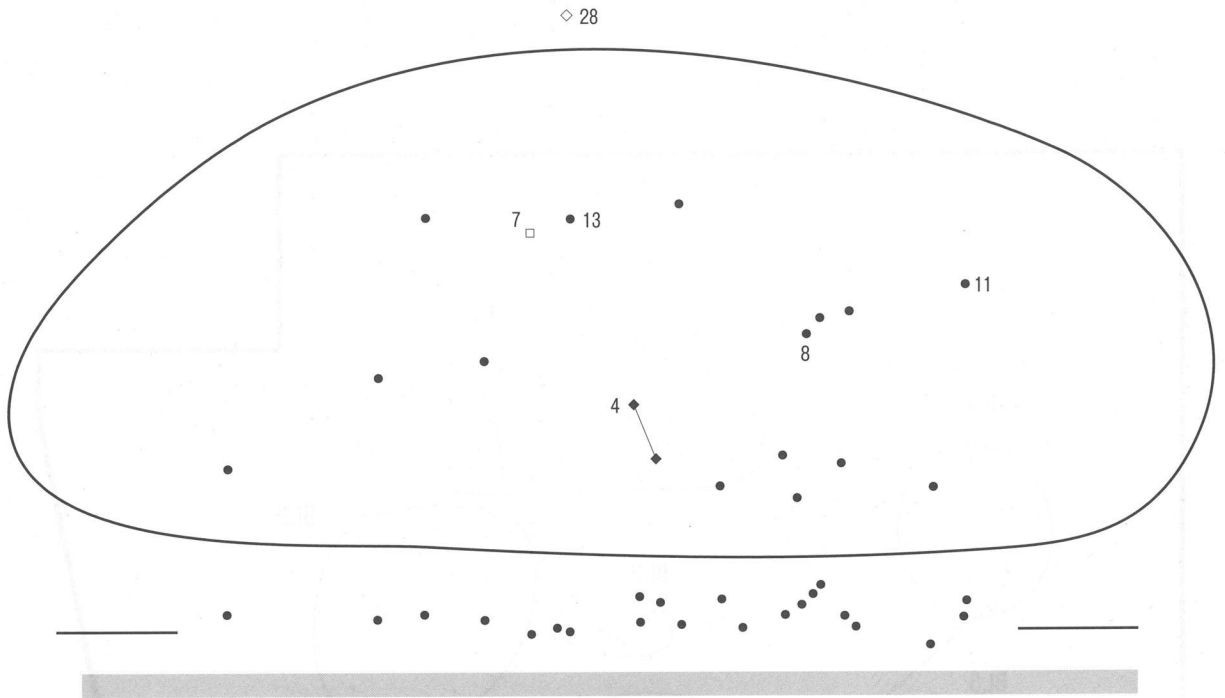


第9図 先土器時代遺物全体分布図

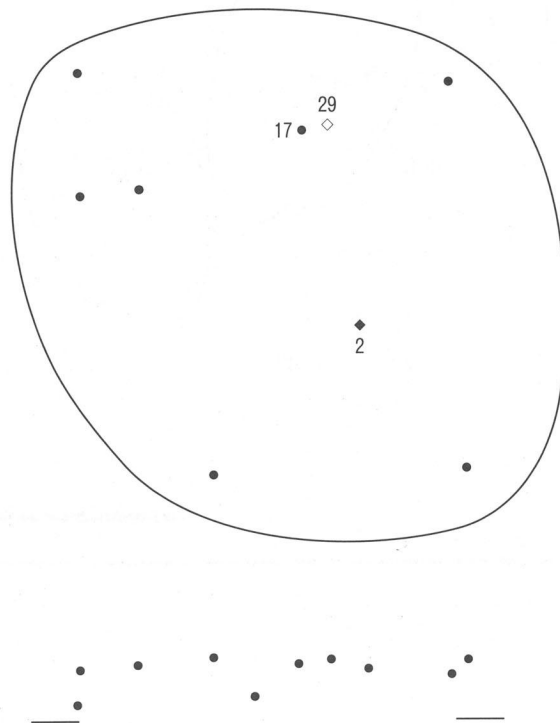


第10図 先土器時代遺物接合図

BL1

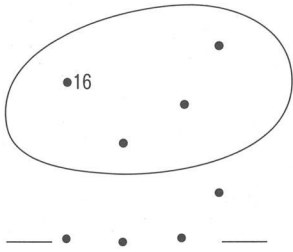


BL2

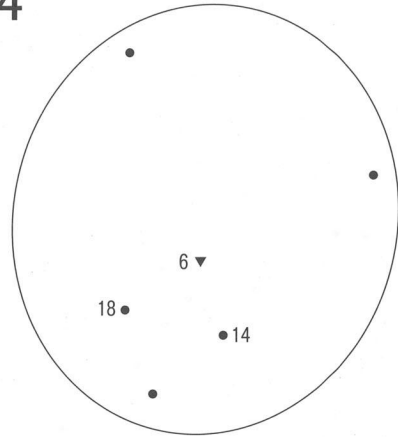


第11図 先土器時代遺物分布図その1

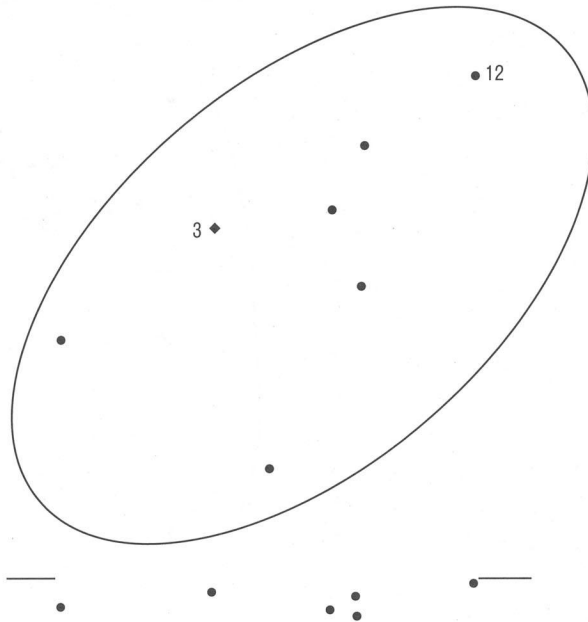
BL3



BL4



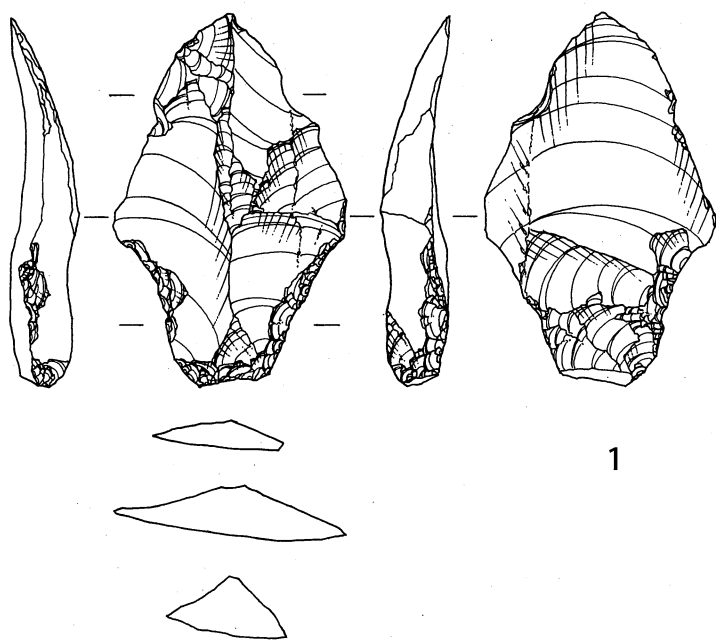
BL5



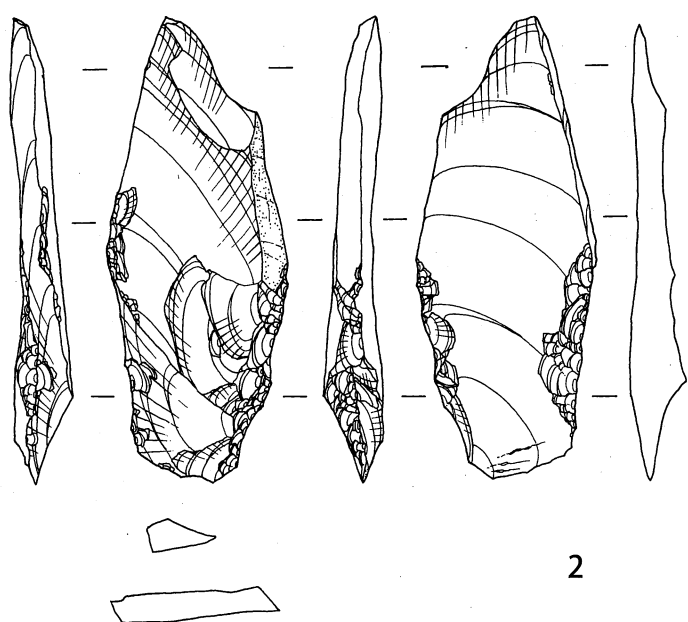
第12図 先土器時代遺物分布図その2



第13図 先土器時代遺物分布図その3

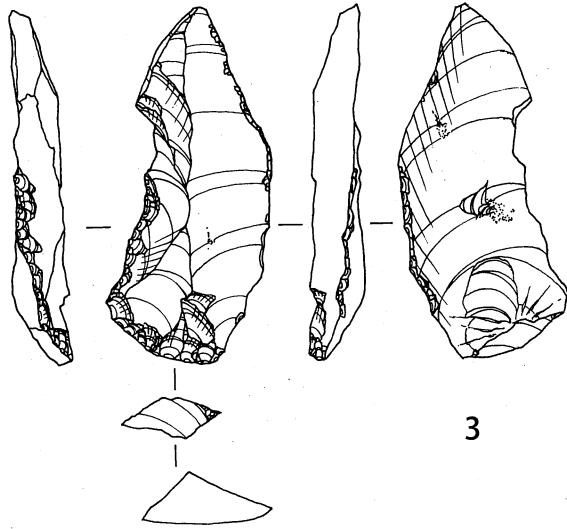


1

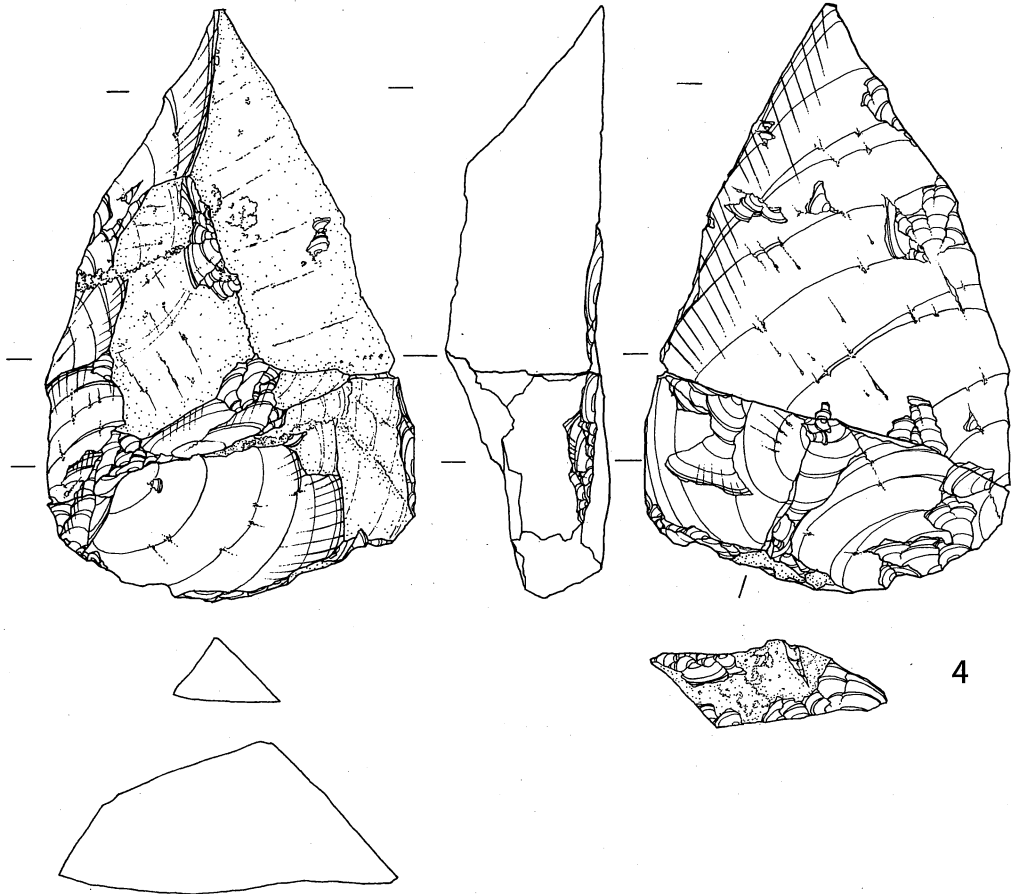


2

第14図 先土器時代遺物その1 (3:4)

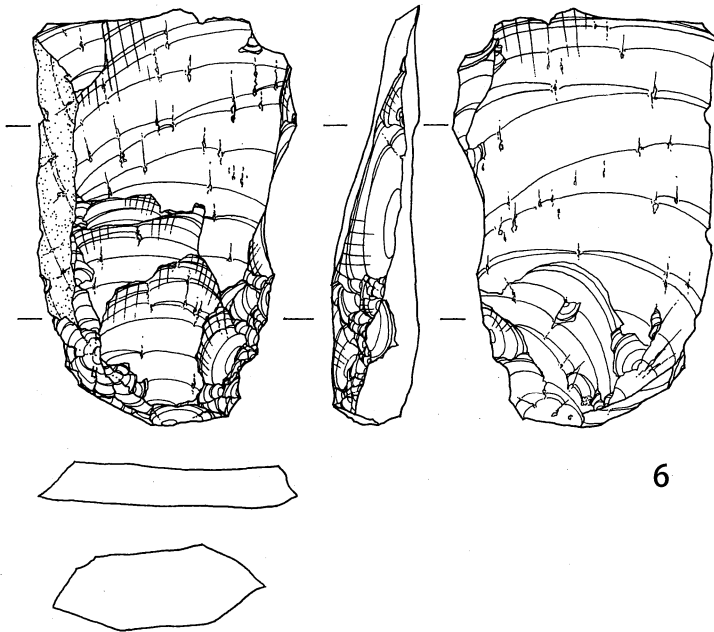
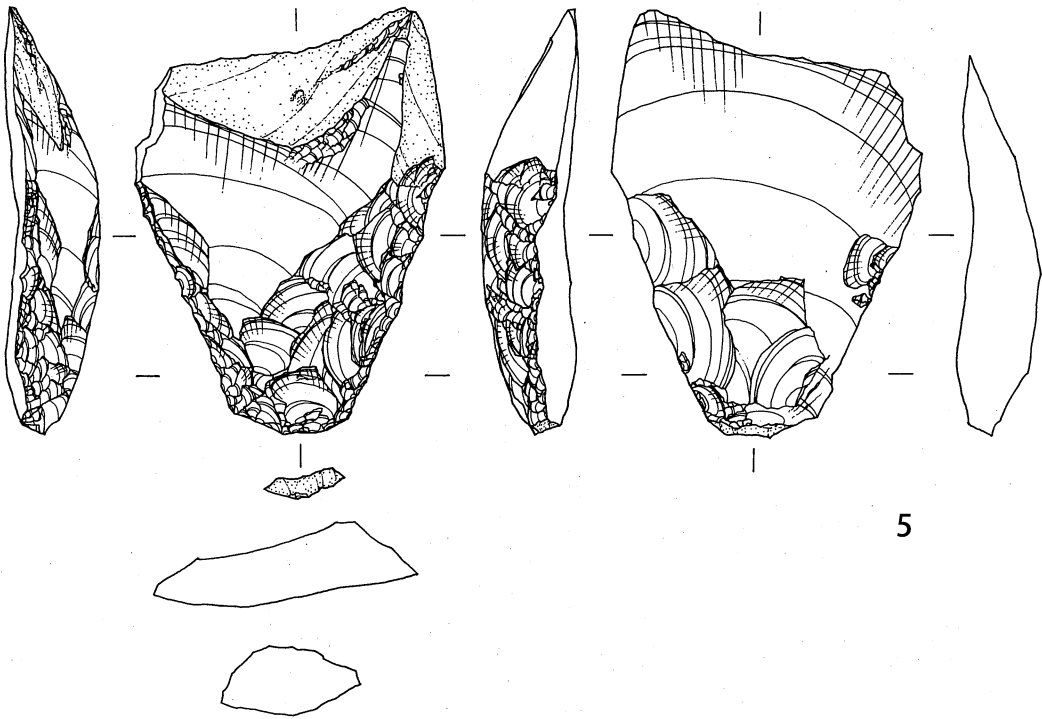


3

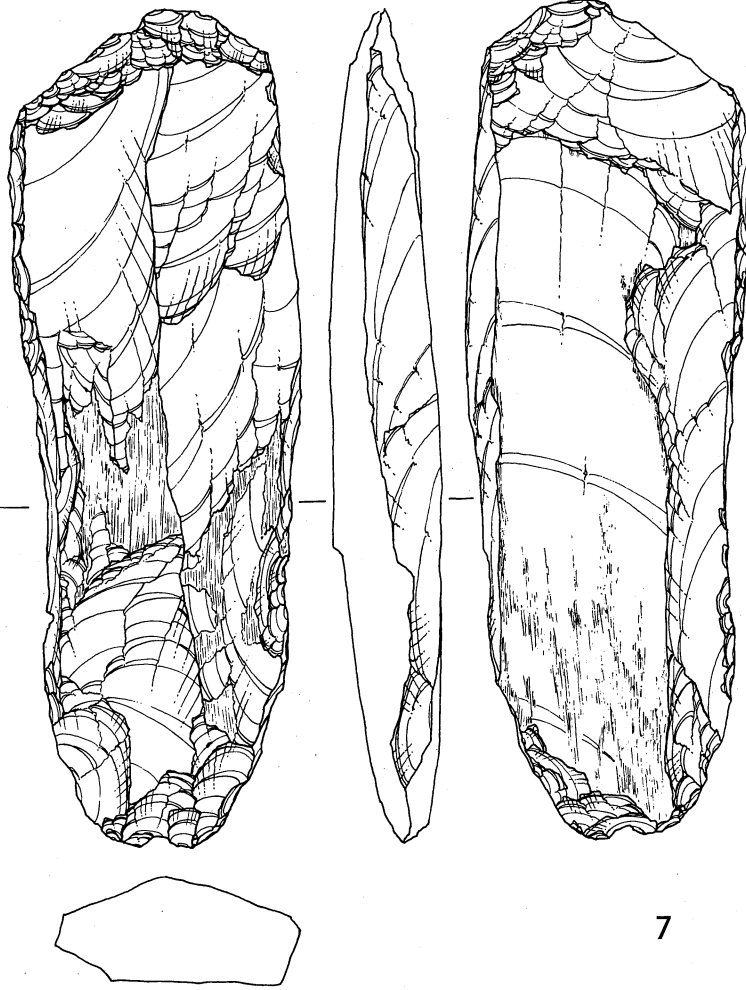


4

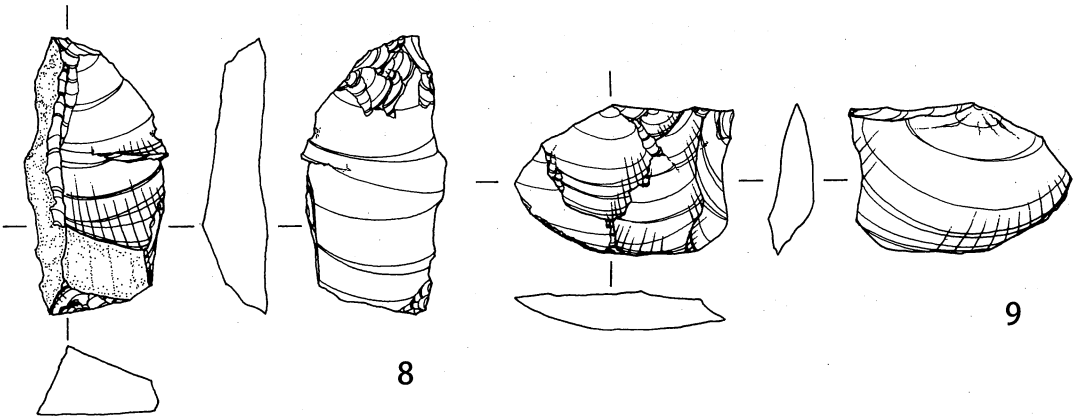
第15図 先土器時代遺物その2 (3:4)



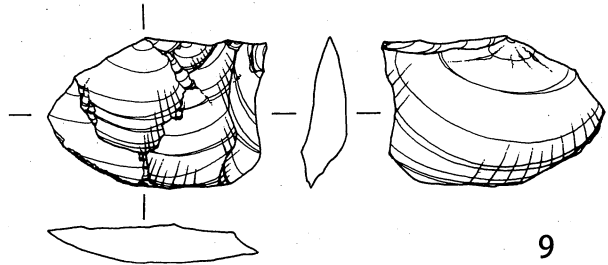
第16図 先土器時代遺物その3 (3:4)



7

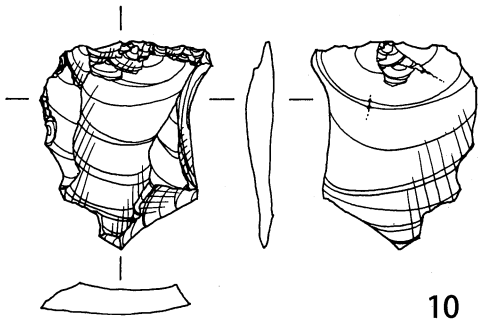


8

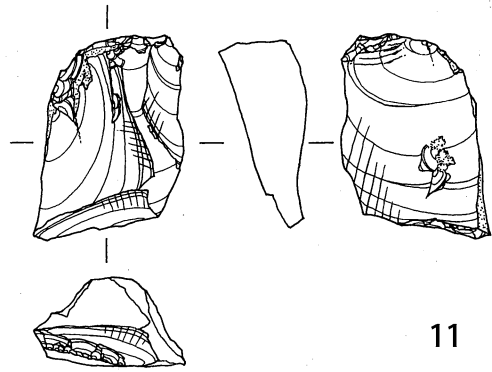


9

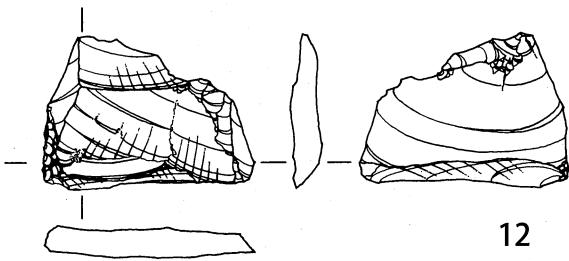
第17図 先土器時代遺物その4 (3:4)



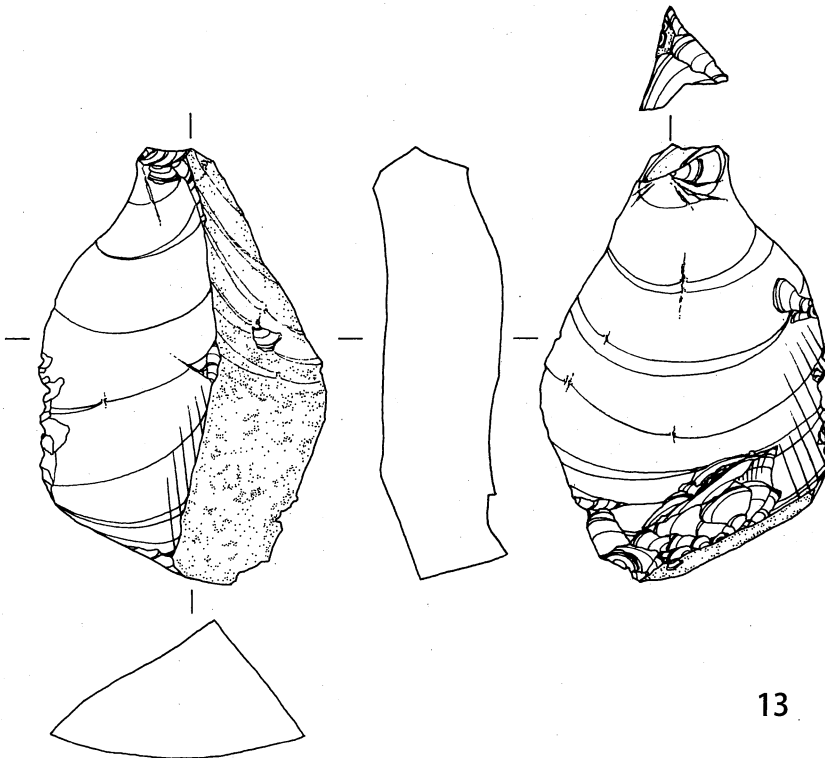
10



11

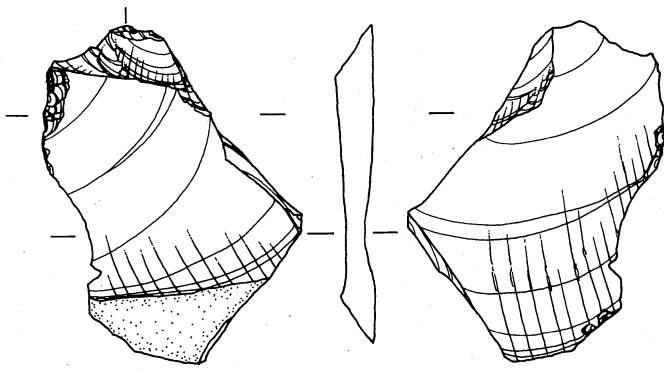


12

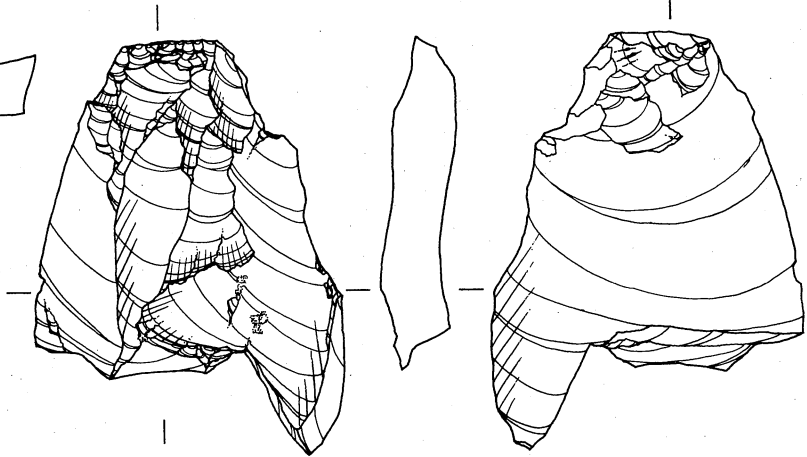
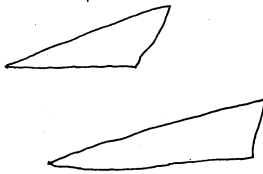


13

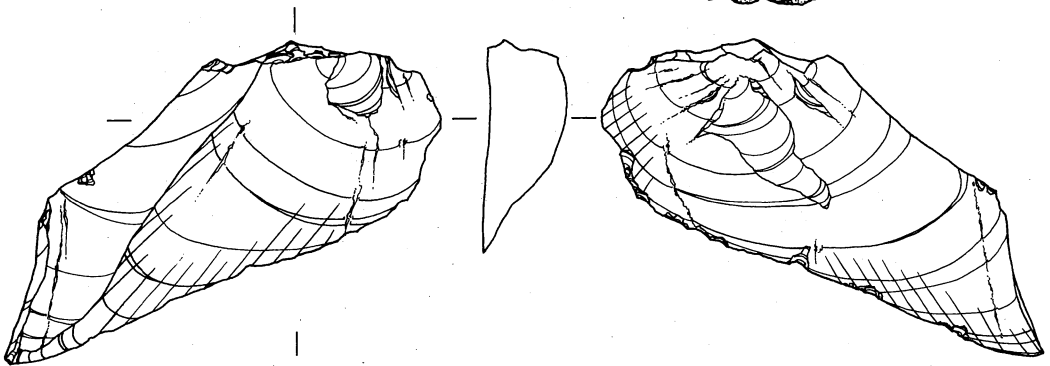
第18図 先土器時代遺物その5 (3:4)



14



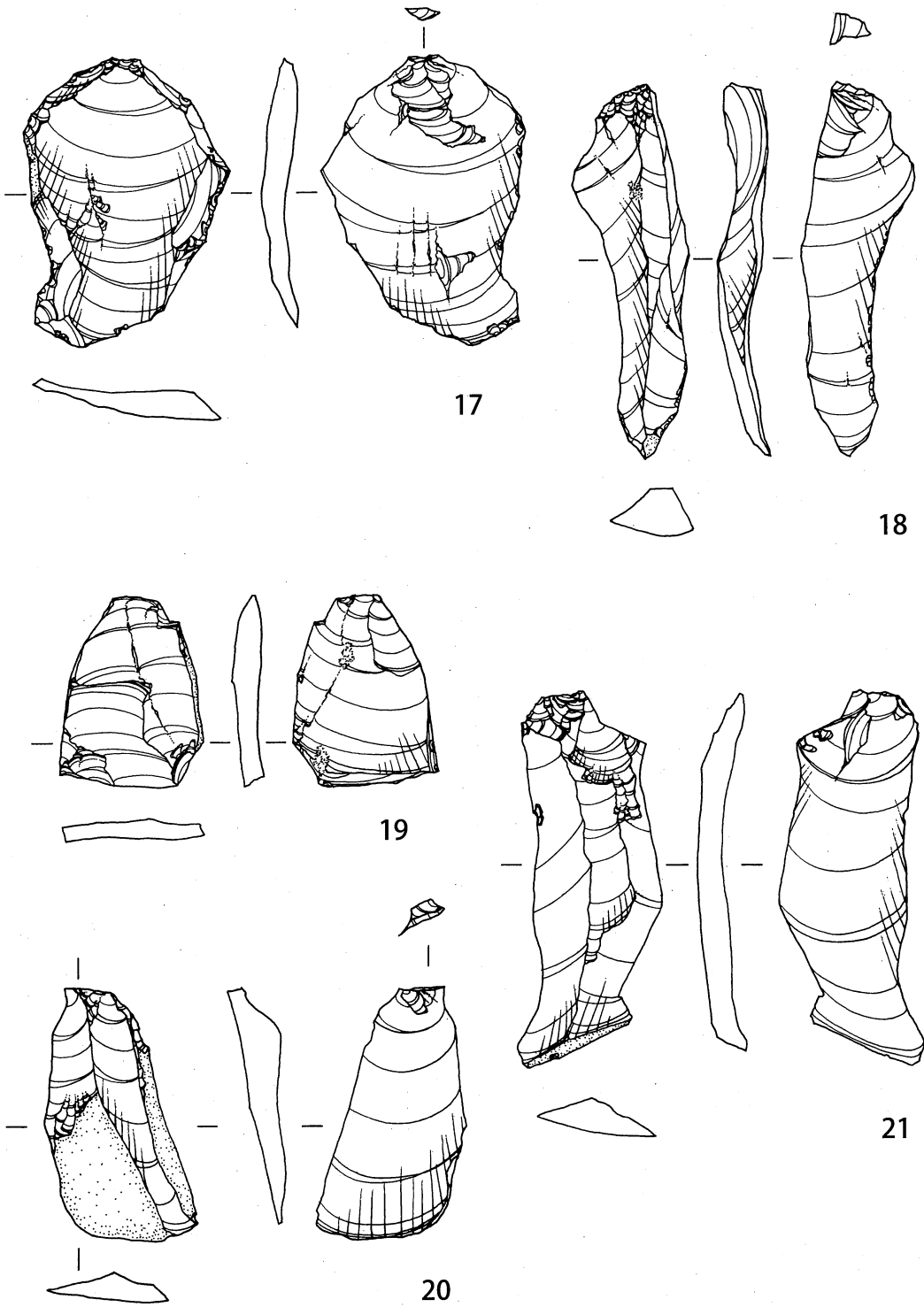
15



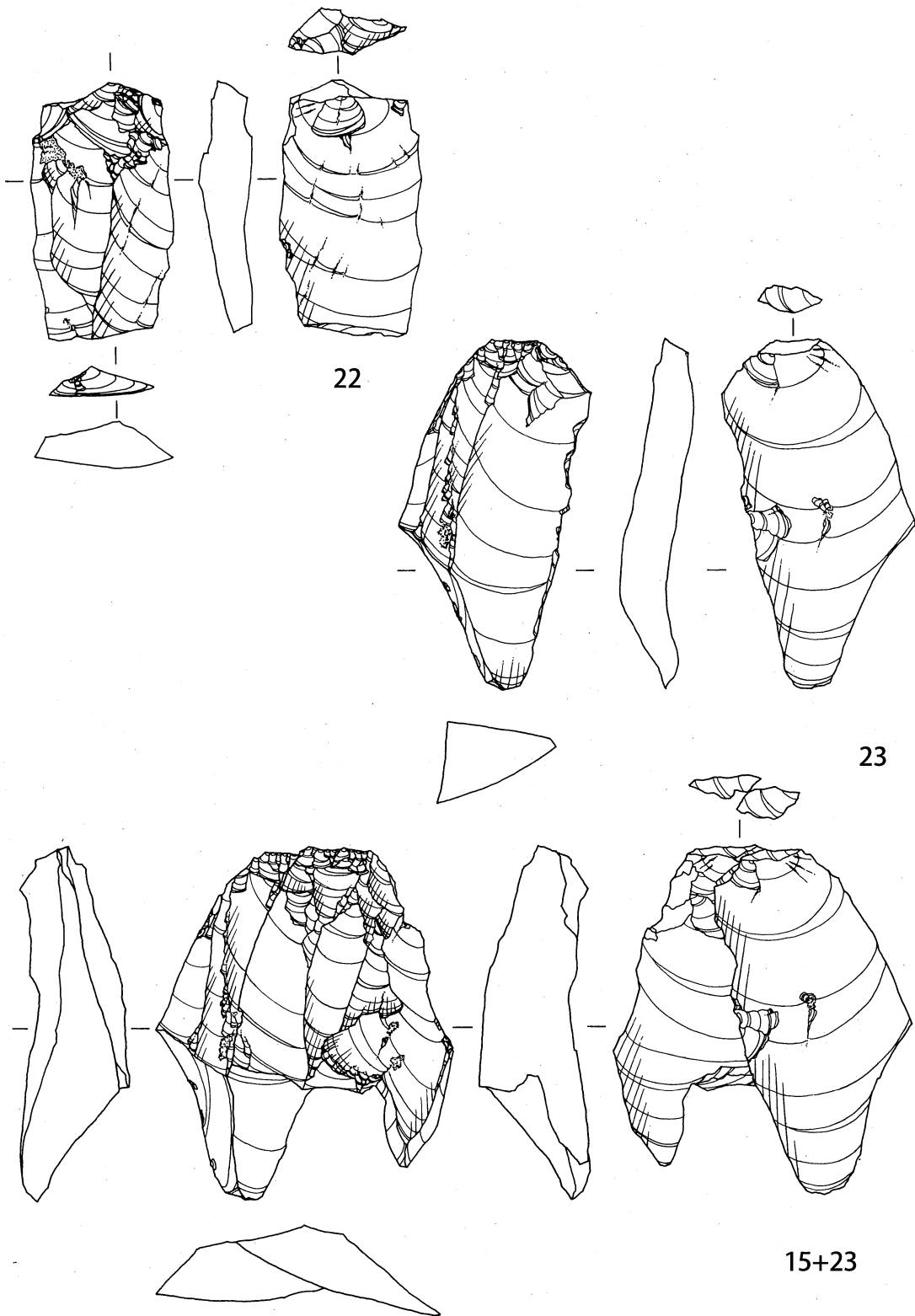
16



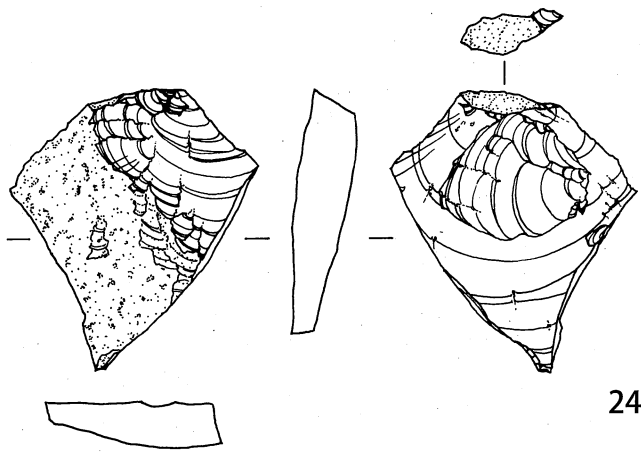
第19図 先土器時代遺物その6 (3:4)



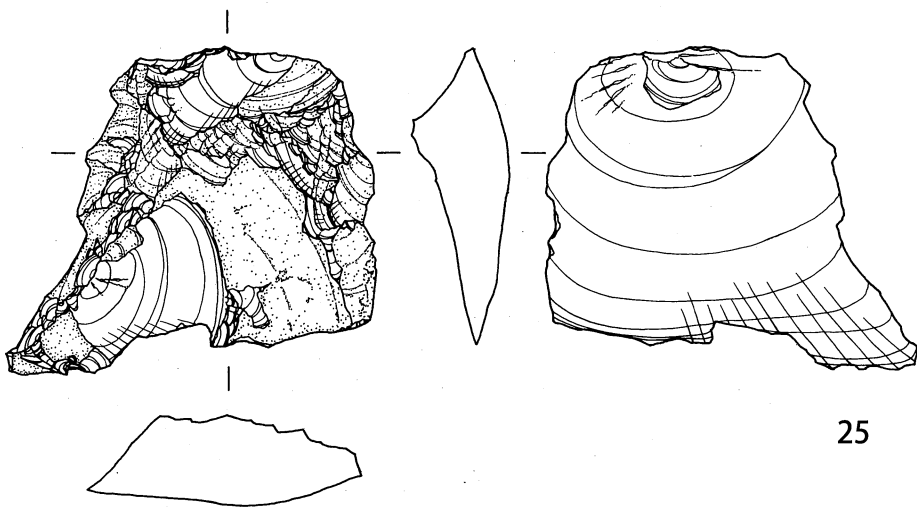
第20図 先土器時代遺物その7 (3:4)



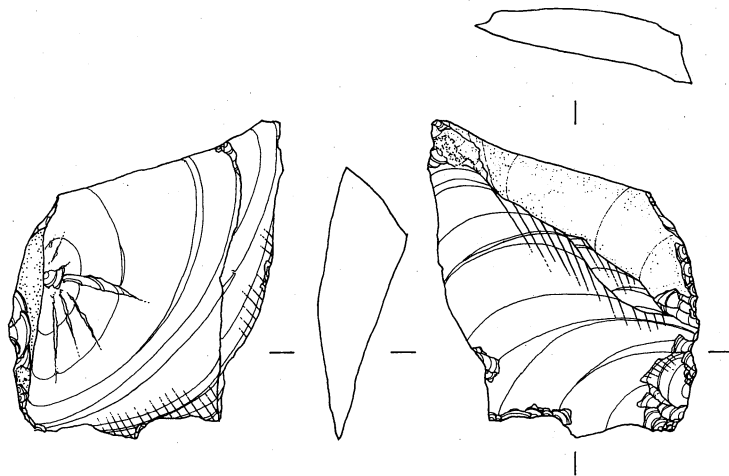
第21図 先土器時代遺物その8 (2:3)



24

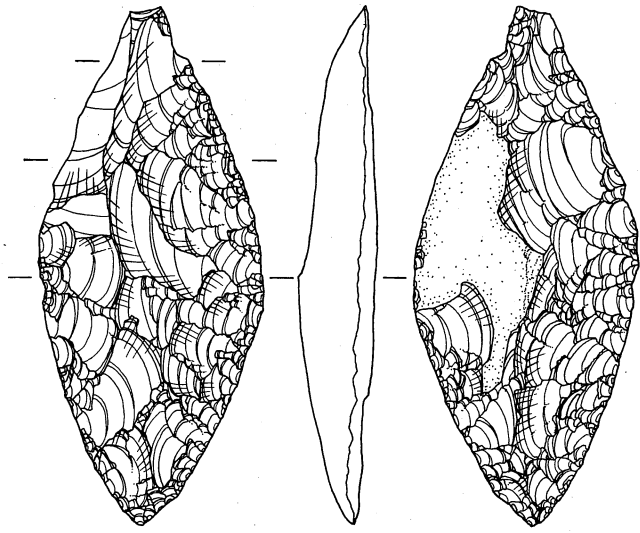


25

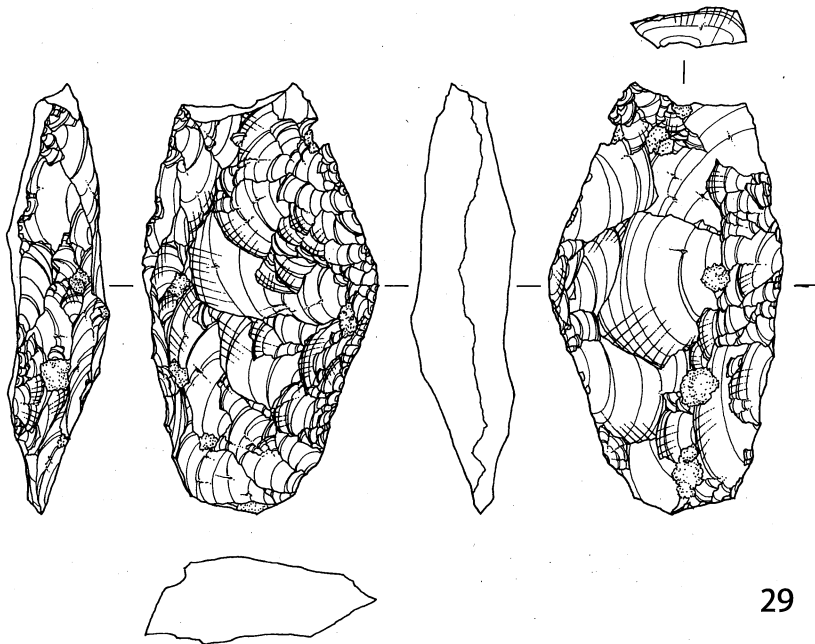


26

第22図 先土器時代遺物その9 (3:4)

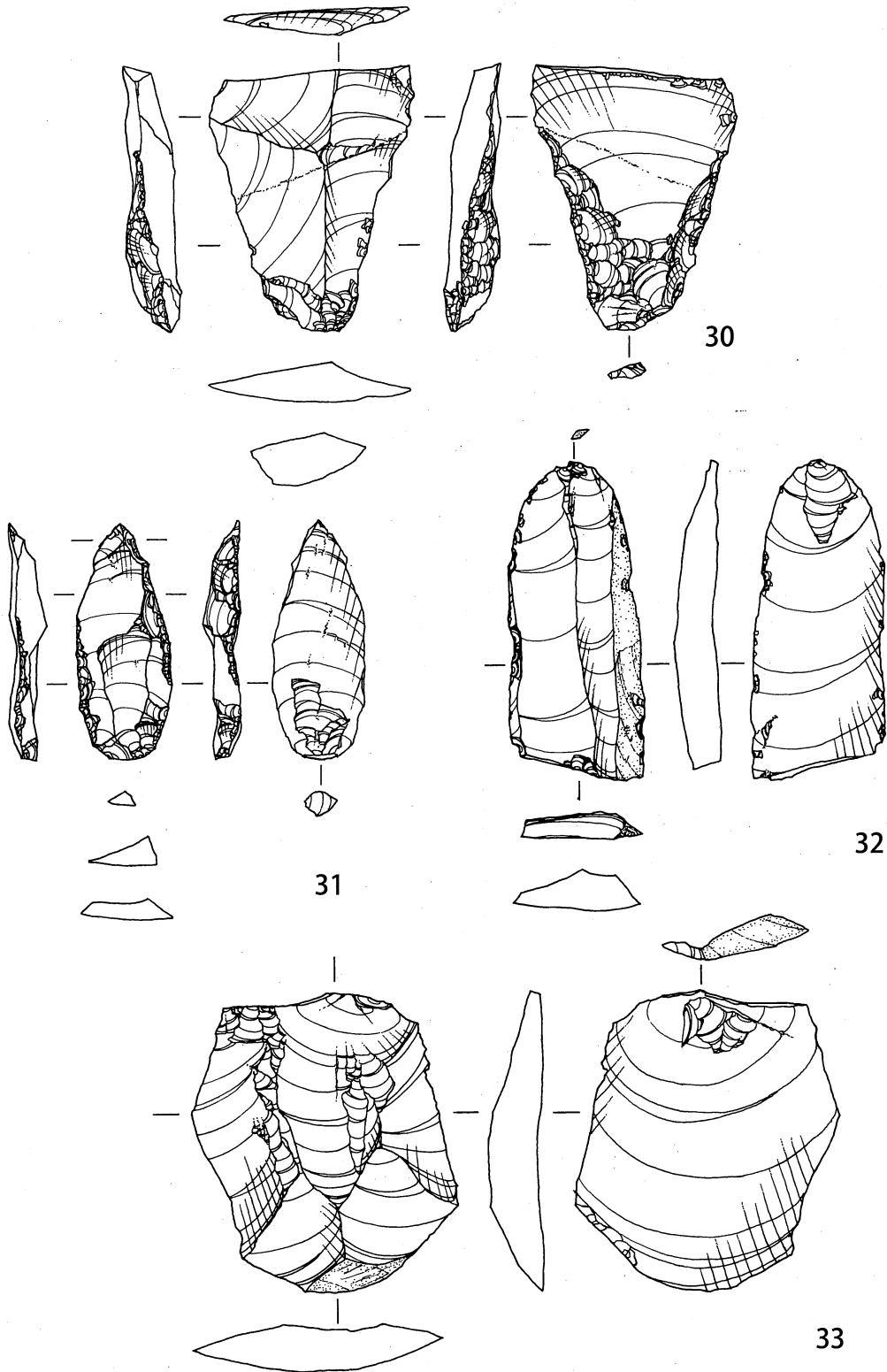


28



29

第23図 先土器時代遺物その10 (3:4)



第24図 先土器時代遺物その11 (3:4)

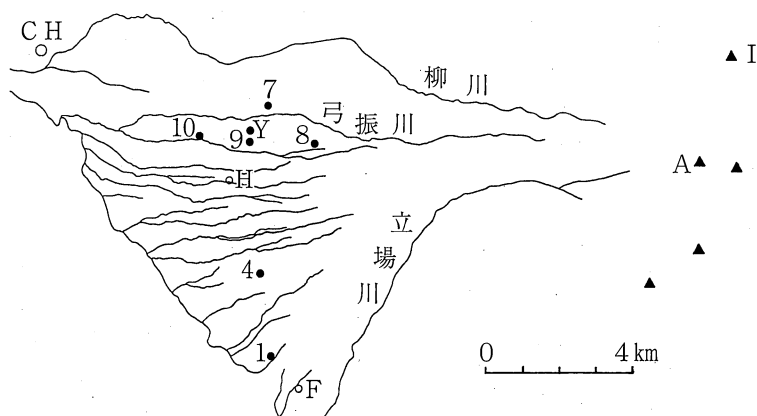
弓振日向遺跡のテフラ層

河西 学

はじめに

本遺跡の位置する八ヶ岳西麓は、弓振川・前沢川などの小河川によって開析された狭長の低地と、これに平行して残された台地とから構成される。本遺跡は、小規模な尾根状台地上に立地する。周辺地域では4～7mの風成火山灰層が堆積し、下部に存在する御岳第一軽石Pm-I（小林ほか1971）が広域に認められる（第25図・第26図）。遺跡内で観察される風化テフラ層は全体で厚さ約4mで礫層上に堆積し、地表下約3m付近にPm-IV（S1，小林ほか，1971）が薄いレンズとして存在し、Pm-Iはみられない。本遺跡では硬質褐色風成火山灰層（ハードローム層）中から黒曜石製の石器が出土している。

今回の分析は、テフラ層序の中で特にATと石器出土層準との層位関係を明らかにすることを目的として行った。

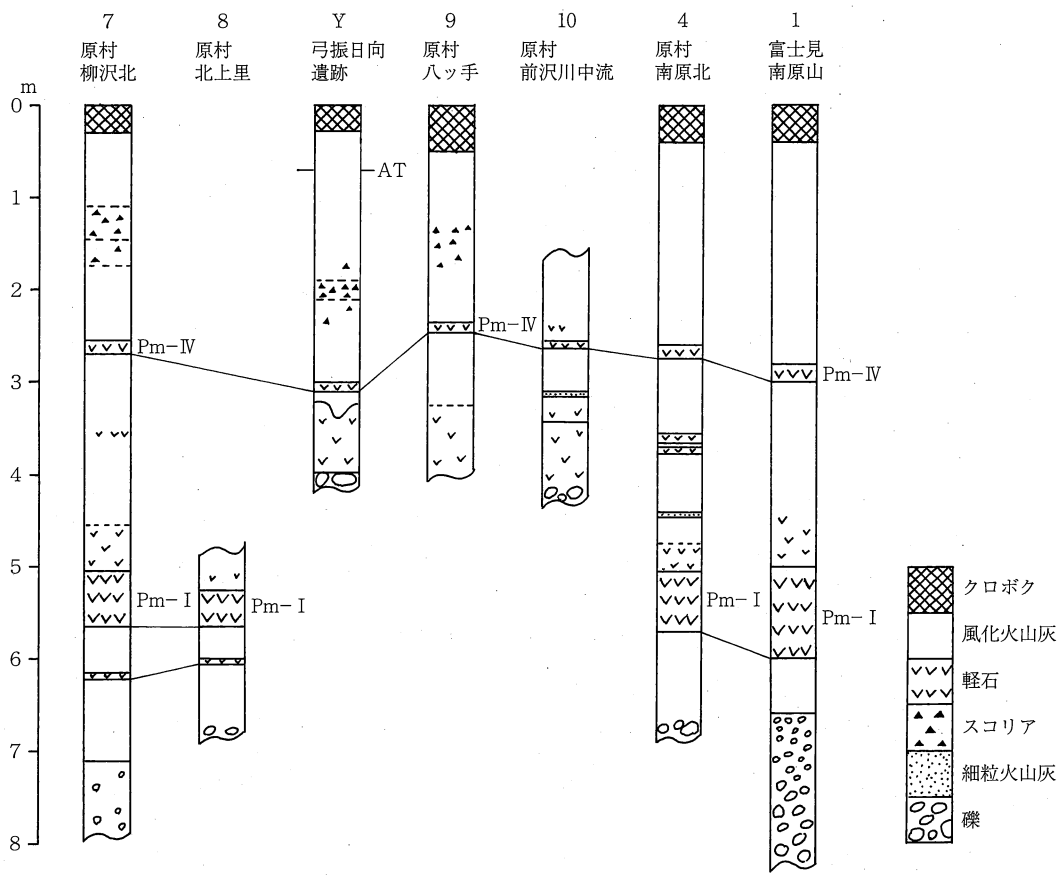


A 阿弥陀岳、CH 茅野市、F 富士見町、H 原村
Y 弓振日向遺跡、数字は柱状図番号

第25図 弓振日向遺跡位置図

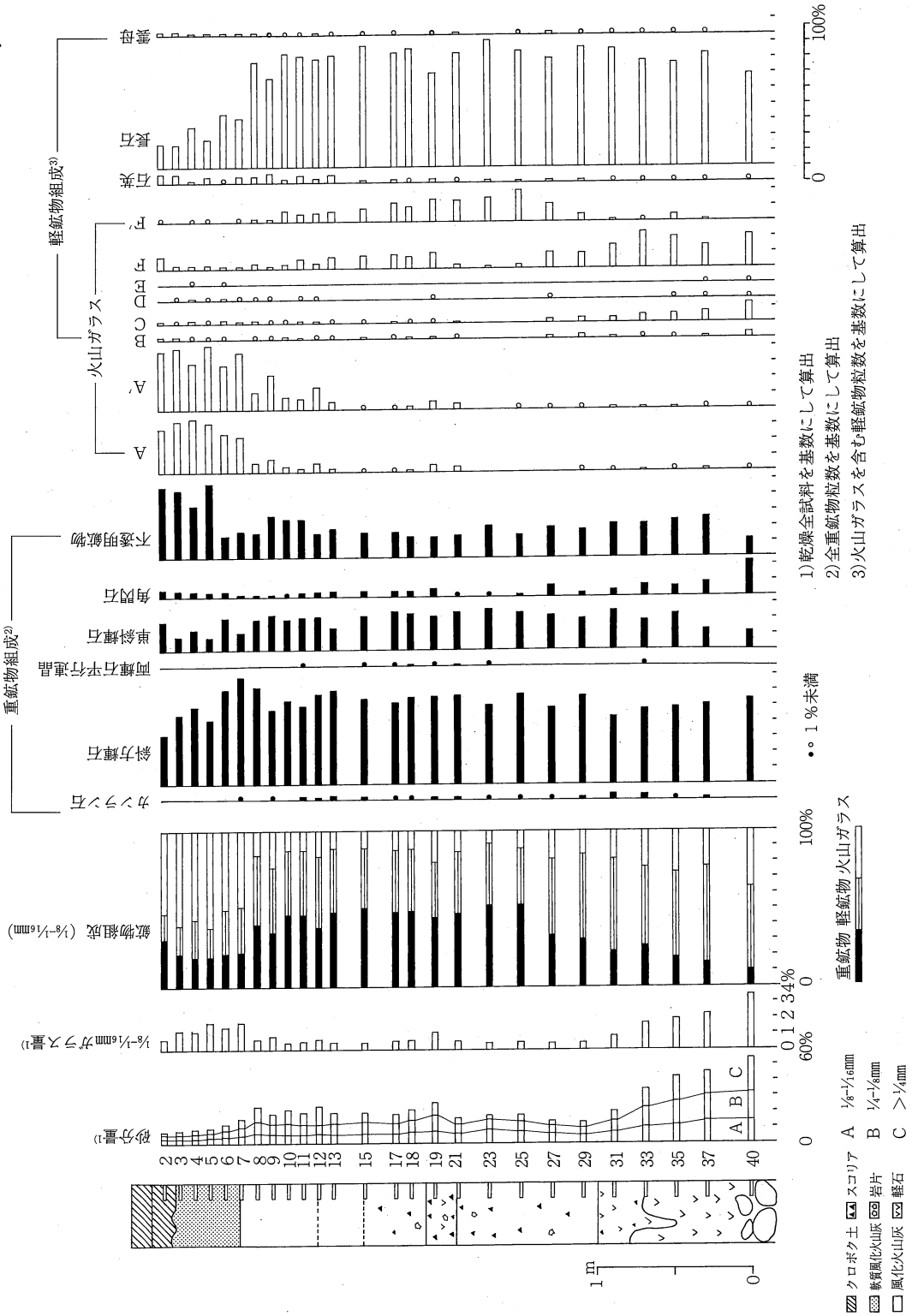
試料および分析する方法

試料は、自然堆積の標準土層として遺跡北部のAトレンチ、南部のBトレンチで、幅10×10cmの柱状連続試料をそれぞれ4m、4.2m採取し、このうちから室内において任意にサンプリングした。また出土石器直下の風成火山灰試料3点を採取した。

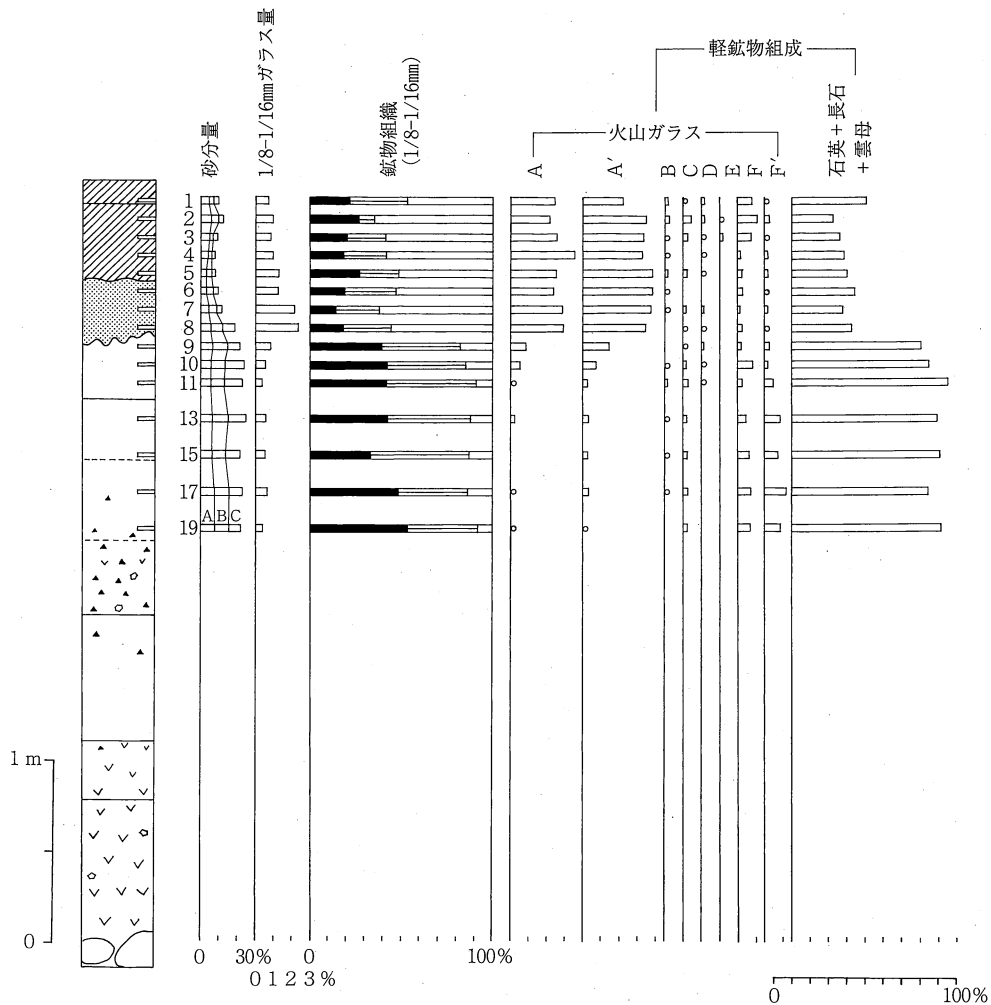


第26図 八ヶ岳西山麓のテフラ層柱状図

分析法は次のとおりである。湿ったままの試料約20gを秤量し、泥化・分散後、分析篩(#250)で受けながら流水にて泥分を除去した。乾燥後、分析篩(#60・120)を用いて>1/4mm、1/4-1/8mm、1/8-1/16mmの砂分を篩別後秤量した。1/8-1/16mmの一部をそのままスライドグラスに封入し検鏡した。別途同一試料を105℃5時間乾燥し、用いた試料の乾燥重量を計算し、試料あたりの1/8-1/16mmガラス量を求めた。なお検鏡は、プレパラートあたり火山ガラスおよび軽鉱物粒子の合計が200粒以上になるように計数した。火山ガラスの形態分類は(遠藤・鈴木1980)に従って行い、細粒結晶を包有するF型ガラスについてはF型とした。Aトレンチでは重鉱物組成も求めた。屈折率の測定は(新井1972)の方法に従って行った。



第27図 A トレンチ、テフラ試料の鉱物組成



第28図 Bトレンチ、テフラ試料の鉱物組成

分析結果および考察

分析結果を第27・28図、表5に示す。

トレンチのA 7(地表下70~72cm)・B 8(80~82cm)において無色バブルウォール型であるA・A'型ガラスが最大となる。ガラスの屈折率は、A 7(レンジ1,497-1,502、主要レンジ1,499-1,500)、B 8(レンジ1,499-1,502、モード1,500)を示す。ガラスの形態および屈折率から、これらの濃集ガラスは2.1~2.2万年前のATに対比される。

トレンチ最下部の地表下330~400cmに存在する軽石層は、全体に褐色、5~35mmの安山岩円礫が含まれ、ときにPm-Iに由来すると思われる発泡良好な黄色軽石粒もわずかに混入する。おそらく二次堆積層と考えられる。重鉱物組成は、最下部で角閃石を20%以上含むが他の部分では斜方輝石>単斜輝石≧不透明鉱物>角閃石であり、Pm-Iの組成とは異なっている。周辺地域

表5 石器出土層準直下テフラ分析結果

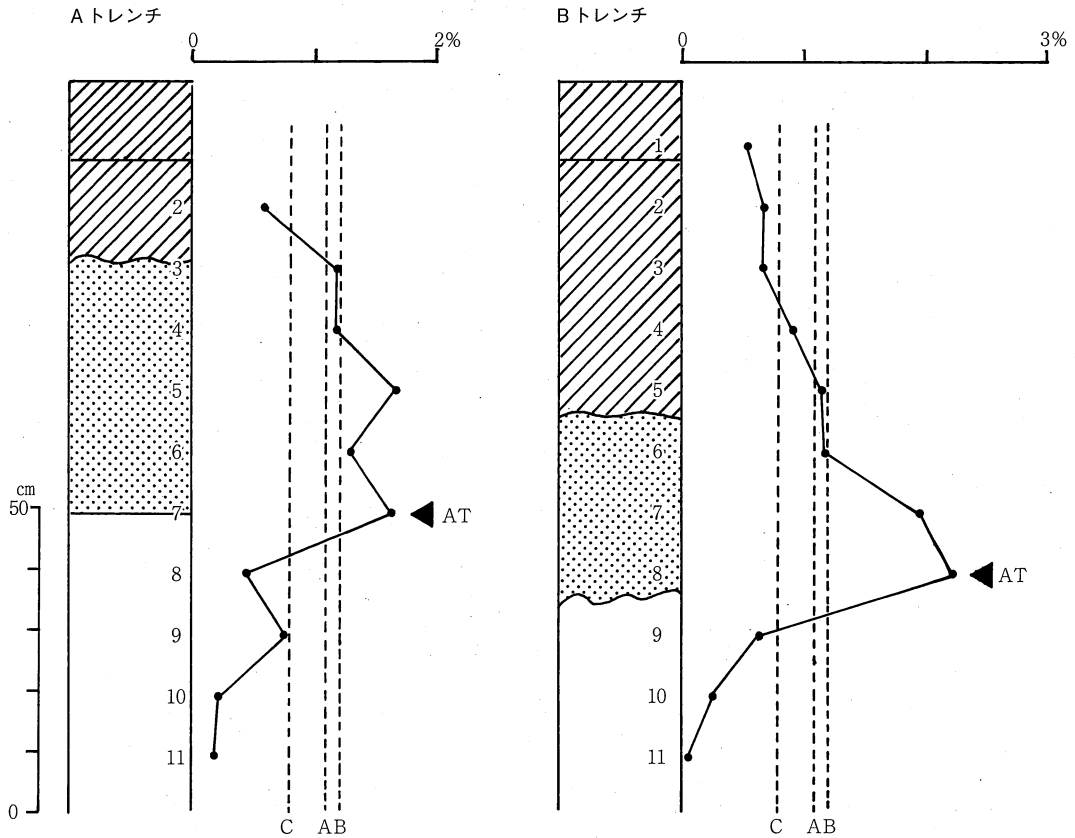
試料		A 61113a	B 61113b	C 61122	
試料当りの砂分量 (%)	1/8 - 1/16mm	5.2	6.1	6.2	
	1/4 - 1/8mm	7.0	7.5	8.0	
	> 1/4mm	5.5	6.3	11.1	
試料当りの1/8 - 1/16mm火山ガラス量 (%)		1.3	1.4	1.2	
鉱物組織 (1/8 - 1/16mm) (%)	重鉱物	27.9	29.2	34.9	
	軽鉱物	34.4	37.0	39.4	
	火山ガラス	37.7	33.8	25.7	
重鉱物組成 (%)	カンラン石	0.9	1.0	2.6	
	斜方輝石	50.0	48.5	59.7	
	両輝石平行連晶	0.0	0.0	0.0	
	単斜輝石	22.3	21.8	18.4	
	角閃石	0.0	4.0	0.9	
	不透明鉱物	26.8	24.7	18.4	
軽鉱物組成 (%)	火山ガラス	A	20.8	20.8	9.9
		A'	22.8	20.4	16.4
		B	0.0	0.4	1.9
		C	0.7	2.9	0.9
		D	1.7	0.8	1.4
		E	0.4	0.0	0.0
		F	2.8	1.6	4.3
		F'	3.1	0.8	4.7
	石英 長石 雲母		0.0	2.0	5.2
			45.6	49.5	55.3
			2.1	0.8	0.0

では礫層の上位に Pm - I が風成テフラとして堆積している場合が多いが、本遺跡では Pm - I 降灰以降まで水の影響が残っていたものと考えられる。

Pm - IV (S - 1) は A トレンチ断面で地表下約 300cm 付近に最大 10cm の厚さでレンズ状に分布しているが、採取柱状試料中には赤色スコリアがわずかに点在するにすぎない。赤色スコリアは、粒径 1 ~ 5mm、分級中程度、発泡良 ~ 中、粒子は風化し指で容易につぶれる。また Pm - IV 中には単斜輝石・斜方輝石・斜長石などの結晶粒子も含まれる。

Pm - IV と A T の中間にスコリア・岩片が多く含まれる部分が存在する。A トレンチ 190 ~ 210 cm、B トレンチの 190 ~ 240 cm に相当する。これらは平均 1 ~ 3mm、最大 5mm、新鮮で分級中程度、暗灰色緻密な安山岩片、灰色 ~ 明灰色やや多孔質の輝石安山岩片、発泡の良くない暗灰色スコリアを多く含む。そのほか褐灰色 ~ 黒色スコリアや赤灰色安山岩質岩片等をわずかに含む。また単粒の鉱物粒子の含有も多い。斜長石・単斜輝石・斜方輝石が多く、角閃石・石英をわずかに

伴う。1/4mm以上では単斜輝石の量が斜方輝石より多い。柱状自形～半自形鉱物も含まれるが全体にこわれた鉱物粒子が目立つ。このスコリア層は、八ヶ岳北西麓の新时期ローム層上部層の八ヶ岳起源のテフラ層（北沢・河内1967）に相当するものと考えられる。



第29図 1/8-1/16mm砂分中のA・A'型ガラス量
 (破線は石器出土層準直下のガラス量を示す)

石器出土層準について

上述のように濃集火山ガラスはATに対比された。ATの分布の等厚線図からみると中部地域では保存が良好ならば10~20cmの厚さのATが期待される。しかし本地域は風成堆積層中にATが存在しており、単一層としてATを認識するのは一般的に困難である。これは削剥作用や攪乱作用によりテフラ粒子の二次的移動が活発であったためと考えられる。従って本遺跡では第29図に示されるようにATのガラスの含有量が最大かつ下位試料との含有量増加率が最大であるA7・B8をAT層準と考えることとする。このAT層準は、硬質・軟質風化火山灰層境界から軟質火山灰層下部に位置している。従って硬質風化火山灰層中出土の石器群はATより古い。

さらにATを特徴づけるA・A'型火山ガラスの含有量の垂直変化と石器出土層準直下での含有量の関係から見た場合、石器出土層準のA・A'型ガラス含有量は、A・B両トレンチのAT

層準より下位の硬質風化火山灰層中、および軟質風化火山灰層から黒褐色土層中の含有量に相当する。後者は、深度および岩相において実際に石器の出土した層準と異なる。しかし前者の場合、実際の石器が地表下約85~95cmの明らかに硬質風化火山灰層中から出土した事実とよく一致する。従って以上の二点から石器出土層準が層位的にA Tより下位にあることは明らかである。

テフラの年代は、A Tが2.1~2.2万年前、P m - I が約8万年前、P m - IVは大山倉吉軽石D K P (町田・新井1979) (約4.8万年前) より下位に存在し、竹本ほか (1987) は5.7万年前の年代を推定している。石器出土層準の年代は、A Tとの層位関係からみて2.1~2.2万年前より古いことが極端にさかのぼった年代ではないと推測される。

引用・参考文献

- 新井房夫 1972 「斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究—」 第四紀研究, 11 (254-269)
- 遠藤邦彦・鈴木正章 1980 「立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層」 考古学と自然科学13 (19-30)
- 北沢和男・河内普平 1967 「八ヶ岳北西山麓のローム層—八ヶ岳火山列・円頂丘形成期の火山活動—」 地質学雑誌73 (199-206)
- 小林国夫・清水英樹・北沢和彦・小林武彦 1971 「御嶽火山第一学石層」 地質学雑誌73 (291-308)
- 町田洋・新井房夫 1976 「広域に分布する火山灰—始良 Tm 火山灰の発見とその意義—」 科学 36 (339-347)
- 町田洋・新井房夫 1979 「大山倉吉軽石層—分布の広域性と第四紀編年上の意義—」 地学雑誌 88 (33-50)
- 竹本弘幸・百瀬貢・平林潔・小林武彦 1987 「新时期御岳テフラ層の層序と時代—中部日本における編年上の意義—」 第四紀研究25 (337-352)

VI 縄文時代の遺構と遺物

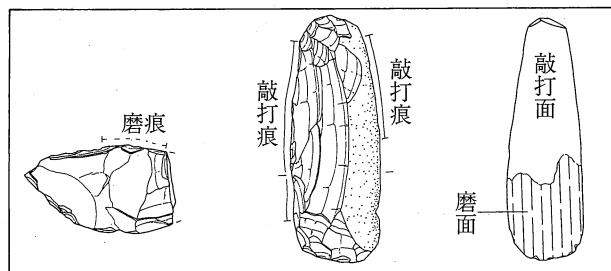
1 遺構と遺物

(1) 竪穴住居址

本調査では、尾根上の平坦部から緩やかな南斜面から中期の竪穴住居址10軒を検出した。中葉の新道期が9軒と後葉曾利Ⅱ期が1軒で、住居址に重複はなく当地方の遺跡としては比較的短期間の集落址であり、その全域を調査できたものと思っている。各遺構から出土した土器と石器は、その点数を記載するにとどめ

「調査の成果と課題」でふれたい。遺構間接合した資料については、便宜的に実測図は土器破片が最も多く出土した遺構に掲載してある。

なお、実測図中の石器の表現は第30図の如くである。



第30図 石器実測図の表現方法

中期中葉の竪穴住居址

第1号竪穴住居址 (第6・31~34・88・89・91図、写真9~11)

調査の経過

本址は第1次発掘調査で、EH-73グリッドで南東壁をEH-75グリッドで北東壁を確認し住居址Aと呼んだものである。

本調査は重機で表土剥ぎを行い引き続き人力で検出作業を進めた。基本層序第Ⅱ層黒色土の下半部で炭化物を包含する埋土を認めるがプランを明確にするまでに至らず、第Ⅳ層の軟質ローム上面でEF-72~75、EG-72~75、EH-72~75の12グリッドに跨る楕円形を呈する竪穴住居址を検出した。

土層観察ベルトを自然傾斜の東西方向に設定しⅠ~Ⅵに分けた。Ⅰは黒色土で基本層序の第Ⅱ層にあたる。Ⅱは黒褐色土でⅠより褐色が増し炭化物を包含する。Ⅲは含炭化物ローム褐色土でⅡより褐色が増す上にロームの細粒を包含する。ローム細粒が多い所では黄色く見えるくらいである。Ⅳは含ローム褐色土でⅢよりローム粒が大きくなり、大きい粒は径8mmくらいである。炭化物を包含するところもあり一様ではない。Ⅴは黄褐色土でロームの包含が極めて多くなり黄色く見える。Ⅵはロームブロックで壁土が崩落したものである。以上のように逆三角堆土と三角堆

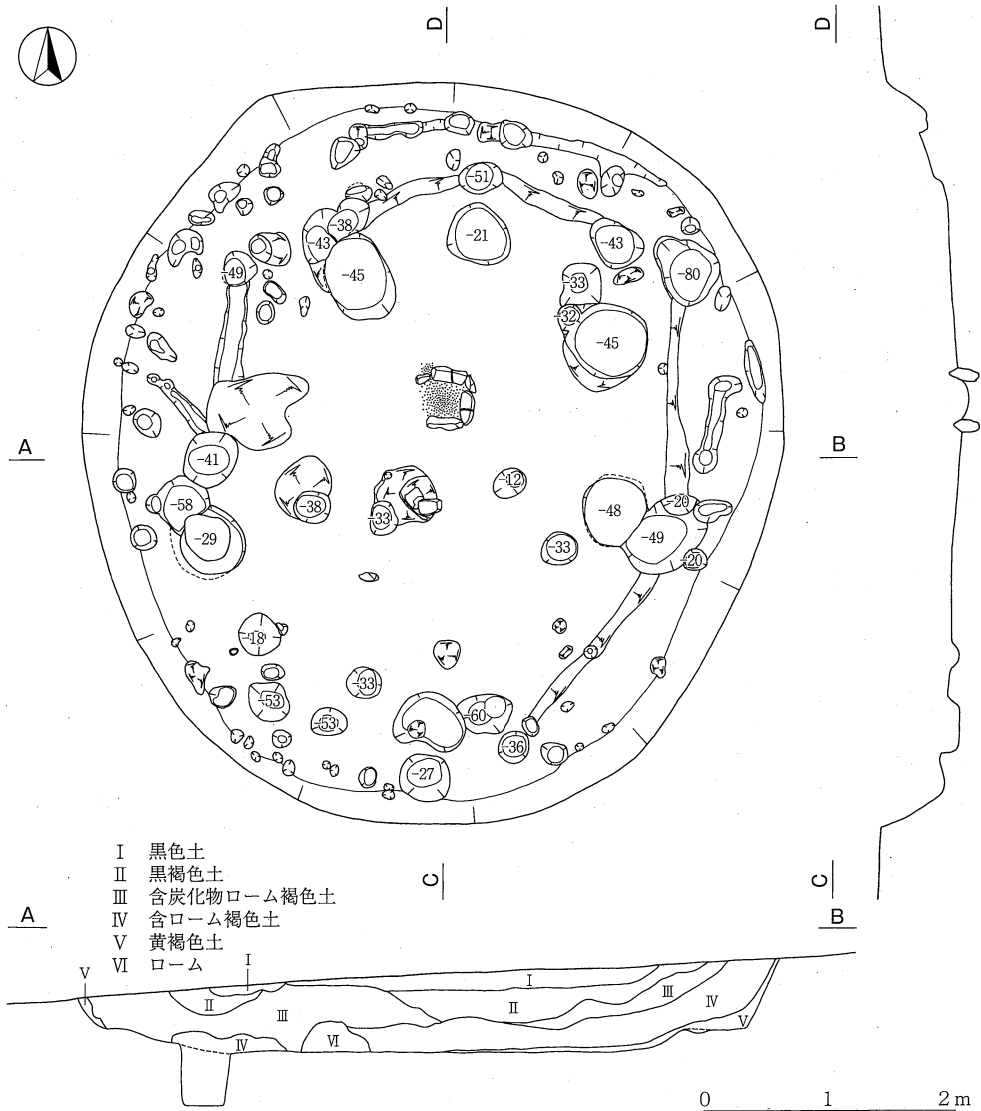
土の発達がみられた自然埋没である。

遺物は少ないが北壁近くからミニチュアの完形土器が出土した。

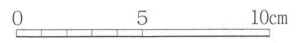
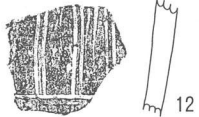
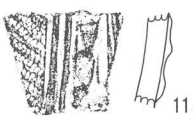
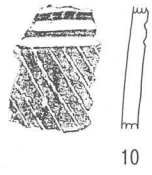
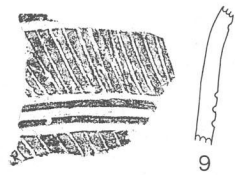
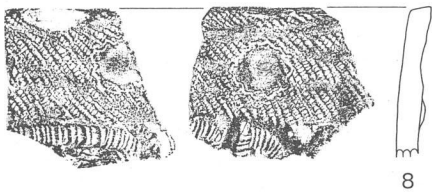
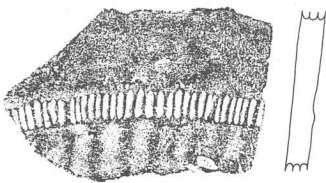
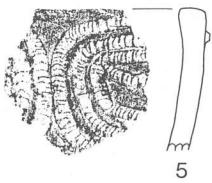
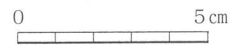
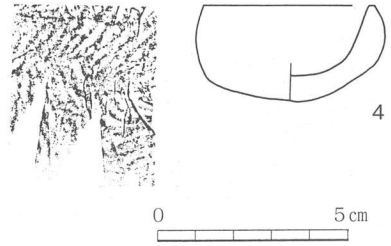
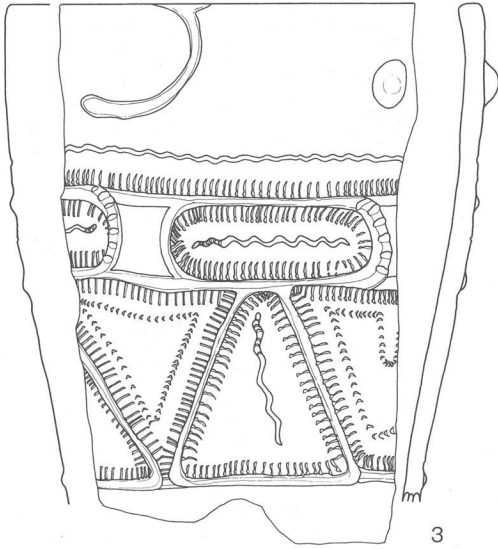
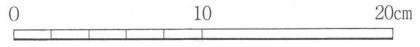
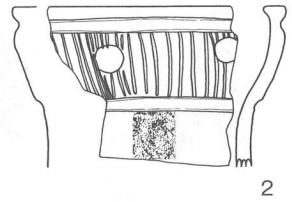
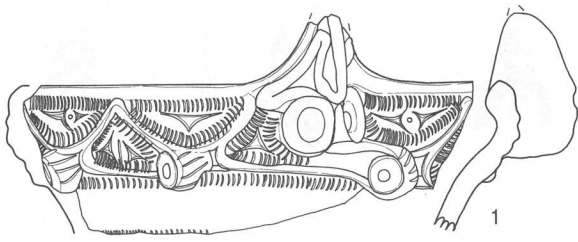
遺構

竪穴住居址の平面形は円形で大きさは長軸5.88m、短軸5.58mである。壁の立ち上がりは良好で、壁高は東53cm、西22cm、南38cm、北30cmである。

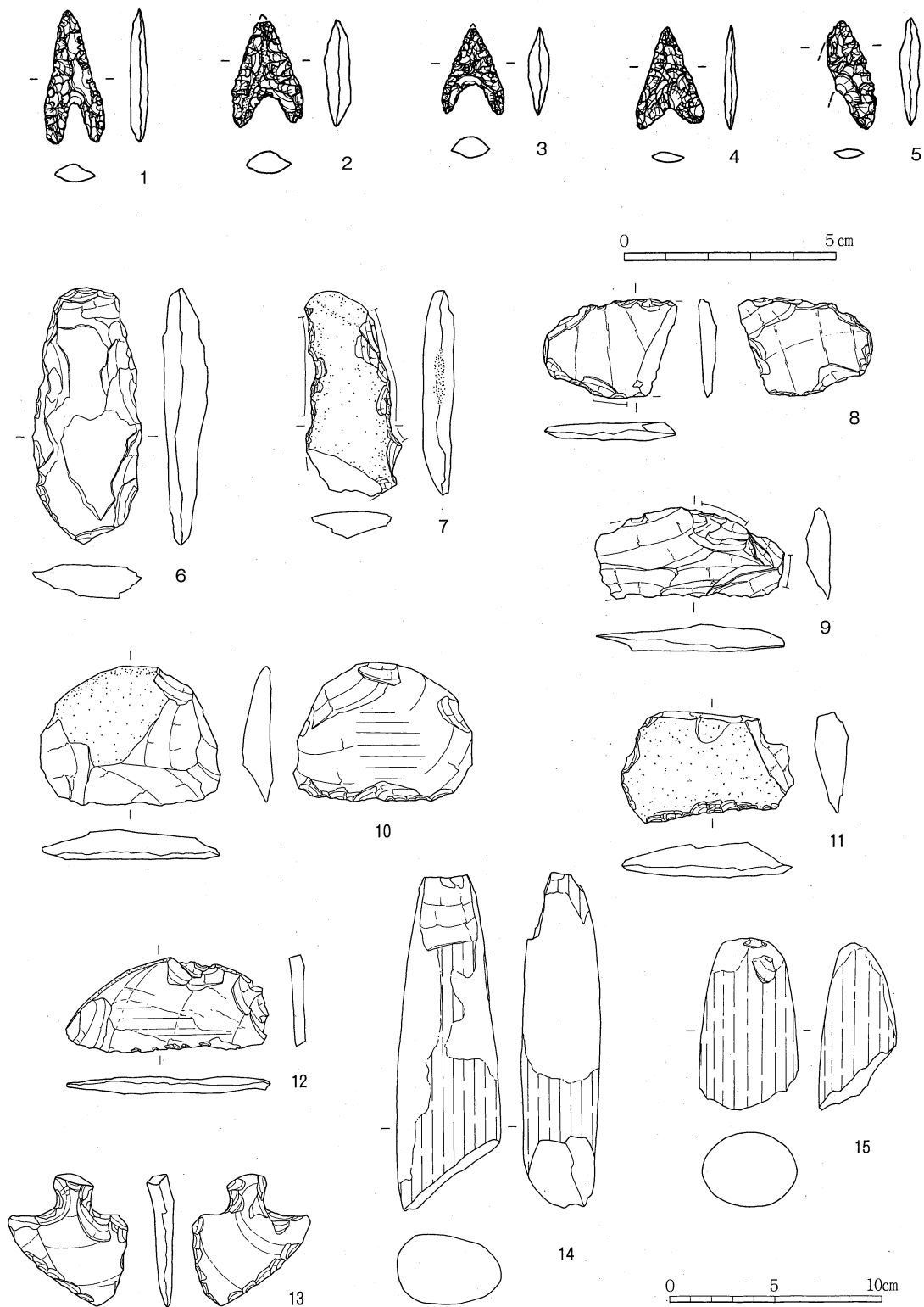
床面は新道期特有の手法をもつ住居址で、柱穴間を結ぶ周溝から外壁側は高く内側が低く段差が設けられている。そのレベル差は14~20cmであるが、入口部にあたる南西側には周溝はなく床面に段差はなくゆるやかな傾斜になっている。



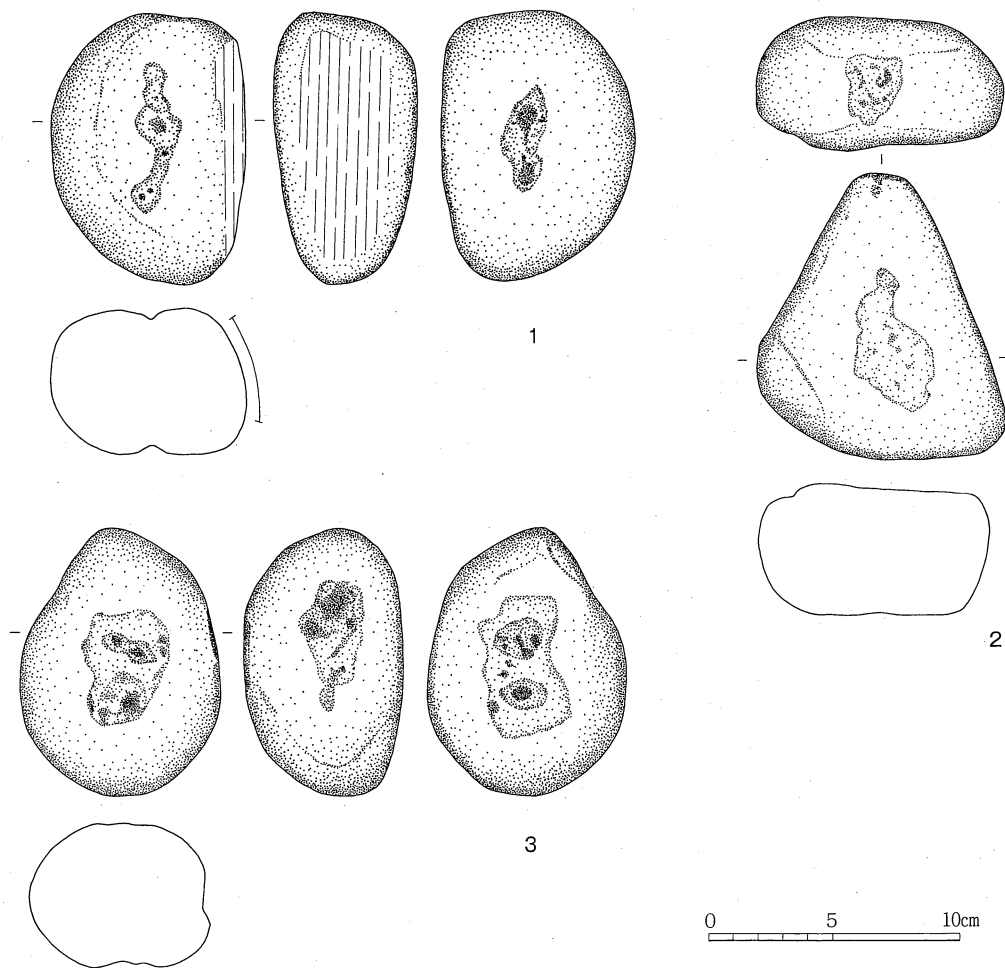
第31図 第1号竪穴住居址



第32图 第1号竖穴住居址出土土器



第33図 第1号竪穴住居址出土石器 その1



第34図 第1号竪穴住居址出土石器 その2

周溝は2形態あり、壁直下のものは幅7~10cm、深さ5cmほどで部分的にみられる。柱穴間を結ぶものは南西辺にみられないが、基本的には六角形になるもので幅は8~20cm、深さは2cmほどと浅いが8cmと深い所もある。

支柱穴は6穴であるが重複が認められる。中にはロームで確りと貼り床されたものもあり同心円上建て直しが行われていることは容易に考えられる。なお、柱穴の中には3回におよぶ重複が認められるものがある。支柱穴以外では壁際に小ピットが集中するが、径20~25cm、深さは13~34cmとばらばらで規格性に欠け、性格については不明である。

炉は中央やや北寄りにコの字状の石囲炉があるが、方形石囲炉の一辺の石が取り除かれたものであろう。焼土は厚く2~6cmでその下層も火熱で変色している。炉の構築は、北辺と南辺は石に合わせた穴を掘り埋め立てているが、東辺には穴は掘られていないが石は立てられている。規模(内径)は30×(30)cmである。

遺物

土器 中期中葉の新道式である。破片から器形を復原した3点(第32図1~3)とミニチュア土器1点(4)、破片9点(5~13)を図示した。(9・10)は同個体土器である。

遺構間接合 第4号竪穴住居址の深鉢(第40図3、第88図3)、第4号竪穴住居址の深鉢(第44図11、第89図2)、第5号竪穴住居址の深鉢(第49図3、第91図1)との接合がある。第6号竪穴住居址の有孔鏝付土器(第53図3、第91図3)と直接の接合はないが同個体の破片がある。

石器 石鏃5点(第33図1~5)、ピエス・エスキーユ21点、二次加工のある剥片4点、使用痕のある剥片3点、打製石斧2点(6・7)、横刃形石器6点(8~12)、石匙Ⅱ類1点(13)、磨製石斧2点(14・15)、磨石・凹石類3点(第34図1~3)、石核7点、黒曜石剥片251点、黒曜石以外の剥片22点である。

第3号竪穴住居址 (第6・35~38・87・91・92・97・100図、写真15~20)

調査の経過

本址は第1次発掘調査においてDK-80グリッドで北東壁を確認し、住居址Cと呼んだものである。

本調査では手掘りで検出作業を進め、第Ⅱ層の下半部で漆黒色・ローム細粒を包含する黒色土の埋土を認めるがプランを明確にするまでには至らず、第Ⅳ層のソフトローム上面で検出した。

DI-79~81、DJ-78~81、DK-78~81、DL-79・80の13グリッドに跨る平面卵形を呈する住居址である。西壁付近は掘りすぎたきらいがある。

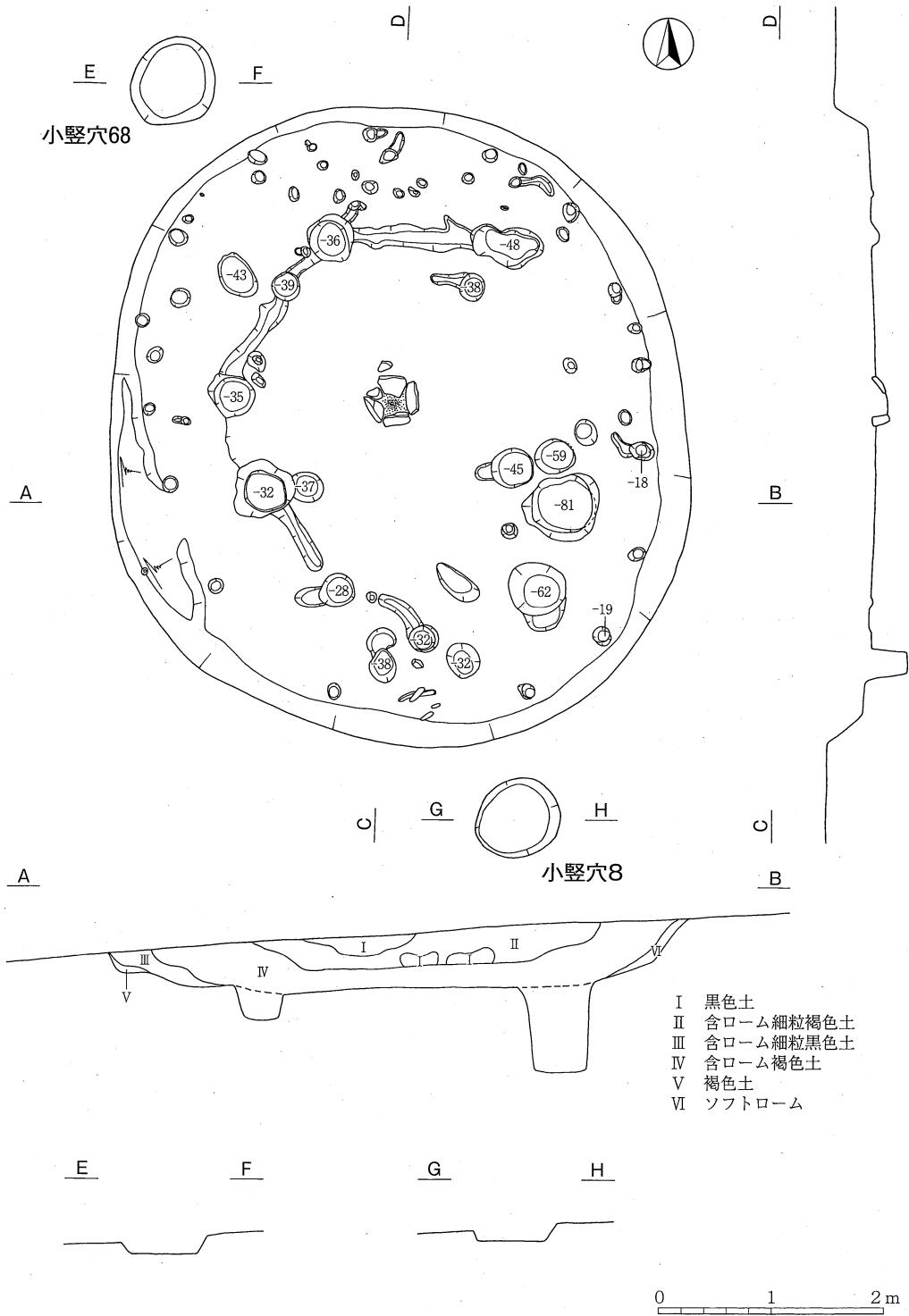
土層観察ベルトは自然傾斜の東西方向に設定したが、第1次調査のグリッド掘りのため中央よりやや南寄りとなる。床面までは深く東で50cm、西で28cmを計り埋土はⅠ~Ⅵに分けたが、Ⅰは黒色土で基本層序の第Ⅱ層にあたるが色調はやや漆黒色になる。Ⅱは含ローム細粒褐色土である。Ⅲも含ローム細粒黒色土でⅡより黒色味を増す。Ⅳは含ローム褐色土で。Ⅴは褐色土でⅣより黄色味が強い。Ⅵはソフトロームで壁土が落下したものであろう。埋土中には炭化物の混入はみられたがそれほど多くない。以上のように逆三角堆土と三角堆土の発達が見られた自然埋没である。

東壁直下の三角堆土上で完形土器が、南壁直下の床面から乳棒状石斧3点が重なり、そこから16cm離れて1点が出土した。それら4点の刃部はほぼ同方向を向いた状態であった。また、その間から打製石斧1点が出土した。石器研究上の好資料となろう。

遺構

竪穴の平面形は卵形で大きさは長軸5.80m、短軸5.08mである。壁の立ち上がりは普通で壁高は東50cm、西28cm、南32cm、北30cmである。床面は新道期特有のもので周溝から外の壁際が高く、そのレベル差は14~20cmである。

周溝は基本的に柱穴間をほぼ直線に結ぶもので、幅は14~20cm、深さは数cmと浅く北西の半分



第35図 第3号竪穴住居址、小竪穴8・68

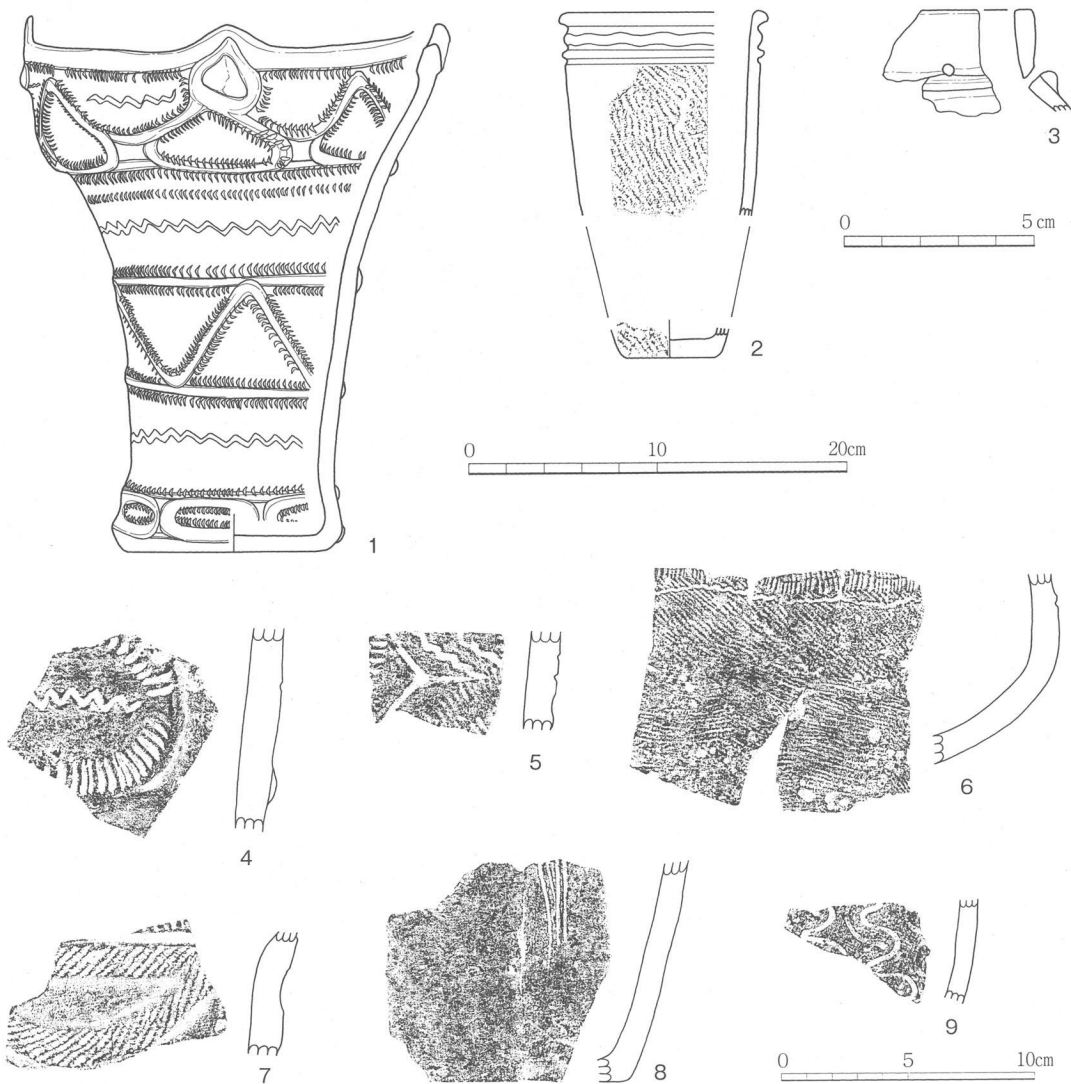
くらいにみられただけである。

支柱穴は6穴であるがその間隔は一定していない。また、パサパサしたロームで埋められたものがあるし、重複の認められる柱穴もあり同心円上建て直しが行われていることが容易に考えられる。支柱穴以外にも小ピットが多くありそれは同間隔で壁際に集中するが、壁土の落下を防ぐための施設を考えることができる。

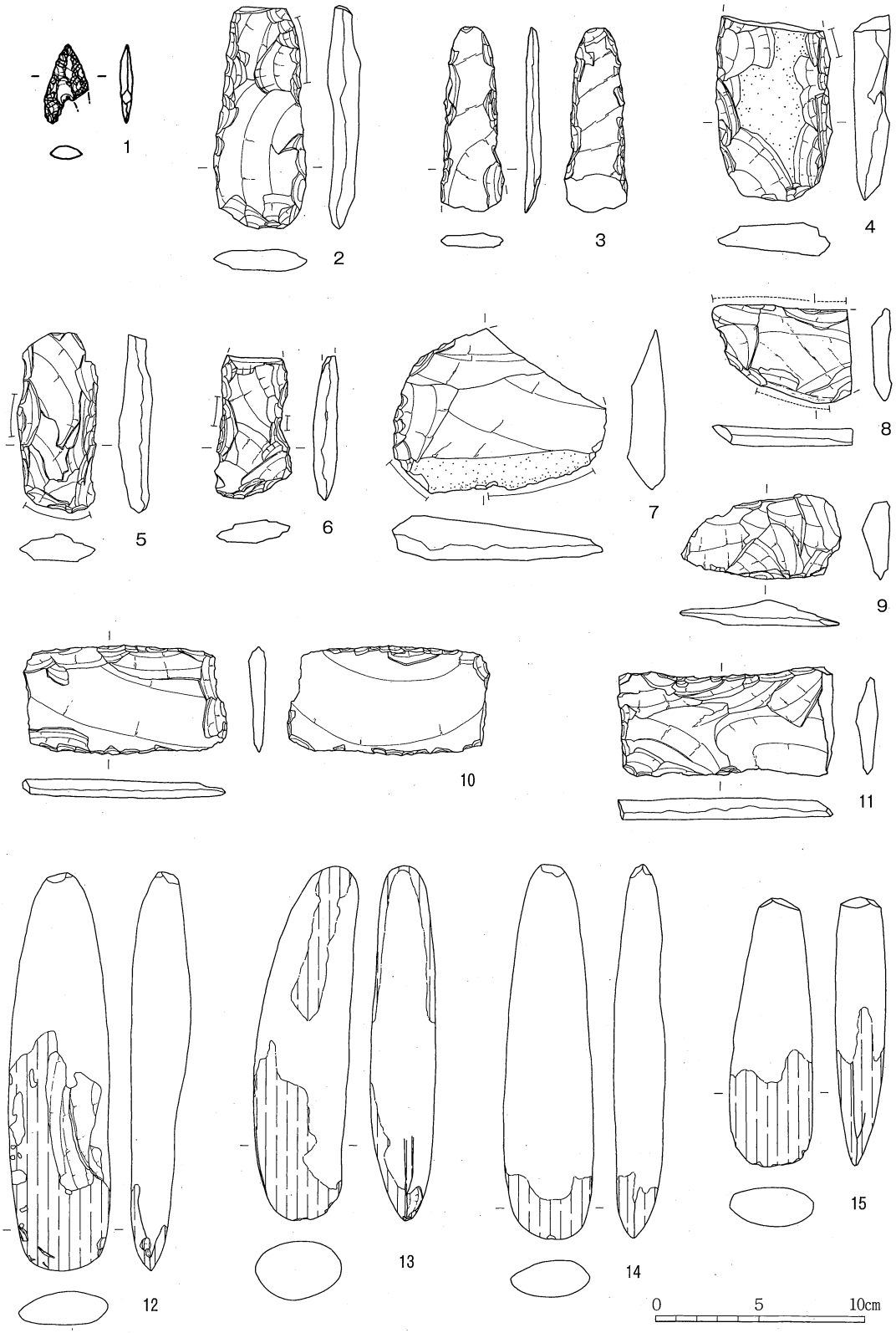
炉はほぼ中央に5点の石で方形石囲炉を構築している。焼土は厚くその下も火熱で変色している。規模（内径）は30×30cmである。

遺物

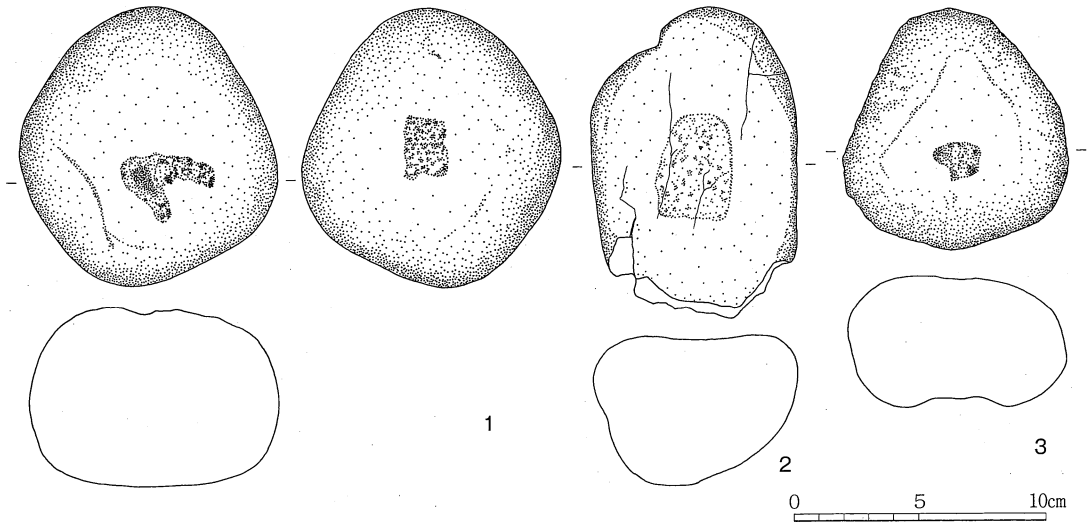
土器 中期中葉の新道式である。完形と破片から器形を復原した2点（第36図1・2）と破片



第36図 第3号竪穴住居址出土土器



第37図 第3号竪穴住居址出土石器 その1



第38図 第3号竪穴住居址出土石器 その2

7点(3~9)を図示した。(3)は有孔鏝付土器のミニチュアで内・外壁とも赤彩が顕著に残っている。(6)は碗形土器である。

遺構間接合 (1)と(2)にグリッド出土破片が接合した(第87図1・2)。第5号竪穴住居址の深鉢、第7号竪穴住居址の有孔鏝付土器との接合がある(第91図1、第92図2)。

石器 石鏝1点(第37図1)、ピエス・エスキーユ9点(第97図4・5)、二次加工のある剥片1点、使用痕のある剥片2点、打製石斧6点(第37図2~6)、横刃形石器6点(7~11)、磨製石斧4点(12~15)、磨石・凹石類3点(第38図1~3)、原石3点、石核3点(第100図1)、黒曜石剥片237点、黒曜石以外の剥片8点である。

第4号竪穴住居址 (第6・39~47・87~90・94・100図、写真21~26)

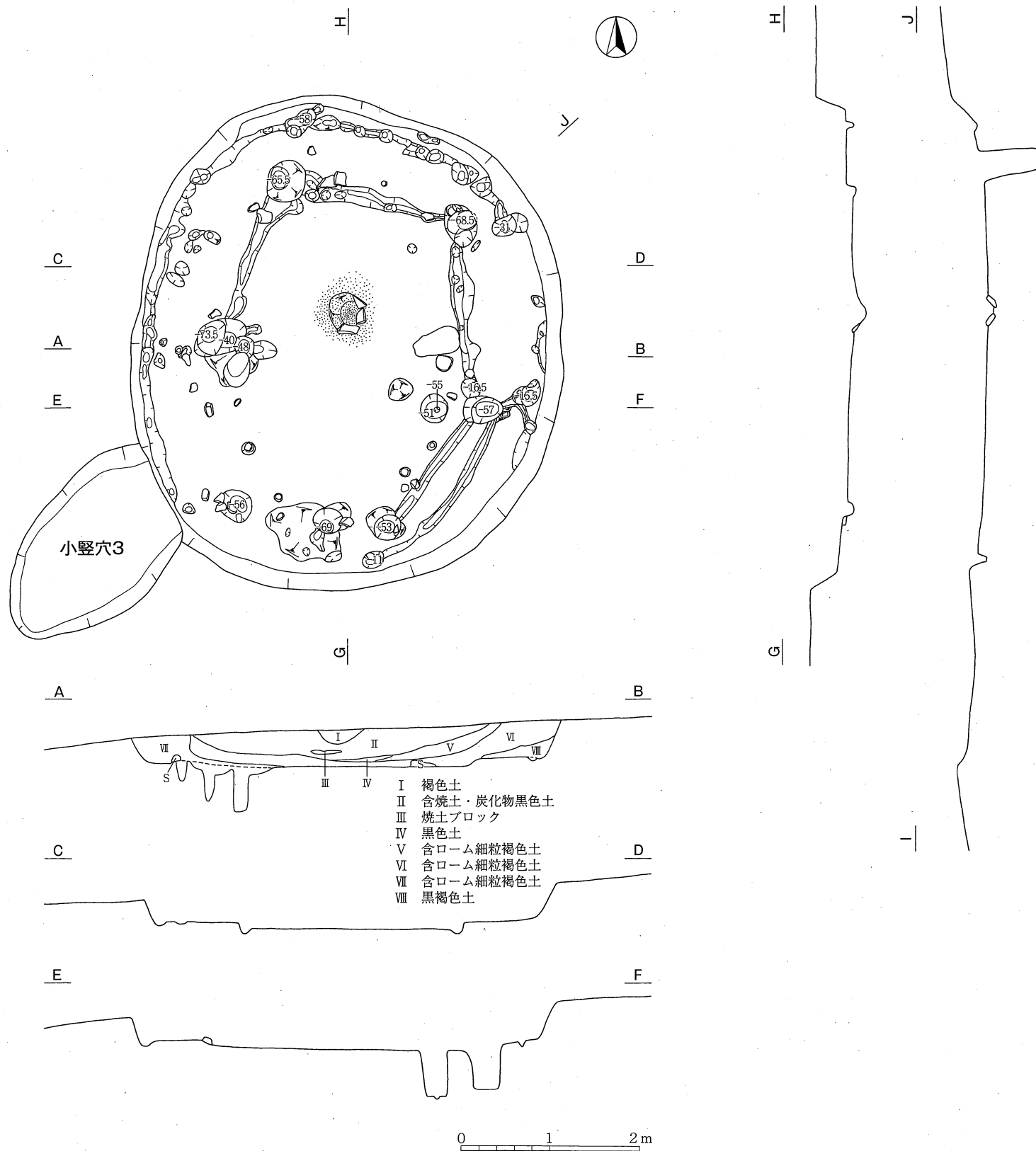
調査の経過

EL-82とEM-82グリッドの発掘調査で遺物の出土が多く、土層の変化を注意していたところEL-82グリッドで焼土と炭化物を包含する黒色土が認められ、EM-82グリッドで東壁の一部を検出し住居址の埋没を確信した。

住居址の検出作業は手掘りで進めたが、第II層の下半部で焼土と炭化物を包含する黒色土の埋土を認めるがプランを明確にするまでには至らず、第IV層のソフトローム上面で検出した。

EK-82~84、EL-82~84、EM-82~84の9グリッドに跨る平面楕円形を呈する住居址であるが、南西方向で小竪穴3と重複していた。平面観察で小竪穴3が新しく本址の旧いことが認められた。

土層観察ベルトは自然傾斜の東西方向に設定した。床面までは深く東で42cm、西で32cmを計り埋土はI~VIIIに分けたが、Iは褐色土であるが黒色味が強く基本層序の第II層にあたる。IIは含



第39図 第4号竪穴住居址、小竪穴3

焼土・炭化物黒色土であるが、Iに焼土と炭化物が混入した状態である。炭化物は大きいもので径1cmくらいである。土器破片の出土が多い。IIIは焼土ブロックで黒曜石のチップが多量に混じっており人為的に遺棄されたもののようである。IVは黒色土である。V・VI・VIIは含ローム粒褐色土でローム粒の大きさと包含量により分けたが、VはVI・VIIより黒色味は強いがロームの量はVIより少ないがVIIよりも多く、ローム粒はVIより小さいがVIIとは同じくらいである。また、炭化物が包含されているがIIに比べるとその量は少ない。土器破片の出土は少なくなるが復原可能な一括土器がある。VIIIは黒褐色土である。以上のように逆三角堆土と三角堆土の発達がみられた自然埋没である。

土器と石器の出土は本遺跡の住居址の中では最も多い。

遺構

竪穴は小竪穴3と重複しているが平面形は楕円形で大きさは長軸5.58m、短軸4.84mである。壁の立ち上がりは普通で壁高は東37cm、西23cm、南30cm、北33cmである。床面は極めて硬いタタキ床であるが、新道期特有のもので周溝から外の壁際が高くなり、そのレベル差は6～12cmである。周溝が認められない南西の2辺には段差がなく壁際に向かってなだらかに上がっている。基本的には楕円形の竪穴住居址の中に、六角形の一段低い床面が作られている。

周溝は基本的に柱穴間をほぼ直線に結ぶもので、幅は10～18cm、深さは数cmであるが、周溝内には径6～15cm、深さ3～11cmの小ピットが穿たれているが、周溝幅より小さいものばかりである。南東の辺には2本の周溝がみられる。北東から南東の壁直下に幅8～15cm、深さ2cm前後と浅い周溝があるが、これは壁直下に穿たれた小ピットを結ぶ状態である。小ピットの径は14～25cm、深さ3～54cmとまばらで規格性に欠けるが壁土の落下をふせぐための施設の一つであろう。

柱穴は6穴であるが重複が認められるものもあるが明確ではない。

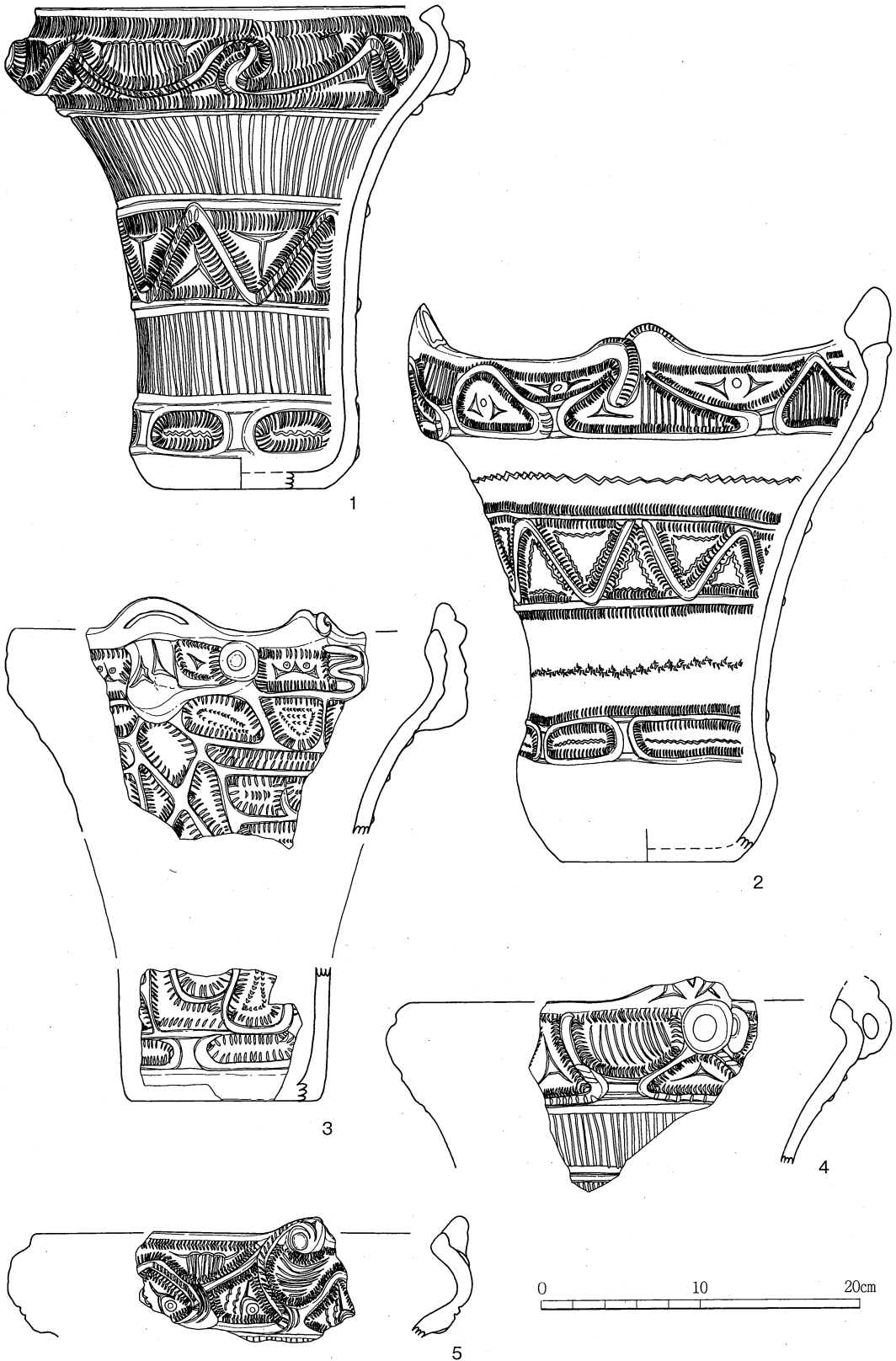
炉は中央やや北寄りにコの字状の石囲炉があるが、石は斜めに据付けられている。規模は25×(20)cmで、その掘り込みは円形で2段に掘られている。当初は方形ないしはそれに近い石囲炉であったことが考えられる。焼土内の焼土は2～5cmでその下も火熱で変色している。石囲炉を中心に径60cmくらいの範囲に焼土がみられたが、しっかりしたもので地床炉の火床と思われるものである。これは炉址の重複で地床炉の中心に石囲炉を構築した状態である。

床面上には大小様々な多くの石が遺存していたが、柱穴と周溝付近に集中する傾向にあり用途は不明である。東と西の床に密着した状態で据え置かれていた大きなものは目を引くものがあり、この石を結ぶ線は竪穴を二分している。

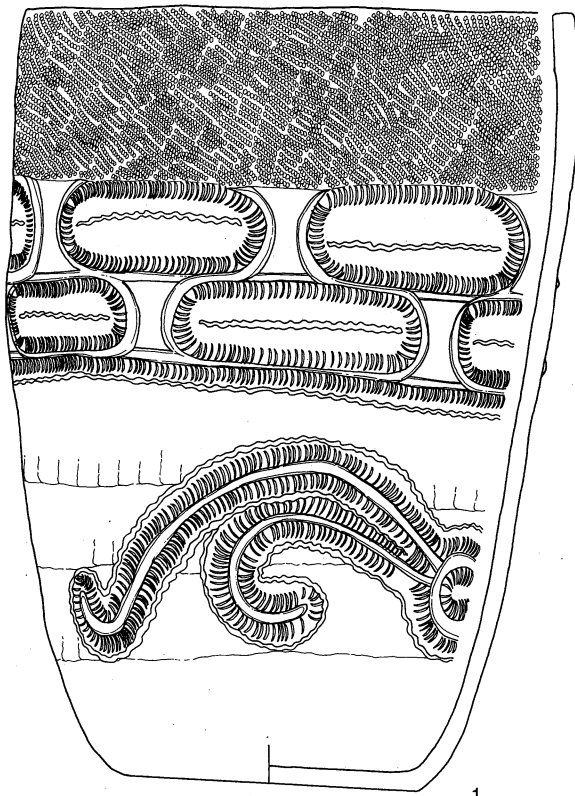
遺物

土器 中期中葉の新道式である。完形と破片から器形を復原した23点(第40～43図)と破片21点(第44図)を図示した。(第43図3)は碗形土器、(4～6)は浅鉢である。

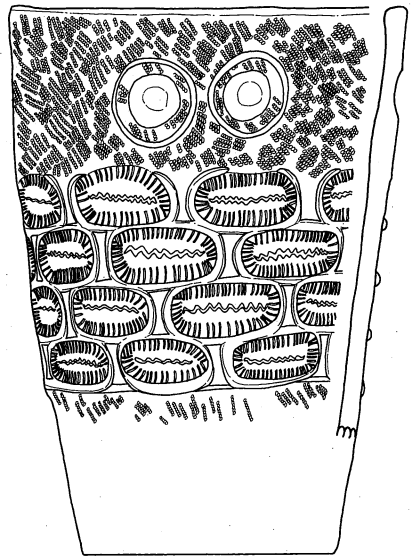
遺構間接合 (第40図3)に第1号竪穴住居址とグリッド、(第42図3)に第3・6号竪穴住居址と小竪穴9、(7)に第5号竪穴住居址、(第43図1)にグリッド、(4)に第8号竪穴住居址、



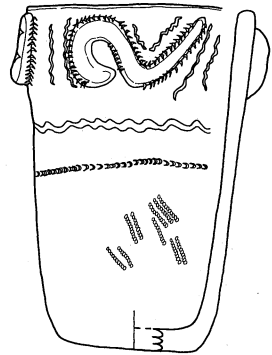
第40図 第4号竖穴住居址出土土器 その1



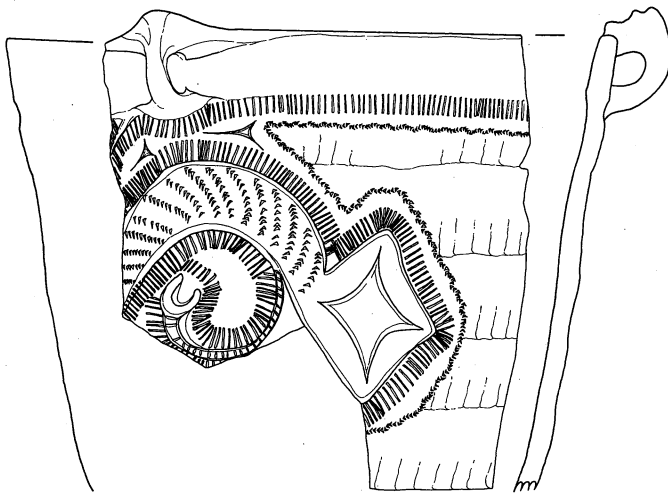
1



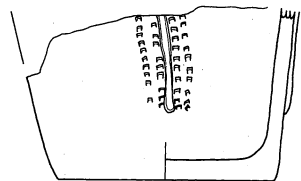
2



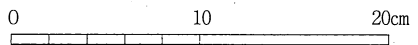
4



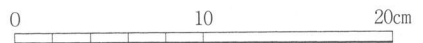
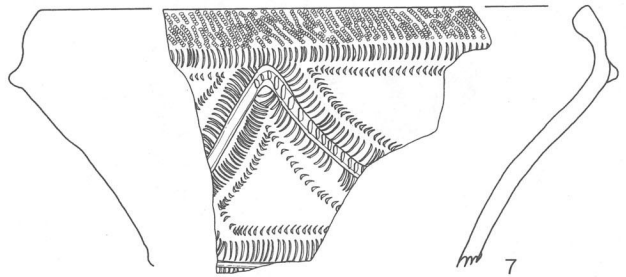
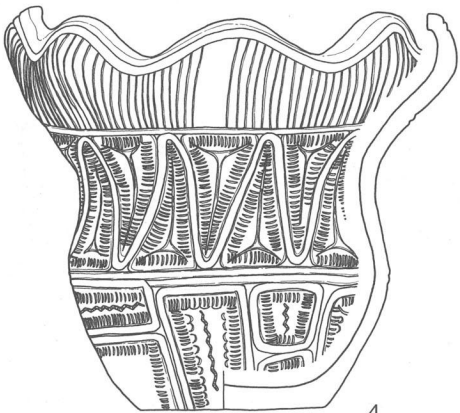
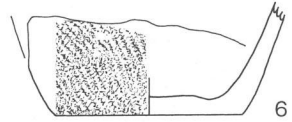
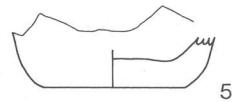
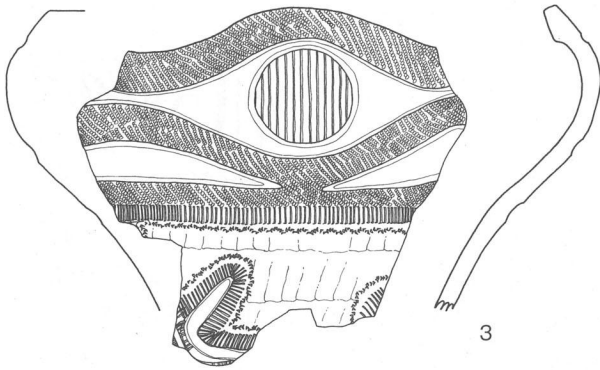
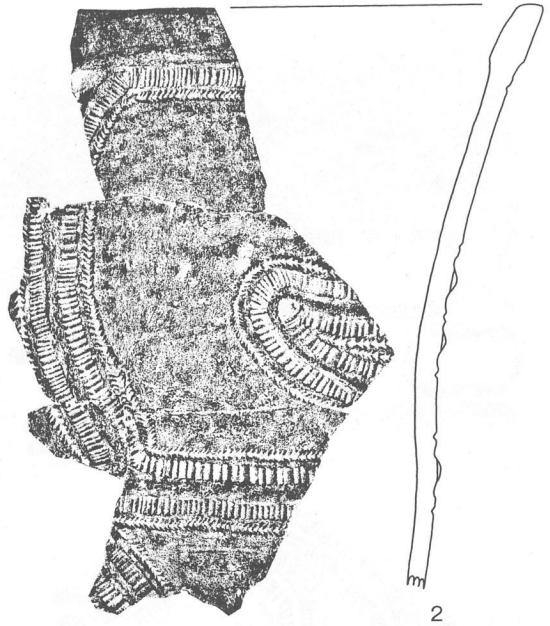
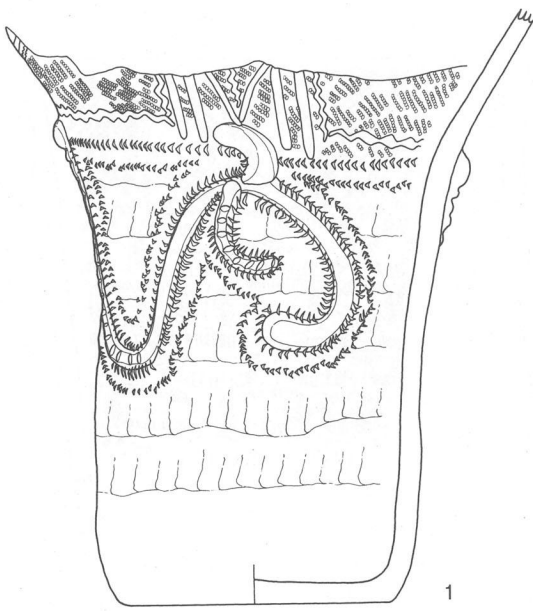
3



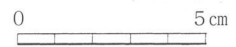
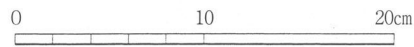
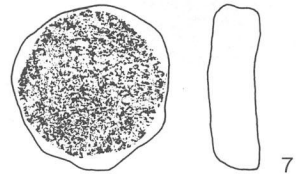
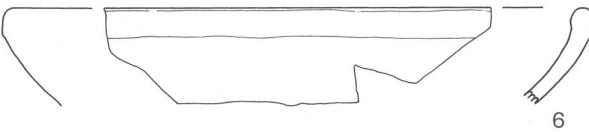
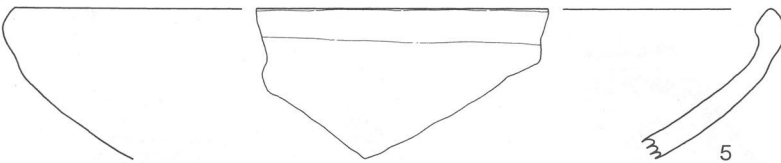
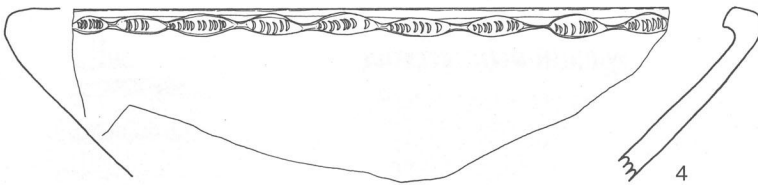
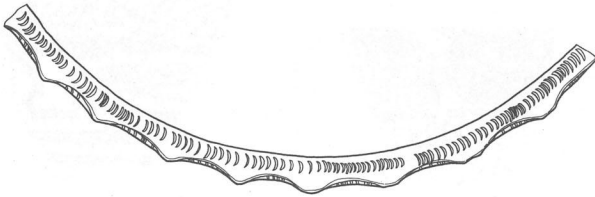
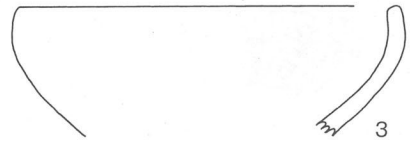
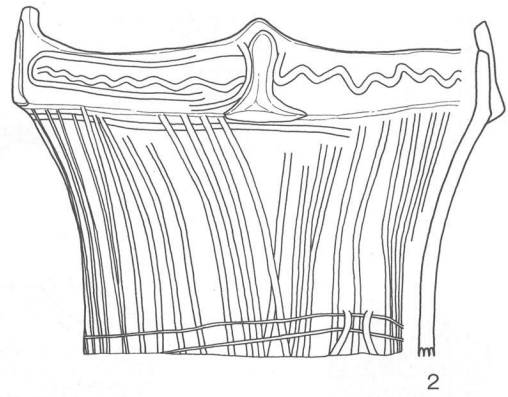
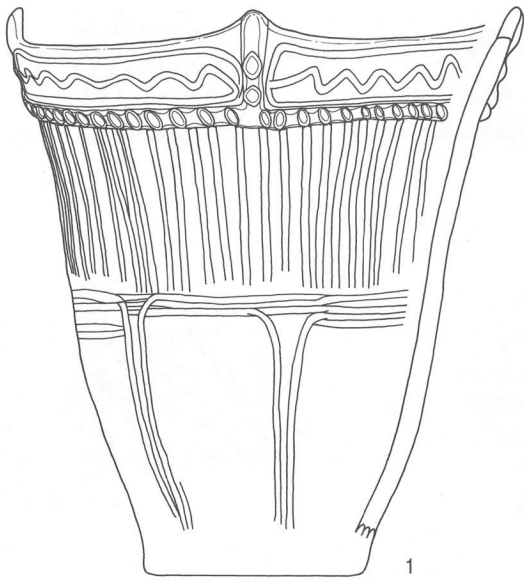
5



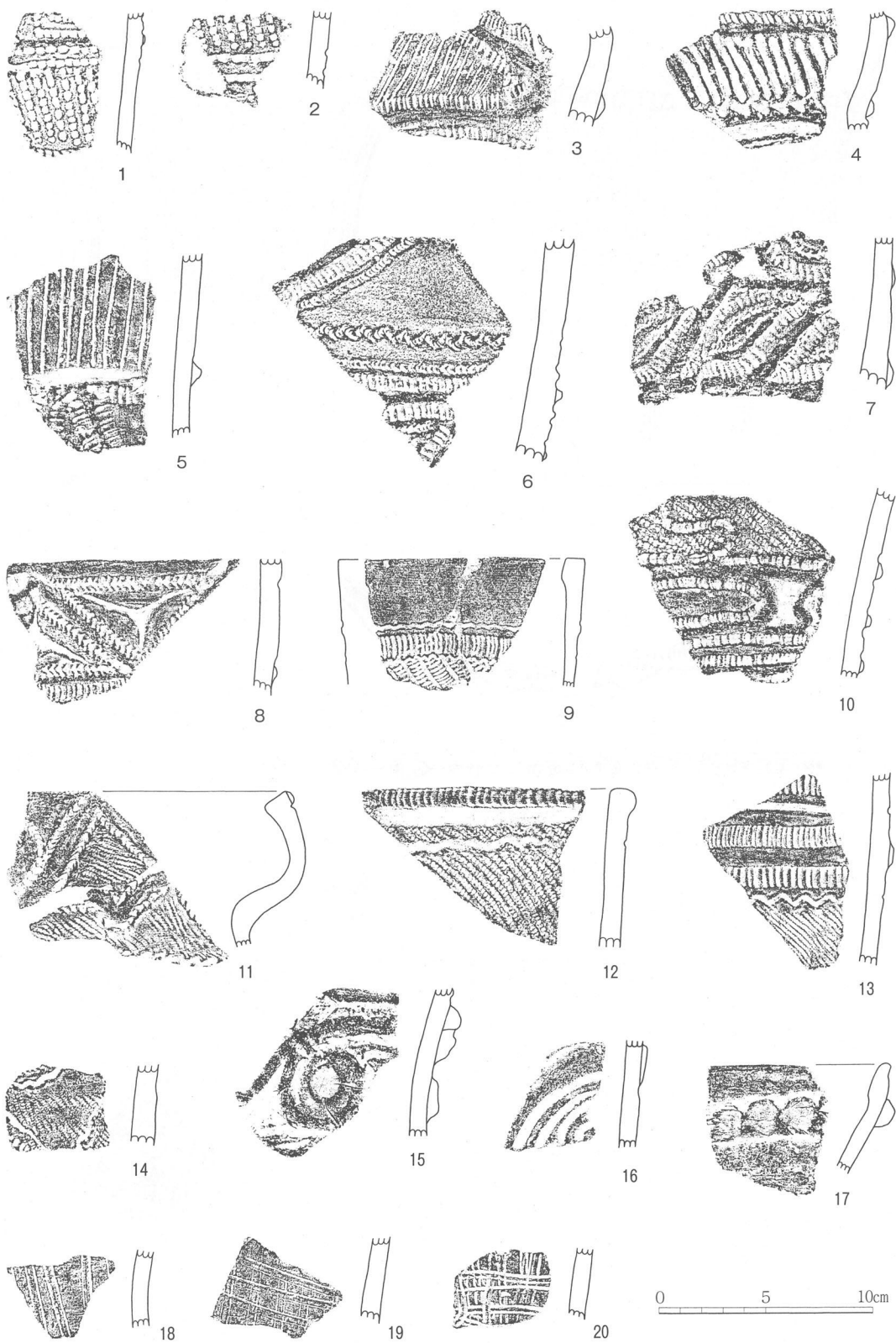
第41図 第4号竖穴住居址出土土器 その2



第42図 第4号竖穴住居址出土土器 その3



第43図 第4号竪穴住居址出土土器 その4、土製品

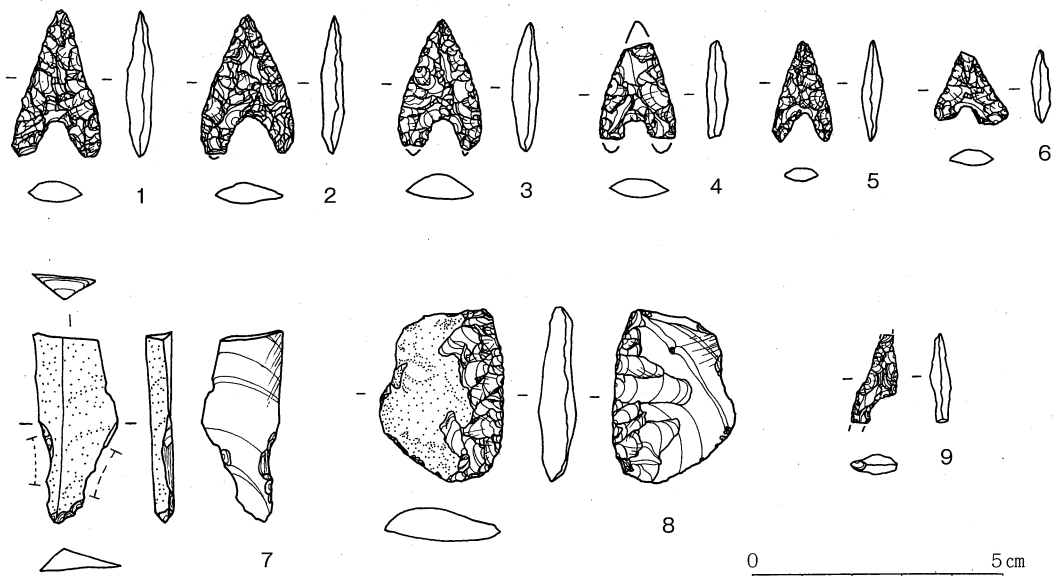


第44図 第4号竖穴住居址出土土器 その5

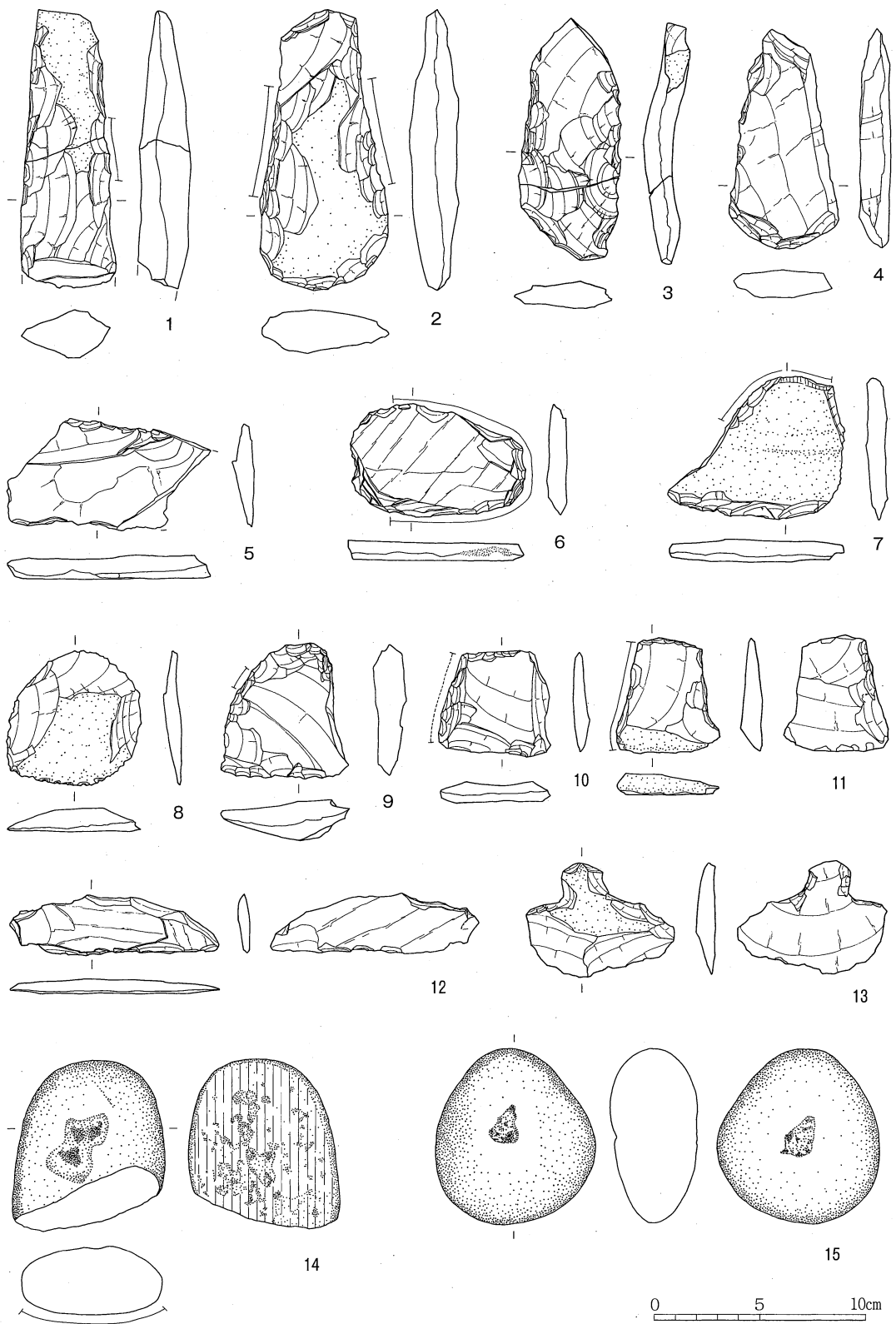
(第44図11) に第1・5・6号竪穴住居址とグリッド出土破片が接合した(第87図3、第88図2・3、第89図2・3)。直接の接合はないが(第40図4)はグリッド、(第43図5)は第5号竪穴住居址とグリッド、(6)はロームマウンド4に同個体破片がある(第88図1、第90図2・3)。第9号竪穴住居址の深鉢、遺構外の浅鉢との接合がある(第89図1、第94図2)。

土製品 土器破片を加工した土製円盤1点(第43図7)がある。

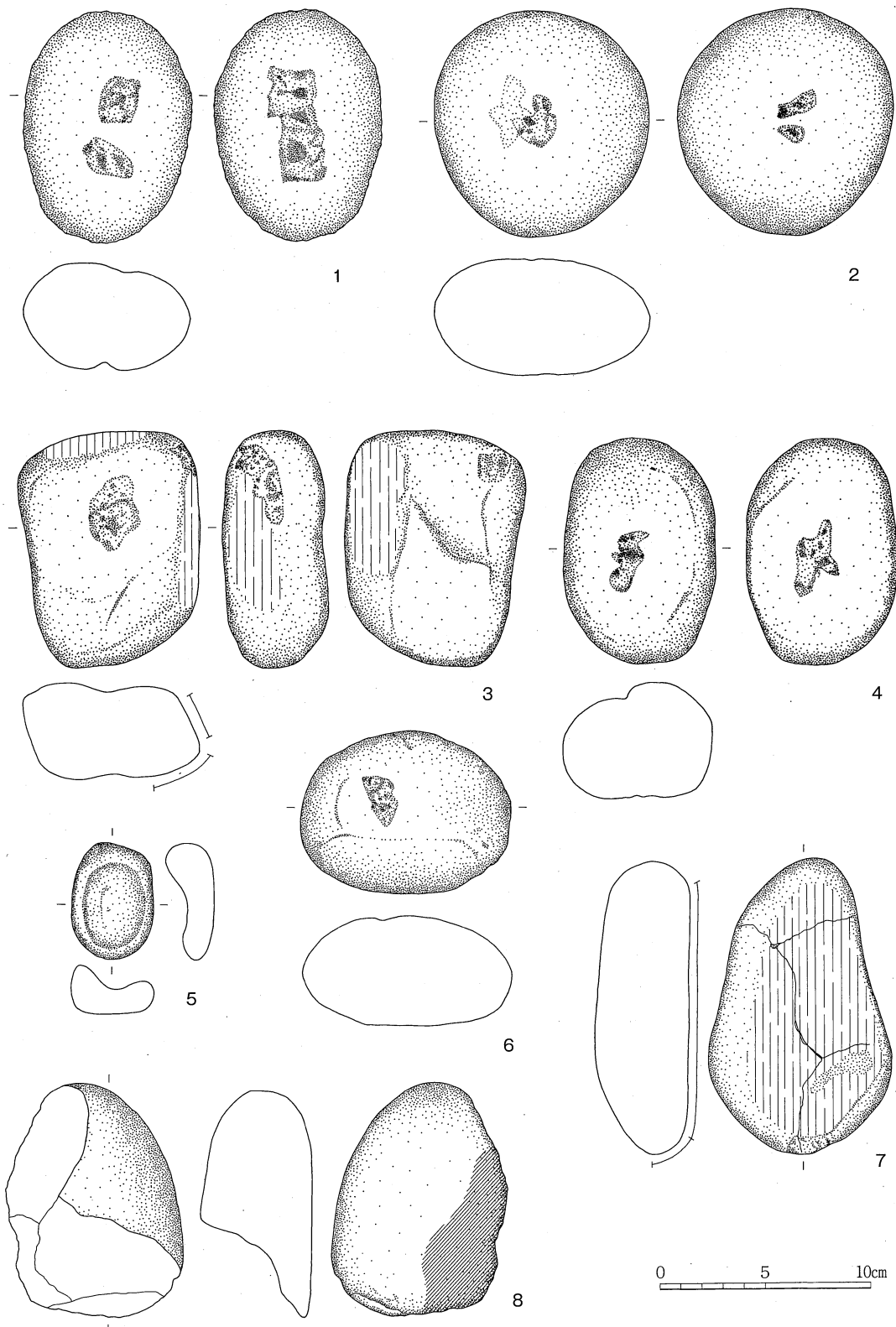
石器 石鏃6点(第45図1～6)、ピエス・エスキュー15点、二次加工のある剥片4点(8・9)、使用痕のある剥片3点(7)、打製石斧9点(第46図1～4)、横刃形石器9点(5～12)、石匙Ⅱ類1点(13)、磨石・凹石類10点(14・15、第47図1～8)、原石4点、石核6点(第100図2)、黒曜石剥片208点、黒曜石以外の剥片25点である。なお、(第46図1・3)の打製石斧2例は接合資料で、(1)は遺構外出土と(3)は遺構内の接合である。



第45図 第4号竪穴住居址出土石器 その1



第46図 第4号竪穴住居址出土石器 その2



第47図 第4号竪穴住居址出土石器 その3

第5号竪穴住居址 (第6・48~51・89~91・100図、写真27~32)

調査の経過

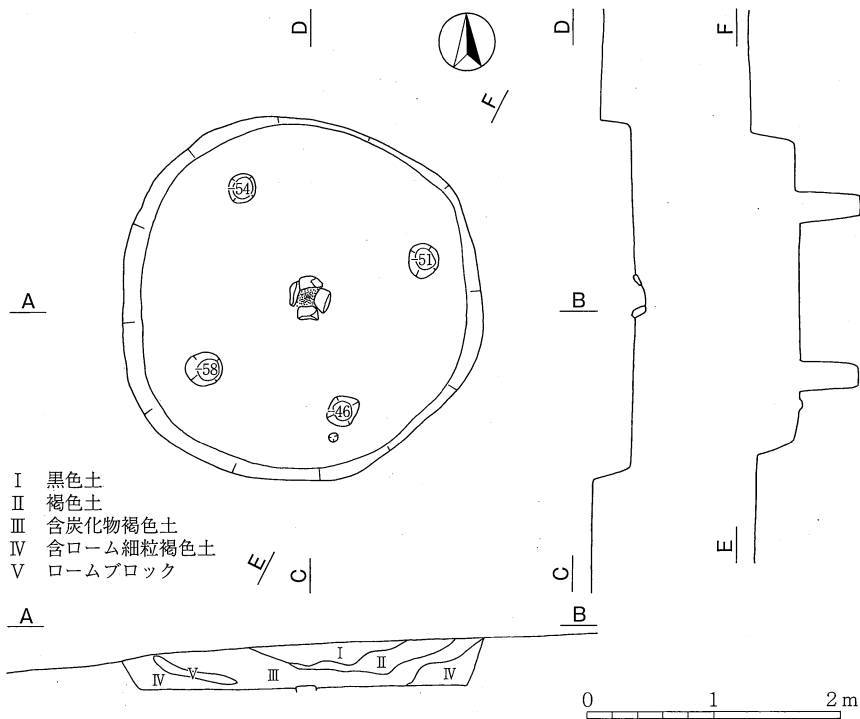
EP-77とEP-78グリッドの発掘調査において、出土遺物が多いうえに炭化物を包含する漆黒色土と褐色土を認め壁の一部を検出した。

住居址の検出作業は手掘りで進めたが、第II層の下半部で径3mくらいの落ち込みを認めるがプランを明確にするまでには至らず、第IV層のソフトローム上面で検出した。

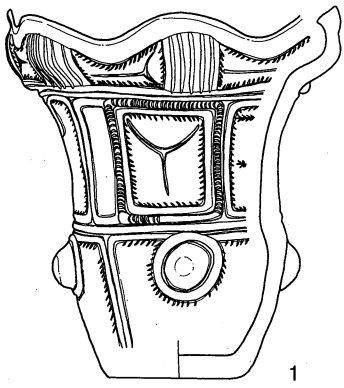
EO-77・78、EP-77・78、EQ-77・78の6グリッドに跨る平面円形を呈する住居址であるが、小規模であり住居址であるのか小竪穴であるのか明確にできないまま調査を進めた。床面直上で一括土器が出土し住居址であることを確信する。

土層観察は自然傾斜の東西方向で遺構を2分割した。床面までは深く東で36cm、西で30cmを計り埋土はI~Vに分けたが、Iは黒色土で漆黒になるが基本層序の第II層にあたる。IIは褐色土。IIIは含炭化物褐色土で、炭化物は多いが真中より西寄りに特に多い。色調はIIとほぼ同じであるが炭化物が包含されていることで黒味をおびてみえる。IVは含ローム細粒褐色土。Vはロームブロックでしっかりしたものであるうえにその量は多い。壁から24cmくらい離れており壁土の落下したものと違うようで混入過程はわからない。以上のように逆三角堆土と三角堆土の発達が見られた自然埋没と思われる。

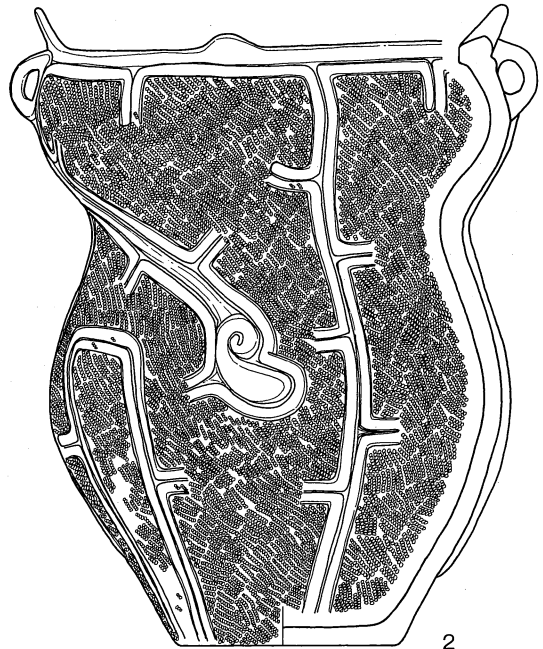
完形土器が炉の上と炉の南に横倒した状態で出土したが、炉南の(第49図2)の土器内には焼



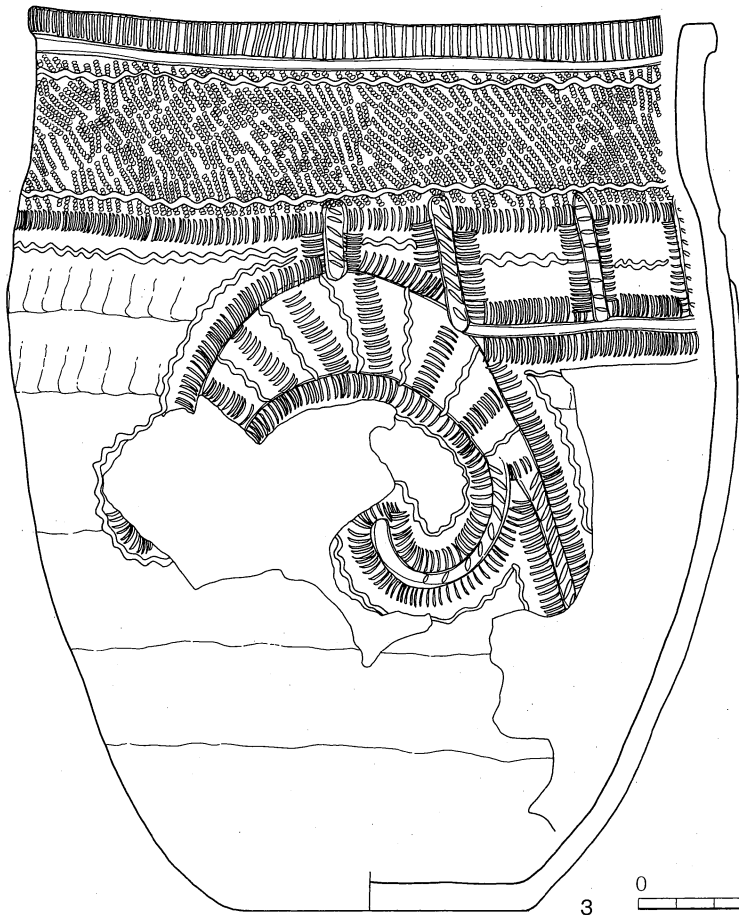
第48図 第5号竪穴住居址



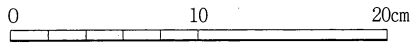
1



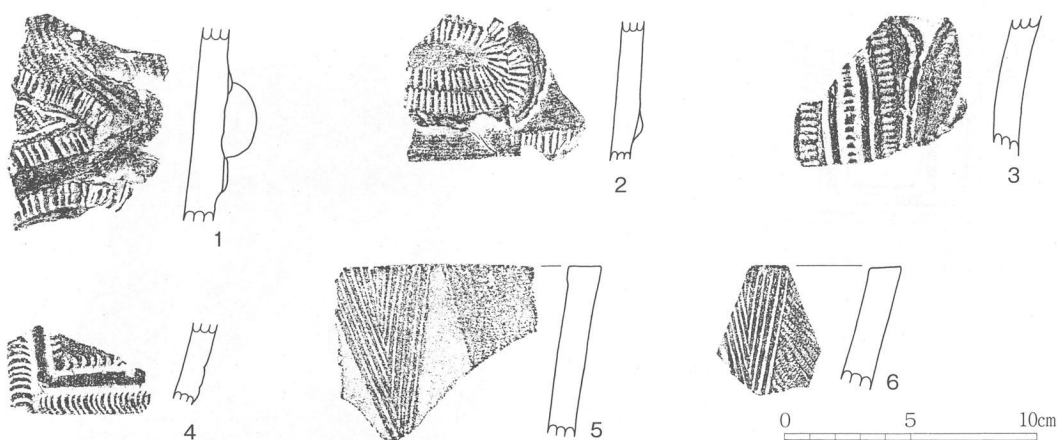
2



3



第49図 第5号竪穴住居址出土土器 その1



第50図 第5号竪穴住居址出土土器 その2

土が充満していたことは注目すべきことである。石器は打製石斧や凹石などは炉の西に集中する傾向がみられた。柱穴4の南方6cmで検出した小ピット内に黒曜石（石核）6点が集石されていたが、ピットは径8cm、深さ2.5cmで見落としそな施設である。埋土Ⅲからクルミの炭化物が出土したが小さいものである。

遺構

竪穴の平面形は円形で大きさは径2.90mと小さいものである。壁の立ち上がりは良好で壁高は東39cm、西24cm、南29cm、北24cmである。床面はほぼ水平で部分的にタタキ床もみられたが総体的には軟弱である。

主柱穴は4穴ですっきりしている。径22~30cm、深さが46~58cmでしっかりしたものである。柱穴4の南には前記した黒曜石が集石されていたピットがある。

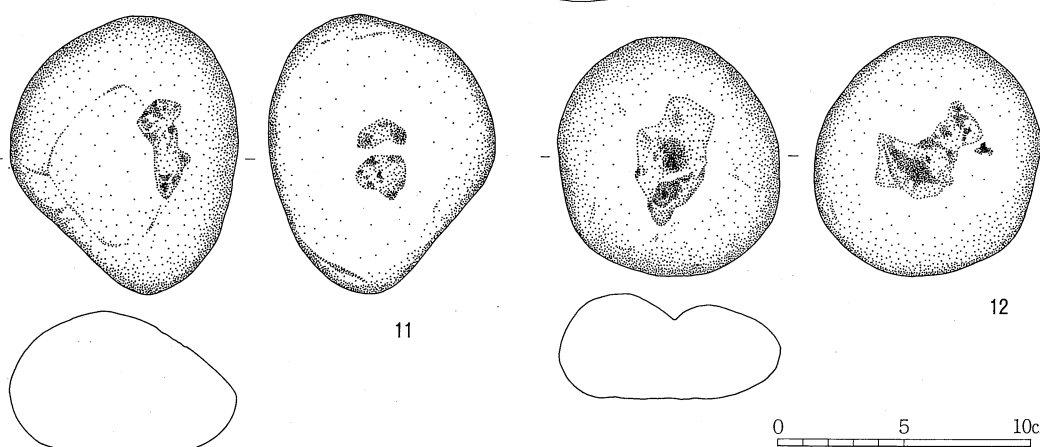
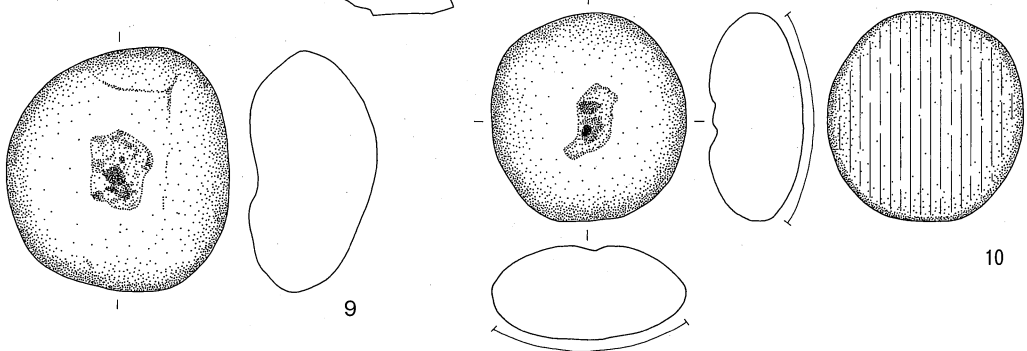
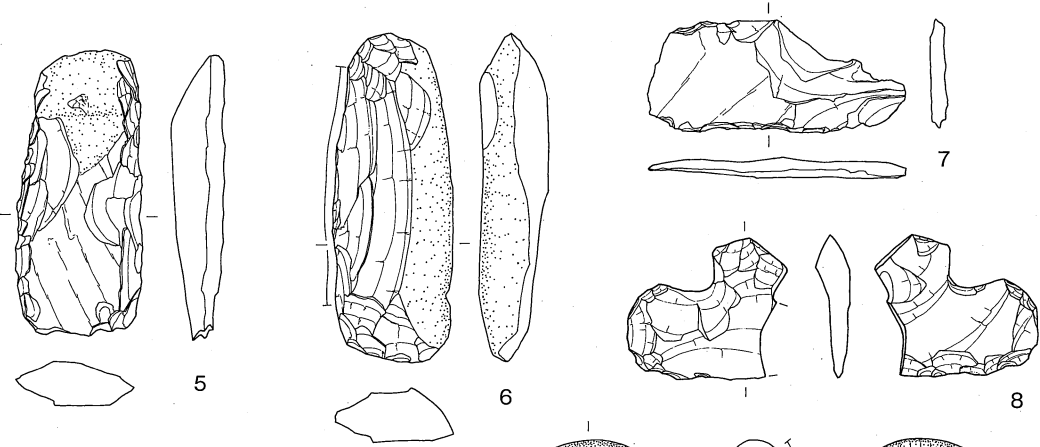
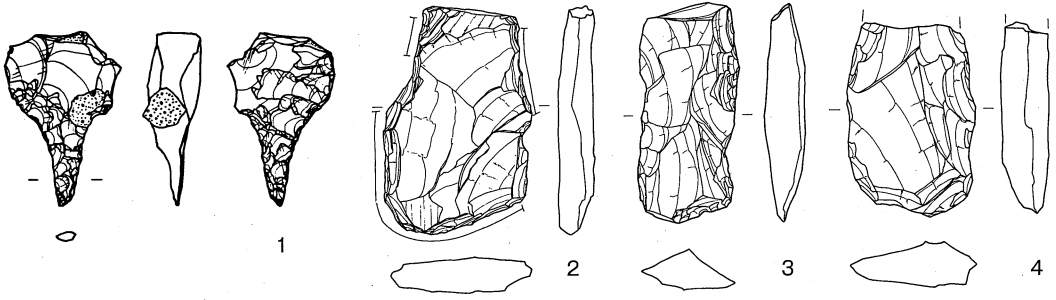
炉はほぼ中央に4点の石を方形に組んだ石囲炉がある。東・南・西の三方の石は立てられているが、北は据えられた状態で焚き口を思わせるが、その方向は一考を要しよう。規模は14×14cmと小さいものである。炉内の焼土は薄く弱いものである。

遺物

土器 中期中葉の新道式である。完形と破片から器形を復原した3点（第49図）と破片6点（第50図）を図示した。

遺構間接合 第4号竪穴住居址の深鉢、第9号竪穴住居址の深鉢との接合がある（第89図2、第91図1）。第4号竪穴住居址の浅鉢と直接の接合はないが同個体の破片がある（第90図2）。

石器 石錐1点（第51図1）、ピエス・エスキーユ8点、使用痕のある剥片2点、打製石斧7点（2~6）、横刃形石器1点（7）、石匙Ⅱ類1点（8）、磨石・凹石類4点（9~12）、磨製石斧1点、石核6点（第100図3）、黒曜石剥片63点、黒曜石以外の剥片8点である。



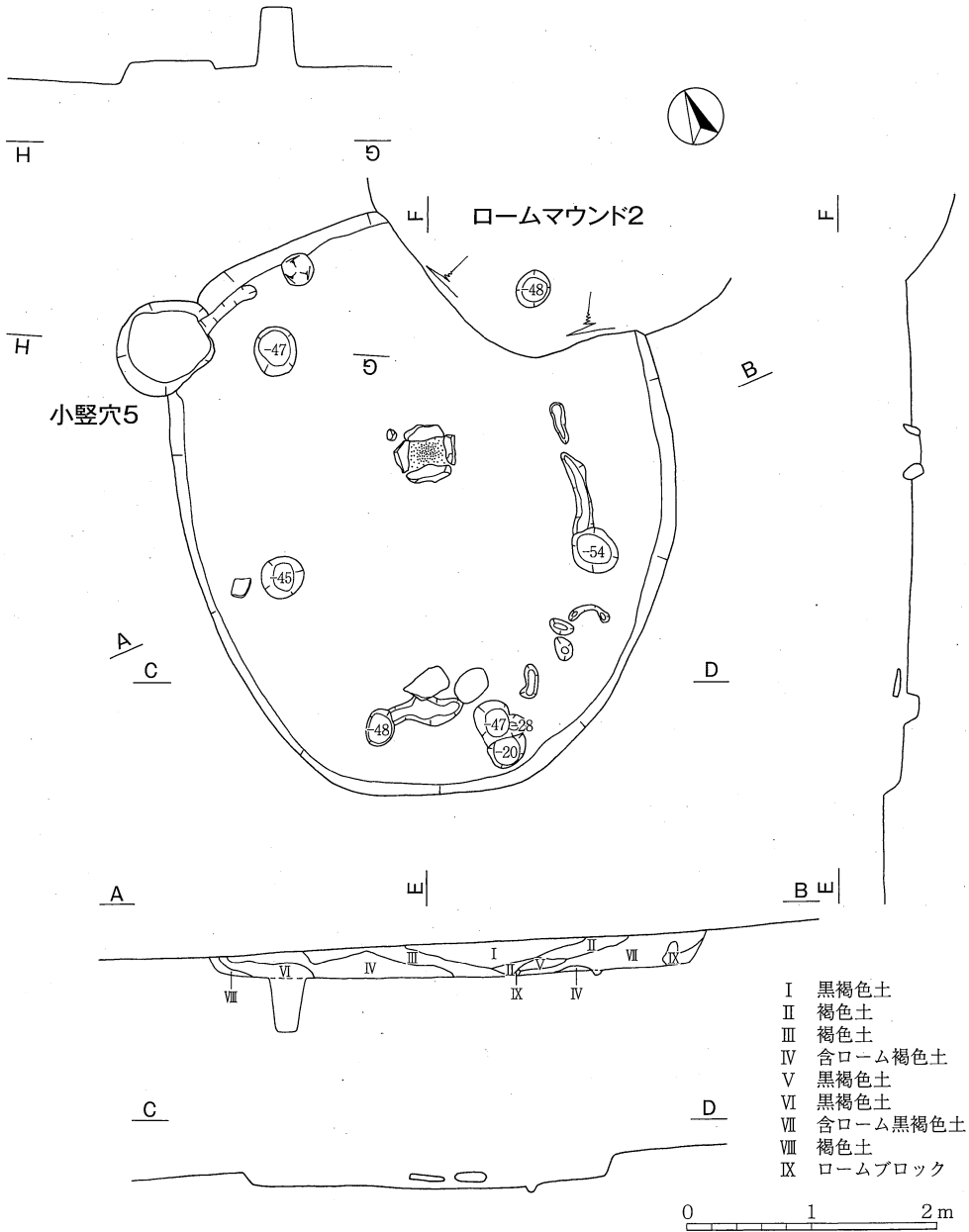
第51图 第5号竖穴住居址出土石器

第6号竪穴住居址 (第6・52~54・87・89・91図、写真33~35)

調査の経過

EN-76グリッドの発掘調査において、ロームマウンド2を確認し、同時に炭化物を包含する黒色土と褐色土を認めたことにより住居址の埋没が考えられた。

住居址の検出作業は第5号竪穴住居址と並行して手掘りで作業を進めたが、第II層の下半部でロームの細粒と炭化物を包含する黒褐色土を認めるが、ロームマウンド2と重複していたことも



第52図 第6号竪穴住居址、小竪穴5

ありプランを明確にするまでには至らず、第Ⅳ層のソフトローム上面で検出した。

EM-74~77、EN-74~78の8グリッドに跨る平面卵形を呈する住居址であるが、ロームマウンド2と重複していたが、平面観察ではロームマウンド2が新しく本址の古いことが認められた。

土層観察ベルトは自然傾斜の東西方向に設定した。床面までは東で27cm、西で11cmであり本遺跡では掘り込みは浅い。埋土はⅠ~Ⅸに分けたが、Ⅰは黒色土で基本層序の第Ⅱ層にロームの細粒と炭化物が混在したものである。Ⅱは褐色土でロームの細粒と炭化物を僅かに包含している。Ⅲは褐色土でⅡよりもローム含有量は多く粒が大きくなる。Ⅳはローム含褐色土でロームの含有量が多くなり褐色味を増している。Ⅴは黒褐色で炭化物の含有量は少なくなる。Ⅵも黒褐色土であるがローム粒を包含している。ⅤとⅥはローム粒の含有量の違いで分けた。Ⅶは含ローム黒褐色土で色調はⅤ・Ⅵとほぼ同じであるが、Ⅵよりもローム粒の含有量が多い。Ⅷは褐色土でⅡ・Ⅲ・Ⅳよりも黄色味が増している。Ⅸはロームブロックであるがしっかりしたものではない。以上のように逆三角堆土と三角堆土の発達が見られた自然埋没である。

土器と石器の出土は少ない。

遺構

竪穴の平面形は卵形であるが、小竪穴5とロームマウンド2と重複している。大きさは長軸4.72m、短軸4.04mである。壁の立ち上がりは普通で壁高は東27cm、西11cm、南18cm、北18cmと浅い。床面はほぼ水平であるが凸凹が著しく部分的にタタキ床もみられたが総体的にはあまり良いものではない。

周溝は部分的に認められるが幅10~15cm、深さ4~11cmである。

主柱穴は6穴ですっきりしている。径22~34cm、深さが45~51cmと確りしたものである。入口部分の左側の柱穴は重複が認められた。主柱穴以外では南西側の柱穴間に楕円形の小ピットがあるが、深さ7~10cmと浅いもので性格は不明である。北壁直下には径25cm、深さ6cmの浅いピットがあるがやはり性格は不明である。

炉は中央やや北寄りに4点の石をほぼ方形に組んだ石囲炉がある。石は全て立てられていた。規模は24×29cmで焼土はあまり強くなかったが、炉石は火熱で脆くなり取り上げる際に割れたものがある。炉の掘り方は方形である。

西壁と柱穴の間には平板石が床面に据え置かれていたが作業台のようなものであろう。南壁の柱穴近くから平板石と扁平円礫が出土したが、床面より浮いてはいたが入口部の施設と考えたい。なお、これらの石は付近で産出する輝石安山岩である。

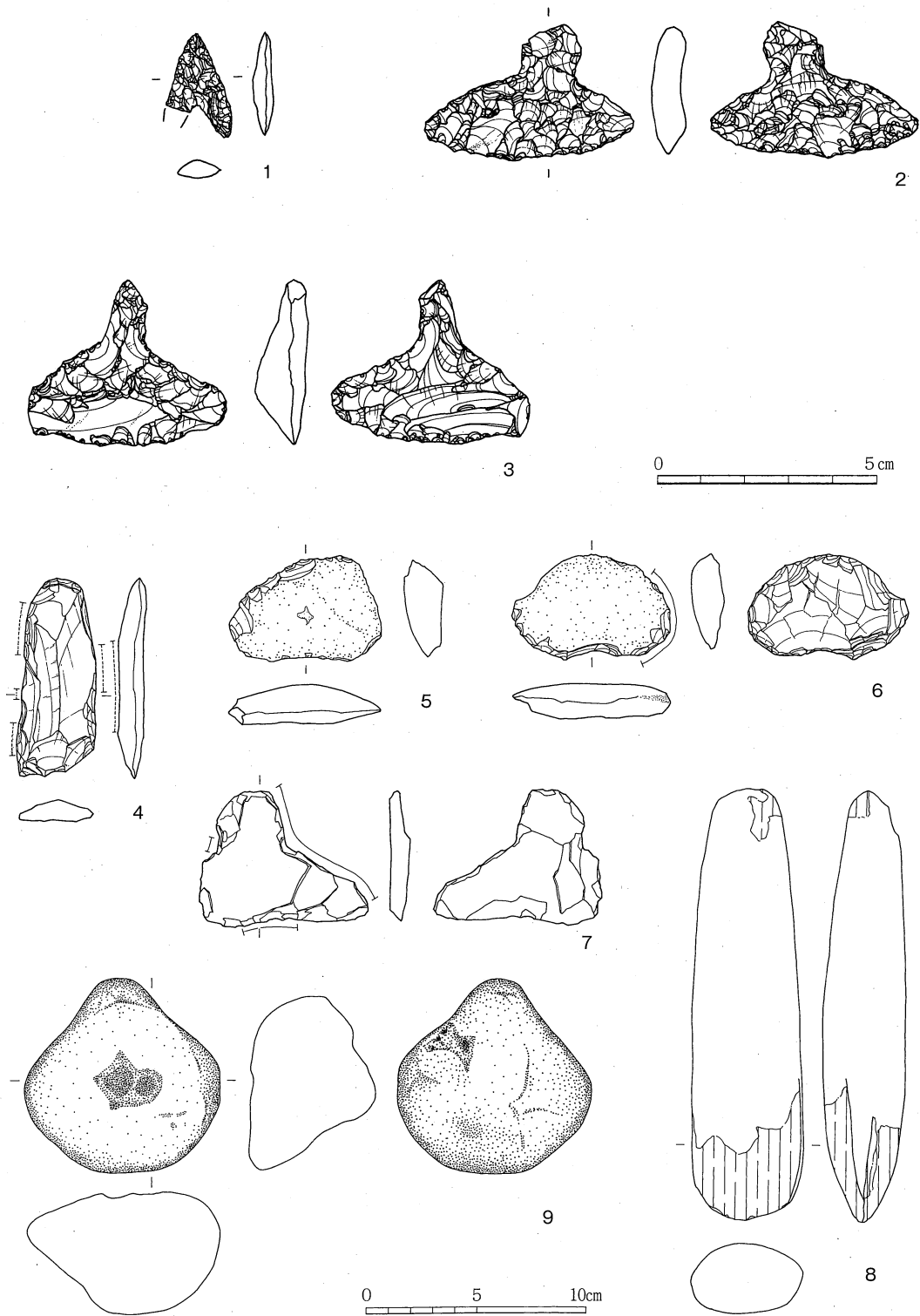
遺物

土器 中期中葉の新道式である。破片から器形を復原した3点(第53図1~3)と破片5点(4~8)を図示した。(3)は有孔鏝付土器である。

遺構間接合 (第53図1)に9号住居址とグリッド出土破片が接合した(第91図2)。直接の接



第53图 第6号竖穴住居址出土土器



第54图 第6号竖穴住居址出土石器

合はないが(3)は第1号竪穴住居址に同個体の破片がある(第91図3)。第4号竪穴住居址の深鉢との接合がある(第87図3)。第4号竪穴住居址の深鉢、第9号竪穴住居址の深鉢と直接の接合はないが同個体破片がある(第89図1・2)。

石器 石鏃1点(第54図1)、石匙Ⅰ類2点(2・3)、ピエス・エスキュー3点、二次加工のある剥片1点、打製石斧2点(4)、横刃形石器2点(5・6)、石匙Ⅱ類1点(7)、磨石・凹石類1点(9)、磨製石斧1点(8)、原石2点、石核2点、黒曜石剥片78点、黒曜石以外の剥片6点である。

第7号竪穴住居址 (第6・55~57・92図、写真36~41)

調査の経過

DG-72グリッドの発掘調査において、第Ⅱ層から同個体の土器破片が出土し、炭化物を包含する褐色土を認めたことにより住居址の埋没が考えられた。

住居址の検出作業は手掘りで進めたが、第Ⅱ層の下半部から第Ⅲ層で炭化物を包含する褐色土を認めるが、プランを明確にするまでには至らず、第Ⅳ層のソフトローム上面で検出した。

DF-71~73、DG-71~73、DH-71~73の9グリッドに跨る平面楕円形を呈する住居址である。

土層観察ベルトは自然傾斜の東西方向に設定した。床面までは東で34cm、西で26cmを計り埋土はⅠ~Ⅵに分けたが、Ⅰは黒色土で基本層序の第Ⅱ層と同じである。Ⅱは含ローム炭化物褐色土。Ⅲは含ローム黒褐色土。Ⅳは含ローム褐色土。Ⅴも含ローム褐色土でⅣよりロームの包含量が多い上にローム粒は径15mmくらいに大きくなりざらざらしている。Ⅵはロームで床面に掘られていたピットの廃土である。このピットは住居廃絶時に掘られたものであり、掘りあげたロームは床面直上に置かれており間層は認められなかった。ピットを掘り上げたローム後における埋土の堆積は、逆三角堆土と三角堆土の発達がみられるもので自然埋没である。

遺物は少なかったが、炉の上方から土器破片が出土したが、それは原形を保つものではなくバラバラの状態であったが復原できるものである。

遺構

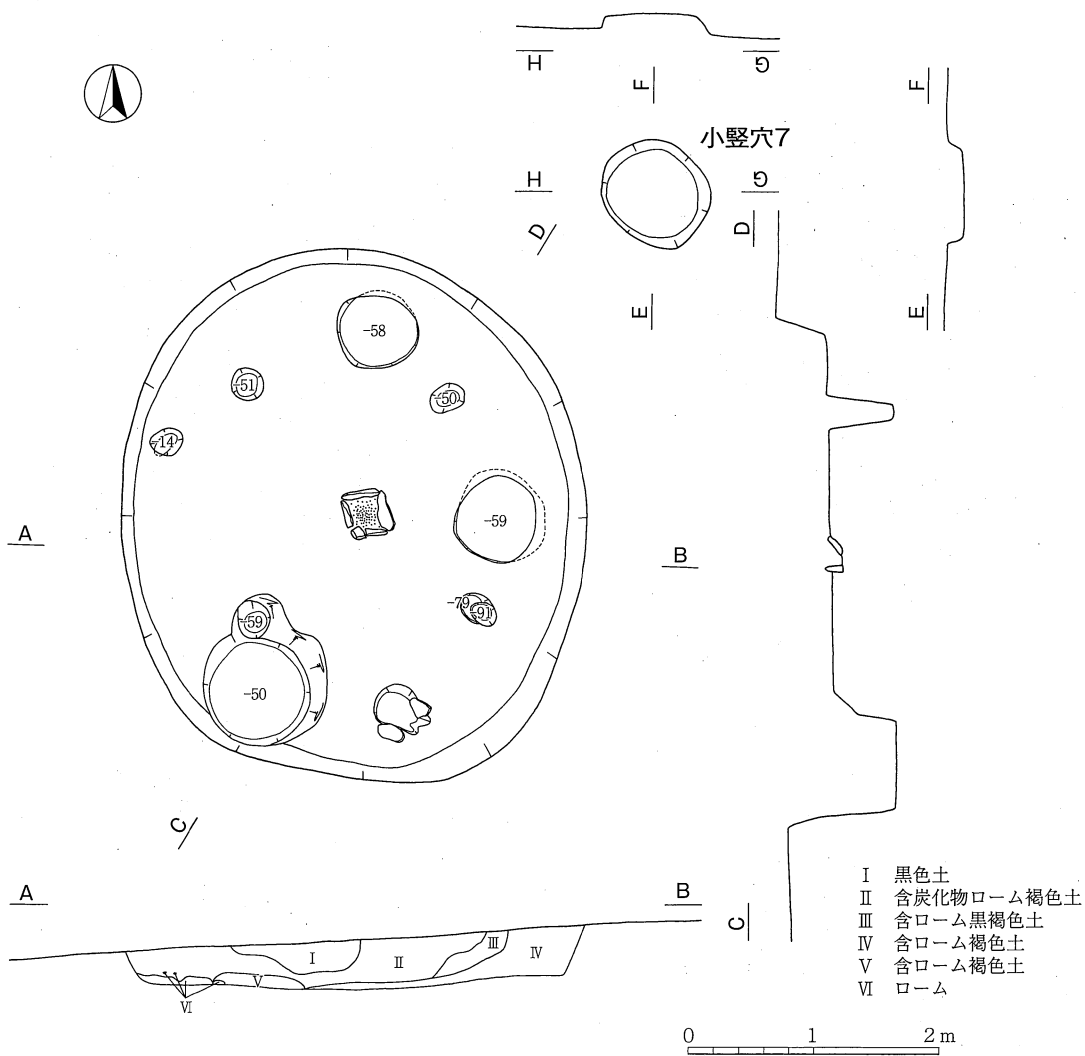
竪穴の平面形は楕円形で、大きさは長軸4.20m、短軸3.72mである。壁の立ち上がりは良好で壁高は東43cm、西23cm、南24cm、北33cmである。床面はほぼ水平のタタキ床であるが、比較的軟弱の上に凸凹が著しく総体的にはあまり良いものではない。

周溝は部分的に認められるが幅10~15cm、深さ4~11cmである。

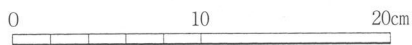
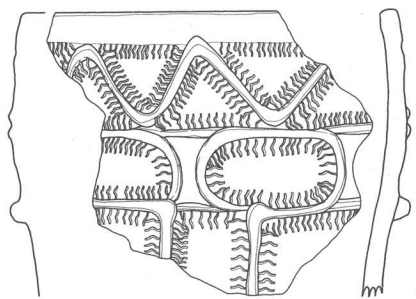
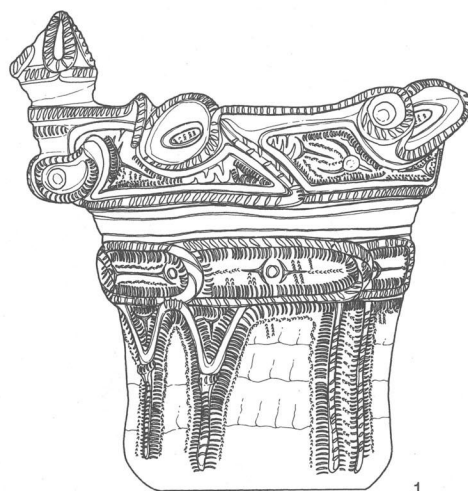
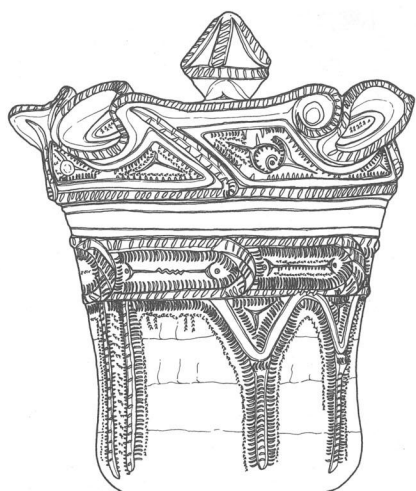
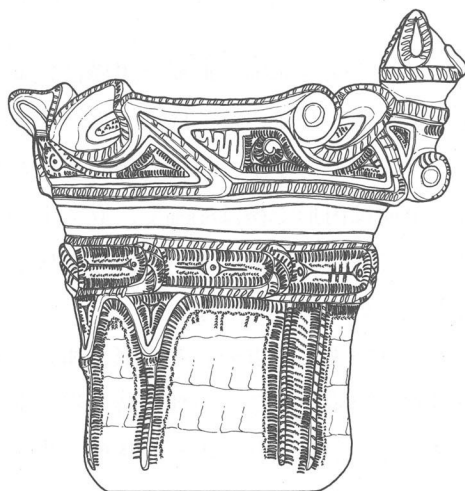
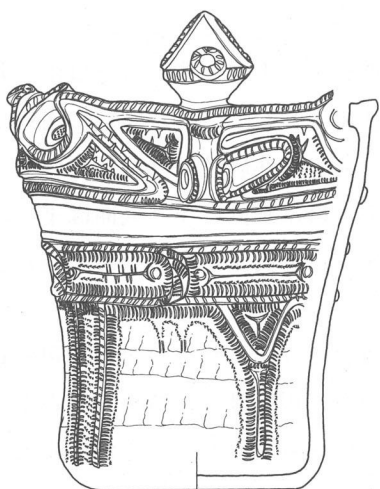
主柱穴は4穴ですっきりしている。径22~25cmと小さいが、深さが50~91cmと深く確りしたものである。東南の柱穴は重複が認められた。主柱穴以外では西壁直下に柱穴状のものがあるが深さは14cmと浅い。貯蔵穴と思われるものが3穴と、調査経過で記述した廃絶時に掘られたものがある。東壁と北壁下の貯蔵穴は部分的に袋状になる。大きさは東壁下が径72cm、深さ59cm。北壁

下が径66cm、深さ56cmで形態と規模は似通ったものである。西壁下の不整卵形のものには南と北縁に礫が据え置かれていた。底面からいわゆるアワ状炭化種子が出土した。さて、問題は南壁下の一番大きな穴であるが、住居廃絶時ないしはその後に掘られたもので住居址よりは新しいものである。平面は円形で径は85cmで、立ち上がりは2段になり下方はほぼ垂直になり底面は平らで深さは57cmである。性格は不明であるが僅かであるが住居址と確実に時間差があるため小竪穴と考えた方がよいのかもしれない。

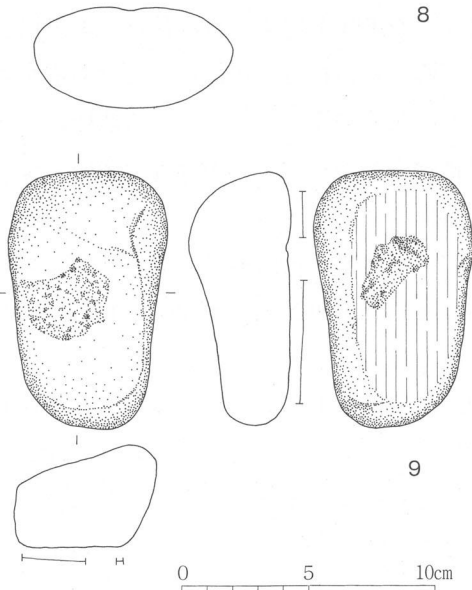
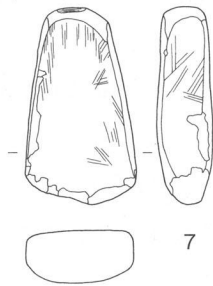
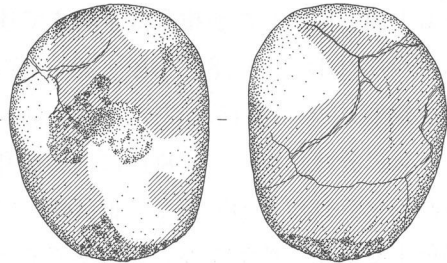
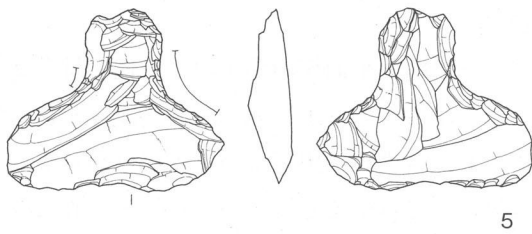
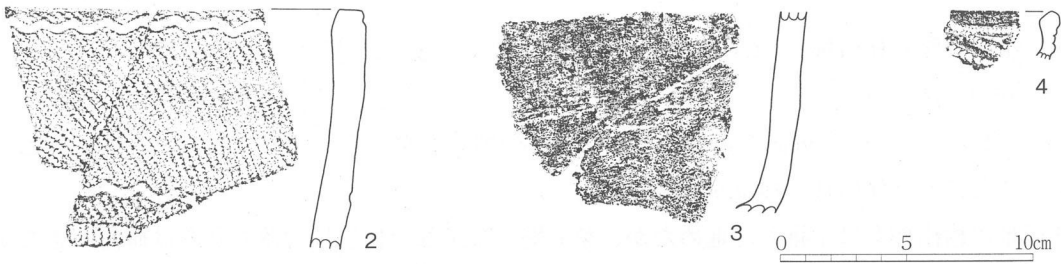
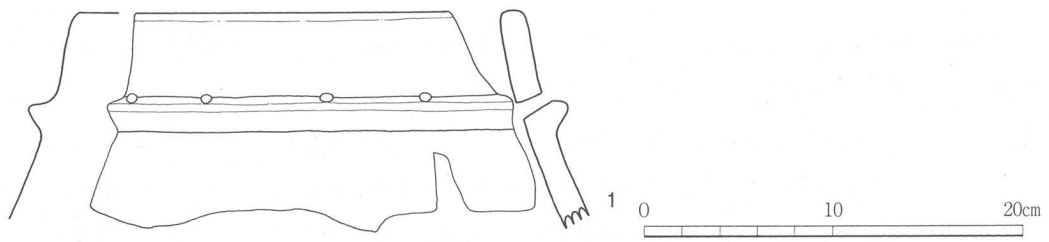
炉はほぼ中央に4点の石を方形に組んだ石囲炉がある。石は全て立てられていたが東辺の石はやや斜めになるが、これが使用時の姿であったのかは不明である。規模は22×24cmで炉内からは土器破片1点が敷かれたような状態で出土した。焼土は極めて弱いものである。炉の掘り方は方形である。



第55図 第7号竪穴住居址、小竪穴7



第56図 第7号竪穴住居址出土土器 その1



第57図 第7号竪穴住居址出土土器 その2、石器

遺物

土器 中期中葉の新道式である。完形と破片から器形を復原した3点（第56図、第57図1）と破片3点（2～4）を図示した。

遺構間接合（第57図1）に第3号竪穴住居址とグリッド出土破片が接合した（第92図2）。（第56図2）はグリッド出土破片が接合し第4号竪穴住居址に同個体破片がある（第92図1）。

石器 打製石斧1点、石匙Ⅱ類1点（第57図5）、磨石・凹石類2点（8・9）、磨製石斧2点（6・7）、黒曜石剥片9点、黒曜石以外の剥片1点である。

第8号竪穴住居址（第6・58～61・87・90図、写真42～47）

調査の経過

DE-79グリッドの発掘調査において、住居址の埋土と考えられる炭化物を包含する黒色土を認めたことにより住居址の埋没が考えられた。

住居址の検出作業は手掘りで進めたが、第Ⅱ層の下半部で住居址の落ち込みは確認できたが、部分的ではあったが耕作による攪乱がありプランを明確にするまでには至らず、第Ⅳ層のソフトローム上面で検出したが攪乱は本層まで達していた。

DC-80、DD-79～81、DE-79～81の7グリッドに跨る平面楕円形を呈する住居址である。

土層観察ベルトは自然傾斜の東西方向に設定した。床面までは東で36cm、西で30cmを計り埋土はⅠ～Ⅶに分けたが、Ⅰは耕作による攪乱である。Ⅱは含炭化物黒色土で基本層序の第Ⅱ層に炭化物が包含されたものである。Ⅲは焼土ローム含褐色土で真中より東側でみられた。Ⅳは含ローム褐色土でⅢから焼土を除いた状態でありやはり東側でみられた。Ⅴも含ローム褐色土でⅣより色調はやや黒味を増す。Ⅵは含ローム黒褐色土で、僅かではあるが炭化物が包含されている。やはり東側でみられた。Ⅶはロームであるが確りしたものではない。以上のように逆三角堆土と三角堆土の発達がみられるもので自然埋没である。

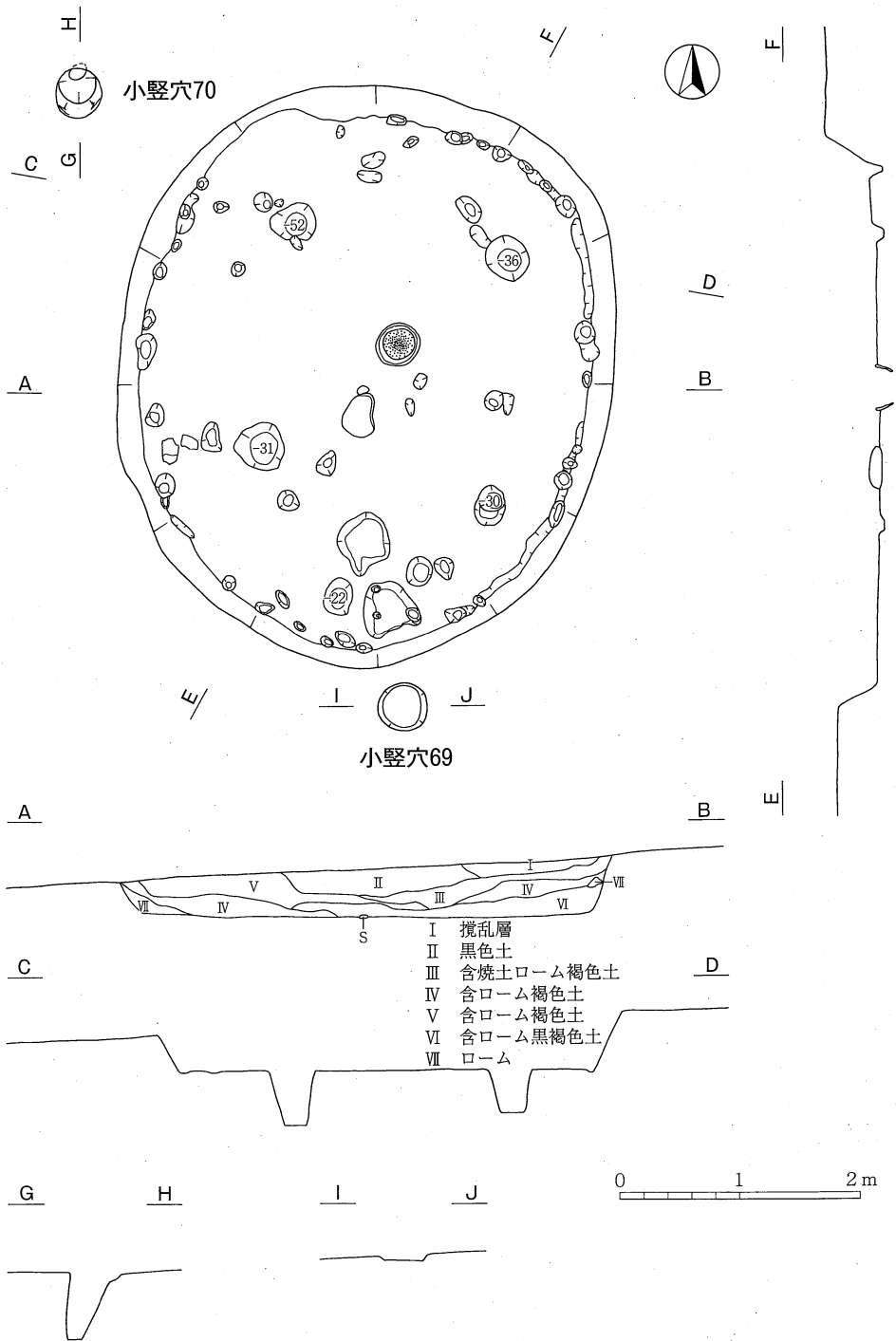
遺物は少なかったが、炉付近の床面および床面直上から復原できるものが出土した。

遺構

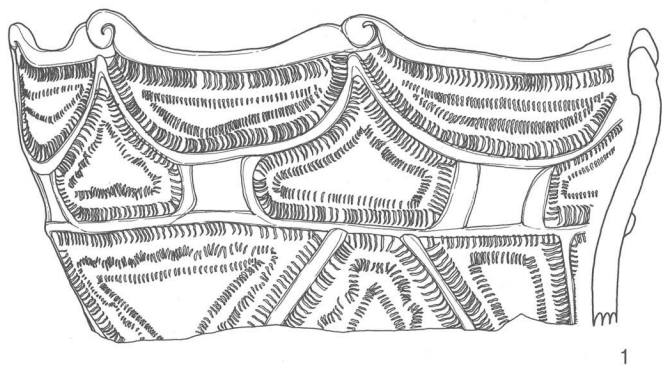
竪穴の平面形は楕円形で、大きさは長軸4.90m、短軸4.14mである。壁の立ち上がりは普通で壁高は東40cm、西25cm、南39cm、北39cmである。床面はほぼ水平のタタキ床であるが、炉周辺は硬いが総体的にはあまり良いものではない。

周溝は東壁直下で部分的に認められるが幅6～10cm、深さ3cm前後と浅いものである。

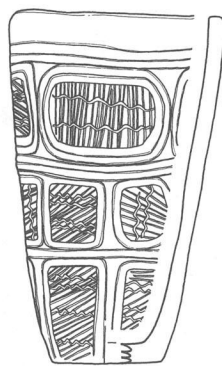
支柱穴は4穴ですっきりしている。径23～40cm、深さが22～52cmと確りしたものであるが規格性には乏しいようである。柱穴以外にも小ピットが多くあるが壁直下に集中している。径8～16cm、深さ5～21とまばらであるが、壁土の落下を防ぐための施設の一つであろう。南壁下には5個のピットがあるが径16～44cm、深さ8～22cmとやはりまばらであるが、入口部の施設の一部と考えておきたい。



第58図 第8号竪穴住居址、小竪穴69・70



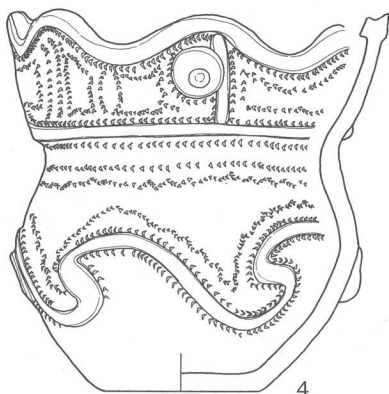
1



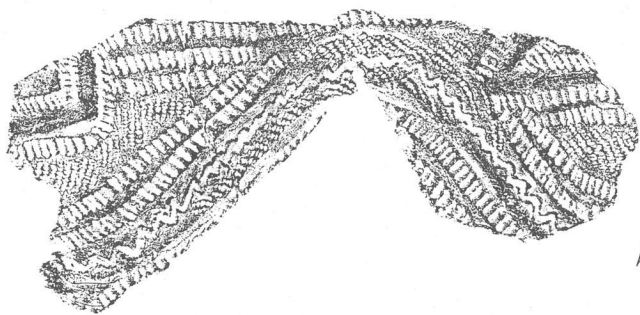
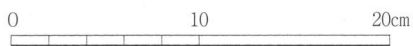
2



3



4



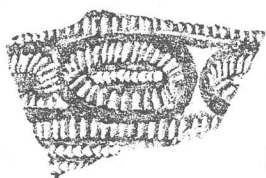
5



6



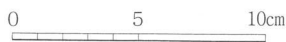
7



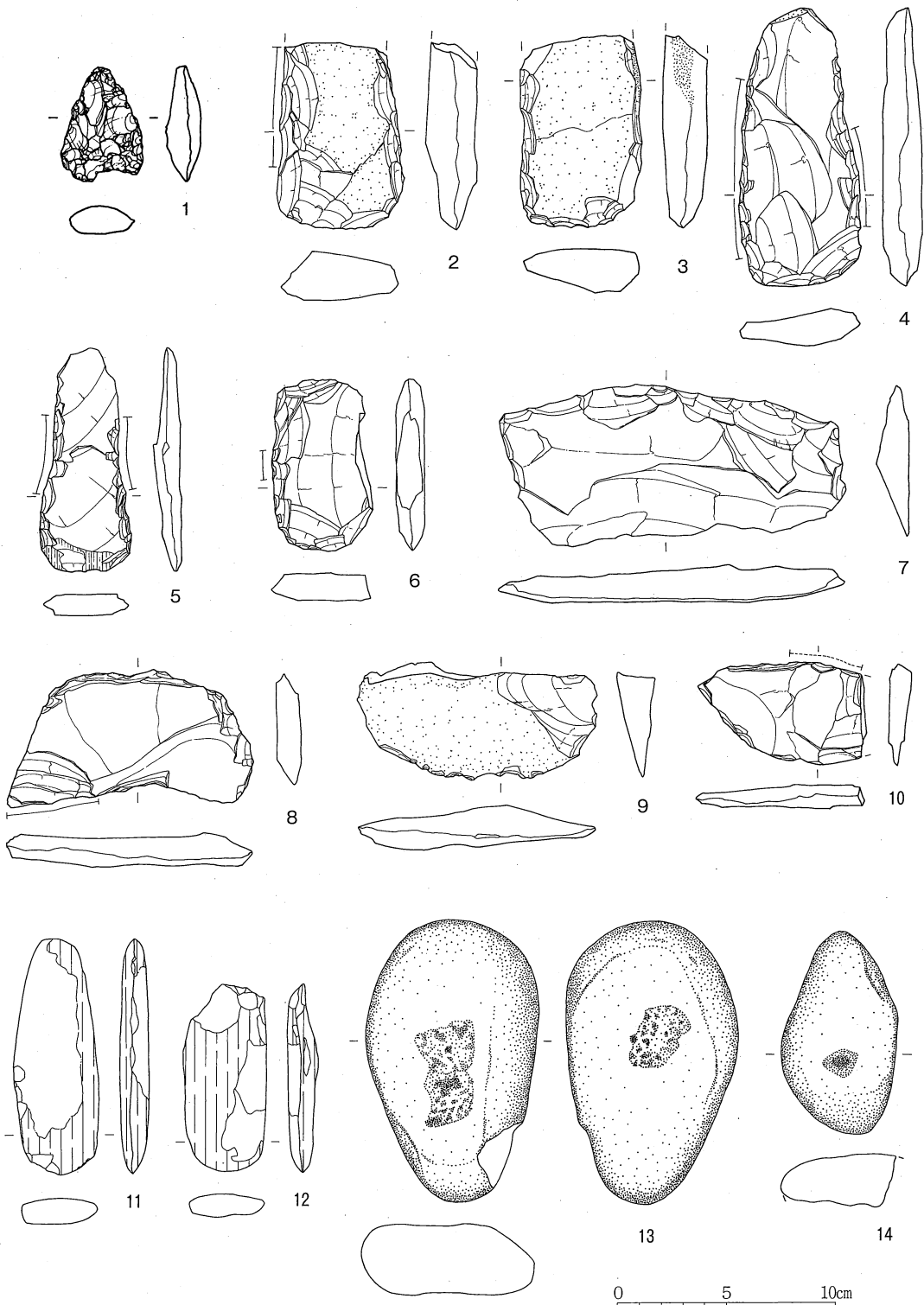
8



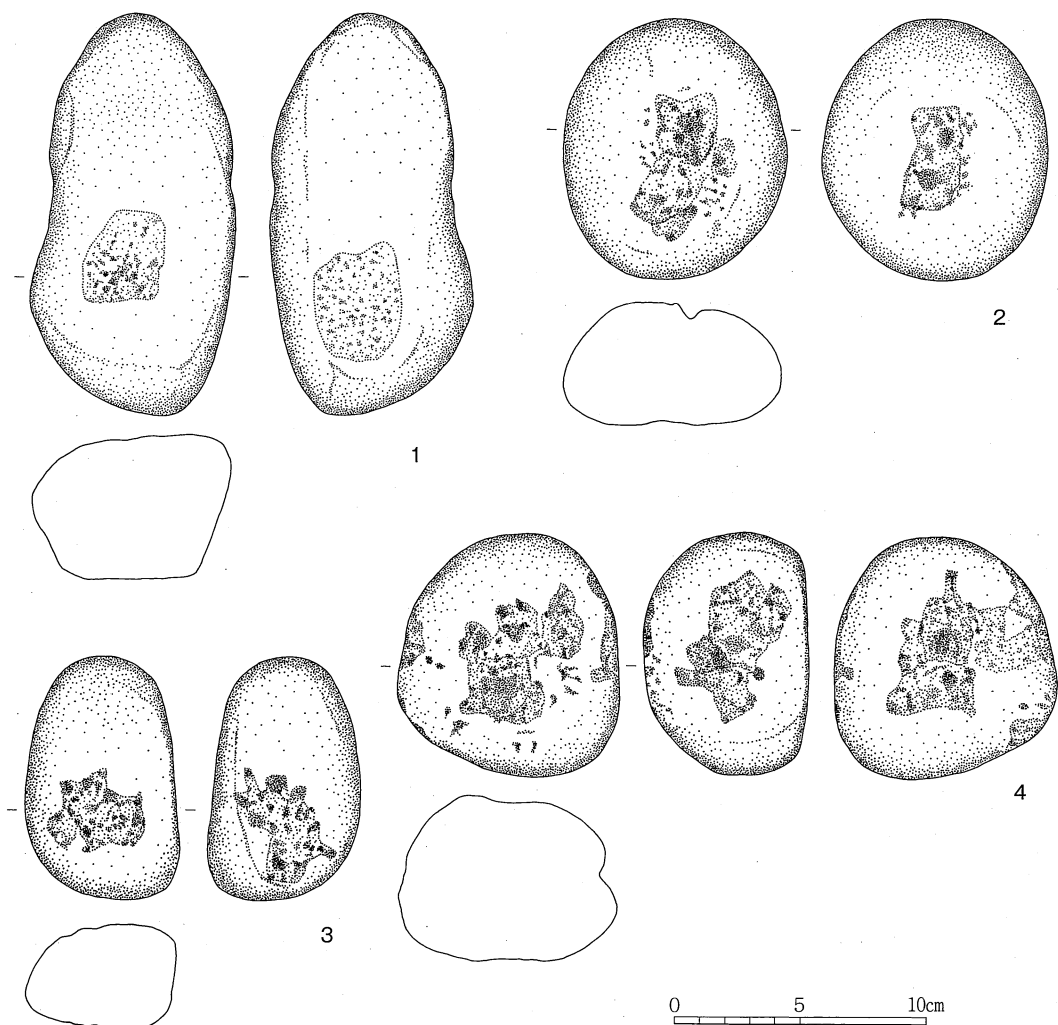
9



第59图 第8号竖穴住居址出土土器



第60図 第8号竪穴住居址出土石器 その1



第61図 第8号竪穴住居址出土石器 その2

炉はほぼ中央のやや北寄りに埋甕炉がある。埋設土器は口縁帯で胴から下はないが内径32cmの深鉢（第59図1）である。やや斜めに埋設されていたが掘り方と土器の間には僅かな埋土がみられただけである。炉内の焼土はあまり強くない。

炉南の床面には37×32cmの石が据え置かれていたが、床面を僅かではあるが掘り窪め石を安定させている。打痕や磨滅痕を顕著に認めることはできなかつたが作業台的な性格を持つものである。南西と北西の柱穴近くから床面に据え置かれた状態の石が出土したが性格は不明である。

遺物

土器 中期中葉の新道式である。完形と破片から器形を復原した4点（第59図1～4）と破片5点（5～9）を図示した。

遺構間接合 第4号竪穴住居址の深鉢・浅鉢との接合がある（第87図3、第90図1）。

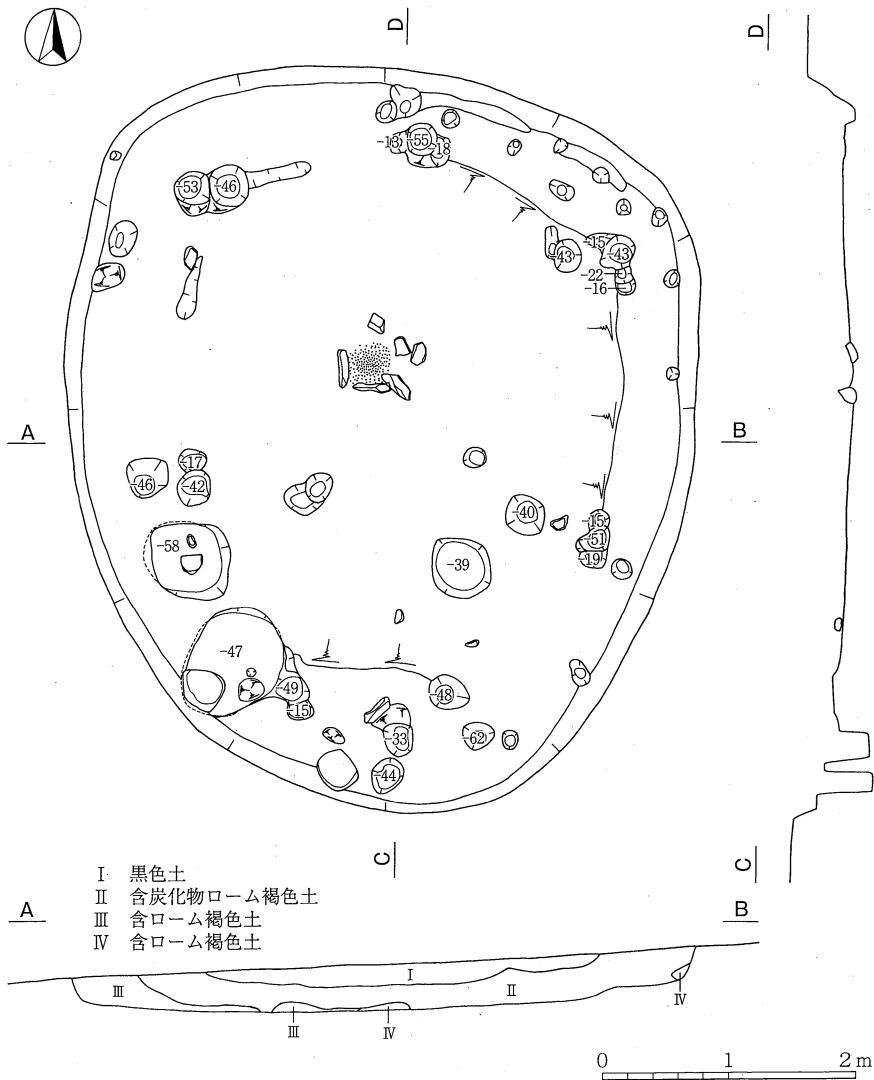
石器 石鏃1点(第60図1)、ピエス・エスキュー3点、二次加工のある剥片1点、使用痕のある剥片1点、打製石斧6点(2~6)、横刃形石器5点(7~10)、磨製石斧2点(11・12)、磨石・凹石類6点(13・14、第61図)、黒曜石剥片11点、黒曜石以外の剥片1点である。

第9号竪穴住居址 (第6・62~66・80・89・91~93図、写真48~50)

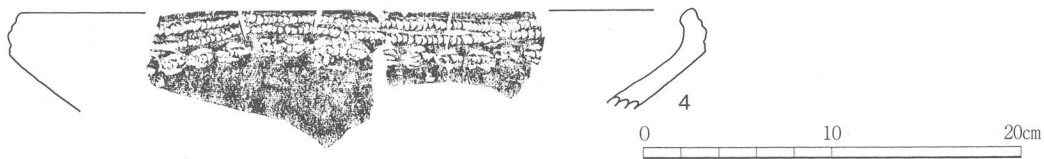
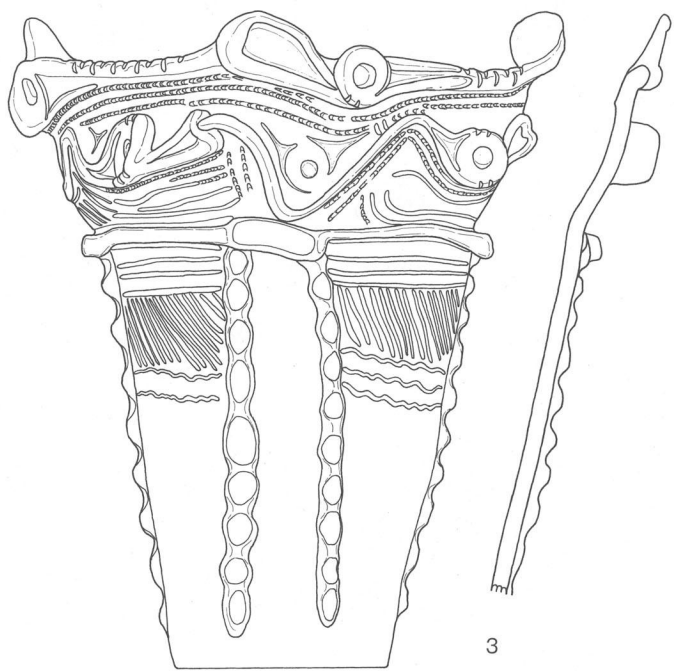
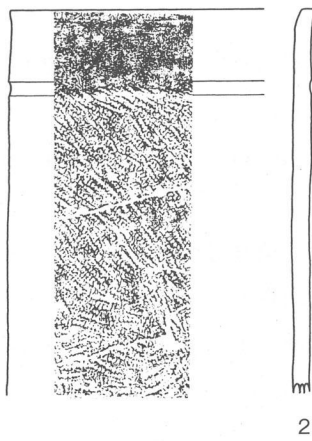
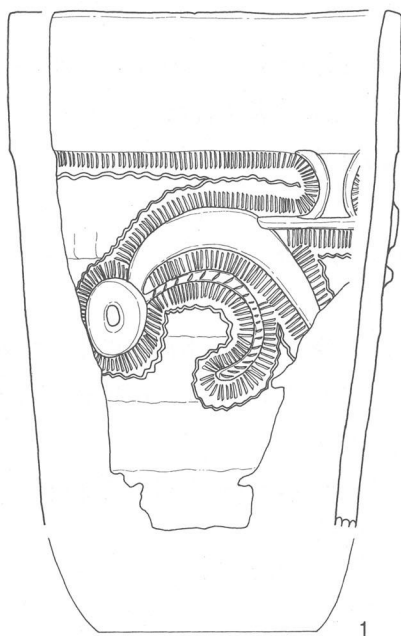
調査の経過

重機による表土剥ぎに引き続き人力で進めた遺構検出作業で、第II層の下半部で炭化物を包含する住居址の埋土と思われる土を認めたがプランを明確にするまでには至らず、第IV層のソフトローム上面で検出した。

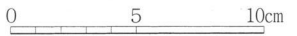
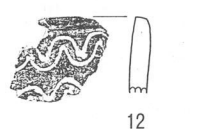
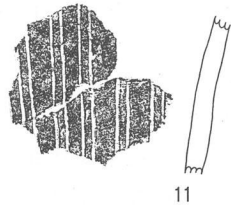
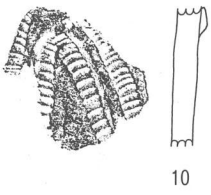
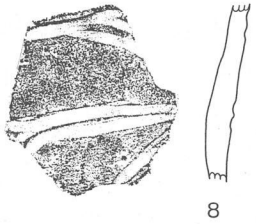
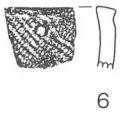
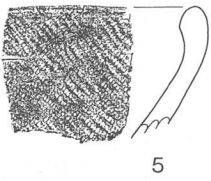
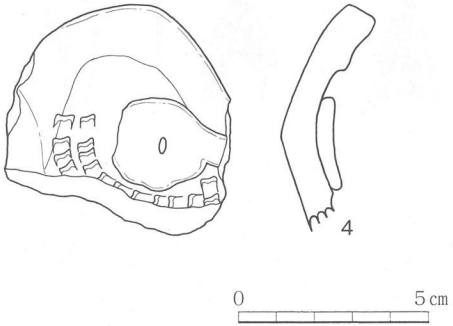
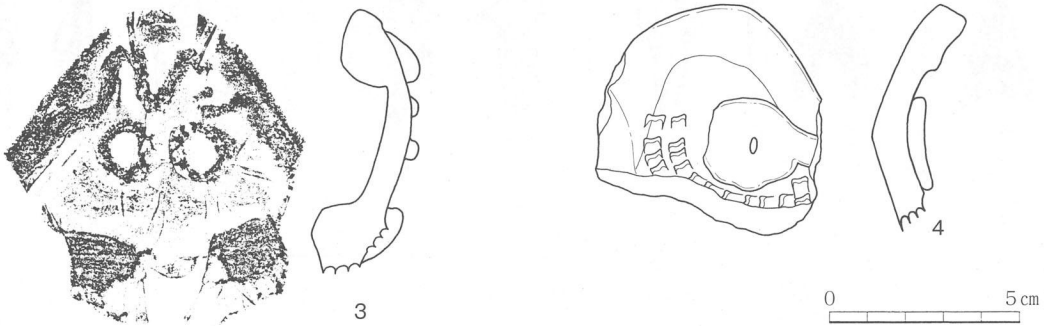
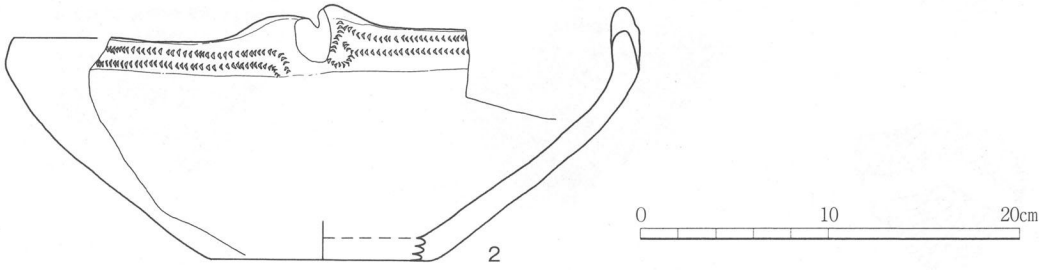
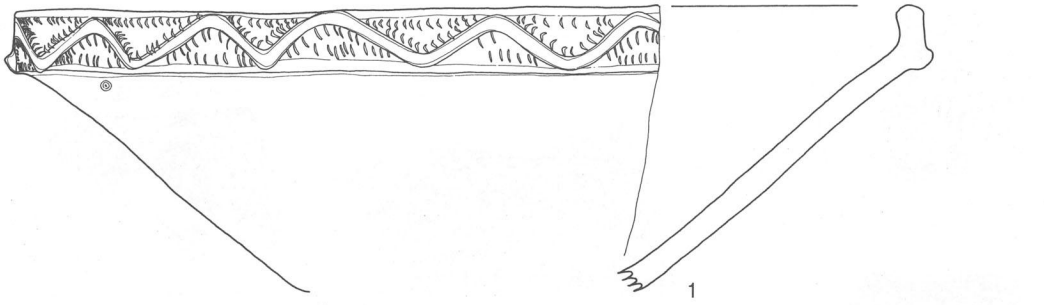
D Y - 72~75、E A - 72~75、E B - 72~75の12グリッドに跨る平面卵形を呈する住居址であ



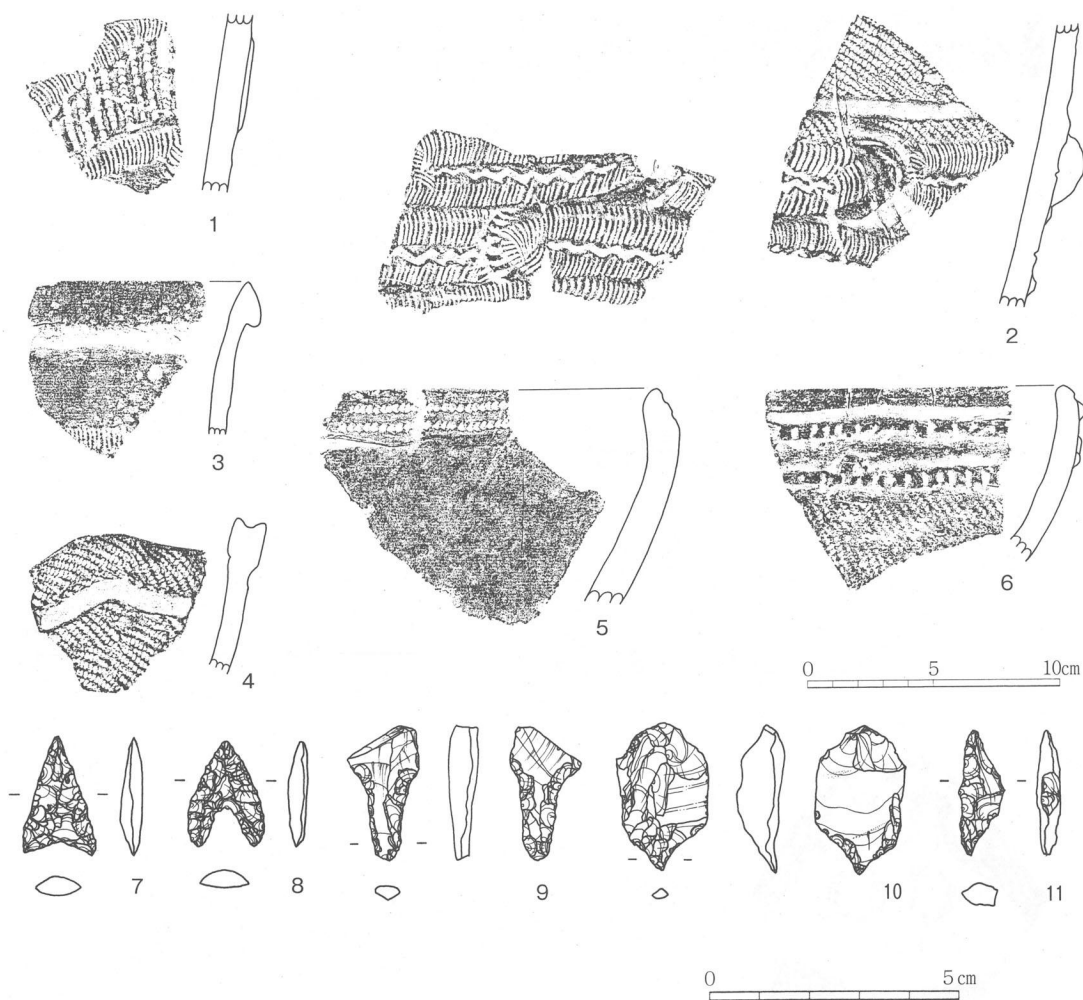
第62図 第9号竪穴住居址



第63図 第9号竪穴住居址出土土器 その1



第64図 第9号竖穴住居址出土土器 その2



第65図 第9号竪穴住居址出土土器 その3、石器 その1

る。

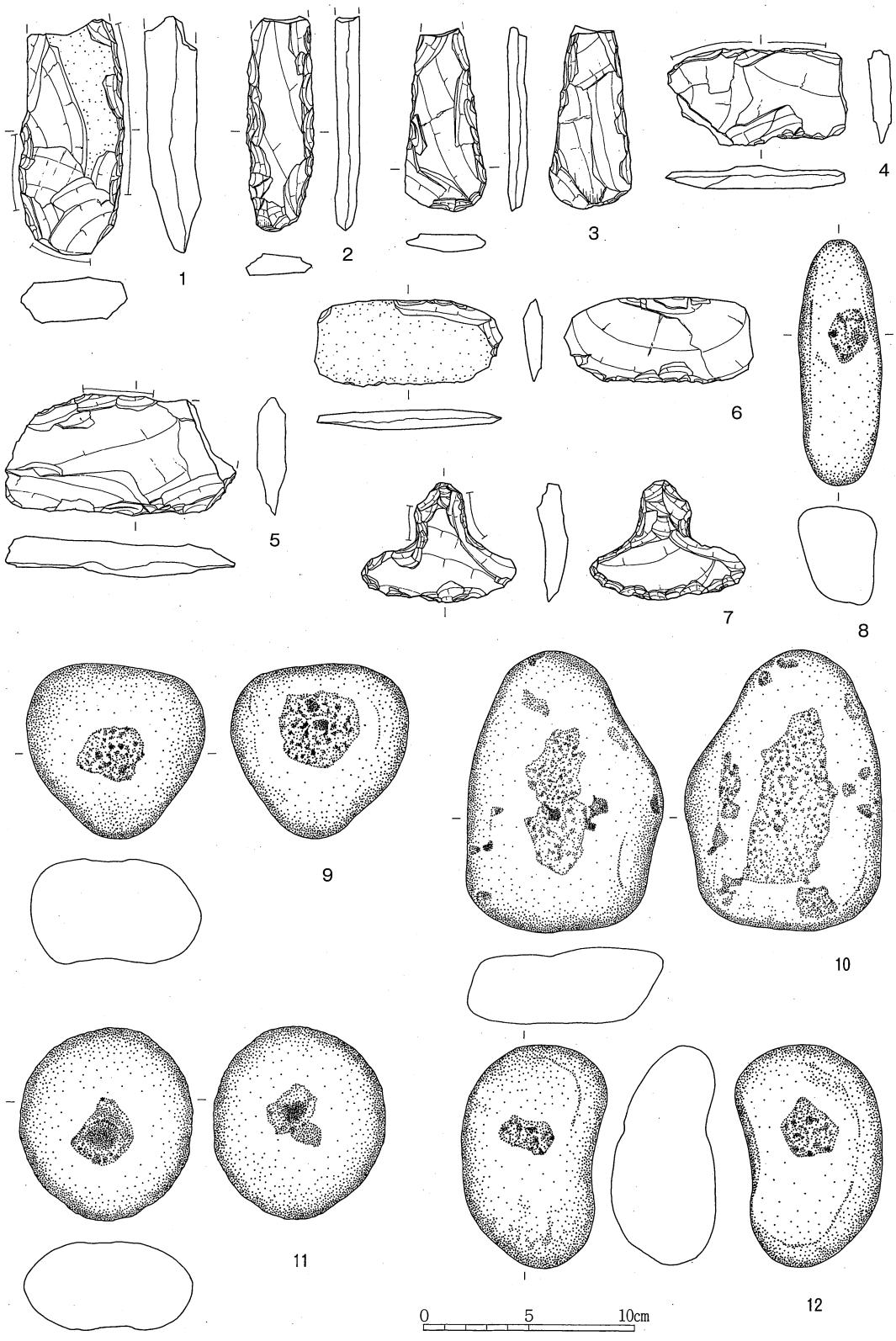
土層観察ベルトは自然傾斜の東西方向に設定した。床面までは東で31cm、西で16cmを計り埋土はI～IVに分けたが、Iは黒色土で基本層序の第II層にあたる。IIは含ローム炭化物褐色土でローム粒は大きなもので豆粒くらいである。中央付近はローム粒と炭化物の包含量が多くなる。IIIは含ローム褐色土でIIよりロームの包含量は増えるが粒は小さくなる。IVも含ローム褐色土であるがロームは際立って多くなり、ロームはIIIの倍くらいに見える状態である。以上のように逆三角堆土と三角堆土の発達が見られるもので自然埋没である。

遺物の出土は少ない。

遺構

竪穴の平面形は卵形で、大きさは長軸5.92m、短軸5.04mである。壁の立ち上がりは普通で壁高は東31cm、西16cm、南18cm、北27cmである。

床面は新道期特有のもので柱穴を結ぶ外の壁際が高くなるがレベル差は8～11cmで、北東の2



第66図 第9号竪穴住居址出土石器 その2

辺でみられただけである。タタキ床で炉付近がやや深くなるが凸凹がみられ、総体的にはあまり良いものではない。

周溝は部分的にみられるが幅10cmくらいで深さは3～5cmと浅いものである。

主柱穴は7穴であるが重複が認められ同心円状建て直しが容易に考えられる状態である。径20～30cm、深さが16～54cmとまばらである。

北東の壁際には小ピットが集中している。径10～15cm、深さ6～24とまばらであるが、壁直下のものは壁土の落下を防ぐための施設の一つであろう。西南壁下には貯蔵穴と考えられる一部袋状になる2基のピットがある。その一つは壁土の落下と思われる径3mmくらいのロームが混じる褐色土で埋っていた。したがって住居廃絶時には開口していたものと思われる。

炉は中央北寄りにL字形の石囲炉があるが、近くには抜き取られたと思われる火熱を受けた石4点が床面直上に散乱していた。遺存した石2点はしっかりと埋め立てられており、当初は方形に組まれた石囲炉であったものと思われる。焼土は3～5cmと厚くその下も火熱で変色している。

南壁には壁上からずり落ちた状態の大きな石2点が出土しているが、壁上に置かれていた入口部の施設の一つが埋没途上に堅穴内に落ち込んだものと考えたい。また、壁下にも柱状の石1点が床面直上から出土したが、やはり入口部の施設の一部と考えたい。

遺物

土器 中期中葉の新道式である。完形と破片から器形を復原した6点（第63図、第64図1・2）と破片17点（3～12、第65図1～6、第80図1）を図示した。（第63図4、第64図1・2）は浅鉢、（3・4）は把手で（3）は顔面を表したものであろう。（6）は小形の碗形土器で焼成前に小孔が穿たれている。

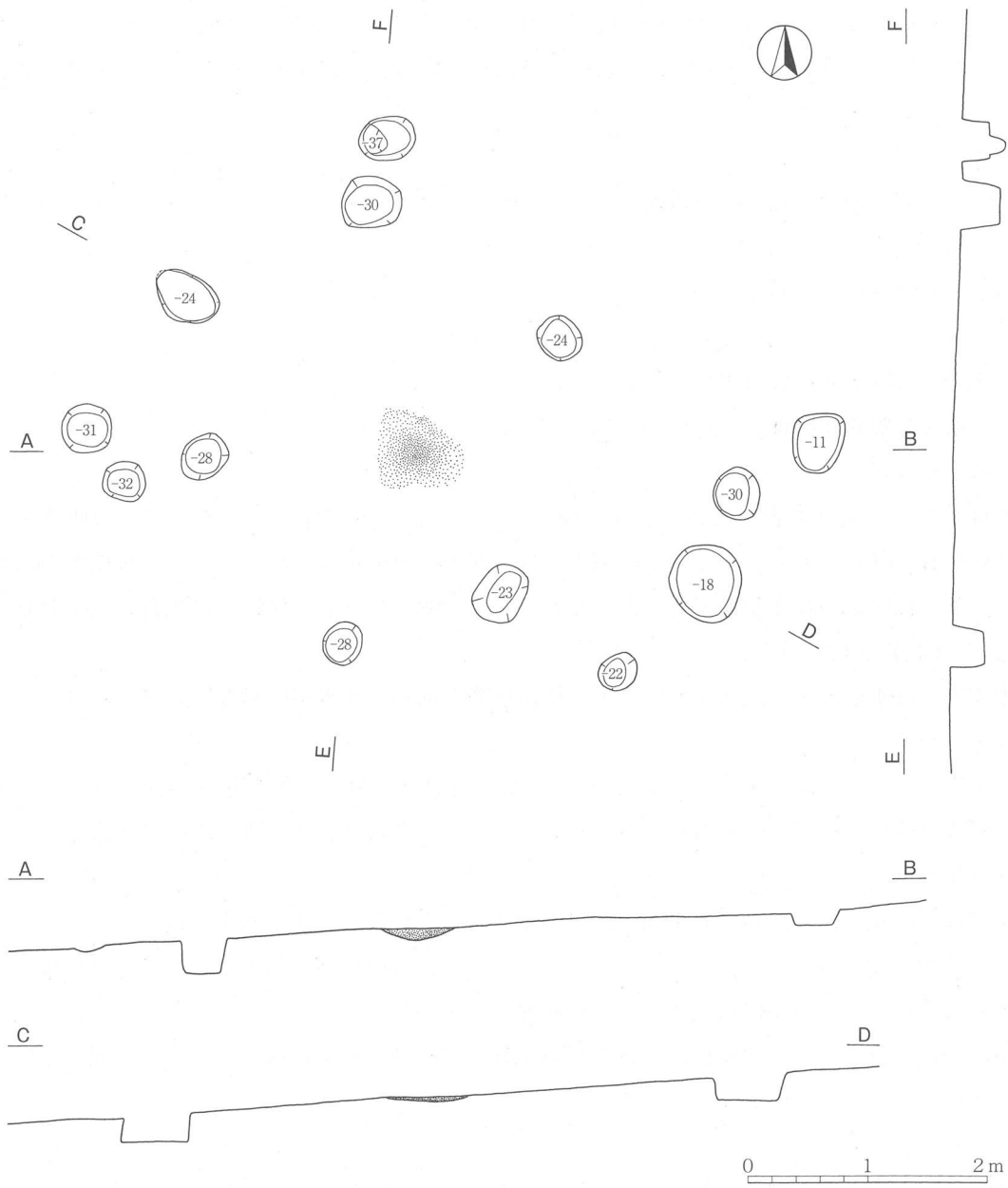
遺構間接合（第63図4）と（第65図2）に第4号堅穴住居址とグリッド、（第64図1）にグリッド出土破片が接合した（第89図1、第92図3、第93図1）。第6号堅穴住居址の深鉢との接合がある（第91図2）。

石器 石鏃2点（第65図7・8）、石錐2点（9・10）、ピエス・エスキュー6点、二次加工のある剥片1点（11）、使用痕のある剥片4点、打製石斧5点（第66図1～3）、横刃形石器4点（4～6）、石匙Ⅱ類1点（7）、磨石・凹石類5点（8～12）、原石1点、石核3点、黒曜石剥片131点、黒曜石以外の剥片16点である。

第10号堅穴住居址（第6・67図）

調査の経過

重機による表土剥ぎに引き続き人力遺構検出作業を進めたが、この辺りは耕作土の直下が基本層序の第Ⅴ層であるローム層になる。したがって、保存状態は極めて悪かったがEA-86グリッドで焼土を検出した。炉の火床と思われるもので付近の精査で柱穴を確認した。焼土と柱穴を第

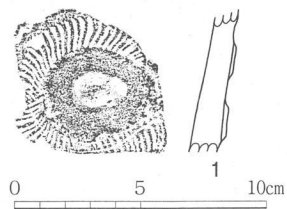


10号竪穴住居址と呼ぶことにした。

遺構

焼土と柱穴から住居址を想定したが、耕作の畝が縞状にみられ状態は極めて悪く壁の立ち上がりは一切認められなかった。したがって本址の規模は不明である。

焼土は厚い所で10cmを計り確りしたもので、炉址の火床と思われる状態であるが付近とレベル差はない。地床



第67図 第10号竪穴住居址、出土土器

炉であればほぼ同レベルに床面があり、石囲炉であれば焼土は床面より低いことになる。以上のことを考えると住居址の床面はすでに削り取られていることになる。柱穴の径は36～50cmである。

遺物

土器 中期中葉新道式で、土器破片1点（第67図1）だけである。

石器 石器は皆無である。

中期後葉の竪穴住居址

第2号竪穴住居址（第6・68図、写真12～14）

調査の経過

本址は第1次発掘調査においてE J-68グリッドで西南壁を検出したことでその埋没を確認し住居址Bと呼んだものである。その報告には「埋土に違いがみられたが、その規模から円形を呈する竪穴住居址の存在が推定できた。なお、E J-68グリッドで柱状の自然石1点を発見している。」と記載されている。

本調査では重機で表土剥ぎを行い人力で検出作業を進め、基本層序第IV層のソフトローム上面で検出した。

E J-68・69、E K-68・69の4グリッドに跨る平面不整隅丸方形を呈する住居址であるが、この辺りは耕作土の直下が基本層序第IV層のソフトローム層になり、耕作の畝による攪乱が著しく保存状態は良くない。

土層観察ベルトは自然傾斜の東西方向に設定し精査を行った。埋土は東で11cm、西では8cmと薄く色調の変化に乏しく分けることはできなかったが、含炭化物黒色土で床面近くは炭化物が多くなるうえにローム粒が混在していた。自然埋没と思われる。

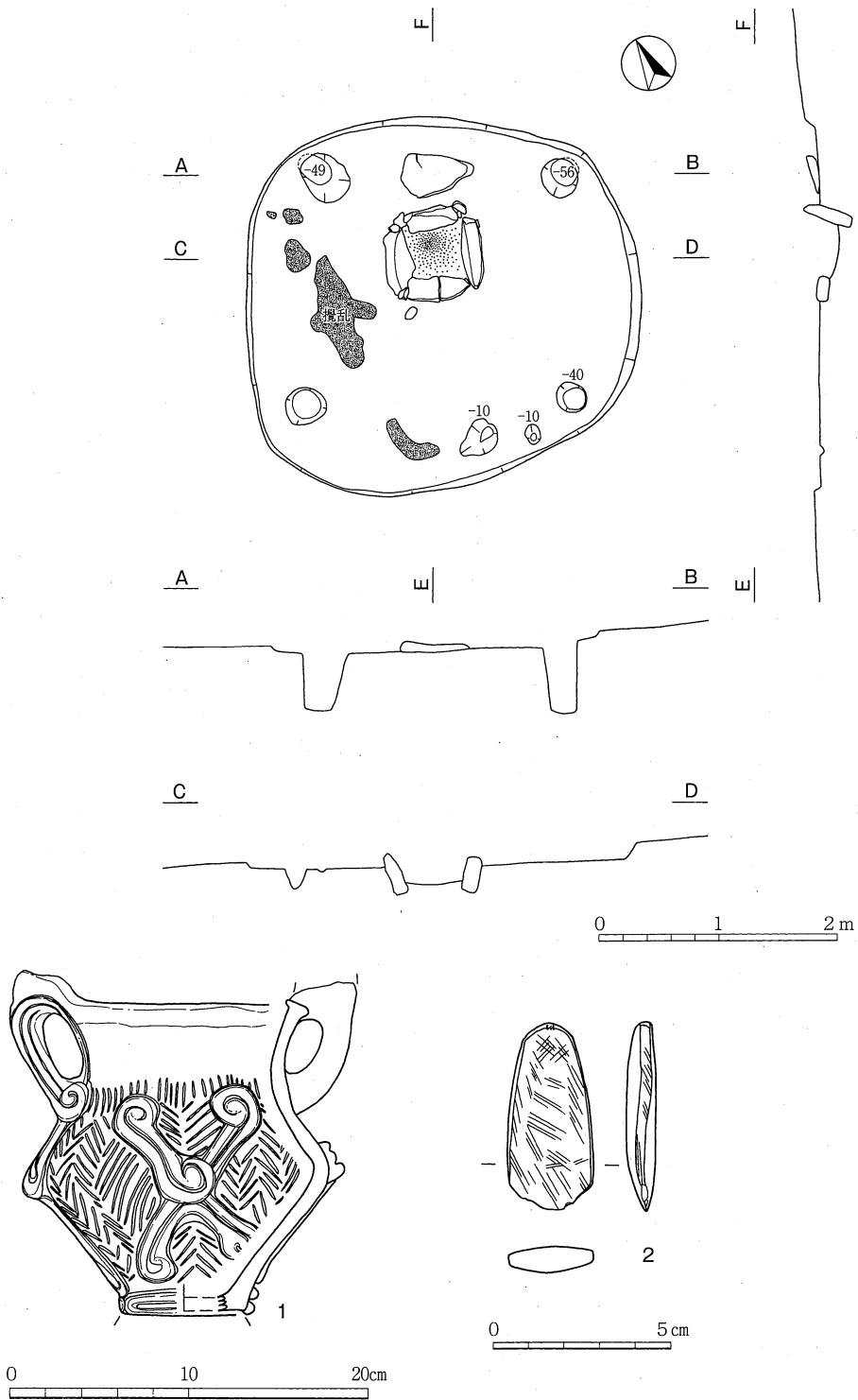
遺物の出土は少ない。炉内にはほぼ完形の深鉢（第68図1）が遺存していたが、埋設されたものではない。

遺構

竪穴の平面形は不整隅丸方形で大きさは長軸3.35m、短軸3.15mと小さいものである。壁は低いが立ち上がりは耕作の攪乱のため現状は良くない。壁高は東13cm、西6cm、南19cm、北7cmである。床面はほぼ水平であるが耕作による攪乱が著しい。部分的にタタキ床がみられたが総体的には軟弱で良くない。

主柱穴は4穴ですっきりしている。径24～32cm、深さが41～51cmと確りしたものである。南壁東寄りの壁下に小ピット2基は入口部施設である。

炉は中央北寄りに方形切り炬燵状石囲炉がある。東・北・西の3辺は大きな平板状石を立てたもので、南は柱状石を据付けた焚き口部である。この焚き口部の石の下には小さな石で確り支え



第68图 第2号竖穴住居址、出土土器、石器

るための基礎が施されていた。規模は50×60cmである。炉内の焼土は2cmでそれほど厚くない。

炉と北壁の間には平板状の大きな石が据え置かれていた。打痕や磨滅などの使用痕は一切認められず祭壇的な役割を持つものと思われる。また、第1次調査ではEJ-68グリッドで柱状の自然石を発見し埋め戻しておいたが、その後における耕作で抜き取られたようで検出できなかった。その位置は入口部付近にあたり立石であった可能性が高いものである。

小規模ではあるが隅丸方形を呈し、4本柱で、方形切り炬燵状石囲炉が構築された中期後葉の典型的な竪穴住居址である。

遺物

土器 中期後葉曾利Ⅱ期で、ほぼ完形の唐草文系土器1点（第68図1）だけである。

石器 磨製石斧1点（2）、黒曜石剥片3点である。

（2）小竪穴

小竪穴は70基調査した。帰属時期を明確にできるような遺物が伴うものは少なく性格もわかっていない。小竪穴が集中した個所については小竪穴A～D群の4群に分けた。

小竪穴A群は中央やや北寄りに位置し、小竪穴12～18・50～53の11基である。平面形は楕円形と円形で、小竪穴12・13・15・16は酷似する。

小竪穴B群はほぼ中央に位置し、11・21～36・54・55の19基、焼土および単独土器2個所で、焼土を中心に展開している。これは、富士見町の藤内特殊遺構を小規模化したようなものである。焼土は第Ⅱ層の黒色土下部で検出した。厚い所で3cmを計るがそれほど確りしたものではない。単独土器は第Ⅱ層の黒色土下部から出土した。焼土と単独土器は同レベルであり関連が強いものと思われる。

小竪穴C群は北東外れに位置し、37～40・43～47の9基である。平面形は楕円形と円形で、埋土に若干の違いはみられたが褐色土である。

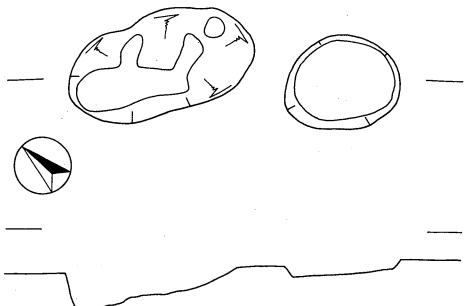
小竪穴D群は南外れに位置し、56～62の7基である。平面形は楕円形で、規模と埋土は酷似する。

個々の小竪穴について大まかな説明をしてみたい。規模は長軸、短軸の順に記述する。なお、カッコ付けは重複などがあるもので現状値を示した。

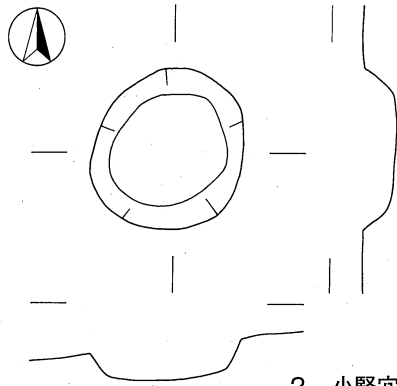
小竪穴1（第6・69図）

遺構 EP-85グリッドで検出した。埋土は黒色土と含ローム褐色土で平面形は152×80cmの不整長楕円形で、壁の立ち上がりはなだらかで底は凹凸が著しく深さは東で16cm、西は33cmと深くなる。

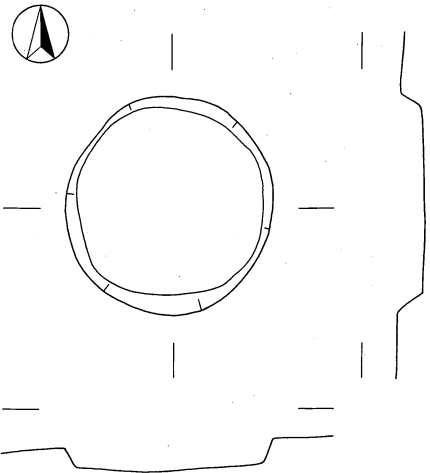
遺物 土器・石器とも皆無である。



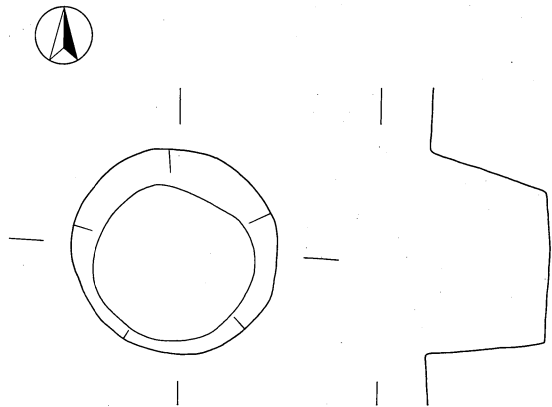
1. 小豎穴1・2



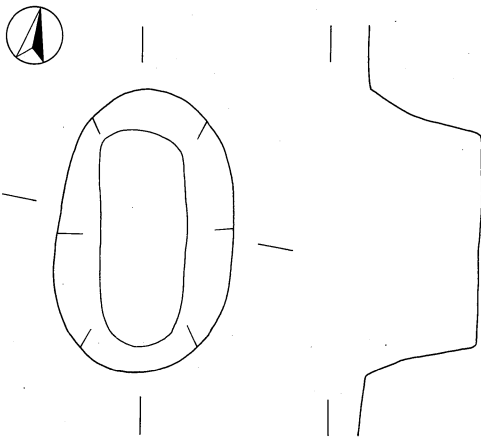
2. 小豎穴4



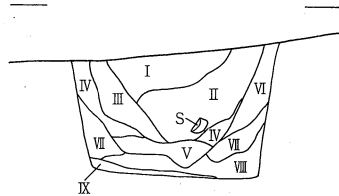
3. 小豎穴6



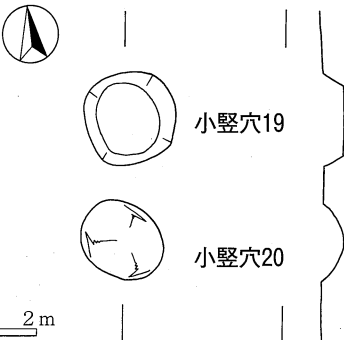
4. 小豎穴9



5. 小豎穴10



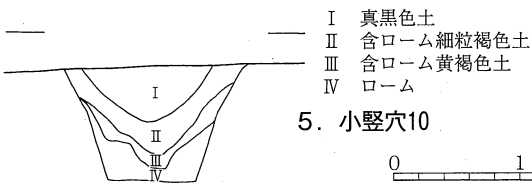
- I 含炭化物黒色土
- II 含炭化物・ローム細粒黒褐色土
- III 含ローム細粒黄褐色土
- IV 含ローム褐色土
- V 含炭化物ローム褐色土
- VI 含ローム黄褐色土
- VII ソフトローム
- VIII ローム
- IX ローム



小豎穴19

小豎穴20

6. 小豎穴19・20



- I 真黒色土
- II 含ローム細粒褐色土
- III 含ローム黄褐色土
- IV ローム

0 1 2m

第69図 小豎穴1・2・4・6・9・10・19・20

小竪穴2 (第6・69図)

遺構 EP-84、EQ-84グリッドで検出した。埋土は褐色土で平面形は91×74cmの不整楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは7cmと浅い。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴3 (第6・39図)

遺構 EK-81、EK-82グリッドで検出したが第4号竪穴住居址と重複する。埋土は黒色土で住居址のものより黒色味は強く、本址が新しく第4号竪穴住居址が古い。平面形は(228)×150cmの長楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底はほぼ平で深さは23cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴4 (第6・69・75・76図、写真51～53)

遺構 EL-71・72、EM-71・72グリッドで検出した。埋土は含黒褐色土で平面形は131×118cmの楕円形で、壁の立ち上がりは比較的なだらかで底は丸みをもち深さは23cmである。

遺物 土器は中期中葉新道式である。1/3位が残存する深鉢(第75図1)は逆位で出土した。ほかには破片3点(第76図1～3)がある。石器は皆無である。

遺物の出土状態から墓壙と考えたい。

小竪穴5 (第6・52図)

遺構 EM-76・77グリッドで検出したが第6号竪穴住居址と重複する。検出面で焼土が認められたが、埋土は含ローム細粒褐色土で焼土は包含されていない。第6号竪穴住居址に焼土と埋土が切られており本址が旧く第6号竪穴住居址が新しい。平面形は84×(71)cmの不整楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは19cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴6 (第6・69・75・76・93図、写真54～56)

遺構 DF-68・69、DG-68・69グリッドで検出した。埋土は不安定な黒色土で人為的に埋められたものようである。平面形は175×164cmの円形で、壁の立ち上がりは良好で底は平で深さは16cmである。

遺物 土器は中期中葉新道式である。口縁部を欠損する深鉢(第75図2)は横位で、上半部を欠損する深鉢(3)は正位で、底面より10cmほど浮いて出土した。なお、(2)にグリッド出土破片が接合した(第93図2)。破片は82点を数え、土器接合図は作成しなかったが内1点(第76図4)が北方約10mの小竪穴7出土破片と接合した。石器は黒曜石以外の剥片1点である。

遺物の出土状態から墓壙であろう。

小竪穴7 (第6・55・76図)

遺構 DH-73グリッドで検出した。埋土は褐色土で平面形は90×70cmの隅丸方形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは11cmである。

遺物 土器は中期中葉新道式である。破片4点で、土器接合図は作成しなかったが内1点(第76図4)が南方約10mの小竪穴6出土破片と接合した。石器は皆無である。

小竪穴8 (第6・35・76図)

遺構 DK-78グリッドで検出した。埋土は含炭化物褐色土で炭化物の量は多い。平面形は78×68cmの卵形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは13cmである。

遺物 土器は中期中葉新道式の破片2点(第76図7)で、石器は皆無である。

小竪穴9 (第6・69・76・77・87図、写真57～59)

遺構 DA-82、DB-82グリッドで検出した。埋土はⅠ～Ⅸに分けたように自然埋没である。Ⅰは含炭化物黒色土。Ⅱは含炭化物・ローム細粒黒褐色土で、Ⅰよりも炭化物は多く黒色味が強くローム細粒を僅かに包含する。Ⅲは含ローム細粒黄褐色土。Ⅳは含ローム褐色土。Ⅴは含炭化物ローム褐色土で、Ⅳよりロームは多い。Ⅵは含ローム黄褐色土。Ⅶはソフトローム。ⅧとⅨはロームで壁土が落下したものである。色調はほぼ同じであるがⅨの方が粘質を増す。平面形は164×161cmの円形で、壁の立ち上がりは前記したように崩落していると思われるがほぼ垂直で、底は平で深さは93cmと深い。底面から逆茂木を立てた小穴を検出することはできなかったが陥し穴と考えたいものである。

遺物 土器は中期中葉新道式である。破片ばかり75点(第76図5・6・8～10)と多いが小さなものばかりである。内1点は第4号竪穴住居址の深鉢と接合した(第87図3)。石器は打製石斧1点、磨・凹石類1点(第77図3)である。

小竪穴10 (第6・69図、写真60～62)

遺構 DO-79・80、DP-79・80グリッドで検出した。埋土はⅠ～Ⅳに分けたように自然埋没である。Ⅰは真黒色土。Ⅱは含ローム細粒褐色土。Ⅲは含ローム黄褐色土。Ⅳはロームで壁土が落下したものである。平面形は226×140cmの楕円形で、底は平で深さは86cmと深い。底面から逆茂木を立てた小穴を検出することはできなかったが陥し穴と考えたいものである。

遺物 土器は中期中葉新道式の破片1点で、石器は皆無である。

小竪穴19 (第6・69図)

遺構 EC-79、ED-79グリッドで検出した。埋土は含炭化物褐色土で平面形は76×74cmの不整形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは18cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴20 (第6・69図)

遺構 EC-79グリッドで検出した。埋土は含炭化物褐色土で平面形は70×58cmの楕円形で、壁の立ち上がりはなだらかで底は舟底状で深さは17cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴41 (第6・70図)

遺構 DS-89グリッドで検出した。埋土は褐色土で平面形は53×50cmの円形で、壁の立ち上がりは普通で底は舟底状で深さは30cmである。東は2段に落ち込みそのレベル差は10cmを計る。

遺物 土器は皆無である。石器は黒曜石以外の剥片1点である。

小竪穴42 (第6・70図)

遺構 DT-88グリッドで検出した。埋土は褐色土で平面形は36×35cmの円形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さ17cmと浅いが柱穴状のものである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴48 (第6・70図)

遺構 ED-82・83グリッドで検出した。埋土は褐色土で平面形は56×49cmの楕円形で、壁の立ち上がりはなだらかで底は舟底状で深さは9cmと浅い。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴49 (第6・70図)

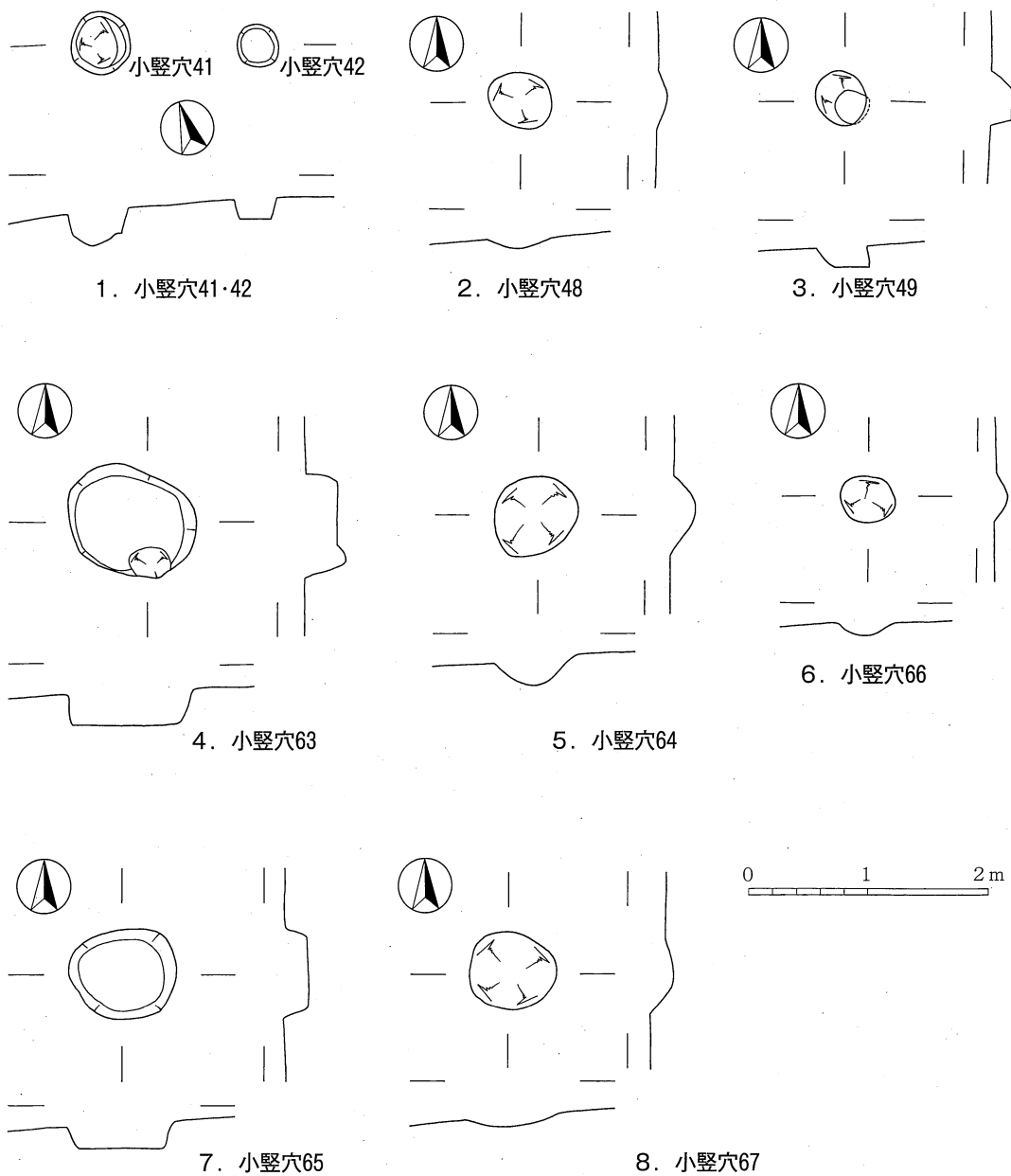
遺構 EE-81グリッドで検出した。埋土は褐色土で平面形は46×41cmの楕円形で、壁の立ち上がりはなだらかであるが東南の一部が袋状になり斜めに掘られたものである。底は平で深さは17cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴63 (第6・70図、写真64)

遺構 DX-71・72グリッドで検出した。埋土は黒褐色土で平面形は112×86cmの楕円形で、壁の立ち上がりは普通で深さは27cmを計るが、南東端に36×25cmの小ピットがあり深さは14cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。



第70図 小竪穴41・42・48・49・63～67

小竪穴64 (第6・70図)

遺構 DI-66・67、DJ-66・67グリッドで検出した。埋土は黒色土で平面形は75×65cmの楕円形で、壁の立ち上がりはなだらかで底は舟底状で深さは26cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴65 (第6・70図、写真65)

遺構 DJ-72グリッドで検出した。埋土は黒褐色土で平面形は91×75cmの不整楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは20cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴66 (第6・70図)

遺構 DI-75・76グリッドで検出した。埋土は褐色土で平面形は46×40cmの楕円形で、壁の立ち上がりはなだらかで底は舟底状で深さは10cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴67 (第6・70図)

遺構 DH-79グリッドで検出した。埋土は褐色土で平面形は73×65cmの不整楕円形で、壁の立ち上がりはなだらかで底は舟底状で深さは9cmと浅い。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴68 (第6・35図)

遺構 DI-81、DJ-81グリッドで検出した。埋土は褐色土で平面形は80×74cmの不整円形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは13cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴69 (第6・58図)

遺構 DC-81グリッドで検出した。埋土は褐色土で平面形は43×38cmの楕円形で、壁の立ち上がりは南がなだらかで北はほぼ垂直になり部分的には袋状になる。深さ56cmで斜めに掘り込まれたものである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴70 (第6・58図)

遺構 DE-78グリッドで検出した。埋土は褐色土で平面形は42×38cmの不整円形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは5cmと浅い。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴A群

小竪穴12 (第6・71図)

遺構 DV-82・83グリッドで検出しA群としたものである。埋土は黒色土で平面形は117×

102cmの楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは21cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴13 (第6・71図)

遺構 DV - 83・84グリッドで検出し A 群としたものである。埋土は褐色土で平面形は102×70cmの楕円形で、壁の立ち上がりはほぼ垂直で底は平で深さは21cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴14 (第6・71図)

遺構 DW - 82グリッドで検出し A 群としたものである。埋土は褐色土で小竪穴13とほぼ同じである。平面形は123×100cmの卵形で、壁の立ち上がりはなだらかで底は舟底状で深さは8cmと浅い。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴15 (第6・71図)

遺構 DW - 83グリッドで検出し A 群としたものである。埋土は含ローム細粒褐色土で平面形は112×88cmの不整楕円形で、壁の立ち上がりはほぼ垂直で底は平で深さは23cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴16 (第6・71図)

遺構 DX - 83グリッドで検出し A 群としたものである。埋土は含炭化物褐色土で平面形は87×81cmの楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは21cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴17 (第6・71図)

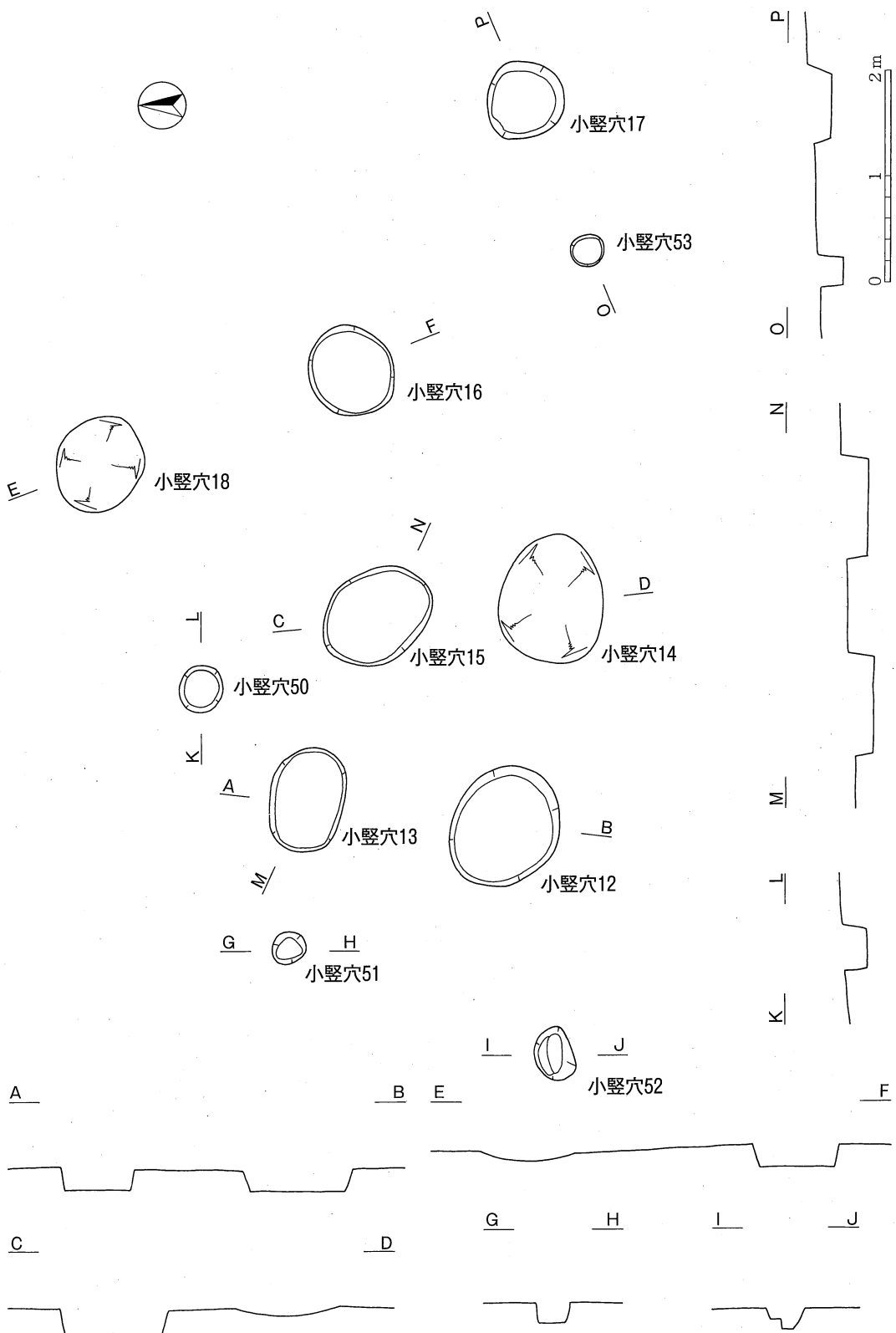
遺構 DY - 82・83グリッドで検出し A 群としたものである。埋土は含炭化物褐色土で平面形は74×74cmの不整円形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは20cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴18 (第6・71図)

遺構 DW - 84・85、DX - 84・85グリッドで検出し A 群としたものである。埋土は褐色土で平面形は90×85cmの円形で、壁の立ち上がりはなだらかで底は舟底状で深さは8cmと浅い。

遺物 土器・石器とも皆無である。



第71图 小竖穴12~18·50~53

小竪穴50 (第6・71図)

遺構 DV-84グリッドで検出しA群としたものである。埋土は褐色土で平面形は43×42cmの円形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは22cmの柱穴状である。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴51 (第6・71図)

遺構 DU-84グリッドで検出しA群としたものである。埋土は褐色土で平面形は35×31cmの円形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは18cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴52 (第6・71図)

遺構 DU-82グリッドで検出しA群としたものである。埋土は褐色土で平面形は51×38cmの楕円形で、底は2段になり南が深く20cm、北は11cmを計りレベル差は9cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴53 (第6・71図)

遺構 DX-82グリッドで検出しA群としたものである。埋土は褐色土で平面形は32×31cmの不整形円で、壁の立ち上がりはほぼ垂直で底は平で深さは25cmの柱穴状である。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴B群

小竪穴11 (第6・72図)

遺構 DY-75、EA-75グリッドで検出しB群としたものである。埋土は黒色土で平面形は74×58cmの楕円形で、壁の立ち上がりは普通であるが東壁には小ピットが穿たれている。底は小さくなるが深さは81cmと深い。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴21 (第6・72図)

遺構 DS-78グリッドで検出しB群としたものである。埋土は真黒色土で平面形は86×64cmの不整形楕円形で、壁の立ち上がりはなだらかで底は舟底状で深さは23cmで柱穴状である。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴22 (第6・72・75・76図)

遺構 DS-80グリッドで検出しB群としたものである。埋土は含炭化物褐色土で平面形は37

×27cmの楕円形で、壁の立ち上がりはほぼ垂直で底は平で深さは14cmである。

遺物 土器は中期中葉新道式である。壺形土器（第75図5）の1/5ほどが残存する。検出時点では下層の小竪穴を確認できなかったことで単独土器4と呼んだものであるが、小竪穴内に逆位で埋設されていたものと思われる。この辺りは耕作の攪乱が深く土器検出面に達しており、耕作で欠損が生じていると思われるが詳しいことはわからない。破片は12点（第76図11・12・14・15）である。石器は皆無である。

小竪穴23（第6・72図）

遺構 DT-79グリッドで検出しB群としたものである。埋土は含炭化物褐色土で平面形は48×37cmの不整楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは14cmである。

遺物 土器は皆無である。石器は磨製石斧1点である。

小竪穴24（第6・72図）

遺構 DU-79グリッドで検出しB群としたものである。埋土は含炭化物褐色土で平面形は33×31cmの円形で、壁の立ち上がりはほぼ垂直で底は平で深さは13cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴25（第6・72図）

遺構 DU-79、DV-79グリッドで検出しB群としたものである。埋土は含炭化物褐色土で平面形は25×24cmの不整円形で、壁の立ち上がりはほぼ垂直で底は平で深さは11cmである。底面からは小礫1点が出土した。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴26（第6・72図）

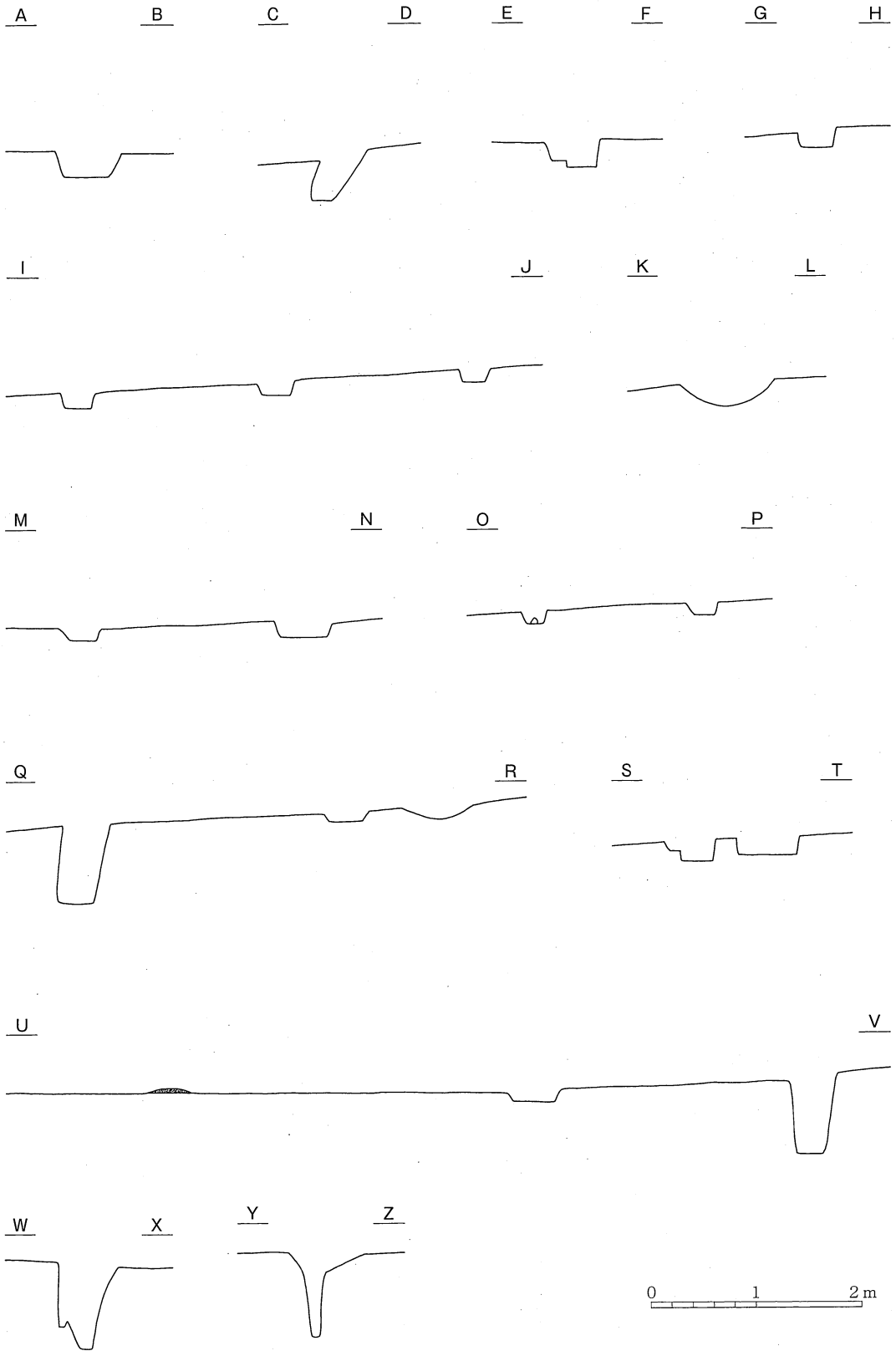
遺構 DV-78グリッドで検出しB群としたものである。埋土は含炭化物褐色土で平面形は33×25cmの楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さは11cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴27（第6・72・76・91図、写真66）

遺構 DW-77グリッドで検出しB群としたものである。埋土は含炭化物褐色土で平面形は33×25cmの楕円形で、壁の立ち上がりはほぼ垂直で底は平で深さは7cmと浅い。

遺物 土器は中期中葉新道式である。小竪穴内に埋められていたが、土器を検出した時点には下層の小竪穴は確認できなかったことで単独土器2と呼んだものである。破片は22点（第76図13）ある。内1点は第1・3・4・5号竪穴住居址出土した土器破片と接合（第91図1）したが、



第72図 小竪穴11・21~36・54・55

土器は破片が最も多い5号住居址に実測図は掲載した。この付近は耕作の攪乱が深く土器検出面まで達していたこともあり、これが埋設時の姿であるとは考えにくく胴下半部を欠損するが、耕作による欠損とも思われるが詳しいことはわからない。

小竪穴28 (第6・72図)

遺構 DX-77グリッドで検出しB群としたものである。埋土は含炭化物褐色土で平面形は48×43cmの不整円形で、壁の立ち上がりは普通で西側の一部が袋状になる。底は平で深さ75cmと深いが斜めに掘り込まれたものである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴29 (第6・72図)

遺構 DW-76・77グリッドで検出しB群としたものである。埋土は含炭化物褐色土で平面形は47×42cmの楕円形で、壁の立ち上がりはほぼ垂直で底は2段になるが東側が深く21cm、西は8cmを計りレベル差は13cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴30 (第6・72図)

遺構 DW-76グリッドで検出しB群としたものである。埋土は含炭化物褐色土で平面形は60×42cmの楕円形で、壁の立ち上がりはほぼ垂直で底は平で深さ19cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴31 (第6・72図)

遺構 DR-78グリッドで検出しB群としたものである。埋土は砂質の黒色土で平面形は53×34cmの不整円形で、壁の立ち上がりはなだらかで西南側が一部袋状になる。底は平で深さ48cmで斜めに掘り込まれたものである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

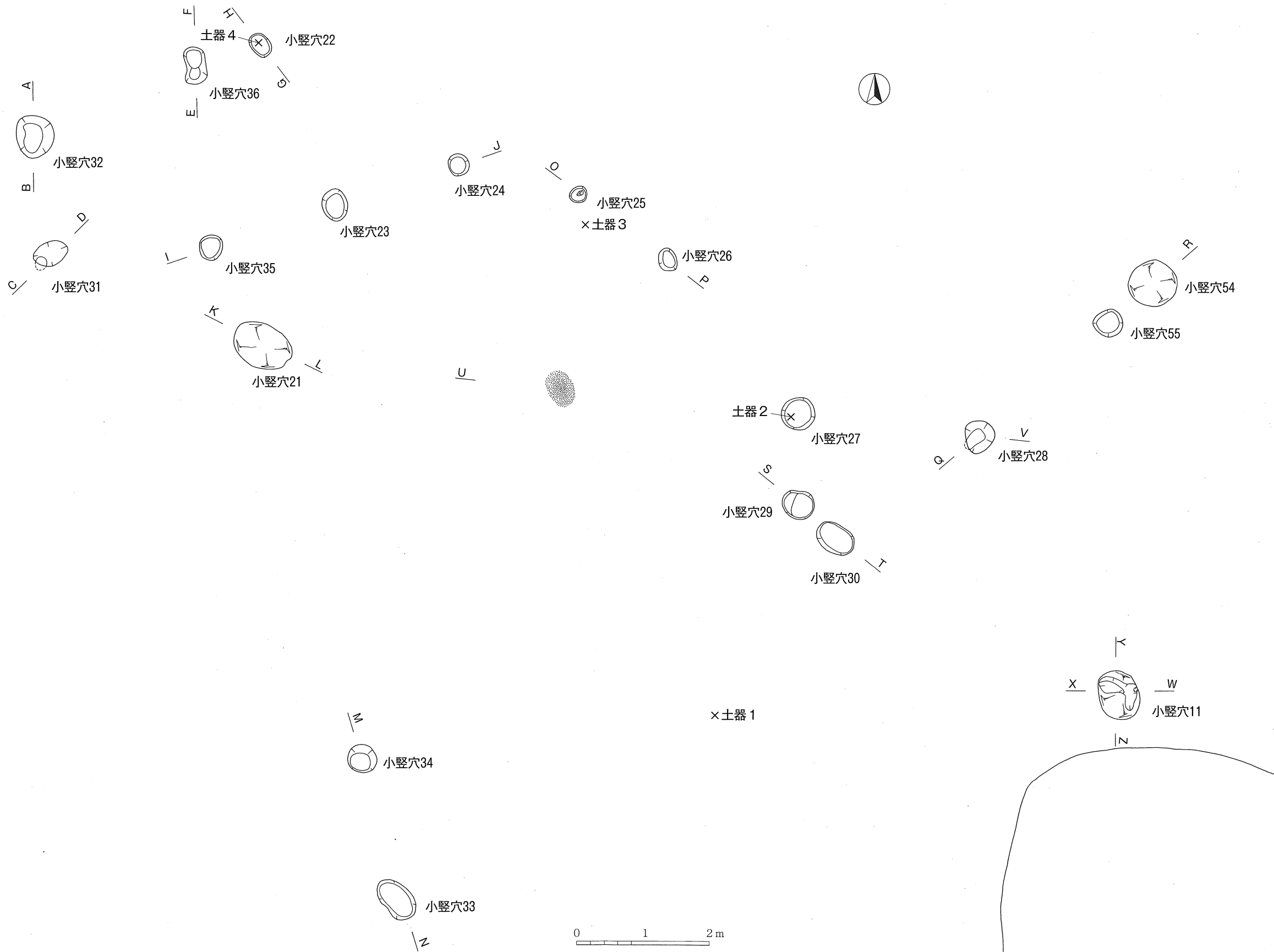
小竪穴32 (第6・72図)

遺構 DQ-79、DR-79グリッドで検出しB群としたものである。埋土は含炭化物褐色土で平面形は62×55cmの卵形で、壁の立ち上がりは普通で底は平で深さ25cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴33 (第6・72図)

遺構 DT-74グリッドで検出しB群としたものである。埋土は褐色土で平面形は70×40cmの



楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さ11cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴34 (第6・72図)

遺構 DT-75グリッドで検出しB群としたものである。埋土は褐色土で平面形は43×41cmの円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さ11cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴35 (第6・72図)

遺構 DS-78グリッドで検出しB群としたものである。埋土は褐色土で平面形は37×34cmの卵形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さ15cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴36 (第6・72図)

遺構 DS-80グリッドで検出しB群としたものである。埋土は褐色土で平面形は54×31cmの卵形である。2基の小竪穴が重複していることも考えられるが、検出時点の観察および埋土の状態では明らかにできなかった。壁の立ち上がりは普通で底面は北が深く28cm、南は21cmを計りレベル差は7cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴54 (第6・72図)

遺構 EA-78グリッドで検出しB群としたものである。埋土は褐色土で平面形は70×68cmの円形で、壁の立ち上がりはなだらかで底面は舟底状で深さ12cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴55 (第6・72図)

遺構 DY-78グリッドで検出しB群としたものである。埋土は褐色土で平面形は44×41cmの円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さ8cmと浅い。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴C群

小竪穴37 (第6・73図)

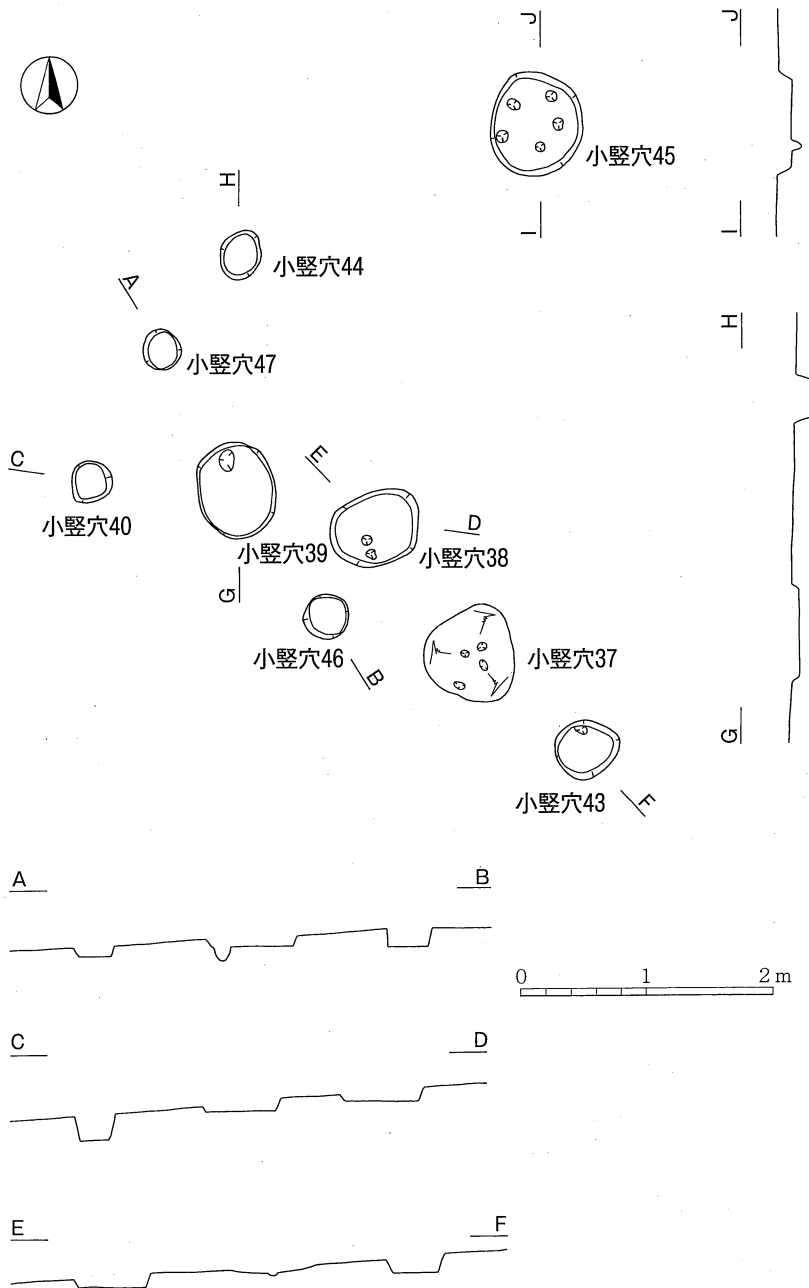
遺構 EG-86・87グリッドで検出しC群としたものである。埋土は褐色土で平面形は78×72cmの不整円形で、壁の立ち上がりはなだらかで底面は舟底状で深さは8cmと浅い。底面には小

ピットが4個穿たれていたが深さは2～4cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴38 (第6・73図)

遺構 EG-87グリッドで検出しC群としたものである。埋土は褐色土で平面形は75×57cmの



第73図 小竪穴37～40・43～47

不整楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さは7cmと浅い。底面には小ピットが2個穿たれていたが深さは4～8cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴39 (第6・73図)

遺構 EF-87グリッドで検出しC群としたものである。埋土は褐色土で平面形は77×61cmの楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は舟底状で深さは6cmと浅い。底面には19×11cmの小ピットが穿たれていたが深さは11cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴40 (第6・73図)

遺構 EF-87グリッドで検出しC群としたものである。埋土は褐色土で平面形は33×31cmの不整円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さは19cmで柱穴状である。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴43 (第6・73図)

遺構 EF-88グリッドで検出しC群としたものである。埋土は褐色土で平面形は51×48cmの不整円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さは14cmである。底面には小ピットが1個穿たれていたが深さは7cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴44 (第6・73図)

遺構 EF-88グリッドで検出しC群としたものである。埋土は褐色土で平面形は40×33cmの楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さは15cmで柱穴状である。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴45 (第6・73図)

遺構 EG-88・89、EH-88・89グリッドで検出しC群としたものである。埋土は褐色土で平面形は83×74cmの楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さは11cmである。底面には小ピットが5個穿たれていたが深さは9～10cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴46 (第6・73図)

遺構 EG-87グリッドで検出しC群としたものである。埋土は褐色土で平面形は35×35cmの

不整円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さは15cmで柱穴状である。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴47 (第6・73図)

遺構 EH-86グリッドで検出しC群としたものである。埋土は褐色土で平面形は33×31cmの不整円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さは7cmと浅いが柱穴状である。

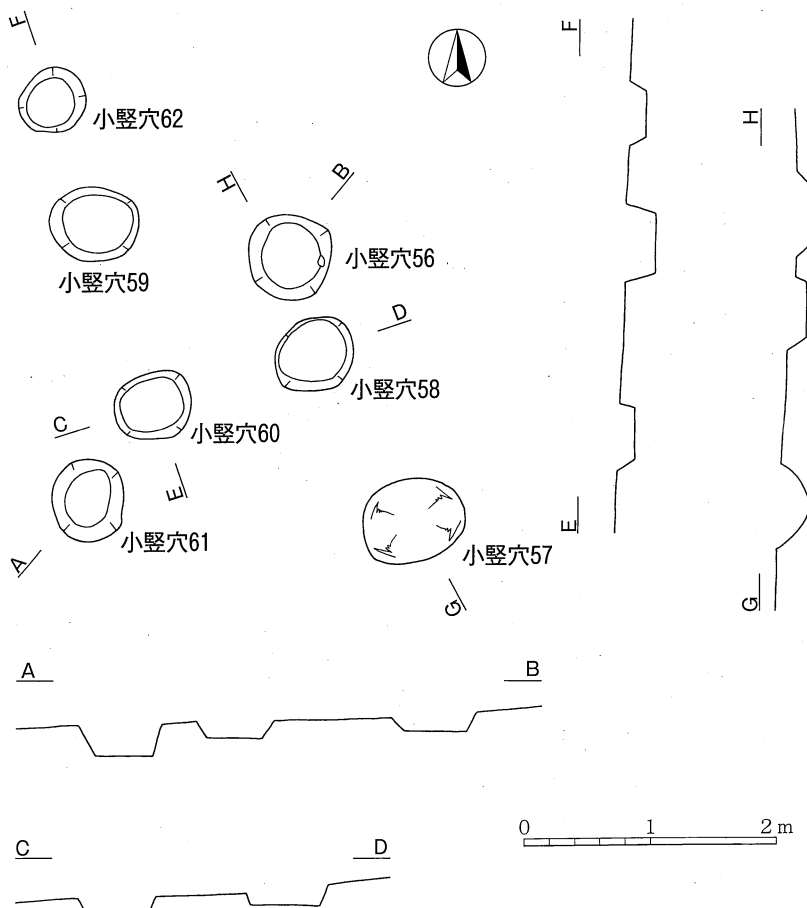
遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴D群

小竪穴56 (第6・74図)

遺構 EC-67グリッドで検出しD群としたものである。埋土は黒褐色土であるが小竪穴56～61基はほぼ同じ状態である。平面形は68×65cmの不整円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さは11cmである。東壁下には底面から7cm浮いた小円礫が1点出土した。

遺物 土器・石器とも皆無である。



第74図 小竪穴56～62

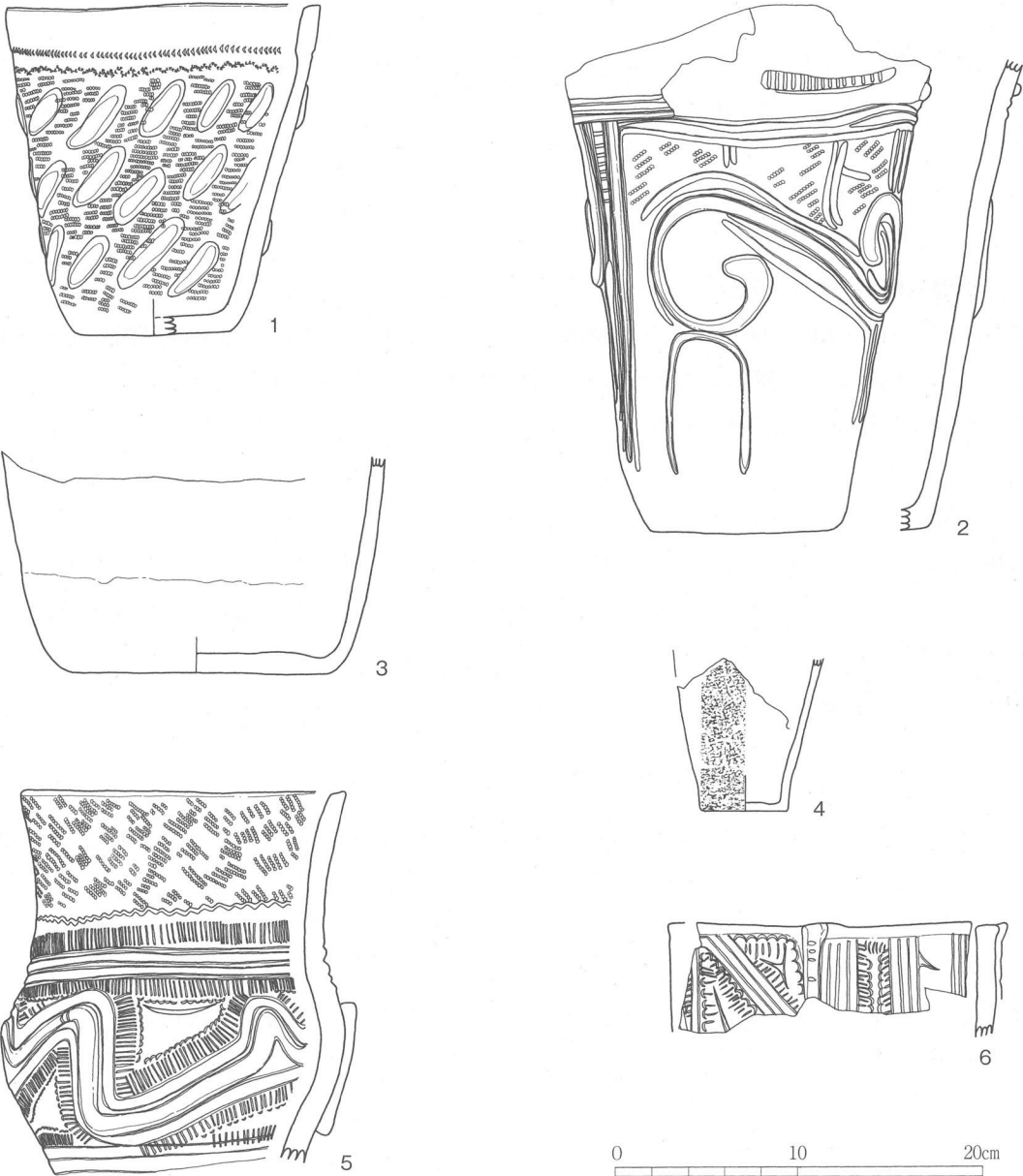
小竪穴57 (第6・74図)

遺構 ED-66グリッドで検出しD群としたものである。埋土は黒褐色土で平面形は83×66cmの楕円形で、壁の立ち上がりはなだらかで底面は舟底状で深さは25cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴58 (第6・74図、写真63)

遺構 EC-66グリッドで検出しD群としたものである。埋土は黒褐色土で平面形は70×59cm



第75図 小竪穴出土土器 その1

の不整楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さは10cmと浅い。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴59 (第6・74図)

遺構 EB-67・EC-67グリッドで検出しD群としたものである。埋土は黒褐色土で平面形は72×58cmの楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さは23cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴60 (第6・74図)

遺構 EC-66グリッドで検出しD群としたものである。埋土は黒褐色土で平面形は63×52cmの不整円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さは12cmと浅い。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴61 (第6・74図)

遺構 EB-66・EC-66グリッドで検出しD群としたものである。埋土は黒褐色土で平面形は66×58cmの楕円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さは26cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

小竪穴62 (第6・74図)

遺構 EB-67グリッドで検出しD群としたものである。埋土は黒褐色土であるが小竪穴56～61より色調はやや明るくなる。平面形は53×51cmの不整円形で、壁の立ち上がりは普通で底面は平で深さは13cmである。

遺物 土器・石器とも皆無である。

(3) 単独土器

現場では土器検出レベルでは下層の遺構が不明であり、便宜的に土器1～4の番号を付け精査を進めた結果、土器2は小竪穴27、土器4は小竪穴22に伴出することが明らかになった。

したがって、単独土器は土器1と土器3の2点である。

単独土器1(第75図4、写真67)はミニチュア土器で、傾いて出土した。

単独土器3(第75図6、写真68)は逆位に据え置かれた深鉢で、口縁帯が遺存しただけである。耕作で欠損したものと思われる。

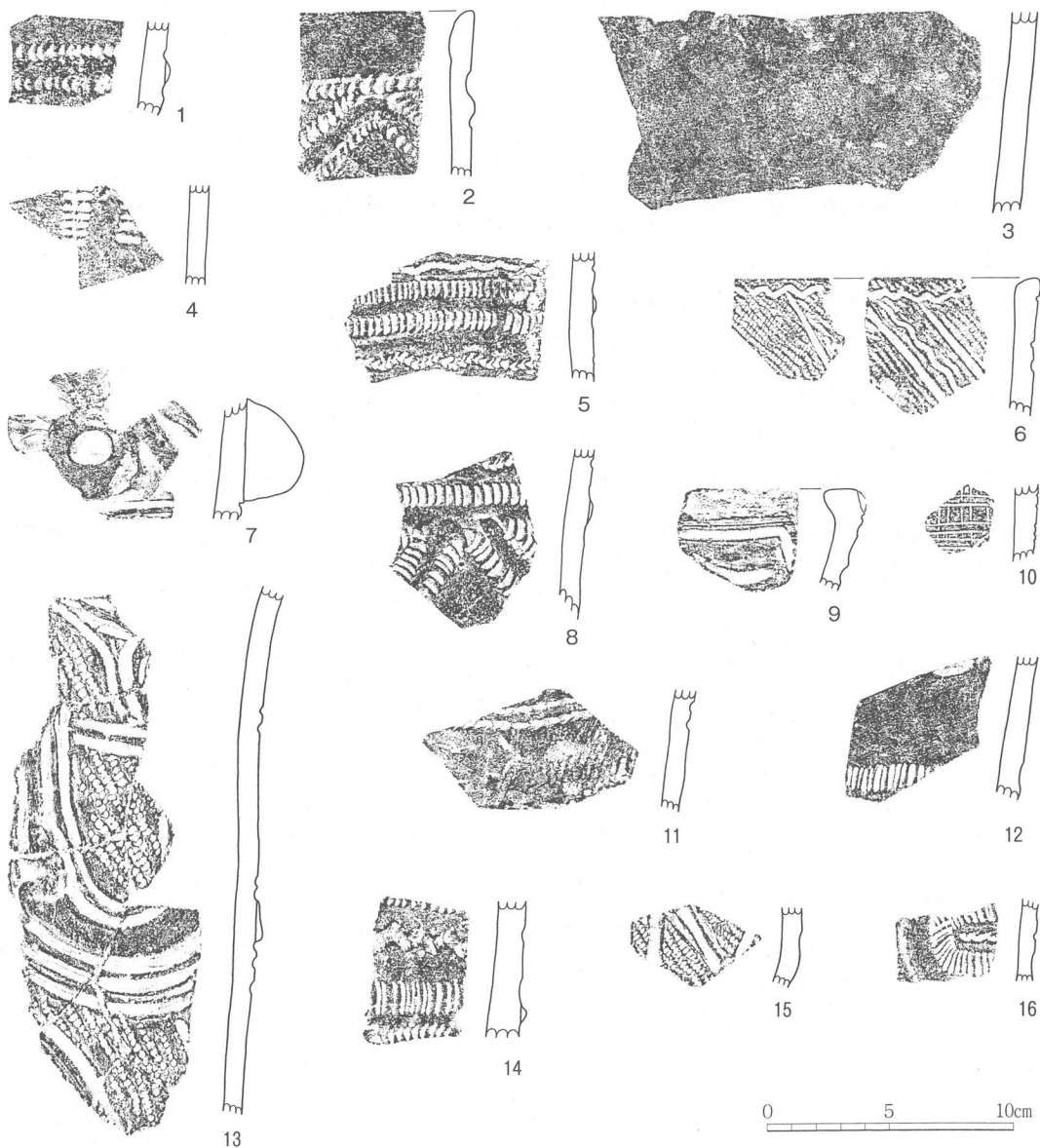
(4) ロームマウンド

9基検出したがロームマウンド1・2を精査しただけである。ロームマウンド3～9は精査し

なかったが、検出時における規模・形態・出土遺物を大まかな説明をしておきたい。

ロームマウンド1 (第6・77図)

遺構 DH-80・81、DI-80・81グリッドで検出し南側の半分を調査した。埋土はⅠ～Ⅶにわけたが、Ⅰは黒色土。Ⅱはソフトローム。Ⅲはロームブロックでパサパサしている。Ⅳは含ローム黒色土で下半部分はロームが多くなる。Ⅴは含ローム細粒褐色土。ⅥとⅦはロームブロックであるが、Ⅶの方がザラザラし僅かではあるがロームブロックの間には黒色土が入る。平面形



第76図 小竪穴出土土器 その2

は222×(204)cmの不整円形である。

遺物 土器・石器とも皆無である。

ロームマウンド2 (第6・77図)

遺構 EN-76・77、EO-76・77グリッドで検出したが南西部分で第6号竪穴住居址と重複するが、本址が新しく第6号竪穴住居址が古い。埋土はI～VIにわけたが、Iは黒色土。IIは褐色土。IIIは真黒色土。IVは含ローム小粒黒褐色土。VとVIはロームブロックで粘質に欠けるがVIはパサパサしている。平面形は286×279cmの不整円形である。

遺物 土器は中期中葉新道式である。破片7点であるが、重複する第6号竪穴住居址に帰属する可能性が高い。石器は皆無である。

ロームマウンド3 (第6図)

遺構 DO-78・79、DP-78・79グリッドで検出した。検出時の平面形は266×256cmの不整円形である。

遺物 土器は中期中葉新道式で、破片3点である。石器は石鎌1点(第77図1)である。

ロームマウンド4 (第6・90図)

遺構 DO-72、DP-71～73、DQ-72・73グリッドで検出した。検出時の平面形は308×303cmの円形である。

遺物 土器は中期中葉新道式である。破片が6点で、内1点は第4号竪穴住居址の浅鉢に直接の接合はないが同個体破片である(第90図3)。石器は皆無である。

ロームマウンド5 (第6図)

遺構 EO-87・88、EP-87・88、EQ-88グリッドで検出した。検出時の平面形は235×233cmの円形である。

遺物 土器は皆無で、石器は磨石・凹石類1点(第77図4)である。

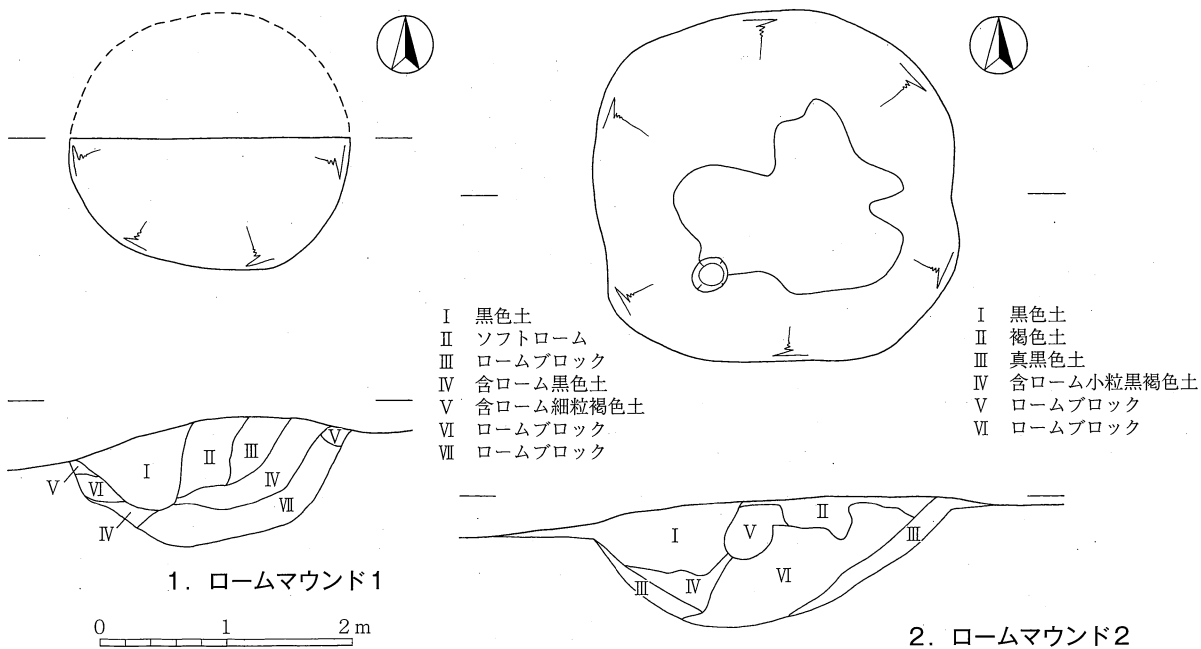
ロームマウンド6 (第6図)

遺構 DV-69、DW-68～70、DX-69・70グリッドで検出した。検出時の平面形は378×324cmの楕円形である。

遺物 土器・石器とも皆無である。

ロームマウンド7 (第6図)

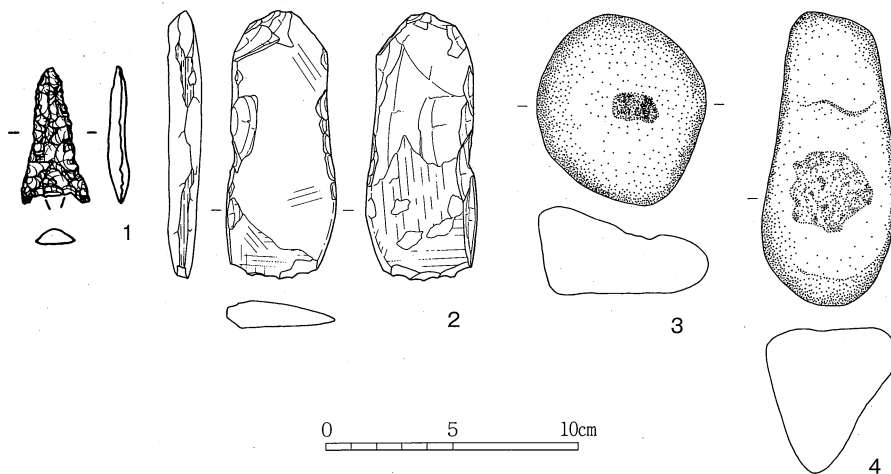
遺構 DY-68～70、EA-68～70グリッドで検出した。検出時の平面形は373×352cmの不整



- I 黒色土
- II ソフトローム
- III ロームブロック
- IV 含ローム黒色土
- V 含ローム細粒褐色土
- VI ロームブロック
- VII ロームブロック

- I 黒色土
- II 褐色土
- III 真黒色土
- IV 含ローム小粒黒褐色土
- V ロームブロック
- VI ロームブロック

0 1 2m



第77図 ロームマウンド1・2、小竪穴・ロームマウンド出土石器

円形である。

遺物 土器・石器とも皆無である。

ロームマウンド8 (第6図)

遺構 EH-75・76、EI-75・76グリッドで検出した。検出時の平面形は190×173cmの不整形である。

遺物 土器は中期中葉新道式で、破片1点である。石器は皆無である。

ローママウンド9 (第6図)

遺構 EF-65・66、EG-65・66、EH-65・66グリッドで検出した。検出時の平面形は271×268cmの円形である。

遺物 土器は中期中葉新道式で、破片2点である。石器は皆無である。

(5) 遺構外出土遺物

土器・石器・土製品がある。

土器 (第78～80・94図)

中期中葉新道式は、破片から器形を復原した深鉢3点(第78図1～3)、浅鉢1点(4)、有孔鏝付土器(5)、把手1点(6)、破片23点(第79図1～19、第80図2～5)を図示した。

後期堀之内式は、破片5点(第80図6～10)を図示した。

接合(第78図1)は広範囲から出土した破片が接合し、(4)に第4号竪穴住居址出土破片が接合した(第94図2)。

土製品(第80図)

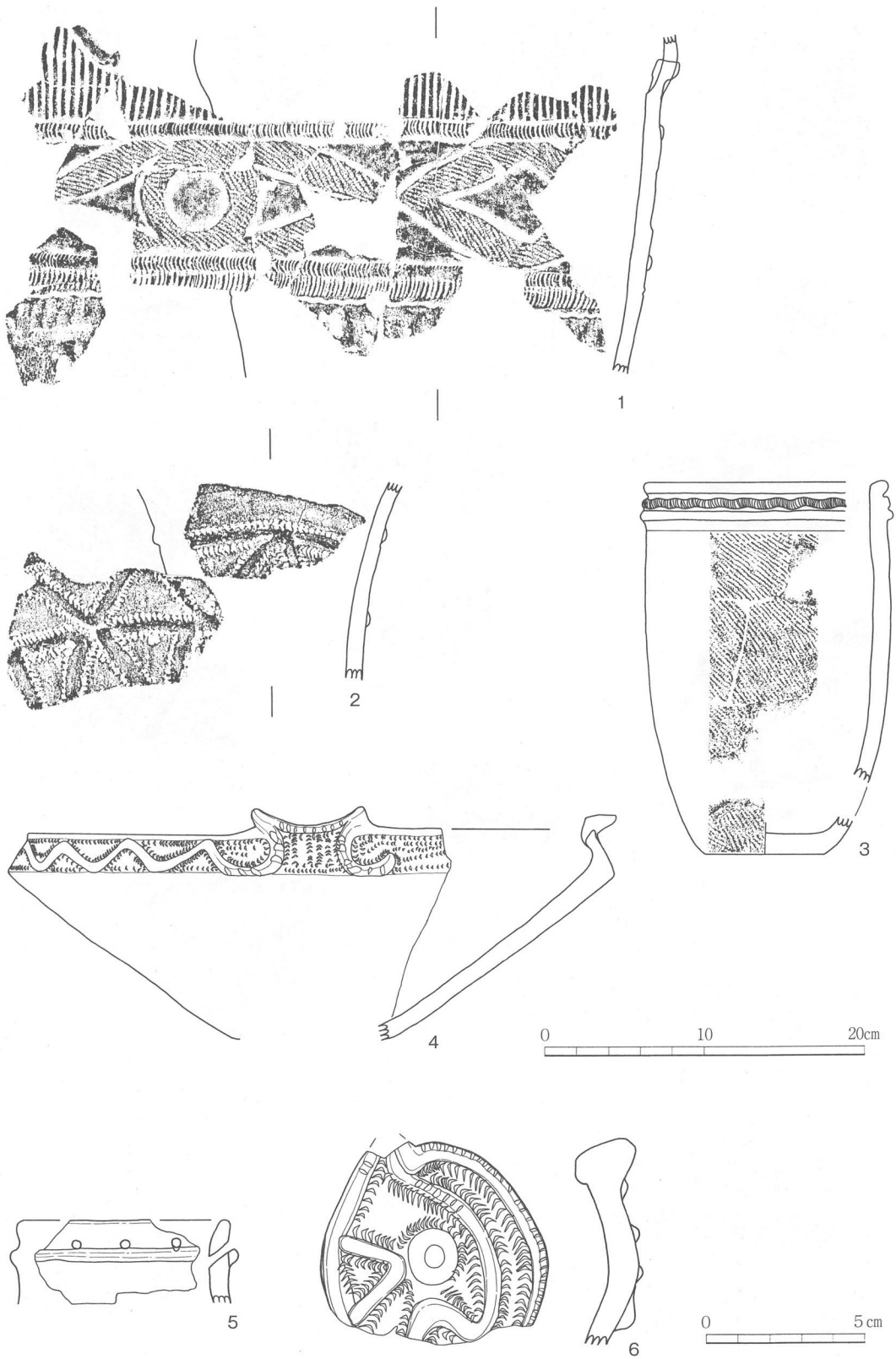
中期中葉新道式土器破片を加工した土製円盤3点(第80図11～13)である。

石器(第81～86・97・100図)

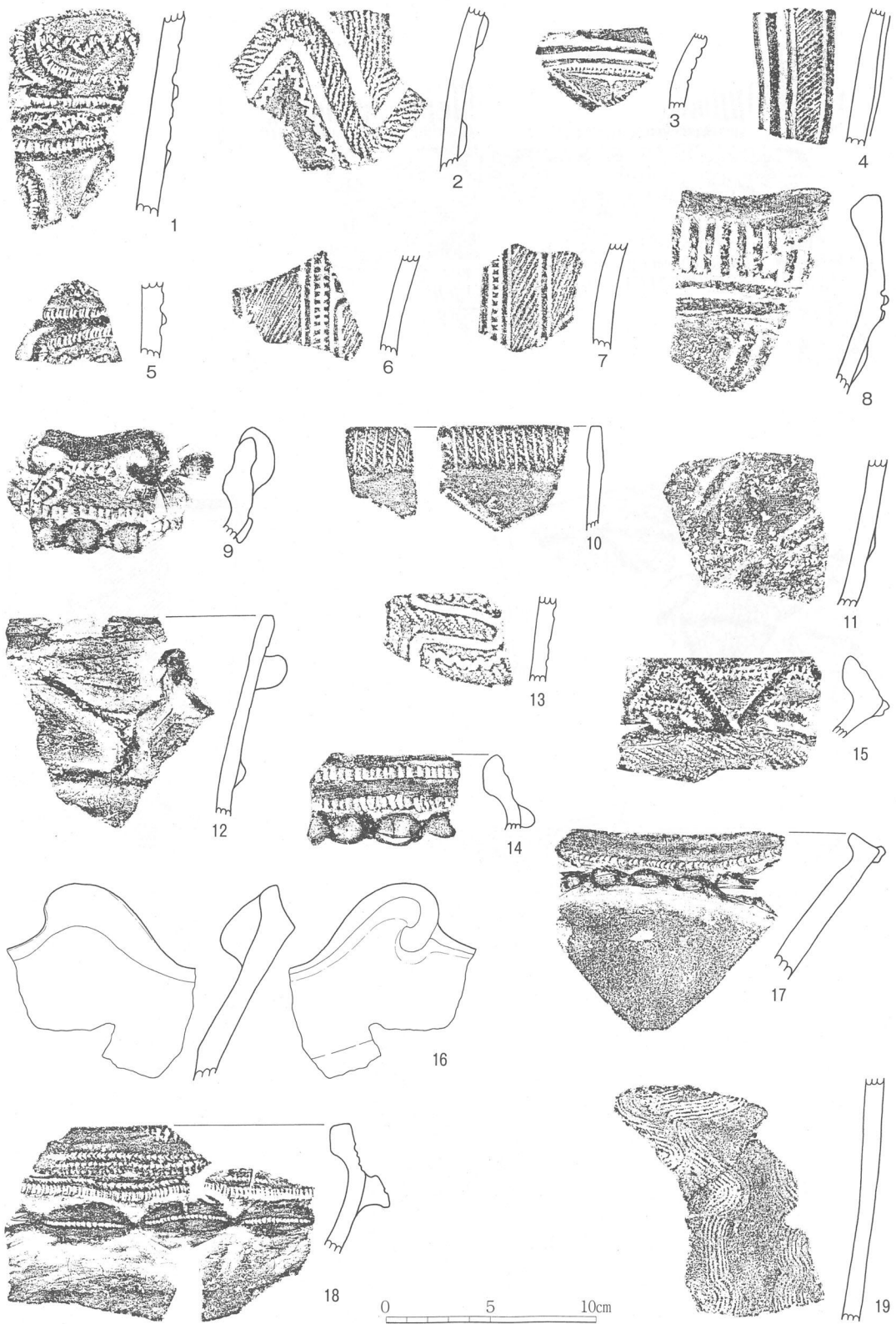
石鏃39点(第81図、第86図1～5)、石錐2点(第86図6・7)、ピエス・エスキューユ101点(第86図11、第97図1～3)、二次加工のある剥片12点(第86図8・9)、使用痕のある剥片10点、打製品石斧51点(第82図、第83図1～5)、横刃形石器24点(6～15)、石匙Ⅱ類4点(16～19)、磨製石斧3点(第84図1～3)、磨石・凹石類(4～9、第85図1～6)、石皿1点(7)、原石15点、石核13点(第100図4・5・7)、黒曜石剥片810点、黒曜石以外の剥片157点である。なお、(第82図4)の打製石斧、(第83図10)の横刃形石器は接合資料である。

平安時代の所産と思われる磨製石鏃1点(第86図12)がある。

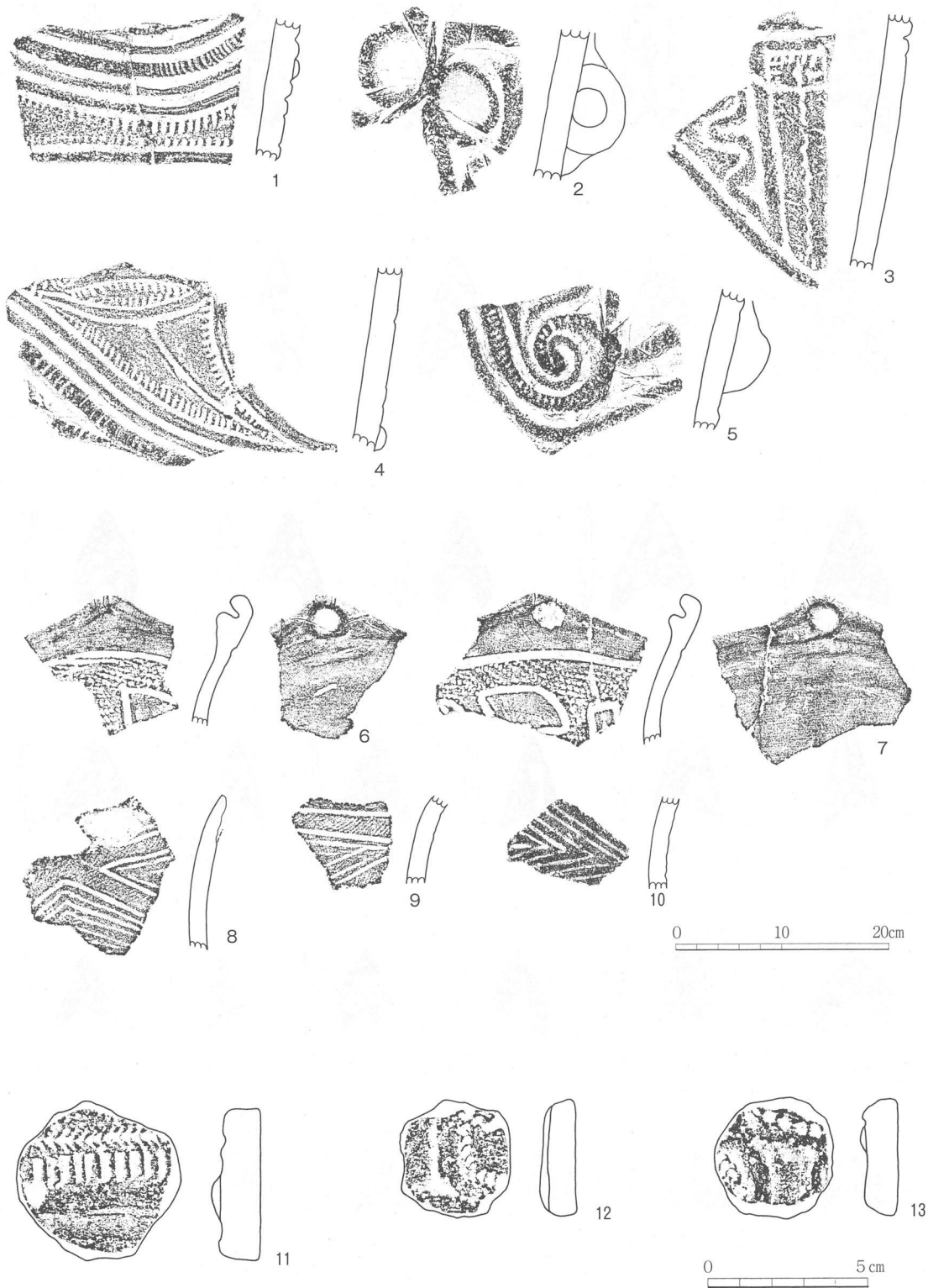
(平出)



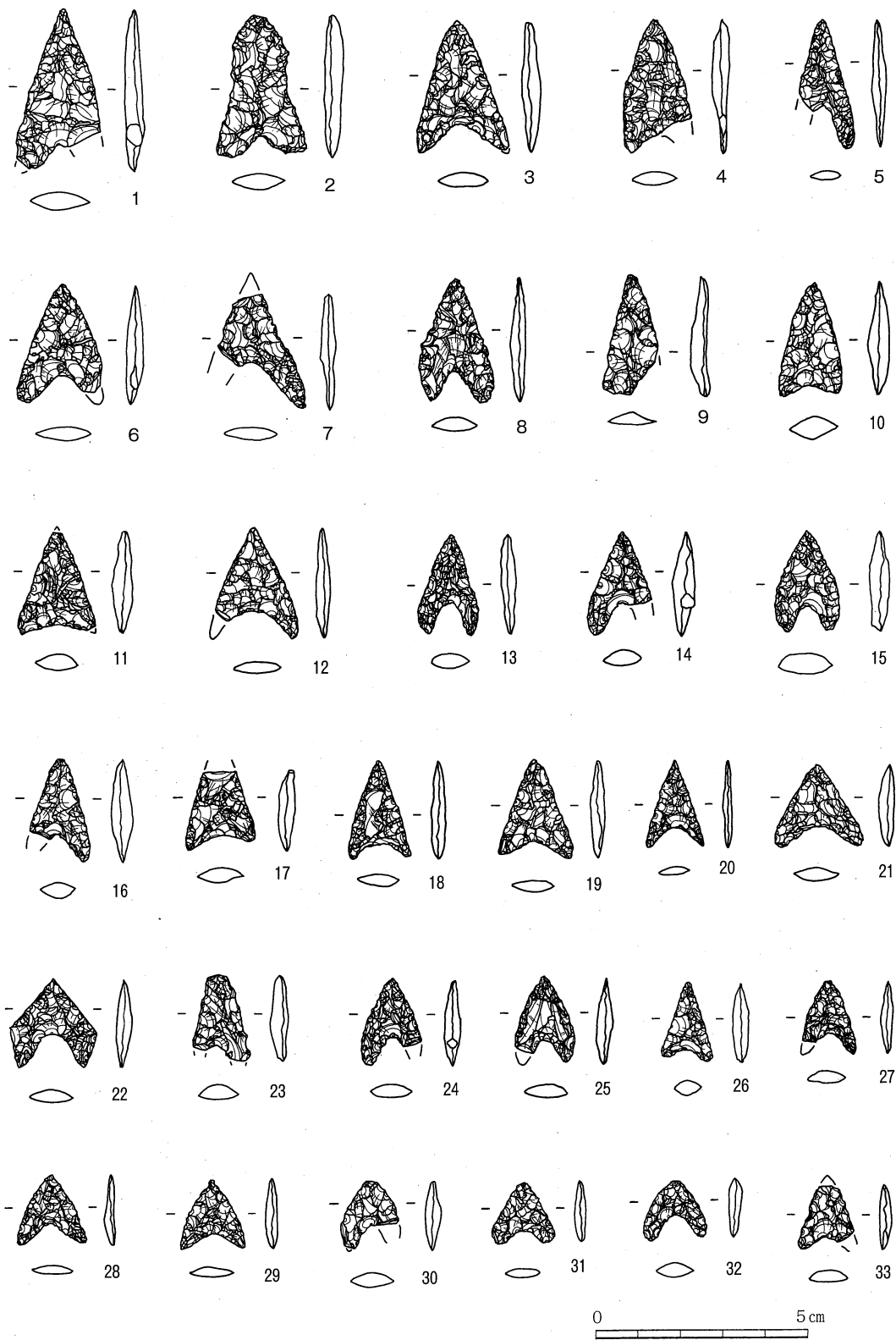
第78図 遺構外出土土器 その1



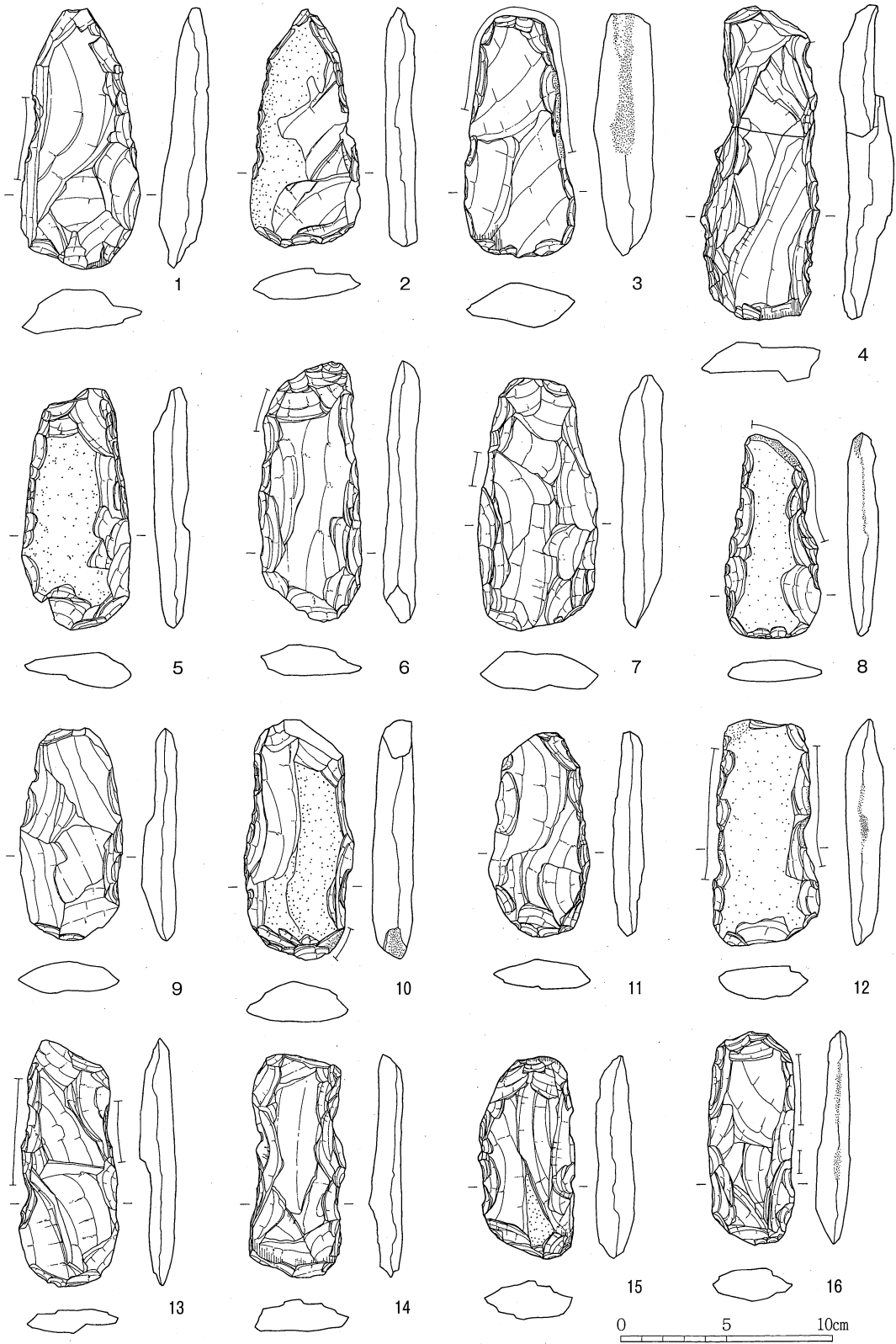
第79図 遺構外出土土器 その2



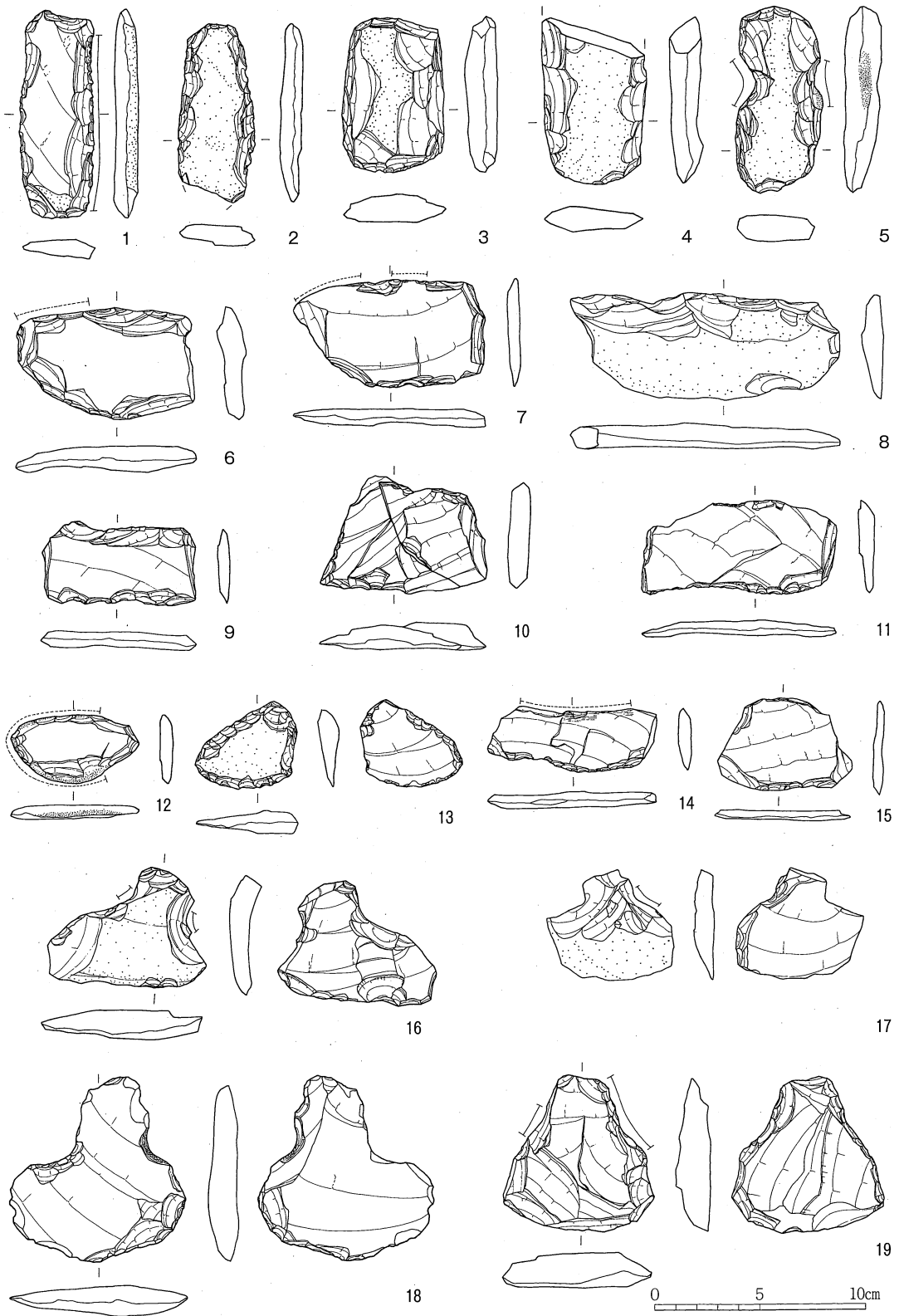
第80図 第9号竪穴住居址出土土器 その4、遺構外出土土器・土製品 その3



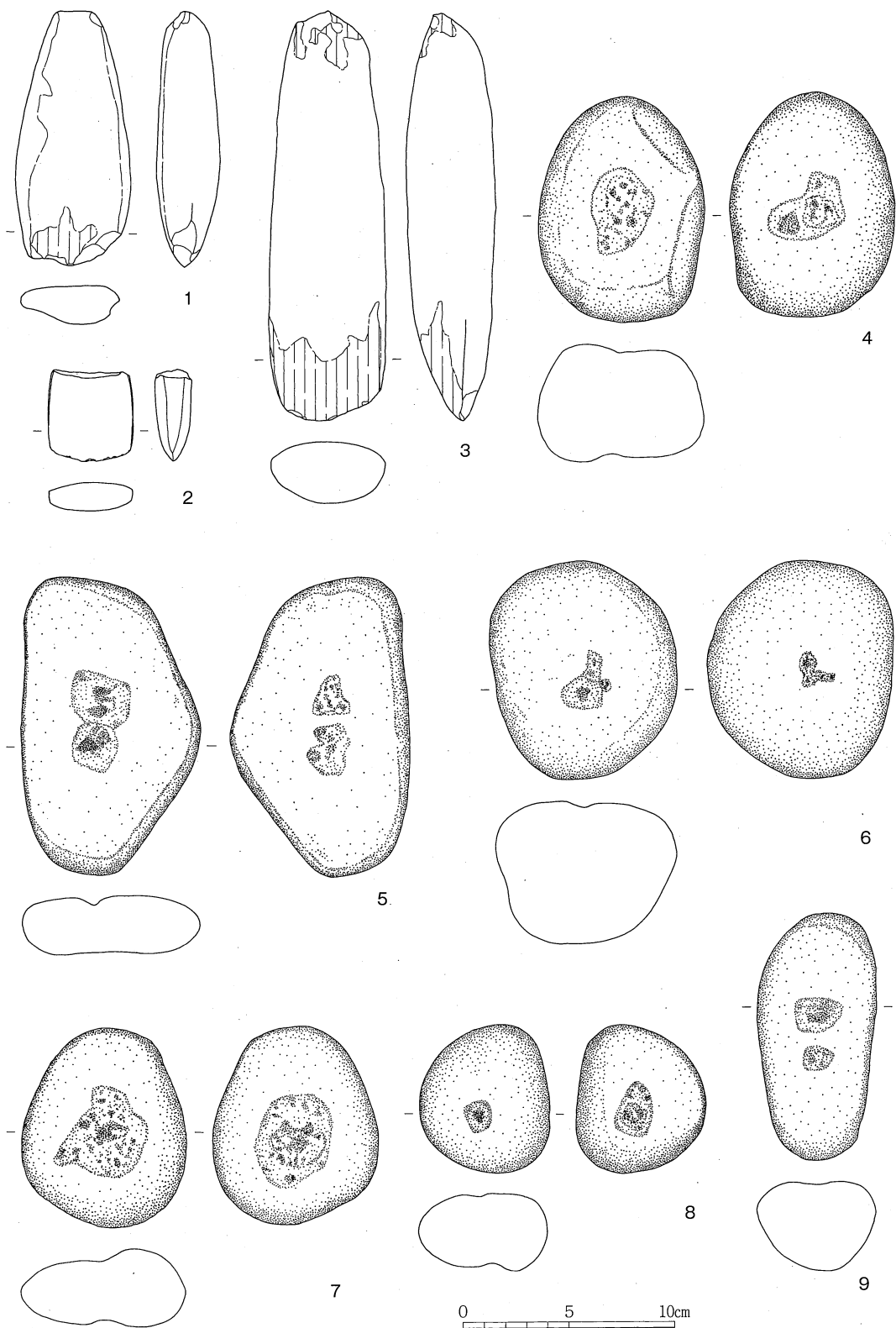
第81図 遺構外出土石器 その1



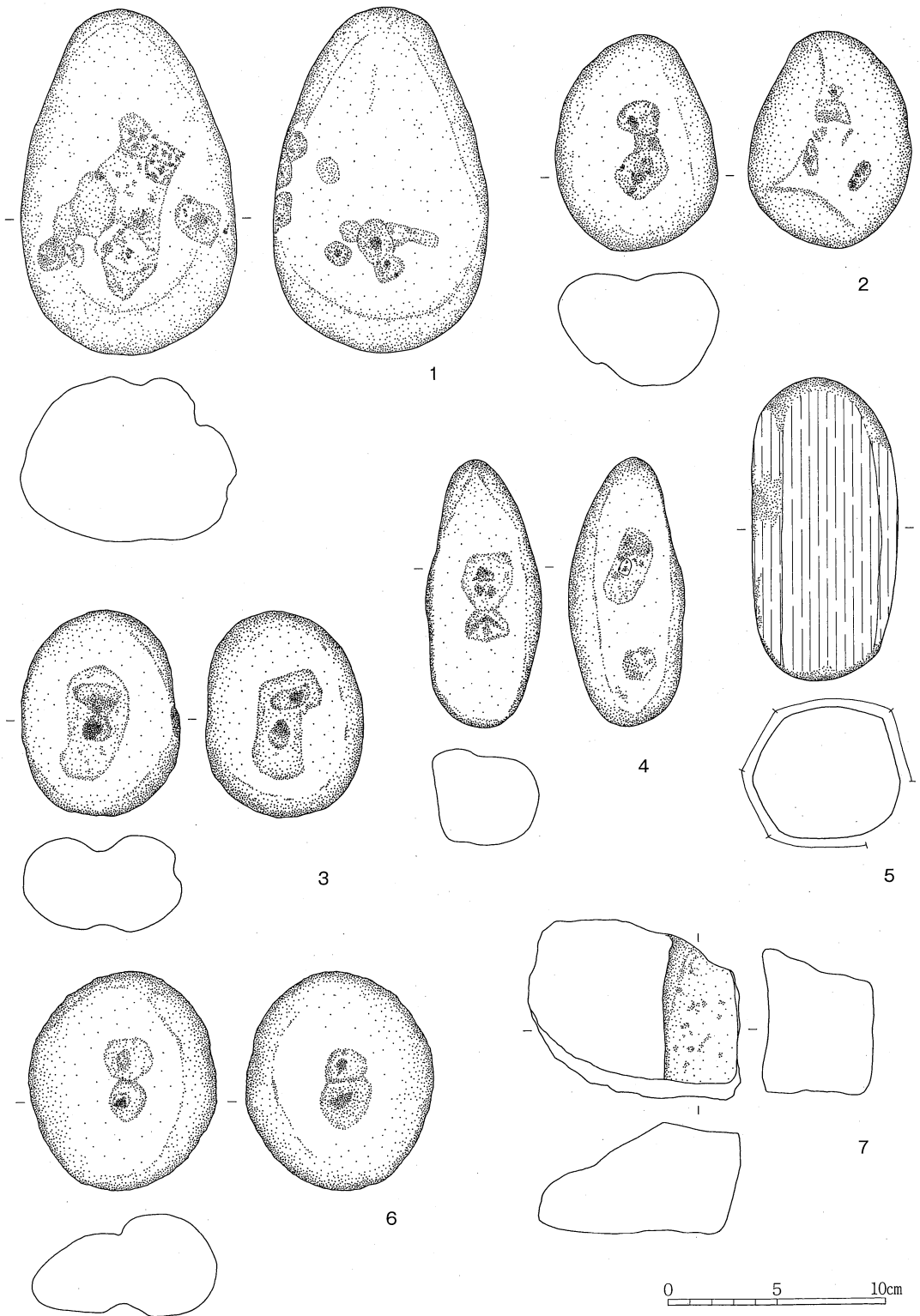
第82図 遺構外出土石器 その2



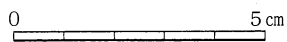
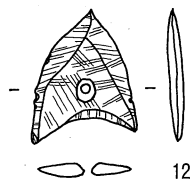
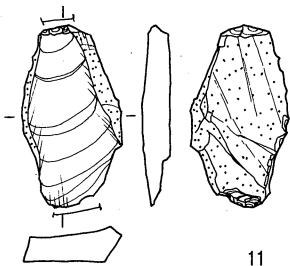
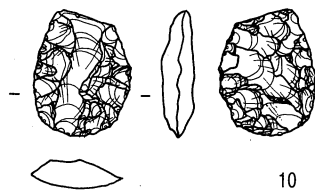
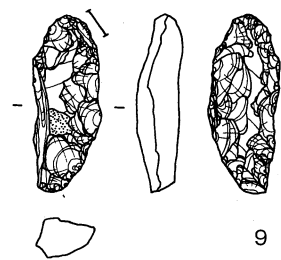
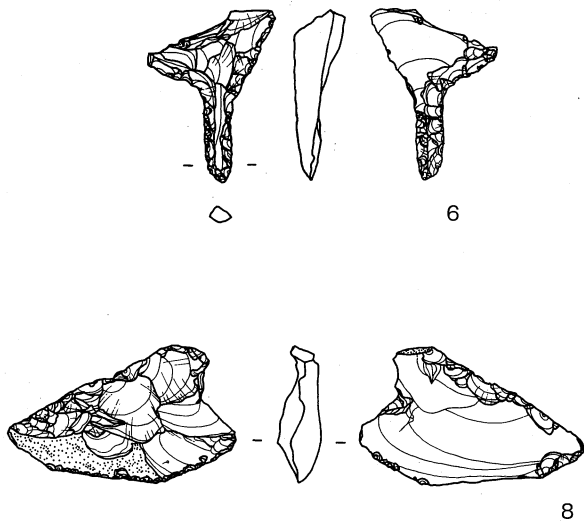
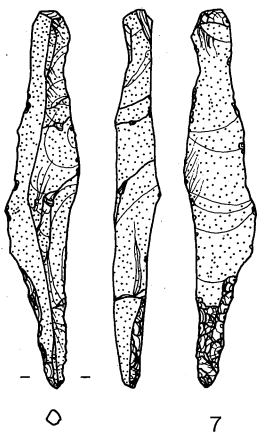
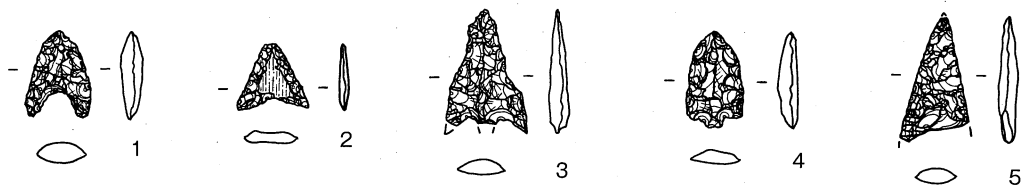
第83図 遺構外出土石器 その3



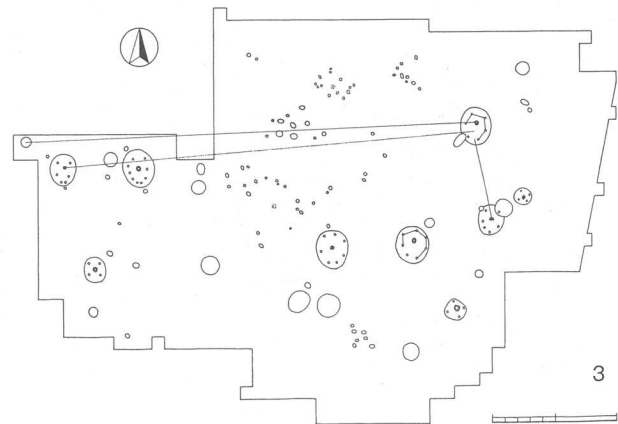
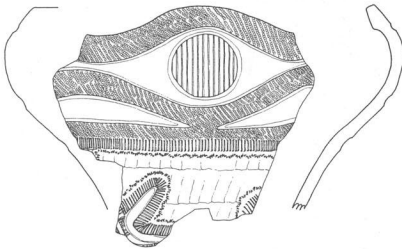
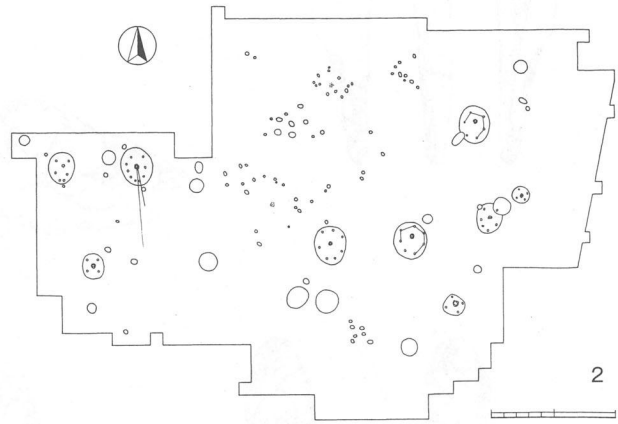
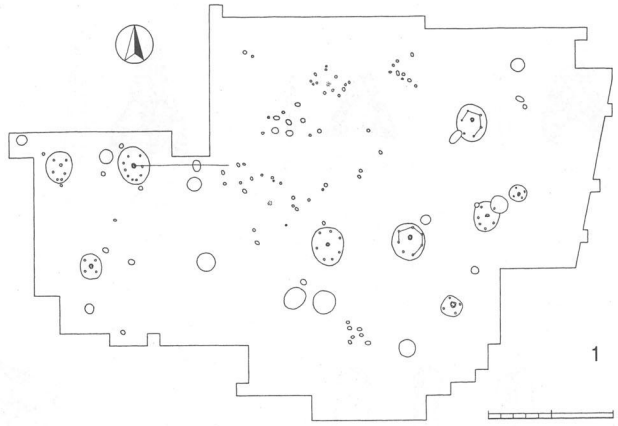
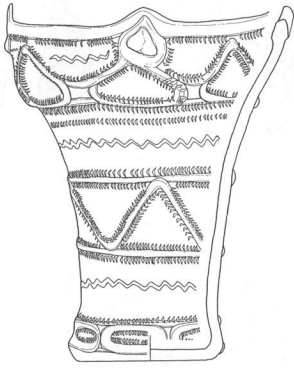
第84図 遺構外出土石器 その4



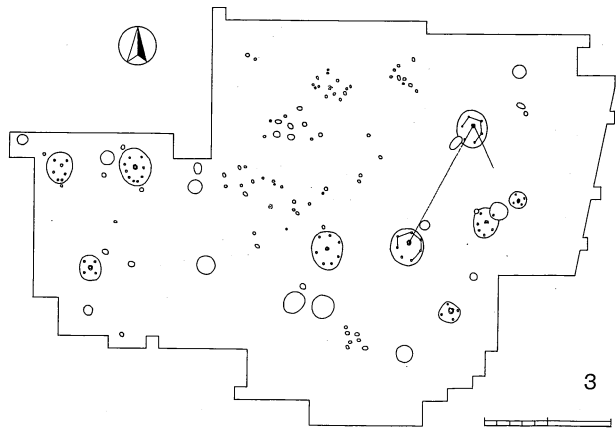
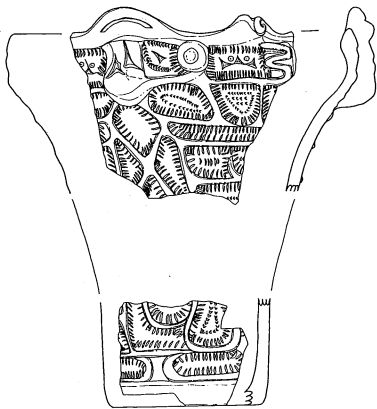
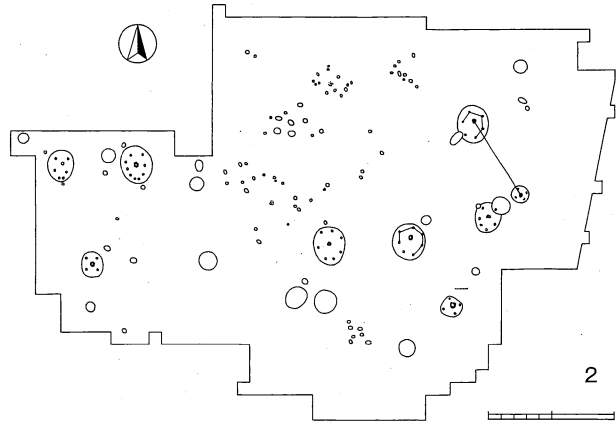
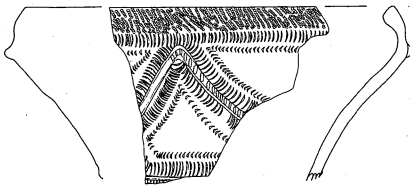
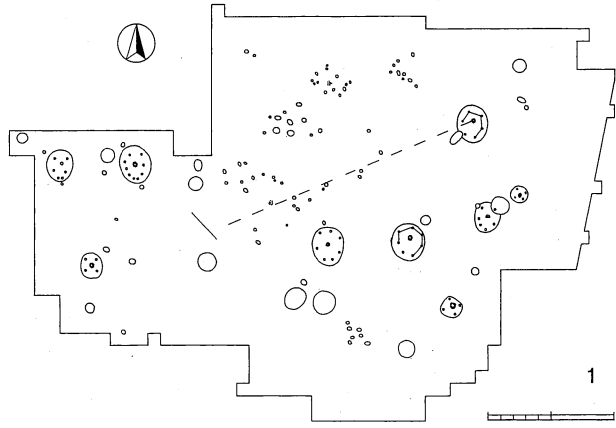
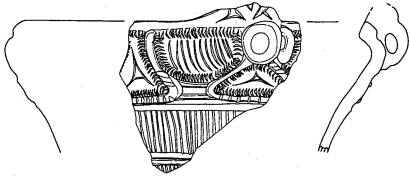
第85図 遺構外出土石器 その5



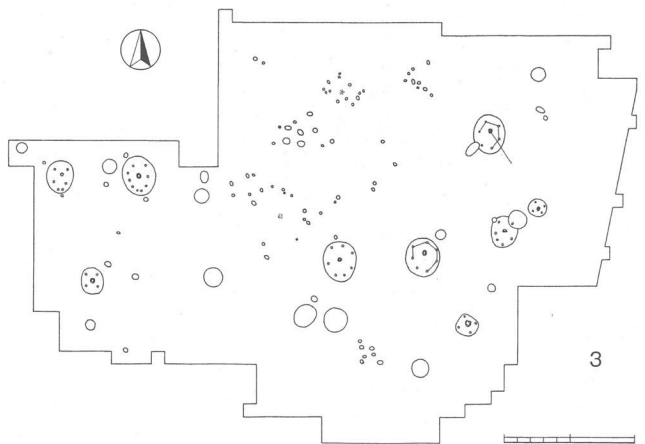
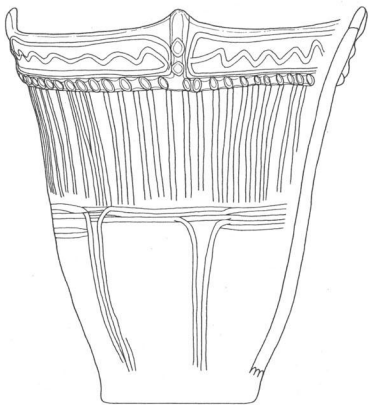
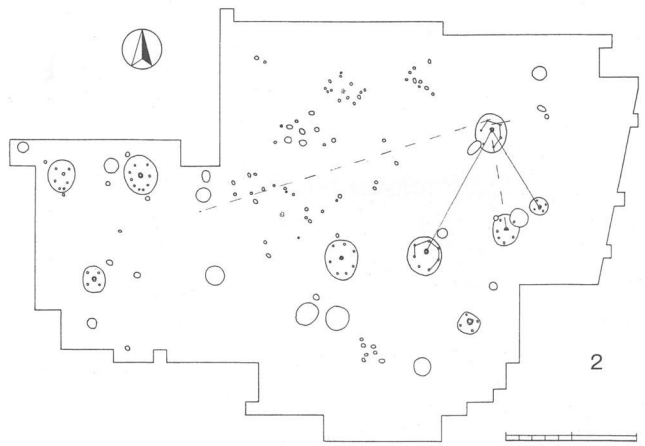
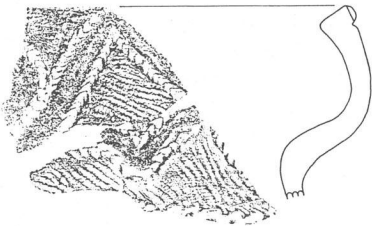
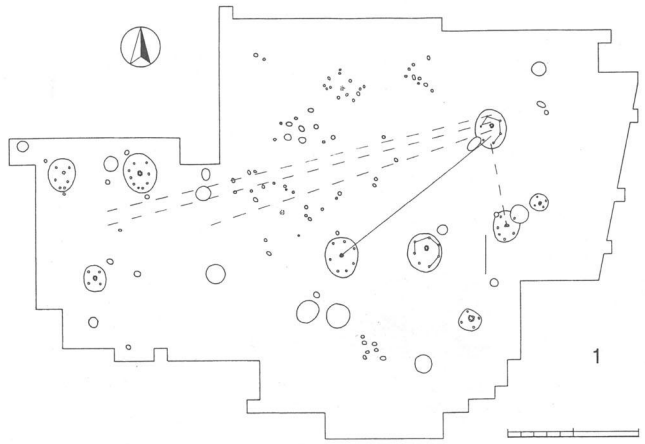
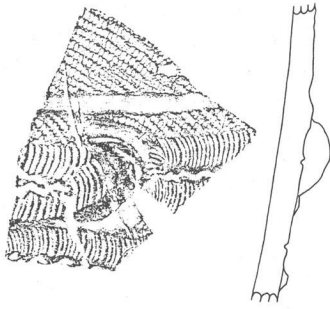
第86図 遺構外出土石器 その6



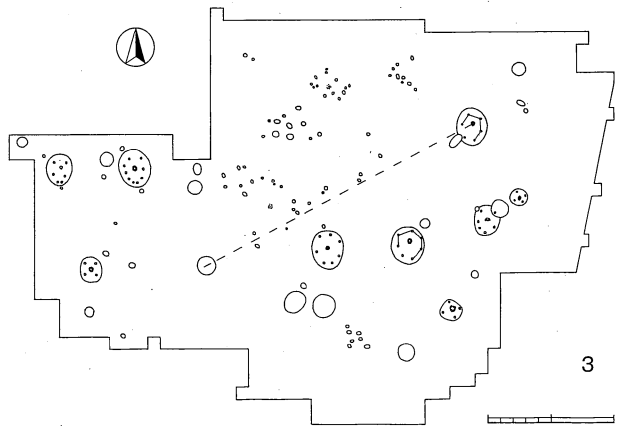
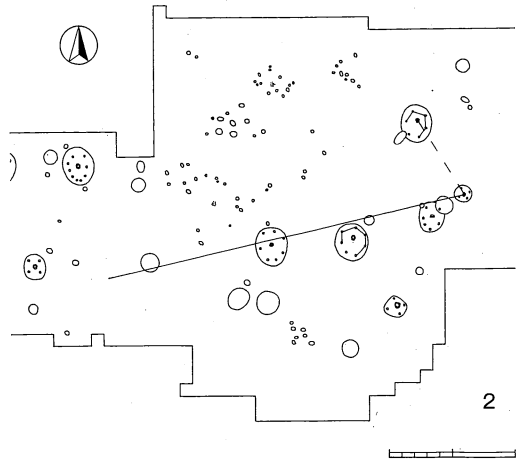
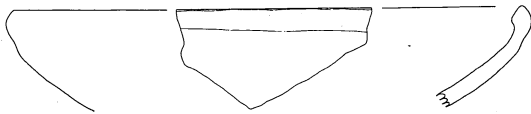
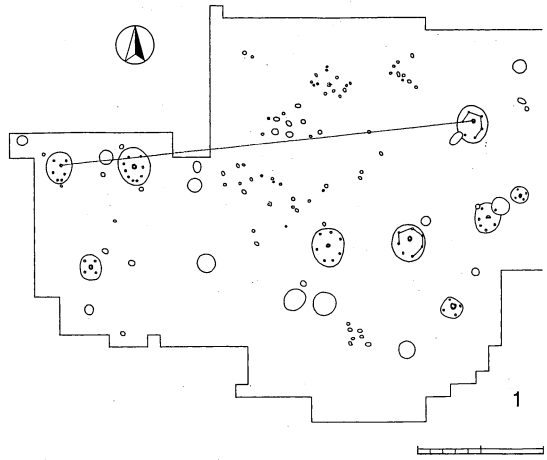
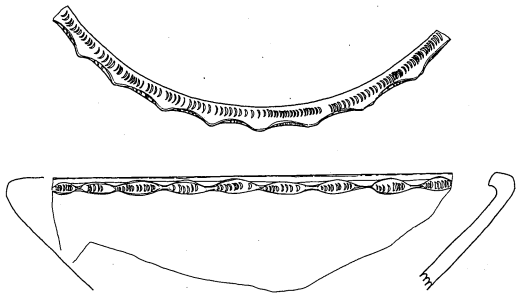
第87図 土器接合図 その1



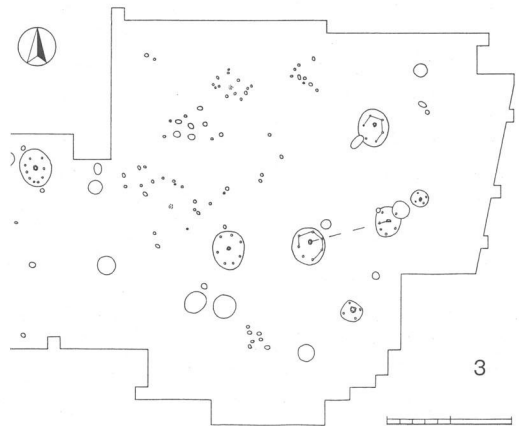
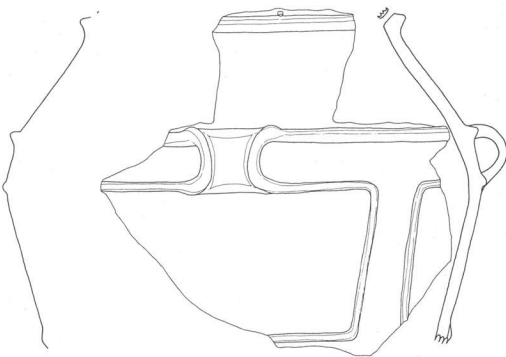
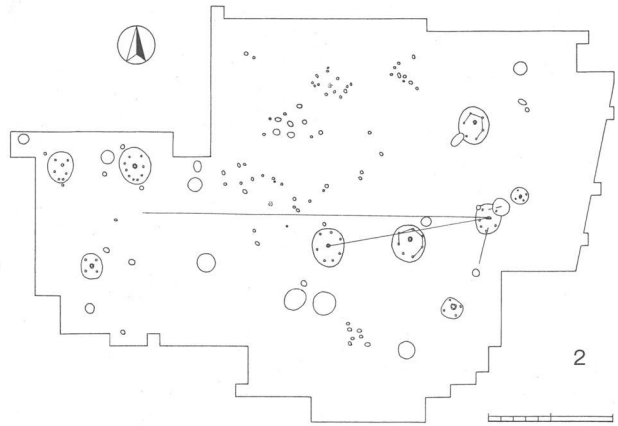
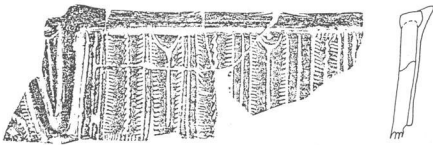
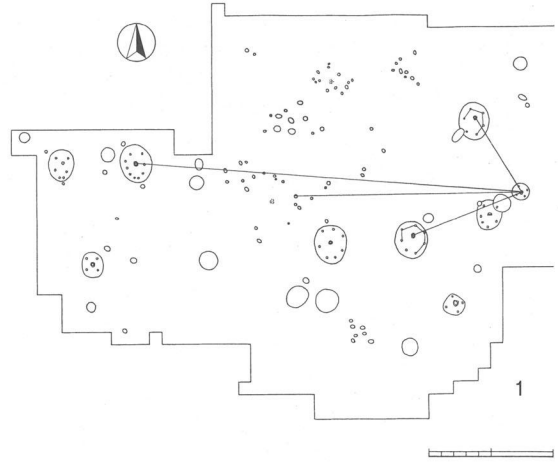
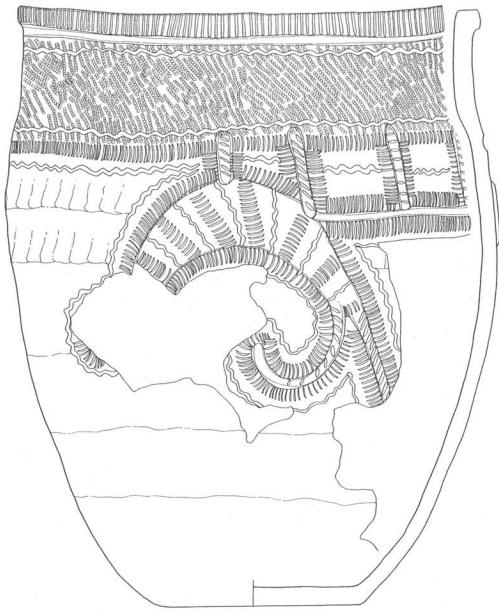
第88図 土器接合図 その2



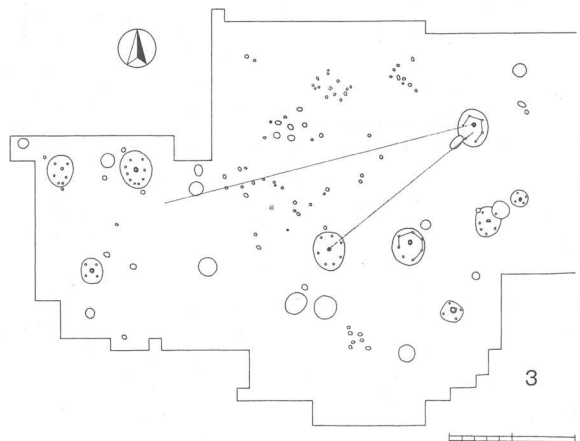
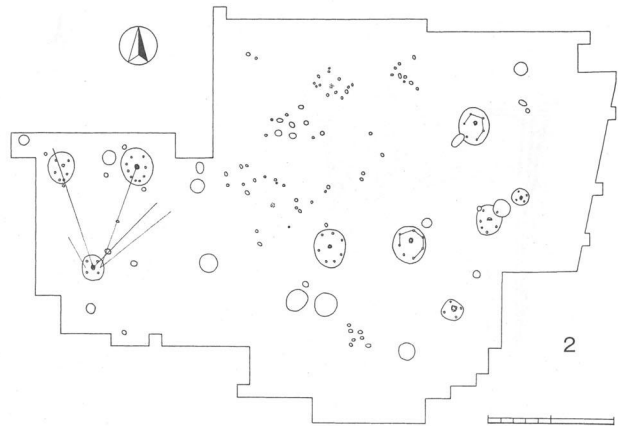
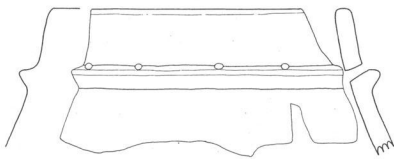
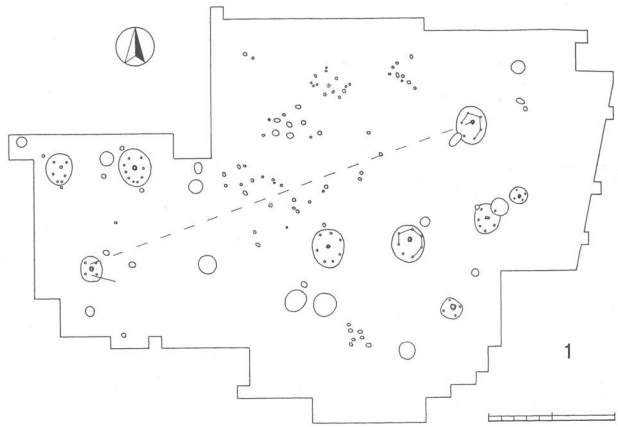
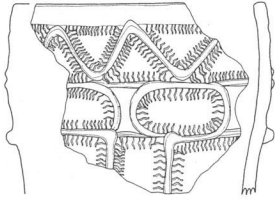
第89図 土器接合図 その3



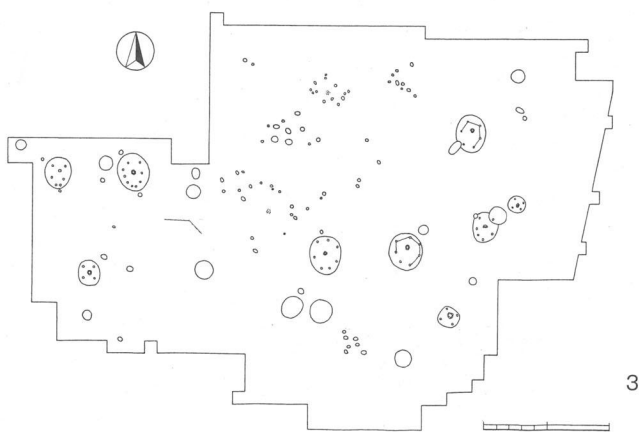
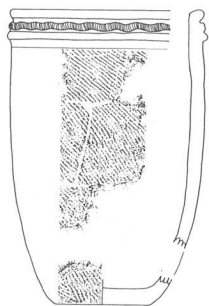
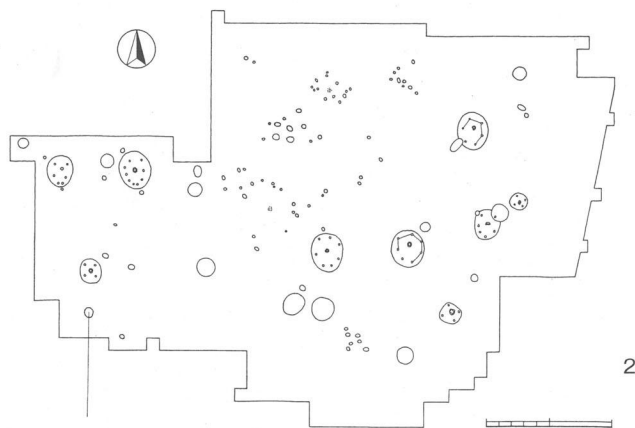
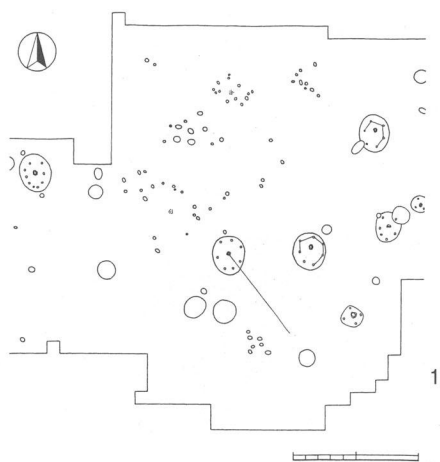
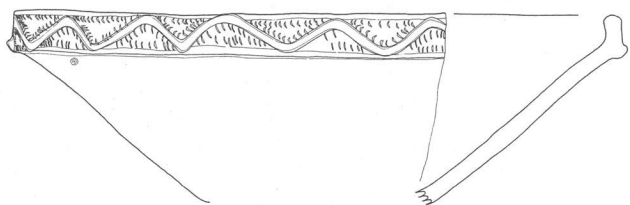
第90図 土器接合図 その4



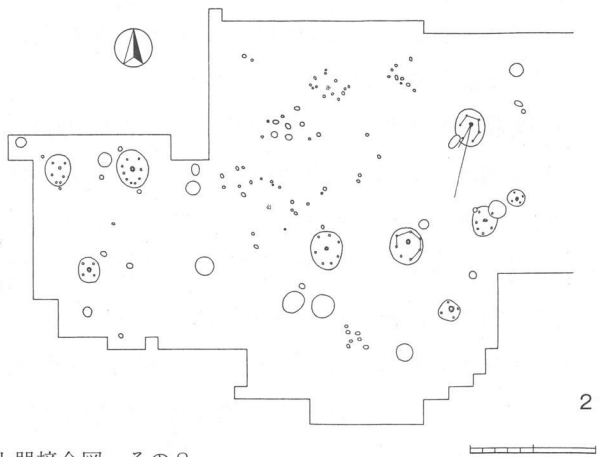
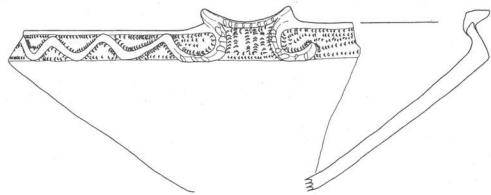
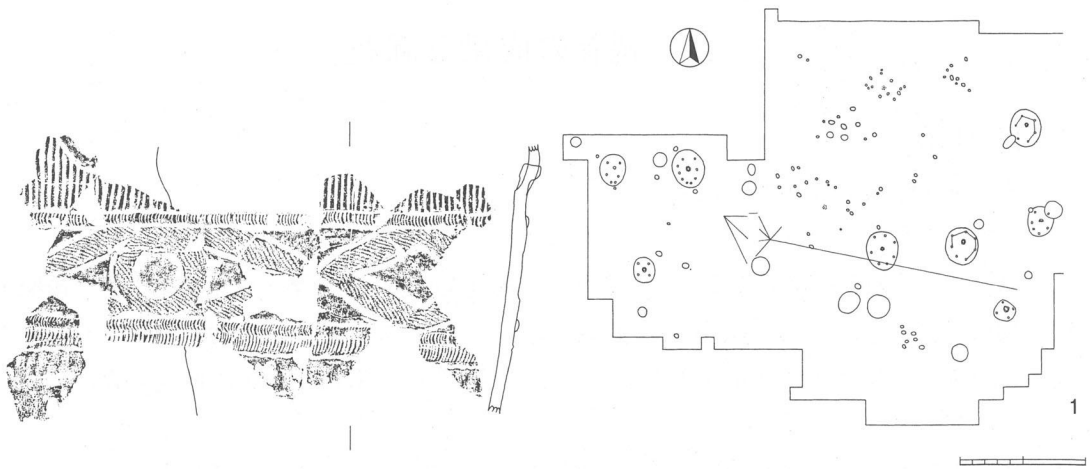
第91図 土器接合図 その5



第92図 土器接合図 その6



第93図 土器接合図 その7



第94図 土器接合図 その8

2 調査の成果と課題

(1) 土器

① 縄文時代中期中葉の土器

土器の系統について

土器は三つの時期の所産であるが（中期中葉・新道式期、中期後葉・唐草文系土器、後期・堀之内式期）、そのほとんどを新道式期の土器が占める。ここではその時間的細分よりも、大まかに言えば時間的にまとまりを示すと考えられる土器群中の、系統的差異に重点を置いて説明する。

新道式段階の土器は、深鉢・浅鉢・有孔鏝付土器の三器種から成るが、深鉢について主に六つの系統に分けて考えることが可能である。各系統について基本的・典型的な土器が存在する一方で、別々の系統の器形・文様を組合せた土器も存在する。

以下に各系統について説明し、その後に系統別に個々の土器の記述を行う。なお便宜的にアルファベット記号をつけることとする。

A. 横帯区画文系統 『井戸尻』（藤森他1965）において新道式標式資料の中心的存在であった。典型例は第36図1・第40図2の土器である。横帯の重なり方は、口縁部複合三角区画（半円と三角の区画が上下に組み合う）横帯＋頸部素文帯＋胴部三角区画横帯＋同下半部素文帯＋底部直上楕円区画横帯、が基本である。本遺跡では胴部を幅広い文様帯とする例は認められなかったが、平行四辺形区画に換わる例はあった。文様はキャタピラ文、三角押文、波状文、三叉文、玉抱三叉文などである。この系統は本遺跡内でも時間差を想定できる。時間差はキャタピラ文の形状・三叉文の描き方・区画内充填文様の様相などに現れる。

B. 抽象文系統 『井戸尻』では縦帯区画文土器と共に藤内I式のメルクマールとされた。その後、新道式段階にも存在するらしいことがわかってきた。本遺跡においても抽象文は確立しておりバラエティも備えている。典型例として第41図1・第49図3がある。基本的に平縁・円筒形の器形で、口縁部を幅広い縄文帯とし、胴部を楕円区画横帯＋抽象文とする。この系統に特徴的な文様として胴部器面に残す輪積痕・指頭圧痕、また縄文上の円形などの磨消文がある。一方、キャタピラ文・三角押文・波状文など抽象文を装飾する文様は全くA. 横帯区画文系統と共通する。

C. 波状隆帯・縄文系統 典型例は第78図3である。平縁・円筒形を呈し、口縁部に二本の横走隆帯にはさまれた波状隆帯を持つ。隆帯は断面カマボコ状で爪形刻みを施される場合が多い。この系統は口縁部破片では識別されるが、胴部破片では難しい。

D. 半隆起線区画文系統 典型例として第42図4・第49図1・第59図2をあげることができる。細い半截竹管による半隆起線を用いて矩形の区画を作る。区画や文様に截痕・刻みが沿うこ

ともある。本遺跡では縦列沈線を持つ波状口縁が特徴的である。藤内式の典型的な縦帯区画文の祖形となる矩形区画を持つ点で、重要である。

E. 沈線文系統 棒状工具による沈線を多用する点で、施文手法上他の系統と一線を画する。隆帯は先端が扁平にふくらみ、途中円形・眼鏡状突起を持つことが多いが、しっかり貼りつけない為か剥落が著しい。器面は赤味を帯びテラテラした感じで、小破片でも識別される。全容が知られるのは第63図3・第75図2がある。県内では諏訪市荒神山遺跡49号住居址（伴他1974）、岡谷市後田原遺跡（戸沢他1970）の類例が知られていたが、最近では東部町久保在家遺跡（小林他1986）からまとまった量が得られている。群馬県新巻遺跡（塚田1964）・三原田遺跡にも類例があり、群馬方面と関係を持ちそうである。

F. 平出三A系統 先学の研究が明らかにした通り（林1976・1980、鷗飼1977）、中期初頭から中葉にかけて存続した息の長い、しかし変化の乏しい系統である。典型例は第40図1・2である。口縁部隆帯の他は文様はすべて平行沈線文による。これも胎土に特徴があり、白色砂粒を多く含んでいる。上伊那から松本平、諏訪湖盆を分布の中心とする。

以上の六系統とその組合せを以て、本遺跡の新道式段階の土器のほとんどが理解される。この六系統にはいずれも完形に近い良好な資料があるが、他に若干、注意すべき破片資料についても言及しておく。

D. D. 半隆起線区画文系統は藤内I式の縦帯区画文の祖型であると考えられる。典型的な縦帯区画文は区画内を斜めの沈線で充填する。本遺跡で最もその典型に近い土器第79図3・4・6・7をD'として区別しておく。

G. 他の土器より余程器壁が厚く、識別し易い。最もまとまっていたのは第53図1で、円筒形の口縁部である。沈線で大雑把な文様を描くが、三叉文・沈線に沿う截痕などはA. 横帯区画文系統やD. 半隆起線区画文系統と共通する。

同様の器厚・胎土を持ちながら別の文様を持つ破片もある。第80図1～5に示した様に、爪形刻みを持つ隆帯に沿う幅広の平行線文が様々な形の区画を作り、区画内には三叉文が入り、截痕風の刻みもある。土器の全容は不明であるが、北陸の天神山式に近いのではないかと考えている。

なお本遺跡で最も古い土器と思われるものは、第44図1・2の角押文列を持つ破片数点である。さらに

H. 浅鉢

I. 有孔鏝付土器

J. その他

としておく。J. には縄文のみ、無文、また細片であるなどの理由で器種・系統を認定できなかった破片を含む。

出土土器の説明

A. 横帯区画文系統

第32図1(1号住居址)

口縁の山形の突起下は、粘土を高く盛上げて、その両側に環状粘土を貼付して眼鏡状としている。区画内の三叉文は内部を削り出している。

第36図1(3号住居址)

基本的な横帯の重なり方を示す。隆帯には幅広の三角押文が沿う。図の裏側にあたる胴部の一區画内には幅広三角押文に沿って幅狭三角押文がめぐるのが、施文具は同一である。頸部素文帯の横走する三角押文のうち、上端と下端の二列は、図の裏側で一部分キャタピラ文に換わっている。

第40図1(4号住居址)

この系統には珍しく口縁突起が無い。口縁部は複合三角区画ではなく大ぶりの波状隆帯から成るが、それは4単位の貼付の上で逆S字状に屈曲する。キャタピラ文は幅広く爪形状を呈する。素文帯や口縁部横帯の余白を、縦列沈線で埋める。以上のあらゆる点から、A. 横帯区画文系統の中でも新しい土器であると考えられる。

第40図2(4号住居址)

横帯区画文系統の基本的な構造を示している。口縁部の4単位の突起は、2単位がやや大きいが形状は同じである。突起内側に三角形に隆帯を貼る。口縁部区画内の三叉文は削り出し手法による。一方、半截竹管使用の縦列沈線を充填するのは新しい様相である。頸部素文帯は波状沈線だが胴下半部素文帯は三角押文による波状文とする。

第40図3(4号住居址、1号住居址、遺構外)

横帯区画文系統の土器であるが横帯の重なり方・区画の形状は特異である。残存する二つの突起のうち左側のものは、突起下の円錐状貼付とつながる。円錐状貼付の上の装飾は、三叉文が残存する他は剥落する。その下に縦長の区画があり、X字状の隆帯が入る。区画の三叉文は削り出し手法による。

第40図4(4号住居址、遺構外)

口縁の突起下に眼鏡状把手がある。口縁部区画内は沈線列と、中央のみ削り出している三叉文。素文帯は第40図1の土器と同様に縦列沈線が入り、以下になんらかの区画横帯が重なったと見られる。

第40図5(4号住居址)

区画内に細かい文様が充填される。半截竹管使用の半円形連続文、Y字状の三叉文など、第37図1の土器と共通する後出の文様を持つ。素文帯はやはり縦列沈線となるらしい。

第41図5(4号住居址)

胴下半部に3単位の隆帯が垂下し、両脇に二列ずつ角押文が沿う。全容は不明だが古手の土器

であろう。

第42図7(4号住居址)

横帯区画文系統の土器であろうが、口縁部の縄文 RL は、B. 抽象文系統の文様を採り入れたものであろう。

第44図4(4号住居址)

寺内隆夫氏の言う「斜行沈線文土器」(寺内1984、1986)は本遺跡ではほとんど例を見なかったが、この破片は太い沈線列を持ち、その範疇に入る可能性がある。

第44図7(4号住居址)

本遺跡では胴部横帯は三角区画となるのが基本であるが、この破片は平行四辺形区画としている。

第56図1(7号住居址)

基本的に A. 横帯区画文系統の土器であるが、異系統文様を組み合わせている。円錐形の把手1単位は中空である。円形と木の葉形が連なった形の突起は、E. 沈線文系統の第63図3の突起と同形であり、後者に由来する可能性がある。横帯の重なり方や区画の形状は横帯区画文系列の基本型とはかなり異なっている。口縁部横帯・頸部素文帯の隆帯に沿って半截竹管による平行沈線が見られるが、これは D. 半隆起線区画系統の手法であり、次の藤内式で一般的となる。胴下半部の輪積痕・指頭圧痕は B. 抽象文系統の文様である。その胴下半部の Y 字状懸垂文は本遺跡では類例無く、並行する阿玉台式の胴部懸垂文を模倣したのかもしれない。三叉文は中央のみ削るが Y 字状を呈すること、隆帯上の刻み手法が卓越する点など、明らかに新しい様相を備えている。

第56図2(7号住居址、遺構外)

器形と横帯の重なり具合が、横帯区画文系統の基本型からかなりはずれる。三角押文は、キャタピラ文の中央が突出した様な形をしている。

第59図1(8号住居址)

胴部で切って炉体土器とした土器である。口縁部横帯の三角区画右側につくつまみ状突起は故意に欠落させたのであろう。キャタピラ文と、その内側の角押文は、共に施文具中央がえぐれている。角押文は山形の押圧痕を示し、三角押文に近い。頸部素文帯を持たずにいきなり三角・台形の区画横帯が重なる点など、明らかに古相を示す。

第59図3・4(8号住居址)、第78図6(遺構外)

いずれも横帯区画文系統の土器の口縁部につく把手がある。第59図3は波状隆帯と円形貼付、4は外反りで扁平な円形貼付文と二列の角押文。第78図6は右縁の隆帯上に刻みをつける。

第78図2(遺構外)

胴部の三角区画横帯が重なる構成は本遺跡では珍しい。

B. 抽象文系統の土器

第32図3(1号住居址)

器形ならびに上半部の構成が抽象文系統であるが、楕円区画の下に A. 横帯区画文系統の三角区画が重なる。口縁部に半球状の突起・J字状隆帯が貼付される。キャタピラ文の形状は特異である。

第32図2(1号住居址)

口縁部は縦の沈線上に、円形の磨消文が入る。抽象文系統の口縁部の縄文上磨消文はよく見ることが、沈線上の磨消は珍しい。胴部には縄文 RL が不明瞭ながら残存している。

第41図1(4号住居址)

口縁部縄文と楕円区画横帯の下に抽象文を持つという基本的な構成をとる。縄文 RL。抽象文は2単位だが、図の裏側の抽象文は若干異なり、2本の隆帯が閉じて体部を作り、端部の隆帯上に刻みがつく。

第41図2(4号住居址)

抽象文系統の土器であるが、楕円区画横帯が重畳し、かわりに抽象文が省かれたと理解することができる。縄文 RL 上に、2個一対、4単位の円形磨消文が入る。

第41図3(4号住居址)

口縁の山形の突起下に橋状把手がつく。突起頂部に小さな環状貼付がつく。抽象文は扁平な隆帯上に三角押文列。抽象文上方の三叉文は削り出し手法による。

第41図4(4号住居址)

抽象文系統の土器とした。口縁部に背の高い隆帯による4単位の貼付文があるが、2単位の短隆帯はいわゆるムカデ状文である。縄文 RL は口縁部にも一部残存するが不明瞭で疎らである。

第42図1(4号住居址)

口縁部はおおかた欠損するが、縄文 RL 上に棒状工具による沈線文を描く。胴部に2単位、全く同じ作りの懸垂文がつくが、抽象文の一種である。

第42図2(4号住居址)

これも抽象文系統の土器とした。口縁部無文帯の下に幅広い横帯がある。

第42図3(4号住居址、遺構外)

6単位の波状口縁として復原した。口縁部の対弧状帯縄文は、抽象文系統の土器にしばしば用いられる文様である。中央の円形文上は半截竹管による縦列沈線。これらはいずれも無文部分の器面を削りとって磨いて作っている。胴部に抽象文の端部が残る。

第49図3(5号住居址、遺構外)

本遺跡最大の土器である。口唇外帯に縦列沈線、器形が内反りする部分は縄文 RL と波状沈線。胴部は2単位の抽象文と右肩に並ぶ矩形区画であるが、この部分の区画が一周しない構成はしばしば見られるものである。抽象文は扁平な隆帯を貼付しキャタピラ文と波状沈線を交互に施

文する。

第50図5・6(5号住居址)

同一個体の口縁部。V字状沈線列・縄文を施す部分の他、無文部を削り取っている。

第59図4(8号住居址)

どの系統の所属とするべきか決めかねる土器である。波状口縁や胴部の張出す器形はD。半隆起線区画文系統のものだが、三角押文はA。横帯区画文もしくはB。抽象文の系統の文様である。胴部の隆帯は5単位の貼付の上でS字状に屈曲するのだが、これは第49図1の口縁部文様と同じ手法である。

第59図5・6(8号住居址)

同一個体である。扁平で弓なりの隆帯で抽象文風の文様を作る。上方に矩形・三角区画が見える。縄文RL。

第63図1(9号住居址)

扁平な隆帯を貼付した抽象文である。

第67図1(10号住居址)

抽象文の端部である。

第75図1(小竪穴4)

いわゆるムカデ状文であり抽象文の一種である。短隆帯貼付の後、斜方向に縄文RLをころがす。

第75図3(小竪穴6)

輪積痕を残すことから抽象文系統の土器とする。

第75図5(小竪穴22)

系統分類が難しい土器である。口縁部の形態と文様は抽象文系統として理解できる。縄文RL。この土器は新しい様相を示す。即ち胴部にクランク状に屈折する隆帯がめぐるが、その両脇に幅広の平行沈線が沿う。この隆帯脇の施文手法は藤内式の縦帯区画文土器などに顕著である。また竹管先端使用の半円形連続文・三叉文の省略である弓なりの沈線などの文様も新しい。不明瞭ながら隆帯上には爪形刻みをつけていたらしい。

第75図6(単独土器)

円筒形の口縁部のみ残存するが、胴部は縄文か、あるいは抽象文がつく可能性もある。半截竹管で沈線を引き、半円形連続文を用いる。これも新しい様相を示す土器である。

第78図1(遺構外)

異系統の要素を組合せた土器として理解される。口縁部は波状で、しかも半截竹管使用の縦列沈線を持つD。半隆起線区画文系統の口縁部である。胴部上半の帯縄文による菱形文・円形文は、第42図3の口縁部と類似し、胴部下半の輪積痕・指頭圧痕と共にB。抽象文系統の文様である。なお横走る二本の隆帯は断面カマボコ状を呈し爪形刻みを有し、C。波状隆帯・縄文系統の手

法を採っている。

第79図8・11（遺構外）

同じくD. 半隆起線区画文系統の口縁部と、B. 抽象文系統の胴部（輪積痕とムカデ状文）を組合せる。

C. 波状隆帯・縄文系統の土器

第36図2（3号住居址、遺構外）

口縁部は隆帯で上下を画した幅狭い帯の中に、波状隆帯を入れる。胴部縄文はRL。

第78図3（遺構外）

隆帯はいずれも断面カマボコ状を呈する。波状隆帯上に爪形刻みを施す。胴部縄文はRL。

第63図2（9号住居址）

メルクマールたる口縁部波状隆帯を欠く点問題であるが、この系統に含めておく。縄文はRL。

D. 半隆起線区画文系統の土器

第42図4（4号住居址）

8単位の波状口縁を持ち、波頂下が外側に突出する。口縁部は半截竹管による縦列沈線。胴部上半は半截竹管による大波状文で三角区画、下半は矩形区画を作る。キャタピラ文・三叉文・細いペン先状工具を押引いた波状文などは、A. 横帯区画文、B. 抽象文の系統の文様である。三叉文がY字状を呈し、半円形連続文が存在する点、新しい様相を帯びる。

第49図1（5号住居址）

6単位の波状口縁。口縁部は波頂下に縦列沈線を施し波底下の余白は三叉文とする。胴部は半截竹管を使用した区画文。半隆起線上を結節して爪形文をつける部分もある。胴下半部に4単位の半球状突起を持つ。区画や三叉文には斜めの截痕が沿う。

第49図2（5号住居址）

口縁部の4単位の山形突起を中心に、文様は大きく2単位構成をとる。眼鏡状把手から2本の隆帯が垂下、うち1本は斜めに伸び、先端が高まり、渦巻・舌状となる。縄文はRL。半截竹管使用の半隆起線は二条一組で、各所で鉤状に屈曲する。

第50図3・4（5号住居址）

3はおそらく縦長の三角区画を作っている。4は区画内側に沿って截痕を施すが、これは半截竹管を用いている。

第53図5（6号住居址）

爪形刻みの加飾された隆帯脇に太めの半隆起線が沿い、区画内には玉抱三叉文がある。この土器の截痕も爪形を呈する。

第59図2(8号住居址)

これも半截竹管で区画を作る。区画内は雑に沈線を施文した上に波状沈線。中段の一区画のみ竹管先端刺突による半円形連続刺突文が入る。

第64図9(9号住居址)

波状口縁の一部と思われる。

E. 沈線文系統の土器

第44図15・16(4号住居址)

沈線文系統の破片である。15はこの系統に特徴的な円形貼付文を持つ。

第53図4(6号住居址)

沈線文系土器の胴部に眼鏡状の貼付がなされている。

第63図3(9号住居址)

口縁部の4単位の突起は、円形と木葉形が連続した形である。この左右を入れ換えた形の突起が、隆帯につながれて、口縁部文様帯に展開する。沈線は粗雑な施文である。その沈線の多くの部分が施文具を押し引いた結節沈線となったり、玉抱三叉文を有したりするのは、A. 横帯区画文・B. 抽象文系統の影響であろう。胴部の4単位の垂下隆帯は、うち2単位が二本一組である。隆帯の背を押圧して連鎖状とする。

第64図7・8(9号住居址)

沈線文系統の破片である。

第75図2(小竪穴6、遺構外)

隆帯はしっかり貼りつけられていなかったため剥落が著しい。文様は隆帯による横S字文・渦巻文・L字状文と、粗雑な施文の沈線文・縄文RLをころがすのは図の正面のみである。

第76図7(小竪穴8)

円形の貼付文で片側が大きく盛り上がる。

第76図13(小竪穴27)

「し」の字形の隆帯と、隆帯に沿う、あるいは単独の沈線文。沈線施文後、縄文RL。

F. 平出三A系統の土器

第43図1(4号住居址、遺構外)

4単位の突起から隆帯が垂下し、口縁部文様帯下端を画す隆帯と連結する。隆帯上はおそらく指頭で押圧する。半截竹管使用の平行沈線で文様を描く。胴下半部の4単位の垂下沈線は必ずしも口縁突起と対応しない。

第43図2(4号住居址)

4単位の突起から隆帯が垂下するが、口縁部文様帯下端はやや突出するのみで隆帯をめぐらし

ていない。

第32図12・13(1号住居址)、第36図8・9(3号住居址)、第44図18~20(4号住居址)、第53図8(6号住居址)、第59図9(8号住居址)、第64図11・12(9号住居址)、第76図10(小竪穴9)いずれも平出三A系統の破片である。

H. 浅鉢

第43図4(4号住居址、8号住居址)

浅鉢口縁部の屈折部端を連鎖状とする手法は当該期に顕著なものである。この浅鉢は屈折部を押しつぶして連鎖状とし、爪形文を押圧する。

第43図5・6(4号住居址、遺構外)

いずれも無文の浅鉢で口縁部が肥厚している。

第63図4(9号住居址、遺構外)

口縁屈折部を押圧して連鎖状とし、背に三角押文施文。口縁部にも二条の三角押文。

第64図1(9号住居址、遺構外)

大型浅鉢。波状隆帯で三角形区画を作り、隆帯に沿って三角押文。

第64図2(9号住居址)

口縁の突起下の何らかの貼付は剥落。

第65図6(9号住居址)

本遺跡の浅鉢の中では特異なもので、口縁部に2本の隆帯をめぐらし、以下縄文RLとする。隆帯上に鋭い刻みを施す。

第78図4(遺構外)

口縁の突起は隆帯と結びついてM字形を呈する。

第79図15(遺構外)

三角押文は富士山形を呈する。屈折部に隆帯をつけ斜めに刻む。

第79図16(遺構外)

浅鉢と考えた。波状口縁は内側に渦巻く。外面は横方向にあらく削って平らにする。

第79図18(遺構外)

屈折部に高く突出する連鎖状隆帯をめぐらし、背に三角押文。口縁部は4列もの押引文をめぐらす。上から三角押文・半截竹管内面の両端を使用した2列の押引文・再び三角押文・同じ半截竹管の外面を使用したキャタピラ文と、二種の施文具を用いる。

I. 有孔鏢付土器

第53図3(6号住居址、1号住居址)

胴部の張出し部に二本の隆帯が横走し、橋状把手が渡される。下方の隆帯は屈曲して垂下して

いる。

第57図1(7号住居址、遺構外)

有孔鐔付土器で第57図1は器壁が厚い。

第36図3(3号住居址)、第78図5(遺構外)

いずれもミニチュア有孔鐔付土器の破片である。

J. その他

第32図4(1号住居址)

完形のミニチュア土器。外面全体に無節の縄文Lをころがす。

第36図6(3号住居址)

壙形土器と考えた。残存部上半は縄文RL、下半はLの縄を用いる撚糸文らしい。キャタピラ文と細い波状沈線が見える。

第43図3(4号住居址)

壙形土器。

第53図2(6号住居址)

縄文RL。

第64図6(9号住居址)

小型の壙形土器で焼成前穿孔の小孔がある。縄文RL。

K. 土製品

第43図7(4号住居址)、第80図11~13(遺構外)

土製円盤である。

② 縄文時代中期後葉の土器

第68図1(2号住居址)

本遺跡で出土した中期後葉の土器はこの一個体のみで、他は破片でも確認できなかった。これは所謂唐草文系土器で、台付土器であろう。胴部は隆帯脇・間を沈線でなぞる手法で、2単位はX字状、把手下2単位はY字状の文様を作る。地文は綾杉状短沈線文を充填する。この、所謂腕骨文と綾杉文を持つ土器が出現する時期に、村内の居沢尾根遺跡(青沼他1981)は集落が途絶えている。編年的位置は「梨久保B式」(宮坂他1972)に後続するものと思われる。

③ 縄文時代後期の土器

破片ばかりであるが、磨消縄文を持つものと櫛歯条線を持つものに二大別できる。

第80図1(9号住居址)・2(遺構外)

同一個体である。口縁の波状部分は肥厚し、波頂下を内面から円形にくりぬいている。磨消縄文は縄文RLで、充填縄文であるらしい。堀之内1式とする。

第80図3～5(遺構外)

同一個体である。縄文帯により作られた三角・菱形部分を沈線で埋める。縄文LRで、充填縄文である。堀之内2式とする。

第79図19(遺構外)

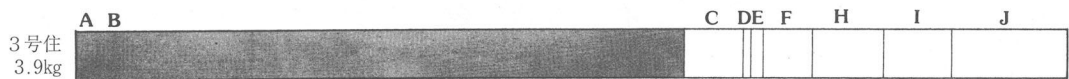
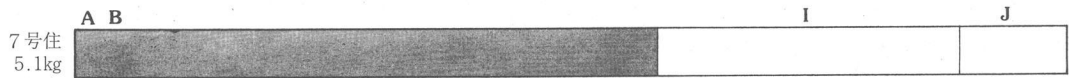
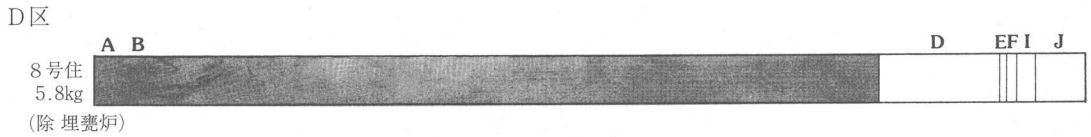
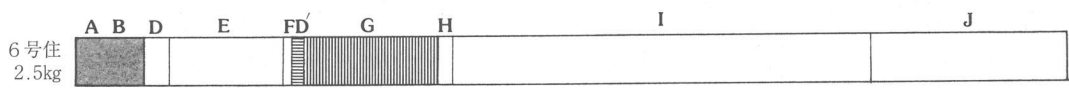
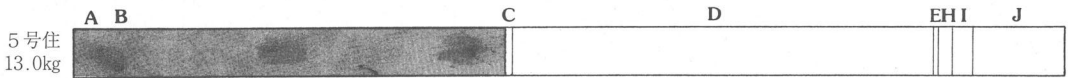
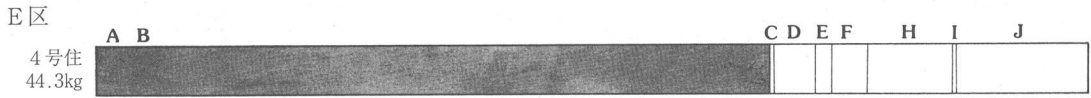
9本1単位の櫛歯状工具による条線が弯曲しながら垂下する破片である。時期決定に迷ったが当該期の粗製土器と考えておく。

④ 結語

本遺跡では縄文中期中葉の住居址9軒が、全く重複を持たずに存在した。その意味で単純な遺跡であり、土器型式を考える上でも有効な視点を提供するはずである。

具体的には、新道式を検討する為の良好な資料となる。『井戸尻』において型式設定された後、新道式をめぐる幾つかの議論がなされた。その論点をあげると、まず、新道式と藤内I式の型式内容の再検討が必要となってきた点があげられる。原村大石遺跡(伴他1976)、八王子市神谷原遺跡(中西他1982)などの成果から、藤内I式のメルクマールとされた抽象文、縦帯区画文の土器と、新道式土器との共伴が問題となってきた(鈴木1986、谷井1982)。それに伴って『井戸尻』で新道式とされた横帯構成の土器(本遺跡でA. 横帯区画文系統としたもの)は特に、「新道タイプ」(谷井1977)・「新道系土器」(小野1987)とも呼称されるに至る。また別に、新道式は関東地方において、勝坂式成立の画期をどこに置くかという論議の中で常にとりあげられてきた。猪沢式から勝坂式とする立場(谷井1981、鈴木1981など)、新道式からとする立場(戸田1971、我孫子1988など)、藤内I式からとする立場(佐藤1974、佐藤他1976)は各々、新道式に対する評価に違いを見せていると言えよう。そのうち佐藤達夫氏は、五領ヶ台式直後から新道式並行段階までを勝坂式成立直前段階として理解し、限られた一地域内に多数型式が存在し、その結果一遺跡内に複数型式が存在する・一個体の土器に異系統紋様が施される、といった視点から考察を行っている(寺内1986・1988)。本遺跡の土器群も同様の方法で理解することができた。

新道式をめぐる論議は多岐にわたるが、新道式とは何であるのかという、根本的な部分を再考する機が熟していると言える。ここでは本遺跡に関わる限りで、その問題について若干考えることとする。



- | | | |
|-------------|---------------------|----------|
| A 横帯区画文系統 | E 沈線文系統 | H 浅鉢 |
| B 抽象文系統 | F 平出三類A系統 | I 有孔鐳付土器 |
| C 波状隆帯・縄文系統 | D' D系統のうち新しい文様をもつ土器 | J 不明 |
| D 半隆起線区画文系統 | G 北陸の天神山式類似の土器 | |

第95図 住居址出土新道式土器・器種・系統別組成グラフ

表6 土器重量計測値一覧表

	完形 半完形 個数	破片数	総重量 (g)	A+B	C	D	D'	E	F	G	H	I	J	唐草文 系土器
1号住居	1	274	6,475	4,735	0	0	70	210	110	0	40	120	1,160	0
2号住居	1	0	1,100	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,100
3号住居	1	69	3,855	2,360	235	20	0	50	190	0	280	260	460	0
4号住居	7	844	44,270	30,065	80	1,965	0	695	1,655	0	3,865	50	5,895	0
5号住居	2	270	12,885	5,610	90	5,495	0	50	0	0	180	250	1,210	0
6号住居	0	112	2,540	175	0	65	30	290	20	345	35	1,070	510	0
7号住居	1	77	5,090	2,955	0	0	0	0	0	0	0	1,550	585	0
8号住居	3	224	8,825	7,620	0	770	0	10	30	0	0	105	290	0
9号住居	2	339	10,462	2,020	0	70	550	2,470	290	30	3,485	125	1,422	0
10号住居	0	1	50	50	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
住居址計	18	2,210	95,552	55,620	405	8,385	650	3,775	2,295	375	7,885	3,530	11,532	1,100
小竪穴4	1	3	638	458	0	0	0	0	0	0	0	0	180	0
小竪穴6	2	82	3,820	1,250	0	0	0	2,390	0	0	0	180	0	0
小竪穴7	0	4	65	5	0	0	0	0	0	0	0	0	60	0
小竪穴8	0	2	60	0	0	0	0	50	0	0	0	0	10	0
小竪穴9	0	75	865	505	0	0	0	90	10	0	0	0	260	0
小竪穴10	0	1	30	0	0	0	0	0	0	0	0	0	30	0
小竪穴22	1	12	1,230	1,140	0	0	0	40	0	0	0	0	50	0
小竪穴27	1	22	7,882	7,600	0	0	0	282	0	0	0	0	0	0
小竪穴計	5	201	14,590	10,958	0	0	0	2,852	10	0	0	180	590	0
単独土器	1	8	244	130	0	0	0	0	0	0	0	0	114	0
遺構総計	24	2,419	110,386	66,708	405	8,385	650	6,627	2,305	375	7,885	3,710	12,236	1,100

RMはローム・マウンド

	完形 半完形 個体数	破片数	総重量 (g)	A+B	C	D	D'	E	F	G	H	I	J	後期
RM 2	0	7	380	50	0	0	130	0	0	180	0	0	20	0
RM 3	0	3	23	0	0	0	0	3	0	0	0	0	20	0
RM 4	0	6	160	50	0	0	0	0	5	0	90	0	15	0
RM 8	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0
RM 10	0	2	45	0	0	0	0	0	0	0	0	0	45	0
RM計	0	19	611	100	0	0	130	3	5	180	90	0	103	0
D区	0	2,775	45,631	16,330	1,273	770	662	3,535	1,253	648	1,177	4,002	14,441	1,540
E区	0	1,175	18,910	6,878	83	273	0	171	1,392	2,335	1,800	310	5,117	551
表採・不明	0	111	620	210	0	0	160	0	0	0	0	40	210	0
グリッド計	0	4,061	65,161	23,418	1,356	1,043	822	3,706	2,645	2,983	2,977	4,352	19,768	2,091
遺構外総計	0	4,080	65,772	23,518	1,356	1,043	952	3,709	2,650	3,163	3,067	4,352	19,871	2,091

	破片数	総重量 (g)	A+B	C	D	D'	E	F	G	H	I	J	唐草文 系土器	後期
遺跡総計	6,499	176,158	90,226	1,761	9,428	1,602	10,336	4,955	3,538	10,952	8,062	32,107	1,100	2,091

まず、本遺跡では主に六つの系統に分類して土器を理解する様に努めたが、六系統をまとめて新道式とすることはできない。A. 横帯区画文系統、B. 抽象文系統、C. 波状口縁・縄文系統、D. 半隆起線区画文系統の四つは、地域差はあるだろうが、関東地方にも共通して分布する。E. 沈線文系統は長野から群馬に分布し、F. 平出三 A 系統は長野独特のものである。各系統には基本的な構造があるが、施文手法の点では A. 系統と B. 系統が、押引文という当該期の顕著な手法を共有する。一方、D・E・F. 系統の各々の施文手法は、他と峻別される独自性を持つ。

系統の組成については、(第95図)の帯グラフ(最上段)に示してみた。これは本遺跡出土の新道式段階の土器の全重量を系統・器種別に計測し、パーセンテージ比を出したもので、実際の数値は表4に掲げている。A. 系統と B. 系統は破片では見分けられないものも多く、一括して

示すこととした。分類できないものも25%に及び、特にC. 系統は識別される部位が限定されること等、若干の偏りはあるが、状況の大勢は明らかにされている。即ち、A. 系統とB. 系統だけで50%強を占めるのに対し、D. 系統とE. 系統は各5%強、F. 系統は3%を占めるに過ぎないのである。本遺跡の主体は明らかにA. 横帯区画文系統とB. 抽象文系統である。E. 沈線文系統とF. 平出三A系統は、既述の通り胎土にも差異を認めることができたため、厳密に分析すれば、別の製作地から供給・搬入されたことを明らかにできる可能性がある。

本遺跡の居住者が、その主体的存在であるA. 系統とB. 系統の土器の製作者であったと仮定すれば、それは浅鉢の存在からも裏付けられる。浅鉢のほとんどが押引文を持つが、もちろんA・B. 両系統の文様である。他の系統の浅鉢と見られるものは無く、容器のセットという面からも、上の仮定は支持される。

あくまでも本遺跡に即して、新道式をどの様に考えればよいか。上に述べてきたことを論拠として、A. 系統とB. 系統を新道式とし、E. 系統とF. 系統は除外すべきである。問題はC. 系統とD. 系統である。D. 系統は、半截竹管による半隆起線という施文手法が、A・B. 両系統と全て相容れないが、従来から新道式の範疇で扱われてきた。両系統ともに長野・山梨にも、西関東にも存在する。分布の問題を重視して、C. 系統とD. 系統も新道式と考えておく。

この一遺跡で考えた内容をそのまま普遍化することは無論できない。他遺跡の成果と突き合わせた上で再検討するべきである。既に土器の記述の中で古相・新相について説明した様に、時間的細分は可能であり、これも今後の問題となる。D. 半隆起線区画文系統の土器の三叉文がすべて新相を示すものである点に注意すれば、A. 横帯区画文系統とD. 系統を単純に並行とするわけにもいなくなる。系統間の時間的關係についてはさらに厳密な分析が必要であると思われる。藤内式との境界の問題については、本遺跡に縦帯区画文土器が全く無いことを重視するべきであろう。祖源的な区画文はあるにせよ、典型的な縦帯区画文土器との懸隔は大きい。縦帯区画文土器の成立を藤内式の画期とし、本遺跡の土器はその直前の新道式段階に置かれるべきであるとする。古い方の猪沢式との關係についてはここでは論ずる準備はない。この問題についても今後の課題とせざるを得ないが、本遺跡出土の土器群が、今後の当該期研究に有効な資料となることは確かである。

(山形)

(2) 石器

① 出土石器の説明

本遺跡より出土した石器は、1次・2次調査を合わせて、石鏃56点、小形石匙（Ⅰ類）2点、石錐5点、ピエス・エスキューユ166点、二次加工のある剥片24点、使用痕のある剥片25点、打製石斧90点、横刃形石器57点、大形粗製石匙（Ⅱ類）10点、磨石・凹石56点、石皿1点、磨製石斧18点、の合計510点である（表7）。出土した土器の大半が、縄文時代中期前葉新道式のものである。

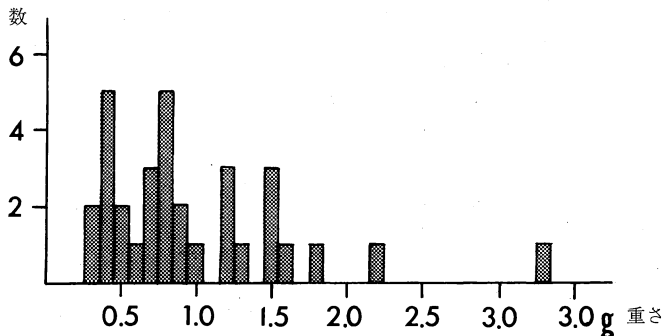
表7 遺構別石器出土点数

器種 出土地点	石 鏃	石 匙 I 類	石 鏃 錐	ピ エ ス ・ エ ス キ ー ユ	二 次 加 工 の あ る 剥 片	使 用 痕 の あ る 剥 片	打 製 石 斧	横 刃 形 石 器	石 匙 II 類	磨 ・ 凹 石 類	石 皿	磨 製 石 斧	原 石	石 核	黒 曜 石 剥 片	黒 曜 石 以 外 の 剥 片
1号住居址	5			21	4	3	2	6	1	3		2		7	251	22
2号住居址												1			3	
3号住居址	1			9	1	2	6	6		3		4	3	3	237	8
4号住居址	6			15	4	3	9	9	1	10			4	6	208	25
5号住居址			1	8		2	7	1	1	4		1		1	63	8
6号住居址	1	2		3	1		2	2	1	1		1	2	2	78	6
7号住居址							1		1	2		2			9	1
8号住居址	1			3	1	1	6	5		6		2			11	1
9号住居址	2		2	6	1	4	5	4	1	5			1	3	131	16
10号住居址																
小竪穴6																1
小竪穴9							1			1						
小竪穴23												1				
小竪穴41																1
ロームマウンド3	1															
ロームマウンド6										1						
遺構外	39		2	101	12	10	51	24	4	20	1	4	15	13	810	157
合 計	56	2	5	166	24	25	90	57	10	56	1	18	25	35	1,801	246

ることから、本遺跡出土の大部分の石器は該期の所産であると考えられる。

石鏃

表採のものを含めて、56点の石鏃が出土している。このうち第86図12の1点は磨製石鏃であり、弥生時代のものである。残りの55点は打製石鏃であり、無茎のもの（I類）と有茎のもの（II類）とに分類される。無茎石鏃は51点、有茎石鏃は3点である。基部形状については、全てが凹基であり、平基、凸基のものはない。石材は、打製石鏃はチャート製1点の他すべてが黒曜石製である。欠損状況を見ると、A:完形のもの31点、B:



第96図 石鏃重量頻度グラフ

先端部が欠損するもの5点、C₁:基部全体を欠損するもの1点、C₂:脚部を欠損するもの19点、D:茎部を欠損するもの2点である。52.5%が完形である。

無茎石鏃は、形状と大きさにバラエティーがあり、さらにいくつかに分類される。しかし、本遺跡の資料のみでは無意味な分類になる恐れがあるので、形状・大きさにバラエティーがあるということを指摘するに留めたい。重さについては、完形のものと同様に欠損部が小さく完形の重さと殆ど変わらないもの33点についてグラフに示した(第96図)。これを見ると、0.4g、0.8g、1.2g、1.5gが山になっている。

次に石鏃の時期を考えると、中期前葉、中葉、後期前葉に営まれた集落とは時期を異にする石鏃が見られる。本遺跡出土の土器が新道式、曾利Ⅱ式、堀之内式のみであり、管見にふれるかぎり、周辺地域の該期以前の遺構から有茎石鏃は殆ど出土していない。このことを考えると、有茎石鏃は本集落に関係した遺物ではなく、本遺跡が、集落としての機能を終えた後、狩場などであった時期に残された遺物であると考えられる。同様なことは磨製石鏃についても言えることである。更に無茎石鏃のなかにも早期のものと思われる部分磨製石鏃第86図2が存在する。他の石鏃については石鏃の形状等からその時期を決定することはできないが、本遺跡で出土する石鏃には集落とは関係のない時期のものが含まれていることは確実である。

このように考えると、先述した重量差が同時期の用途の差であるのか時期の差であるのか確定することはできない。

石匙

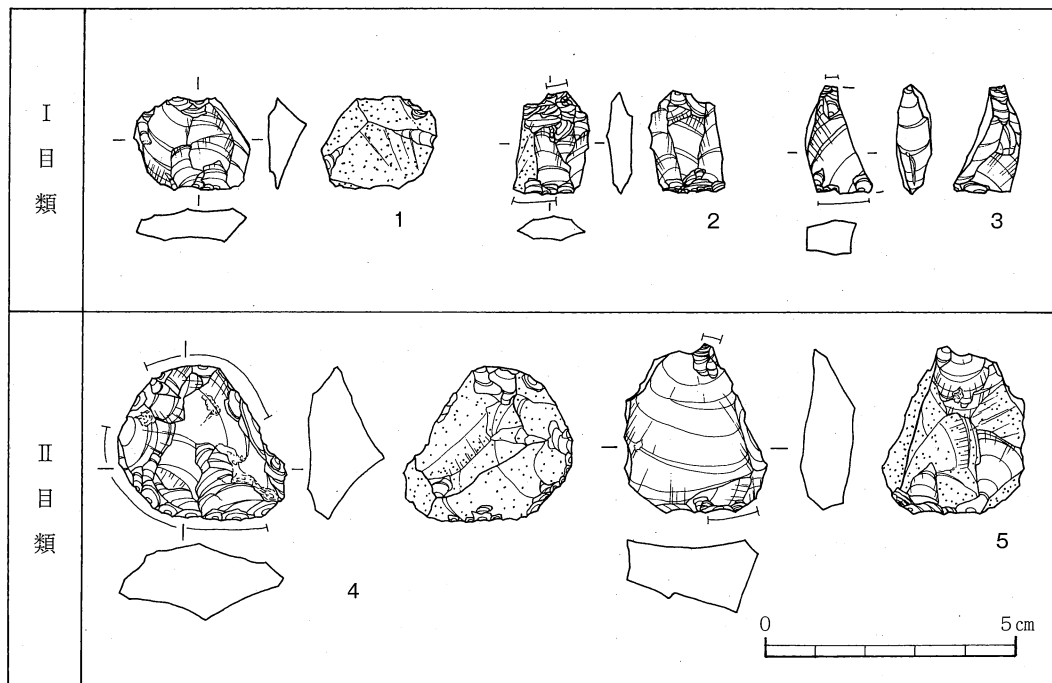
対峙する二辺のえぐりにより、つまみ部が作り出されているものを石匙とする。12点出土した。そのうち、小形の、調整加工が粗いものをⅠ類、大形の調整加工が粗い、所謂大形粗製石匙をⅡ類とする。Ⅰ類は2点で、ともに黒曜石製である。第54図2は両面加工の整形された製品であるが、3は未製品と思われる。Ⅱ類は、10点出土し、硬砂岩及びホルンフェルス製である。欠損したものは第51図8の1点のみで、他は全て完形である。

石錐

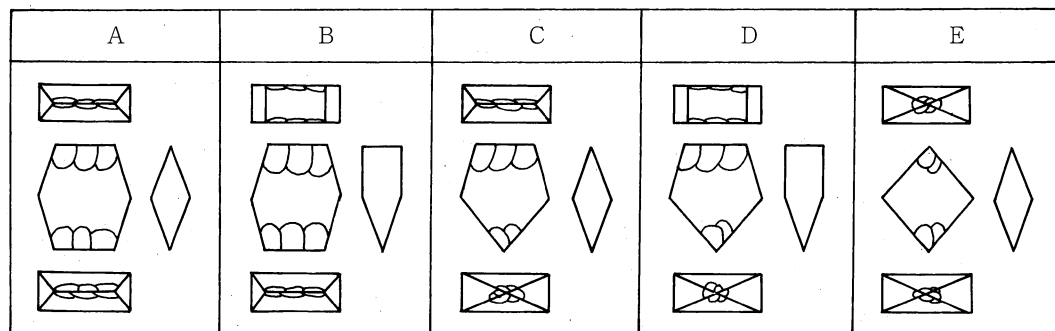
錐部が作り出されているものを石錐とする。5点出土した。このうち錐部を棒状に作り出したものをⅠ類、棒状の錐部を持たず、先端を作り出しただけのものをⅡ類とする。Ⅰ類が4点、Ⅱ類は第65図10の1点のみである。全てが黒曜石製である。第86図7は棒状の原石をそのまま素材として錐部を作り出しているが、他は剥片を素材としている。錐部の磨痕は何れにも認められない。

ピエス・エスキーユ

両極打法により、対峙する二辺または二点に、階段状剥離とツブレが認められたものをピエ



第97図 ピエス・エスキーユの分類



第98図 ピエス・エスキーユの打点形状模式図

表8 ピエス・エスキーユ分類別個体数

	A	B	C	D	E	不明	合計
I類	62	11	10		4	9	97
II類	16	8	11	2	1	7	44
III類	9	3	4			9	23
合計	87	22	25	2	5	25	166

ス・エスキューとする。166点出土した。最近の研究では、両極打法は、剥片生産、二次加工等、石器製作のいくつかの段階で使用される技術である、とされている（阿部1983）。こうした見解を踏まえて、両極打法が見られる石器をピエス・エスキューと両極石核とに分類する考え方が出されている（山田1986・1988）。しかし、形状等特徴から両者を明確に器種分類することは困難であるので、素材の形状に視点を置き、薄い剥片を素材としたものをⅠ類、石核・原石を素材としたものをⅡ類として分類した（第97図）。また対峙する打点の形状を、A：線と線、B：線と面、C：線と点、D：点と面、E：点と点とに分類する（第98図）。

Ⅰ類が97点、Ⅱ類が44点、分類不能が23点である（表8）。全点黒曜石製である。166点中45点に剪断面が認められ、欠損率は21.11%である。

二次加工のある剥片

定形的な石器に含まれない小形の剥片石器をまとめて二次加工のある剥片とする。24点出土。全て黒曜石製である。二次調整加工の在り方により以下のように分類する。

- I a類 連続的な剥片剥離により刃部を作り出すもので、搔器的な刃部を有するもの。4点出土。
- I b類 連続的な剥片剥離により刃部を作り出すもので、削器的な刃部を有するもの。7点出土。
- Ⅱ類 Ⅰ類に比べ大きな剥片剥離が見られるが、刃部の作り出しは見られないもの。8点出土。
- Ⅲ a類 剥片剥離により、ある特定の形状の作り出しを意図したもので、剥離が面的に及ぶもの。4点出土。
- Ⅲ b類 剥片剥離により、ある特定の形状の作り出しを意図したもので、剥離が周辺部に見られるもの。1点出土。

なお、Ⅰ類としたものはスクレーパー類である。

使用痕のある剥片


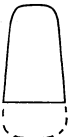

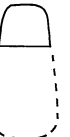


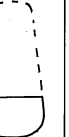
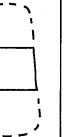
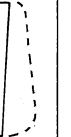
小形の剥片に、刃こぼれと思われる1mm以下の微細な剥離痕、または磨滅痕が認められるものを使用痕のある剥片とする。25点出土。全点黒曜石製である。使用痕の状態により、以下のように分類する。形状、大きさ、重さには規格性が見られない。

- Ⅰ類 微細な剥離痕が認められるもの。24点出土。
- Ⅱ類 磨滅痕が認められるもの。1点出土。

打製石斧

90点出土。打製石斧の分類は、各研究者により様々な細分が行なわれているが、本遺跡では、伝統的な、短冊形、撥形、分銅形の3分類を踏襲する。その分類基準は、鈴木次郎氏（1983）にほぼ準じた。

- Ⅰ類 短冊形 刃部幅が基部幅の1.5倍以下のもの。最大幅の位置は、基部・中央部・刃部の

A	B ₁	B ₂	B ₃	C ₁	C ₂	C ₃	D	E	F
									その他
36点	11点	9点	4点	7点	7点	5点	5点	3点	5点

第99図 打製石斧欠損部位とその点数

いずれの場合もある。

Ⅱ類 撥形 刃部幅が基部幅の1.5倍以上あり、最大幅は刃部にあるもの。

Ⅲ類 分銅形 中央部両側縁に大きなえぐりが存在し、このえぐりの上下両側がほぼ均等に調整加工が施され、上下両端を刃部とするもの。

I類が32点、Ⅱ類が17点、Ⅲ類が1点、分類不能のもの40点である。石材は、硬砂岩35点、粘板岩10点、ホルンフェルス10点、輝岩11点、凝灰岩5点、千枚岩1点、不明18点である。90点中55点が欠損品で、欠損率は約61%である。欠損部位及びその点数は第99図に示した通りである。欠損品の接合は第46図1の4号住居址と遺構外(DL-77)、第46図3の4号住居址内、第82図4の遺構外(DO-76とDZZ)の3例である。

横刃形石器

57点出土。横刃形石器の定義は、現状では明確にされているとは言い難く、様々な形態のものを含んでいる。本遺跡では、打製石斧、大形粗製石匙以外の、刃縁を作り出している大形の剥片石器を横刃形石器とした。石材は、硬砂岩14点、粘板岩9点、ホルンフェルス6点、輝岩2点、凝灰岩1点、千枚岩7点、安山岩1点、緑泥片岩1点、緑色岩1点、不明15点である。欠損状況は、A：完形のもの40点、B：刃部縁に対し直角方向に割れるもの11点、C：その他6点である。欠損率は約30%となる。欠損品の接合は第83図10の遺構外(DL-77とDO-75)の1例である。

磨製石斧

18点出土。形状と製作加工法の違いにより以下の4類に分類する。

I類 乳棒状石斧。断面が楕円形を呈し、剥片剥離と敲打と磨製技術により製作されたと見られるもの。刃部は磨かれているが、他の部分は必ずしも磨かれず、剥離痕・敲打痕が認められるもの。12点出土。

Ⅱ類 製作加工法はI類と同様であるが、I類に比べ扁平であり、断面が楕円形にならないもの。I類同様刃部は磨かれているが、他の部分は必ずしも磨かれず、剥離痕・敲打痕が認

められるもの。2点出土。

Ⅲ類 定角式石斧。明確な稜を有し、断面が胴張の長方形を呈するもの。全面が磨かれており敲打痕は認められないもの。3点出土。

Ⅳ類 形状はⅡ類に類似しているが、敲打による加工は見られず、剥片剥離と磨製技術により製作されたもの。1点出土。

石材は、輝岩10点、凝灰岩2点、輝緑岩1点、不明5点である。18点中7点が欠損品である。点数の多いⅠ類を見ると、12点中4点が欠損品で、欠損率は33%ある。欠損部位の分類は打製石斧に準じた(第99図)。

次に、出土状況であるが、磨製石斧は他の石器と比べ住居址の床面から出土する割合が高い。特に3号住居址では床面に4本が重なって出土しており(第35図)、第37図12・14は刃部に刃こぼれが見られずあたかも未使用のようである。また第57図7は7号住居内ピット1より出土し、刃部はかなりつぶれておりハンマーに転用されたものである。

磨石・凹石・敲石

56点出土。この種の石器は、一点の石器に磨痕、凹痕、敲痕が複合して認められることが多い。そこでこれらの痕跡によって分類を行なった。A類を凹痕、B類を磨痕、C類を敲痕とし、複合する痕跡が認められる場合は、A～Cの記号を併記した。それぞれの出土点数は表9に示した。殆どが凹痕を有するものであるが、風化が著しく磨痕を認識できなかったものもいくつかあると思われる。石材は、全点安山岩である。欠損品は4点で、欠損率は7%である。

凹痕は、礫面の中央部に見られ、一面または二面のものが大部分である(表10)。この凹痕が使用の結果生じたものなのか、凹自身に意味がある石器なのかは不明である。しかし、この凹痕を観察すると、両極打法をおこなうときに使用する台石の凹痕とよく似ており、本遺跡から両極打法に関係するピエス・エスキューが多数出土していることを考えあわせると、凹痕の多くはピエス・エスキューを敲いたあるいは両極打法による剥片剥離の結果生じたものであると考えられる。

次に特徴あるものについて簡単に述べておきたい。4号住居址の第47図5は他の凹石と異なり、かなり小さく凹痕が広く深く、他の凹石とは区別される。第47図8・第57図8には黒色の付着物(斜線部分)が認められる。

表9 磨石・凹石・敲石の痕跡別個体数

痕跡	個体数	%
A	46	82.1
B	2	3.6
C	1	1.8
A+B	5	8.9
A+C	1	1.8
B+C	1	1.8
合計	56	100.0

表10 凹面数別個体数

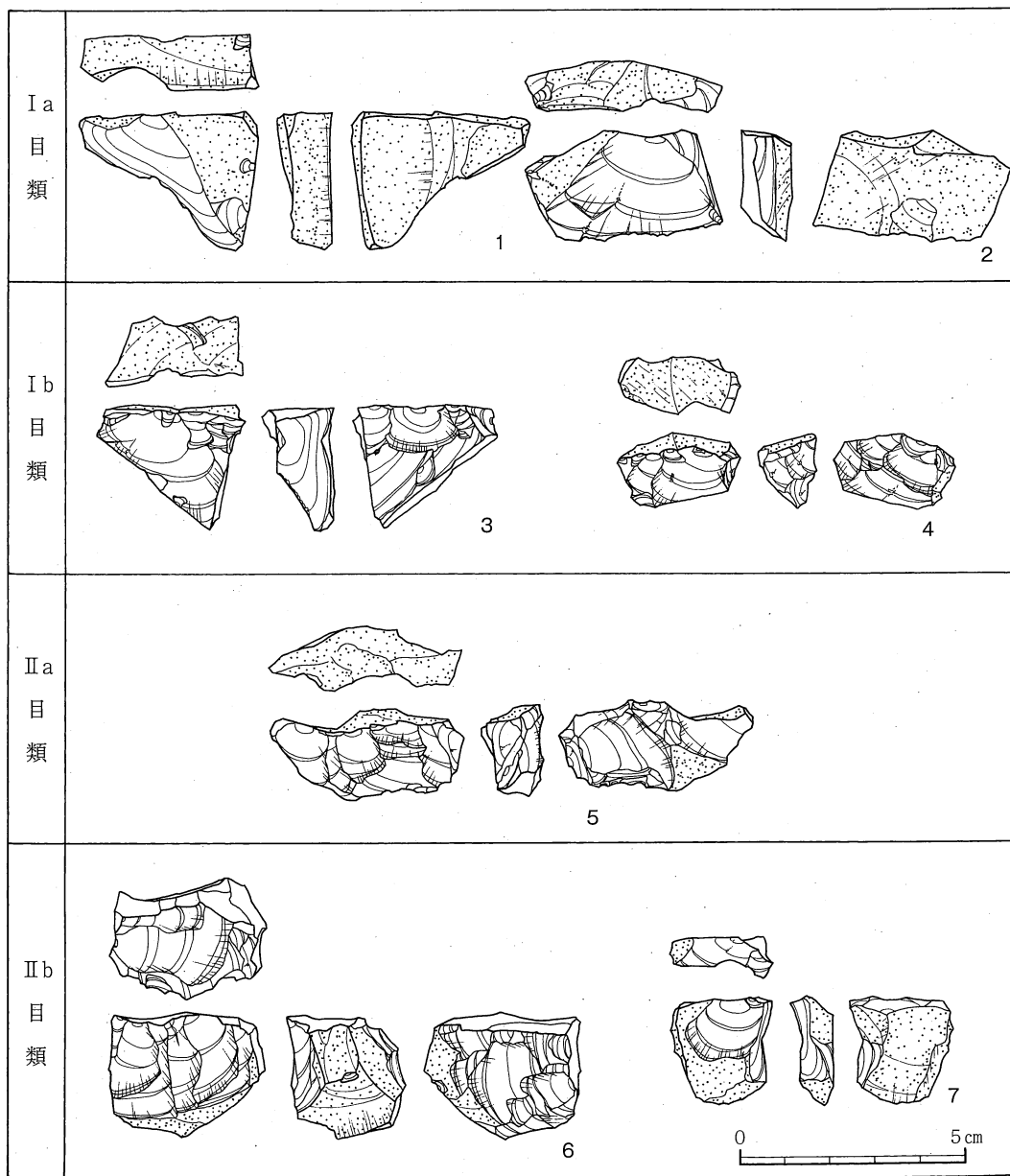
凹面	個体数	%
1面	17	32.1
2面	28	52.8
3面	6	11.3
4面	2	3.8
合計	53	100.0

石皿

DL -77グリッドから石皿片（第85図7）が1点出土したのみである。安山岩製である。

石核

40点出土。全点黒曜石製である。原石の形状及び、剥片の取り方により以下のように分類した（第100図）。



第100図 石核の分類

I a類 打面転移は無く、自然面を打面とし、一面に作業面があるもの。板状の原石を用いているものが多い。18点出土。

I b類 打面転移は無く、自然面を打面とし、表裏二面に作業面があるもの。残核は板状のものとなる。6点出土。

II a類 打面転移を行い、自然面を打面とするもの。7点出土。

II b類 打面転移を行い、作業面が打面となっているもの。8点出土。

全点黒曜石である。自然面をそのまま打面としているものが約8割を占め、そのなかでも打面転移を行わず、1個の石核から数枚の剥片しか剥離しないものが多い。

また、先にピエス・エスキューⅡ類と分類したものの多くは、両極石核といわれるものに相当し、石核であると考えられる。このように考えると、異なった剥片剥離技術をもった2種類の石核が存在する、ということが言える。即ち、石核から剥片を剥す技術には、両極打法によるものと、直接または間接打法による通常の剥片剥離の、2種類があったと考えられる。

原石

26点出土。全点黒曜石である。原石の形状は大別すると、厚手の塊状のもの（Ⅰ類）、棒状のもの（Ⅱ類）、板状のもの（Ⅲ類）となるが、形状はまちまちである。重量は軽いもので8.4g、重いものでも55.7gとあまり大きなものはない。

黒曜石の剥片

1801点出土。石器の素材となる剥片から、石器の細かな調整加工の際生じた碎片を含む。このなかには、両極打法により生じた剥片も多く見られる。

黒曜石以外の剥片

246点出土。打製石斧、横刃形石器、石匙Ⅱ類に用いられる硬砂岩、粘板岩、ホルンフェルスなどの剥片である。石器または素材となる剥片が割れたと思われる大形の剥片と、これに対し小形の調整剥片と思われるものがある。大形のは26点のみであり、他は小形のものである。小形のもの多くは、刃部再生剥片であると思われる。打製石斧、横刃形石器、石匙Ⅱ類の数と調整剥片の数を比べると、石器製作の全工程を集落内で行ったと考えるには、石器数に対し調整剥片の数が極めて少ない。これは、打製石斧、横刃形石器、石匙Ⅱ類の石器製作工程の大部分は集落外で行われ、最終的な整形と刃部の再生などが集落内で行われた結果であると思われる。

② 弓振日向遺跡の石器組成

前述したように、本遺跡出土の石器の大部分は縄文時代中期中葉新道期のものである。

まず、周辺遺跡との比較により、弓振日向遺跡の石器組成をみてみよう。比較対象とした遺跡

表11 周辺遺跡の住居址内出土石器数

グラフ No	遺跡名 (時期)	石器名	住居 址 数	石 鏃	石 錐	石 匙	スク レイ パー	打 製 石 斧	横 刃 形 石 器	粗 製 大 型 石 匙	磨 製 石 斧	磨 ・ 凹 石 類	石 皿	合 計
①	阿久 (関山・黒浜式)		45	573	151	116	312	9	3		30	256	39	1,489
②	阿久 (諸磯 a・b 式)		14	192	42	40	80	4			13	110	14	495
③	大石 (九兵衛 I・II 式)		12	17	7	3	7	187	66	2	11	85	4	389
④	大石 (狹沢・新道式)		27	116	52	16	41	398	184	1	55	148	18	1,029
⑤	弓振日向 (新道式)		8	16	3	2	10	38	33	6	13	34		155
⑥	居沢尾根 (井戸尻 III 式)		4	8			2	30	47	11	12	19	2	131
⑦	居沢尾根 (曾利 I・II 式)		25	19	4		18	84	71	25	35	76	10	342

石匙、スクレイパー、粗製大型石匙はそれぞれ石匙 I 類、二次加工のある剥片 I a・I b 類、石匙 II 類を分類したものである。

は、本遺跡と時期を前後した阿久遺跡、大石遺跡、居沢尾根遺跡の3遺跡である。各時期の住居址より出土した主要の石器のみを取り上げたものが表11である。この各時期の石器の合計数に対する各器種の百分率を累積グラフにしたものが第101図である。大局的にこれを見ると、①・②と③～⑦の2つのグループに別れることがわかる。前者は前期の住居址より出土したものであり、後者は中期の住居址より出土したものである。この図から見るかぎり、弓振日向遺跡の石器組成は他の縄文時代中期の遺跡と大きく異なるものではない、といえる。即ち、本遺跡は、石鏃、石錐、スクレイパーなどの小形石器に対し、打製石斧、横刃形石器などの大形石器が卓越する中期の一般的な石器組成をもつ集落であった、ということがいえる。

次に弓振日向遺跡の石器組成の個性という視点で考えてみたい。個々の石器の数量を近接した時期の大石遺跡と比較すると、特に打製石斧の数に大きな差がある。竪穴住居址1軒当たりの打製石斧数は、大石遺跡では弓振日向遺跡の2倍を越える(表11)。住居址外出土のものを合わせても結果は同様である。しかし、他の周辺遺跡と比較すると、弓振日向遺跡のほうが一般的であり、大石遺跡が突出しているようである。

さらに、本遺跡では集落のほぼ全域を発掘したにもかかわらず、石皿の小破片が1点出土したのみで、全体の形状がわかるものは出土していない。このことは他の遺跡と比べ大きく異なることである。石皿は、磨石とセットで使用される石器と考えられており、本遺跡で明らかに磨石と思われるものは7点のみであることを考えると、本来石皿は1、2点しかなかったかもしれない。また、破損していない石皿は、集落外に持ち出されたということも考えられるが、今度は刃

こぼれもしていない磨製石斧が住居址内に残されているという事実の理解に苦しむ。

このように個々の集落における石器組成を比較し、異なった点があるのかないのかを問題とする場合は、その集落で本来所有された石器の総体をできるだけ忠実に推定する必要がある。そのためには、遺跡から出土する石器に対する資料批判を行わなければならない。しかし、その方法は未だ確立されていない。今後の石器研究の追及しなければならない一視点である。

以上、弓振日向遺跡の石器組成の持つ共通性と特殊性について考えてみた。弓振日向遺跡の石器組成が大局的には前期と異なった中期的な石器組成を示すことは理解できたが、その共通性のなかにも遺跡ごとに特殊性があるのか否か、という点は明確には理解することができなかった。この石器組成における共通性と特殊性が理解されたとき、石器の研究が縄文社会を理解するための手段となるのである。

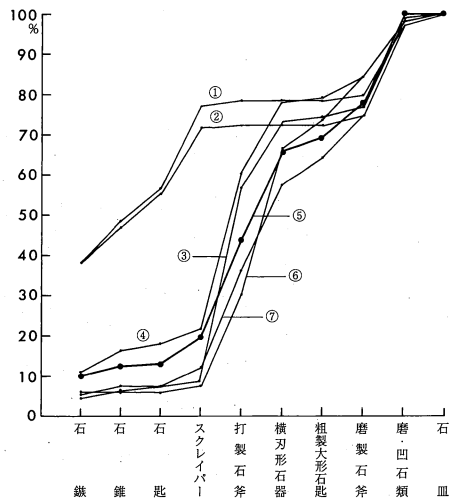
(鶴田)

(3) 集落と遺物分布について

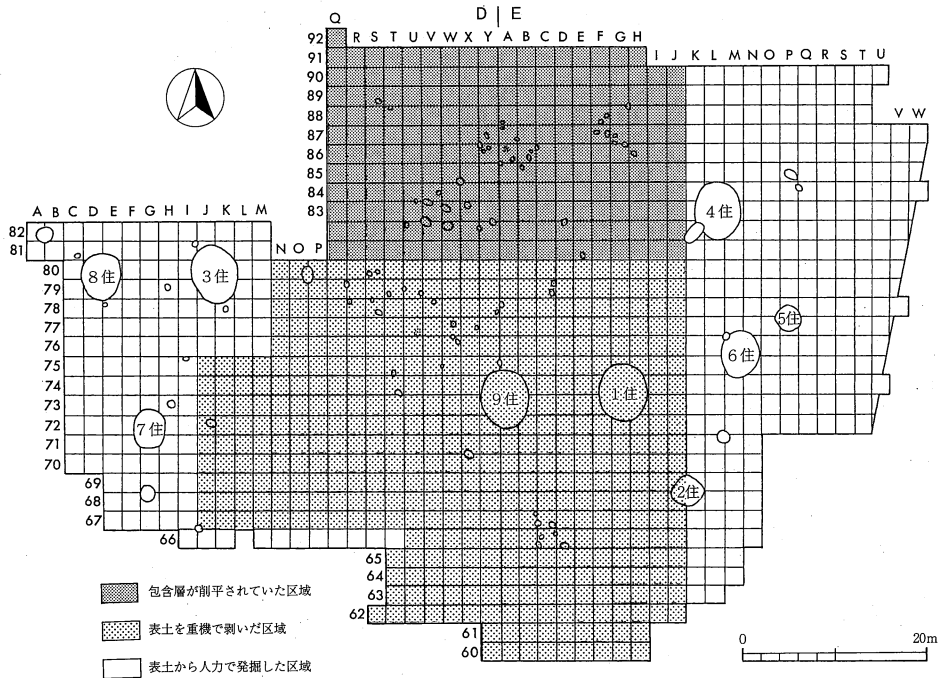
① 目的

既述の通り、本遺跡の集落の継続期間は、新道式という一土器型式の時間内におさまる（唐草文系土器を出土した2号住居址と、攪乱により内容不明な10号住居址を除く）。時間的に限られており、住居址の重複関係も無い。しかも、尾根上に展開する遺跡の中核部分、つまり、住居区域全体を調査できたと考えてよい。このような遺跡について分析することは、所謂大遺跡—住居址の数が多く、重複が著しく、継続期間が複数土器型式に及ぶような集落遺跡—では抽出し難い成果を期待することができる。つまり一時期の集落の実態に近づくために、本遺跡はかなり好条件を備えているのである。

最近の土井義夫・黒尾和久両氏の発言は（土井1985、1988a・b、黒尾1988a・b）、従来のセトルメントパターン分類に対し疑問を投げかけている。いわゆる大規模・定型的集落も、小規模な集落が時間的に累積した最終的な姿にすぎないこと、縄文時代を通じて生活単位は極めて小さかったこと、大規模な集落は人間の往来の頻度の高さを示すものであること、などが両氏の主張の骨子である。両氏の意見を踏まえると、集落研究は確かに一つの転機を迎えていると言える。より短い時間幅のなかで、集落の実像を描き出すことが指向されている。



第101図 石器組成累積グラフ



第102図 包含層の遺存状態と発掘の精度

本遺跡においては、遺物の分布という視点から、一時期の集落の様相に迫ることとする。一土器型式の時間幅のなかで、集落はどのように生起、展開したのか。このような問題意識を念頭に置いて、石器と土器の分布状況について考察していきたい。

なお、遺跡の依存状態及び発掘の精度は遺物の分布状況に大きく影響するものである。そこで、図に占めた範囲を3段階にわけて理解することにした。既に包含層が削られてしまっている区域、表土を重機で剥いだ区域、表土から人力で発掘した区域の3段階である（第102図）。

② 土器の分布状況

土器の分布を分析するための基礎データとして、住居址ごと・グリッドごとに出土土器の全重量を計測した。重量はまた土器の器種・系統別にも計測した。そのデータを表6に示している。

理想的には、実際に遺跡に存在した土器の個体数を求め、それを基礎として考察するべきである。口縁部破片の数を調べるとか、厳密な個体識別を重ねていくとかすれば、個体数に迫ることもできようが、それぞれに限界があるうえ、大変な作業ともなる。重量計測は比較的容易な作業である。しかし得られた重量と真の個体数との間には、ズレが存在するはずであろうことを、常に注意しなければならない。

③ 住居址出土土器の重量分布について

本遺跡出土土器の総重量は約176kg、うち新道式段階の土器がほとんどを占め、173kgにのぼる。新道式期の住居址9軒から出土した土器は約94kg、当該期の土器の56.4%が住居址に含まれていたことになる。

住居址毎の土器量の差は著しい。最も多い4号住居址の重量は44.3kgで、本遺跡の新道式期の土器全体の25.6%、実に1/4がこの住居址内に集中したことになる。逆に、3号住居址・6号住居址はそれぞれ3.9kg・2.5kgという少なさで、しかも小破片がほとんどであった。

ここで土器量の多い順に住居址を並べてみると、4・5・9・1・8・7・3・6号住居址となり、集落東側のE区に位置する4軒の住居址が上位を占める。必然的に、同じE区の6号住居址の少なさが際立ってくる。仮に住居址をE区の5軒とD区の3軒の二群に分けて考えれば、住居址に包含される土器量は、前者のほうが圧倒的に多いという違いが認められる。

ここで土器量の多寡を住居の新旧に結びつけて考えてみるのはどうであろうか。住居廃絶時が古ければ遺物廃棄の対象となる期間も長く、必然的に遺物量も多くなる。廃絶時が新しく、特に集落の廃絶と重なる様な場合には、廃絶の対象とならないはずだから当然遺物量は少なくなるであろうと考えたわけである。するとE区の5軒の中では、4号住居址が最も古く、6号住居址が最も新しいのではないかという見通しが得られる。D区の3軒についてはE区ほどの差異はないが、8号住居址が古いのではないかと思われる。

この見通しに傍証はあるだろうか。4号住居址は土器量が格別に多い。また、他の全ての住居址と接合関係を持つ(第87~94図参照)。最も古く廃絶し、その埋没期間が他の全ての住居の住居期間もしくは廃絶期間と重なっていたと考えることは合理的である。

8号住居址は、本遺跡で唯一の埋甕炉を持つ住居であることに注意すべきである。同じ原村の大石遺跡から得られた知見として、新道式期に、中期初頭的な炉形態としての埋甕炉から小規模な方形石囲炉に大勢として変化していくことが指摘されている(伴他1976)。また炉体土器自体も、本遺跡の土器の中では比較的古相を示していることも、既に説明している。ゆえに8号住居址を古く考えることも妥当であろう。

逆に新しいと想定した6号住居址については、積極的な傍証を得ていない。ただし、第95図の帯グラフは住居址出土土器重量の系統・器種別組成を表しているのだが、6号住居址のグラフはかなり顕著な特徴を有している。本遺跡の中核的存在であるA.横帯区画文系統とB.抽象文系統の割合が、著しく低い。同じ特徴を示しているのは9号住居址である。他に6号住居と9号住居に共通する特徴は、D'・Gと分類した土器を含んでいることである。D'とは本遺跡では比較的新しい様相を示すと考えた土器であり、それが含まれることは住居の新しさの傍証となり得る。しかし通常のD.半隆起線区画文系統とD'とがどれほどの時間差を持つのかという点については慎重にならざるを得ない。よってD'の存在をことさらに重視することはできない。

6号住居址と9号住居址のグラフの特徴は、両住居址の時間が近いことを示しているのか。に

わかには判断しかねるが、興味深い問題である。しかし第95図の帯グラフが何を示しているのか、どの程度有意なデータであるのかといった点については慎重に考慮しなければならない。新道式期の遺跡全体の組成グラフと比較すると、それを大体反映している住居址もあれば、何か一つの系統の比率がめだって大きい住居址もある。また浅鉢や有孔鏝付土器の比率が大きいものもある。住居址出土土器で厳密に遺棄と認定されるものは、8号住居址の炉体土器だけである。床面近く出土したほぼ完形の土器については遺棄である可能性もあるが、その他の土器のほとんどは廃棄もしくは流入によるものと考えられる。すると第95図に示した様なグラフは、廃棄の偶然の産物である可能性も捨てられなくなる。ある住居の組成が集落全体の組成の小型版となることもあろうが、また偶然に組成の一部が欠落する場合もあろう。何が偶然の産物であるらしいか、何が意味をもつデータであるのか、十分に配慮して解釈を行う必要がある。少なくとも、住居址出土土器の組成が即その住居で使われた容器セットの組成を示しているとは、考えることはできない。

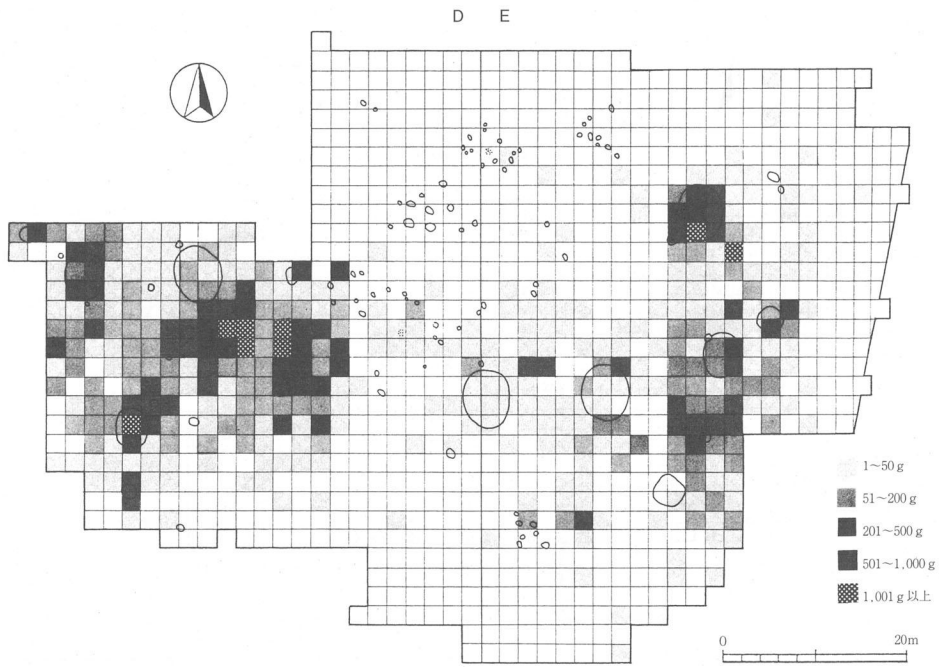
土器量の多寡を主たる根拠として、E区において4号住居址を古、6号住居址を新とする解釈を示した。同様にD区においては8号住居址が比較的古く、3・7号住居址がそれに続く新しいものと考えることができる。

以上の様にして引き出した古・新の別は、強引にすぎると思われるかもしれない。また住居廃絶時の古・新と、それぞれの住居の同時存在とは、同列に論じられない問題である。ここで最低限認識できることは、一土器型式内の、重複を持たない8軒の住居址ではあるが、少なくとも廃絶の時期を異にすると考えられることから、おそらく2～3の小時期に分けられること。つまり8軒の住居が同時に存在・機能したとは考えにくいということである。しかも、次の項でも述べるが、最も早く廃絶したと思われる4号住居址は、ほとんど埋没しきった後も廃棄の場となっていたと思われる。新道式期の最後の住居、おそらく6号住居址の時期には、4号住居址は既にほとんど埋没していたという事態も考えられる。即ち8軒の住居址は、それぞれその構築・廃絶の時期を異にし、時間差をもって継起した。2～3の小時期に分けられるということから、一小時期の住居の軒数は、少なくとも1軒、多くても4～5軒程度と考えるのが妥当であろう。

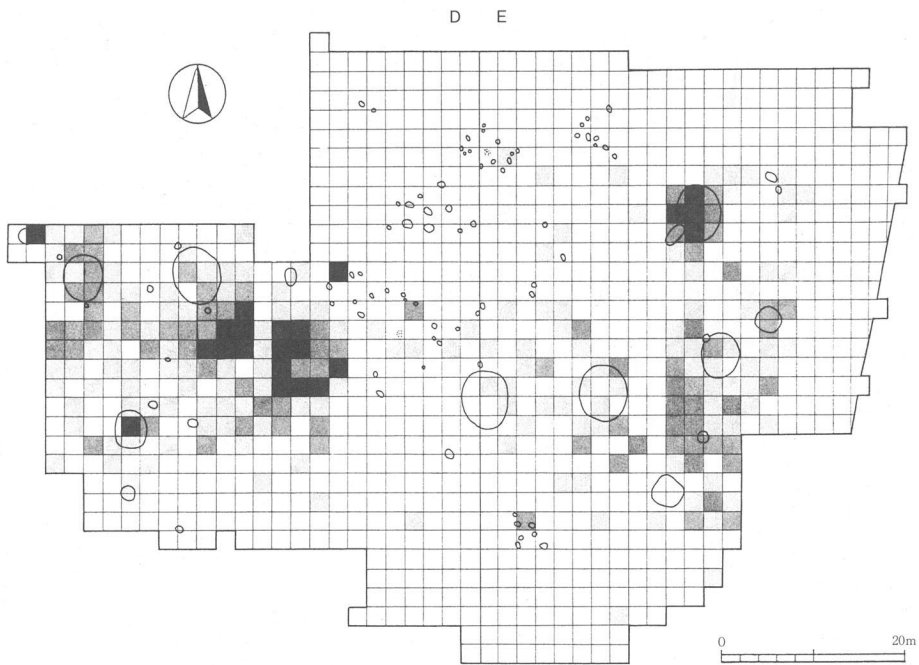
④ 遺構外出土土器の重量分布について

遺構外出土土器の重量分布はスクリーンを用いて図示してみた(第103図)。新道式段階の遺構外出土土器の総量は約63.7kg、遺跡全体の36.8%を占めるが、住居址に包含される土器量よりも少ない。D区総量45.2kg、E区総量18.4kgと、住居址出土土器で見た状況とは逆に、D区の方が多くなっている。

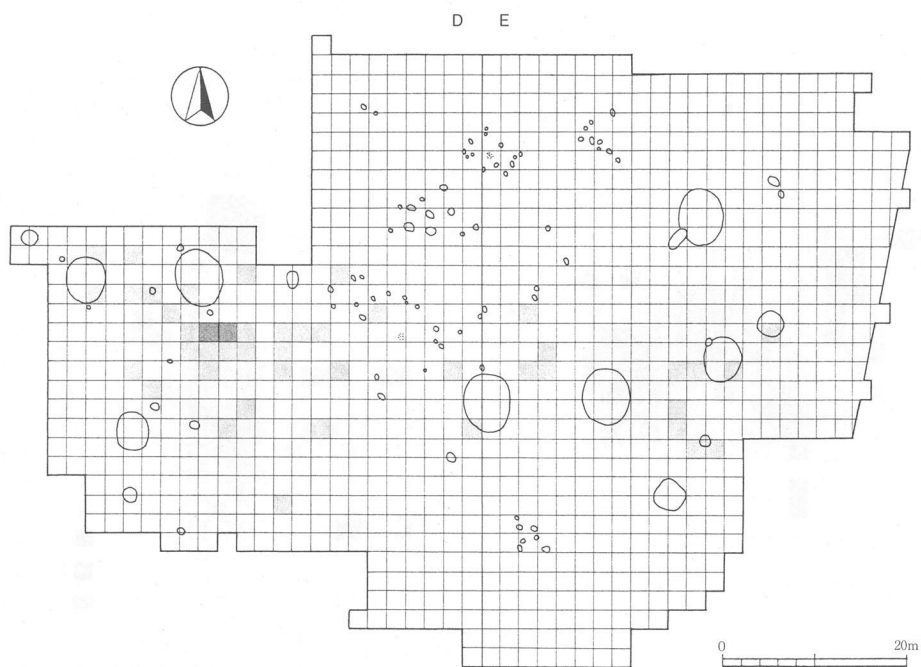
E区では、4号住居址が位置するグリッドに集中が見られる。これは4号住居址がほぼ埋没したころまで引続いて、そこが遺物廃棄の場として機能していたことを示しているのではなかろうか。D区では、3号住居址からみると南東・7号住居址からみると北東にあたる。ちょうど遺構



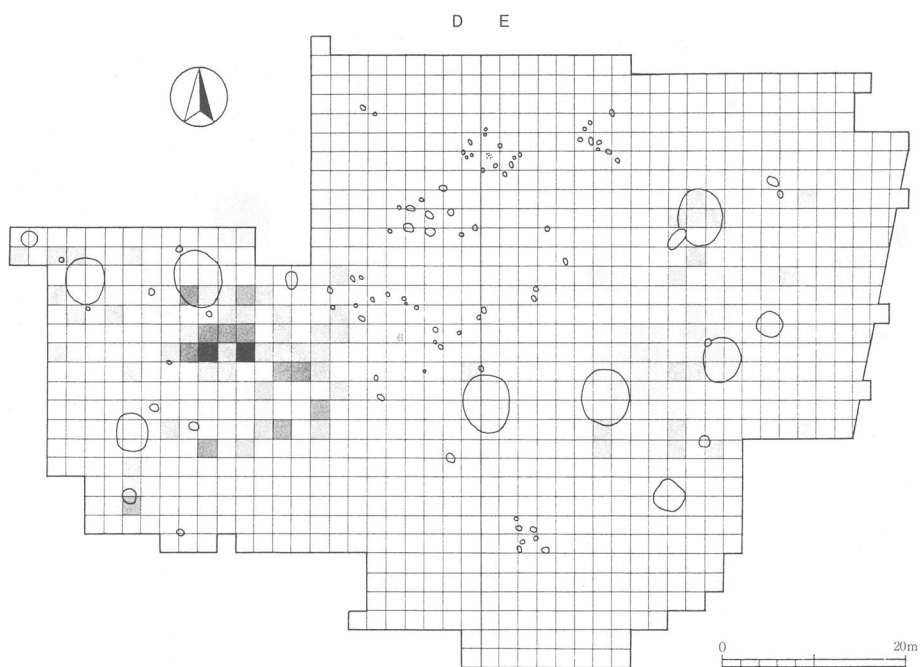
第103図 遺構外出土器重量分布・中期（新道式期）の土器全体



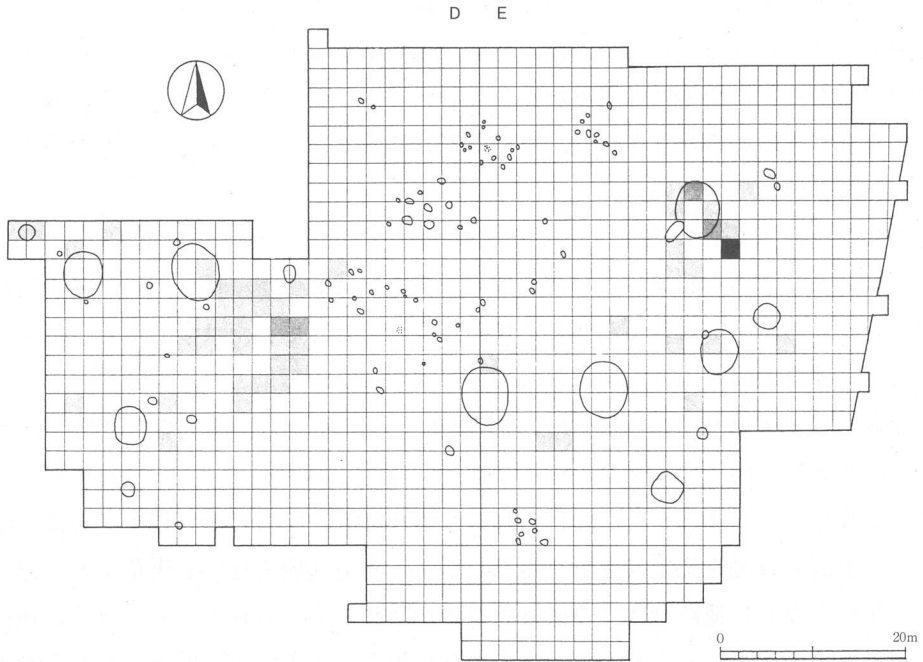
第104図 遺構外出土器重量分布・A横帯区画文系統+B抽象文系統の土器



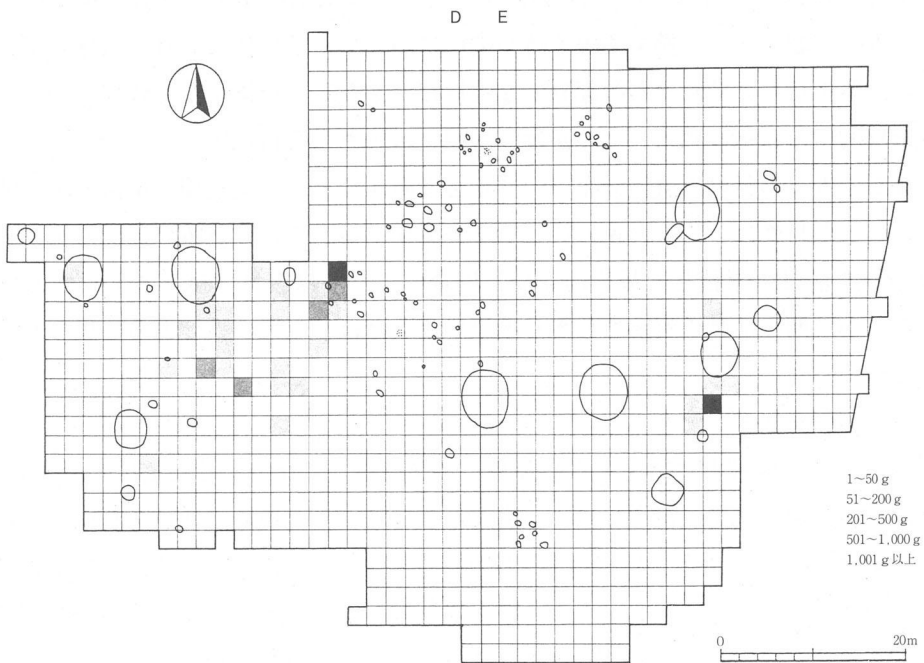
第105図 遺構外出土土器重量分布・D半隆起線区画文系統の土器



第106図 遺構外出土土器重量分布・E沈線文系統の土器



第107図 遺構外出土土器重量分布・F平出ⅢA系統の土器



第108図 遺構外出土土器重量分布・後期（堀之内式期）の土器全体

のない部分に、土器が集中している。この遺物集中箇所は、調査現場ではさして意識されなかったが、接合関係の図を作成している時、接合を示す線が集まることから注目された。なお、ちょうど集落の中央あたりには極端に土器量が少なくなっているが、既述の通り、この部分は攪乱が著しかったり重機による剥ぎ取りを行ったりした部分であるため、本来的に遺構外出土土器が少なかったかどうかは確認できない。

以上の様な集中状況を念頭に置きながら土器の系統別の分布を見ると（第104～107図）、系統による差異がほとんど認められないことに気付く。系統とは製作時に付与された属性から導き出したものであり、その時点では各々別個の意味とか背景をもっていたはずである。しかし使用の時点ではともかく廃棄の時点では、系統差は既に意識されなかったことになる。

あらゆる系統の土器が集中を見せるD区の遺物集中箇所は何を意味するか。何等かの作業の場であるとか、土器捨て場であるとか、様々な想定が可能であろうが、ここでは後期・堀之内式の破片も同じく集中してしまうことが注目される（第108図）。するとこの現象からは、堀之内式期の人々による土器の移動を想定せざるを得なくなる。新道式期の住居も唐草文系土器の住居も既に埋没し平坦面となり、遺跡全体に遺構外の遺物が散乱している状況であったこの地に、後期の人々が入り、何等かの目的から若干の遺物を取り集めた、その結果後期の土器を含む集中が現れた可能性がある。少なくとも土器の面からは、本遺跡の遺物分布に後期の人々の活動が介在したことを、否定することはできない。

堀之内式土器破片は全て遺構外から2.1kg出土している。磨消縄文を持つ破片を調べると、およそ3個体の別が確認できる。櫛歯条線を持つ破片についても2個体に分れる。確認できるだけでは数個体の土器を持ち、それぞれの部分的な破片だけを残し、遺構を全く残さなかった後期の人々が、何を目的にこの地に到来したのかは、不明と言わざるを得ない。

しかし、後期の人々の行動の遺物分布への介在を考慮すると、新道式期の集落の単一時期の様相に迫りたいとした目標は、さらに遠のいてしまう感がある。やはり遺跡における遺物分布は、遺跡で行なわれた活動の累積した最終的な姿、場合によっては後世の攪乱まで反映した姿であり、そこから一小時期の活動の痕跡を分離し抽出することは、至難の技であると思われる。

⑤ 石器の分布状況

各器種の遺構内と遺構外より出土する割合が、全器種均一でないことに気付く（表12）。遺構外の出土率は、石鏃が69.6%と極めて高く、磨製石斧は22.2%と極めて低い。石鏃については、遺構内よりも遺構外のサンプリングエラーの方が低いということはあまり考えられないので、この数値は本来の状況を示しているといえる。他の器種は、ばらつきがあるものの5割前後が遺構外より出土しており、ほぼ均一していると思われる。

まず住居址内出土石器についてみてみたい。時期の異なる2号住居址と覆土が削られてしまった10号住居址は別として、4号住居址は突出して石器が多く、次に1・3・4・8・9号住居址

表12 遺構内外の石器点数と出土比率

()内は合計に対するパーセンテージ

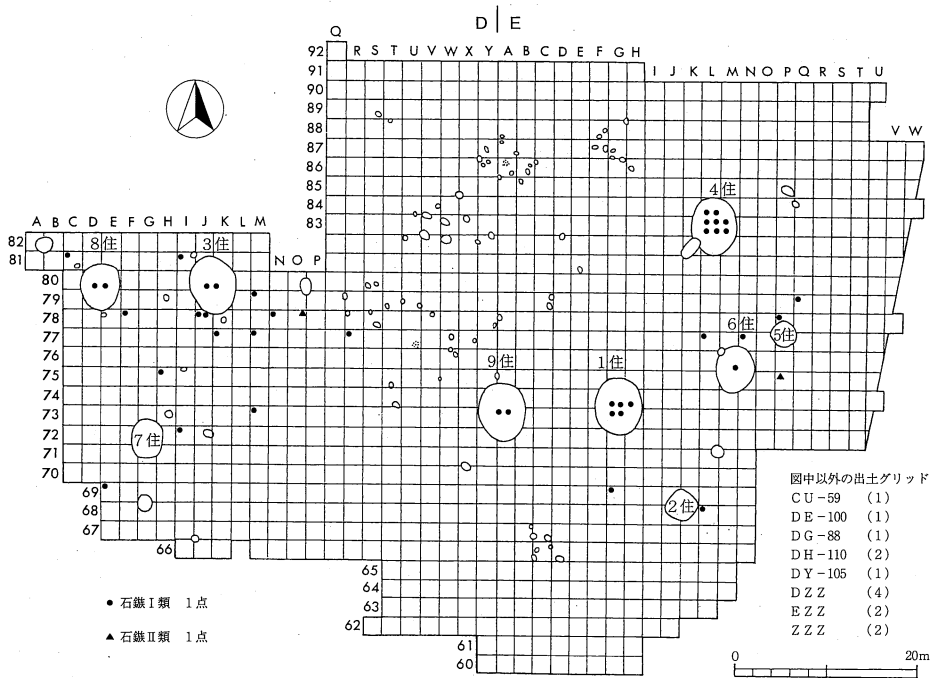
器種	石 鏃	石 匙 I	石 鏃	ビ エ ス ・ エ ス キ ー ユ	二 次 加 工 の あ る 剥 片	使 用 痕 の あ る 剥 片	打 製 石 斧	横 刃 形 石 器	石 匙 II	磨 石 凹 石	石 皿	磨 製 石 斧	原 石	石 核	黒 曜 石 剥 片	黒 曜 石 以 外 の 剥 片
出土遺構																
住居址内	16 (28.6)	2 (100)	3 (60.0)	65 (40.6)	12 (50.0)	15 (60.0)	38 (42.2)	33 (57.9)	6 (60.0)	34 (60.7)		13 (72.2)	10 (40.0)	22 (62.9)	991 (55.0)	87 (35.4)
小竪穴内							1 (1.1)			1 (1.8)		1 (5.6)				2 (0.8)
ローム・マウンド内	1 (1.8)									1 (1.8)						
遺構外	39 (69.6)		2 (40.0)	101 (59.4)	12 (50.0)	10 (40.0)	51 (56.7)	24 (42.1)	4 (40.0)	20 (35.7)	1 (100)	4 (22.2)	15 (60.0)	13 (37.1)	810 (45.0)	157 (63.8)
合計	56 (100)	2 (100)	5 (100)	166 (100)	24 (100)	25 (100)	90 (100)	57 (100)	10 (100)	56 (100)	1 (100)	18 (100)	25 (100)	35 (100)	1,801 (100)	246 (100)

が多く、6・7号住居址は少ない。3号住居址以外は土器の出土状況とほぼ一致する。剥片の数をみると、1・3・4・9号住居址が多数出土しているのに対し、7・8号住居址は極めて少ない。8号住居址からは比較的石器が出土しており、必ずしも石器と剥片の数は比例しないことを示している。

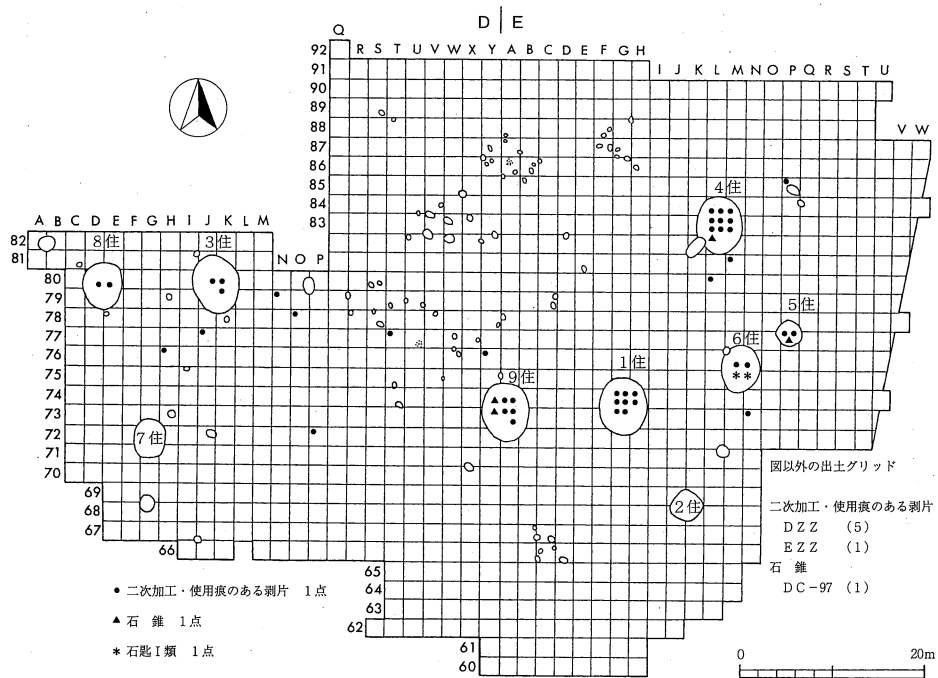
では、なぜ剥片の数に差があるのか。住居址内の剥片がまとめて廃棄されたということは否定できない。しかし、遺構外からも多数の剥片が出土しており、住居址内のもののみをまとめて廃棄されたものとするのは不自然である。当然流れ込んだ剥片もあると思われるが、住居址内より多数の剥片が出土するという事実は、その住居址内で石器製作が行われたことを示しているのではないだろうか。とすると、これらの住居址が同時存在したかどうかは別として、石器製作を頻繁に行う住居とそうでない住居があったといえる。7・8号住居址などは剥片が極めて少なく、石核と原石もみられない。石器製作が行われなかった住居なのであろう。

次に遺構外の石器を含めた分布についてみてみたい。前述したように、遺跡の依存状況と発掘精度に違いがあるので、図に示された分布が遺跡における本来の分布状況を示しているわけではないことを確認しておく(第109~117図)。

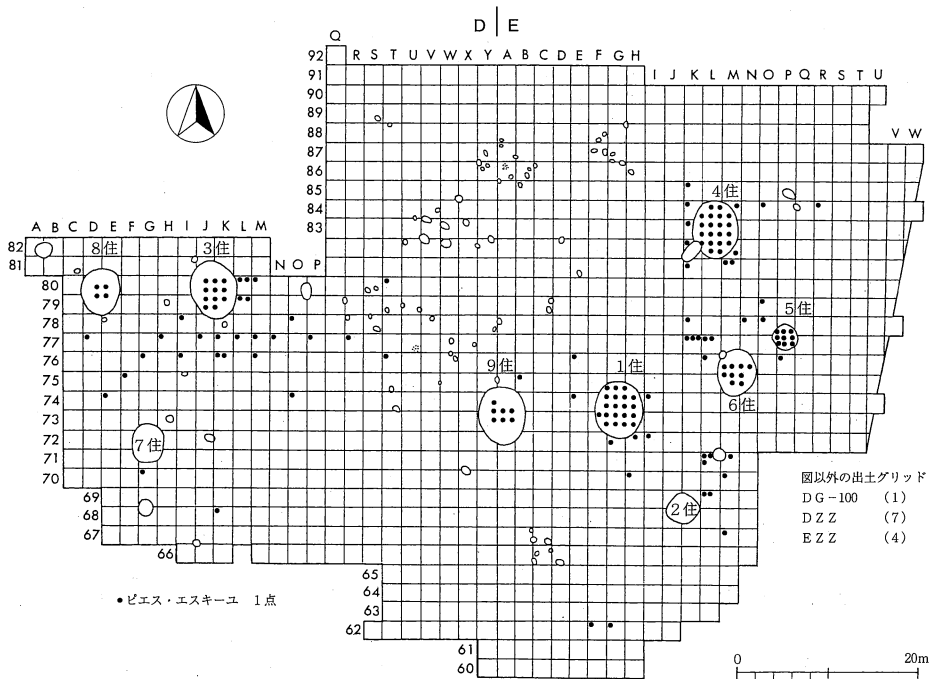
小形の黒曜石製の石器の分布を見ると、大半が住居址内またはその周辺に分布する。遺構外では、3号住居址の南側に比較的多く分布している(第109~111図)。打製石斧、横刃形石器、石匙II類も同様に大半が住居址内及びその周辺に分布する。そのなかでも打製石斧は比較的広範囲な分布を示すようである(第112・113図)。磨製石斧、磨石・凹石、石皿も同様に大半が住居址内及びその周辺に分布する。特にこの三器種は、他の器種のように、住居址からかなりはなれたところに1、2点出土するということがなく、分布範囲が住居址周辺に限られる(第114図)。石核と原石も大半が住居址内及びその周辺に分布している。EC-67と、EE-66グリッドに比較的大きな原石と石核が集まっているのが注意される(第115図)。しかし、発掘所見からは貯蔵されたような施設は確認されていない。剥片は広範囲に分布しているが、大半は住居址及びその周



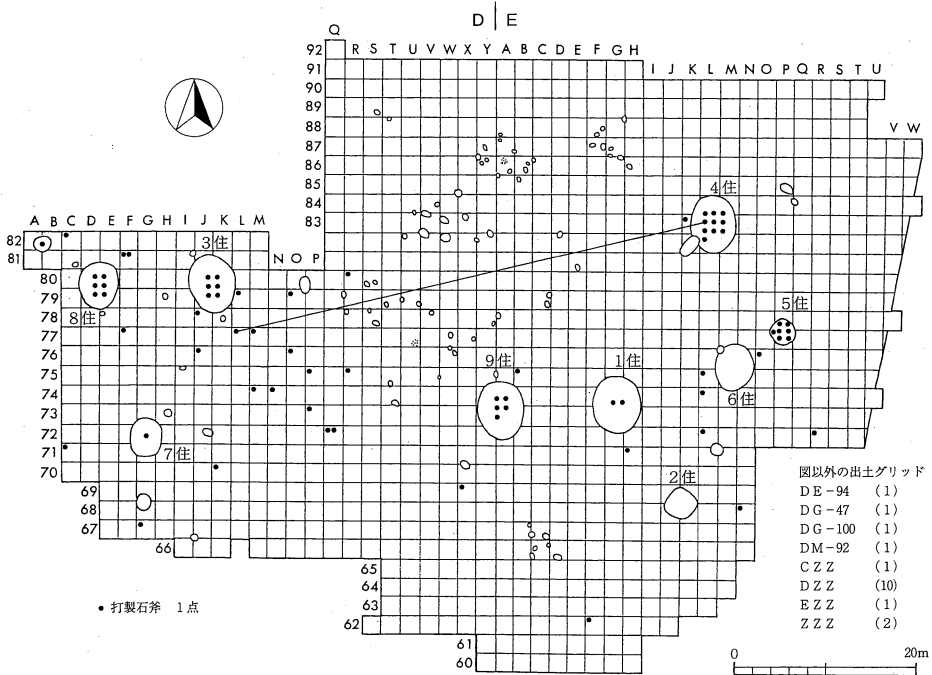
第109図 石鏃出土分布図



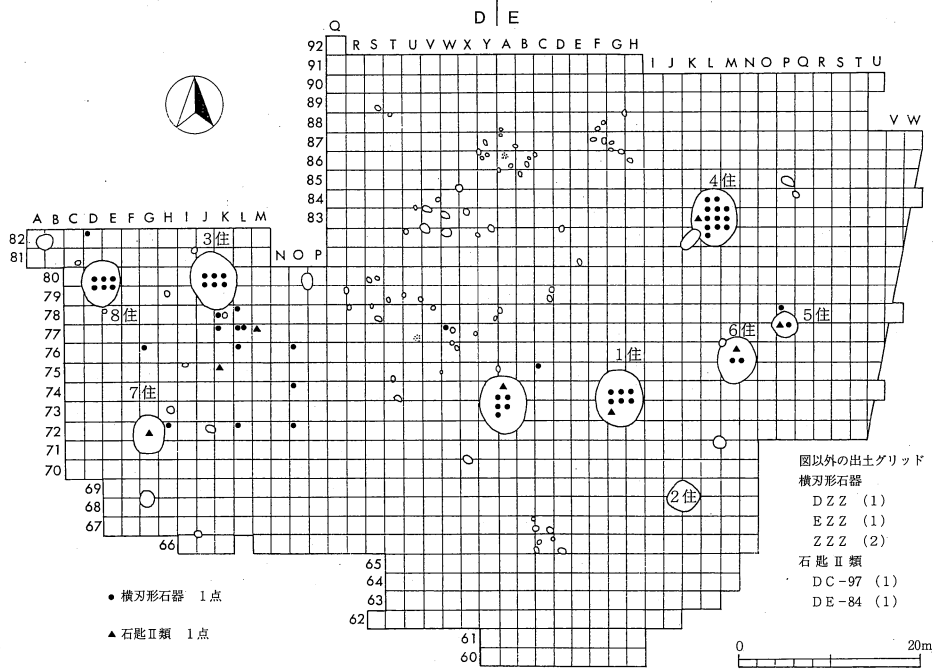
第110図 石鏃・石匙 I類出土分布図



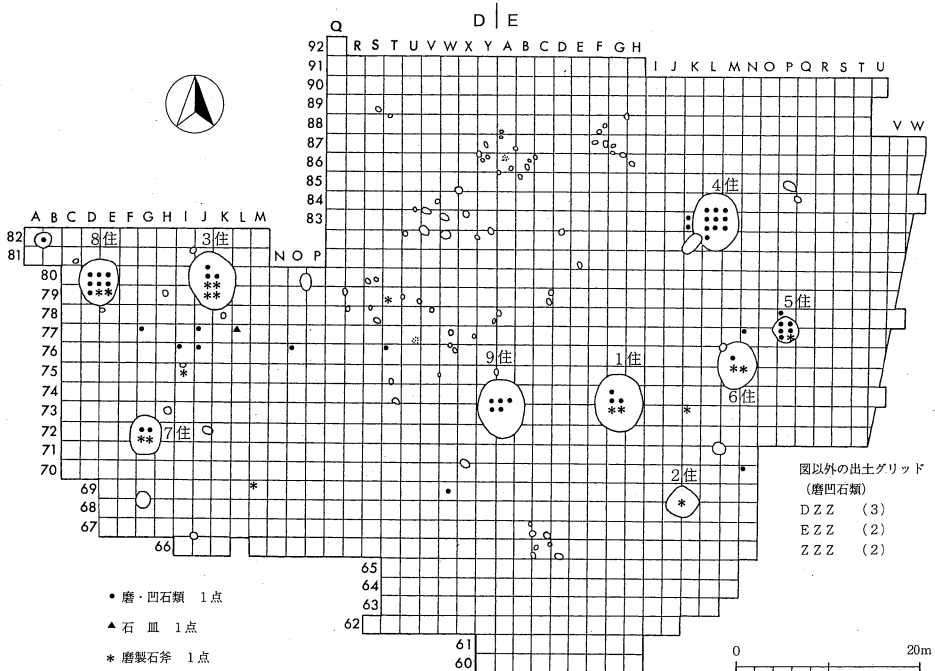
第111図 ピエス・エスキーユ出土分布図



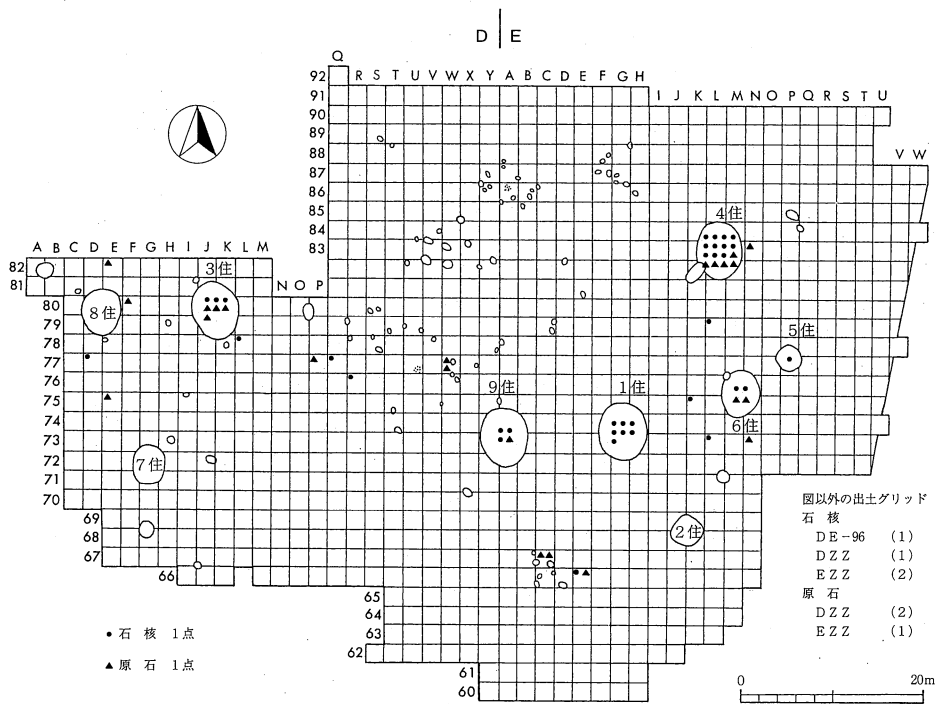
第112図 打製石斧出土分布図



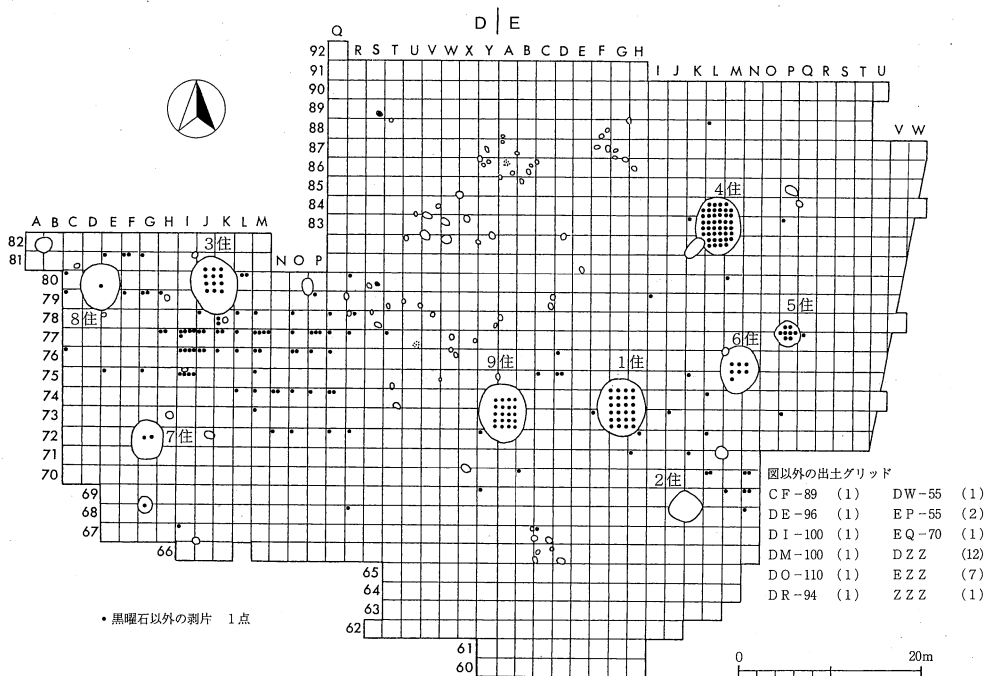
第113図 横刃形石器・石匙Ⅱ類出土分布図



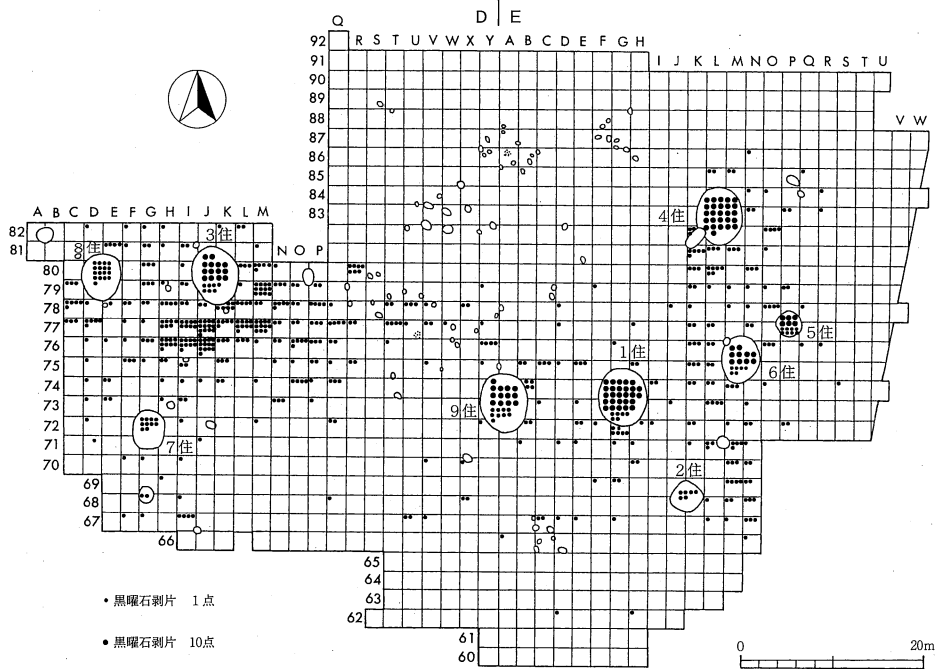
第114図 磨石凹石類・石皿・磨製石斧出土分布図



第115図 石核・原石出土分布図



第116図 黒曜石剥片出土分布図



第117図 黒曜石以外の剥片出土分布図

辺に分布する。遺構外では特に3号住居址の南側に集中している。また、5号住居址の東側では、剥片の分布は殆ど見られない。

剥片は他の石器と異なり人為的に片付けられないかぎり石器製作を行った場を示す資料となる。とすると、剥片の分布が示す範囲は、弓振日向集落に居住した人たちが、石器製作を行った場を示しているといえることができるであろう。さらに、剥片の分布範囲は石器・土器の分布範囲と一致している。これは、剥片の分布が示す範囲は、石器製作の場を示しているのみではなく、その空間が、日常生活の他の作業を行う場所でもあった、ということを示していると考えられる。そして、遺物が最も集中している3号住居址の南側は、頻繁に使用された空間（廃棄行為を含めた何らかの行為を行った空間）であった、と考えてよいのではないだろうか。土器の分析では、遺構外の土器集中部には後期の行為の介在が指定されているが、小形の剥片を拾い集めるとは考え難いので、後期の人の介在を考えるのであれば、遺物を含んだ土の移動を考慮すべきであろう。

(4) まとめ

土器及び石器の分布状況から、縄文時代の集落を理解するうえで、いくつかの課題を上げることができた。

一、弓振日向遺跡は、土器型式にして一型式という比較的短時間に営まれた集落跡である。検出

された8軒の住居址間の土器量の隔差は著しく、それは住居廃絶の時間差によると考えられる。つまり、8軒の住居址は同一土器型式期のものであるが、それぞれその構築・廃絶の時期を異にし、時間差をもって継起したものと考える。

二、本遺跡の8軒の住居は等質の機能を有していたわけではなく、剥片の出土状況に見られるように、少なくとも石器製作を行っている住居址と行わない住居址があったと考えられる。

三、本遺跡では遺物の分布範囲は、石器製作などの日常の作業空間を示し、遺構外で遺物の比較的集中している場所は、石器製作などの日常作業を頻繁に行なった空間であったと考えられる。

ここで取り上げた三点については、裏付けとなる資料を十分に提示できず、分析も不十分であった。特に、三については、僅かな量ではあるが、後期の土器を残した人々の介在もあり、現在の遺物分布状況が新道式期の人々の生活の痕跡をそのまま残しているとは即断できない。さらに検討していかなければならない問題である。

(山形・鶴田)

VII 結語

遺跡は、昭和59年度に行った踏査で土器破片と石器を採集し、昭和60年度に実施した範囲確認調査では縄文時代中期住居址が確認できた新遺跡であるが、本調査では、先土器時代と縄文時代の複合遺跡であることが明らかになった。

調査は、発掘調査の経過でも触れたが、整備事業にたいする反対者もあり、問題をかかえたままの着手であり、計画通りに作業が進まず一時現場を引揚げた時期もあり、作業は遅れがちであった。

調査終盤には、思いもしなかった先土器時代の遺跡が複合していることが明らかになり、関係機関による保護協議が開かれ、村教育委員会では先土器時代の調査にあたり調査団の再編成を行なった。しかし、工事はすでに進んでおり調査対象地だけが高台として残された状態であり、寒風が吹き抜ける最悪な状況であったが調査を終了することができた。

村内における先土器時代遺跡の発掘調査は、昭和54年度の向尾根遺跡と同58年度の広原日向遺跡があるが、両遺跡とも本調査同様に縄文時代の遺跡調査で確認したものである。たまたま縄文時代と複合していたことで明らかにできたが、先土器時代単独の遺跡も容易に考えられることであり、遺跡把握をどのようにしていくのか大きな問題が提示された調査でもあった。

縄文時代は、中期中葉新道式の単純集落址で住居址の重複はなく、当時の姿を今日に伝える貴重な遺跡である。開発に先立つ調査で数多い貴重な資料を得ることはできたが、遺跡はすでに消滅してしまい失ったものはあまりにも大きいようである。

先土器時代、縄文時代とも極めて良好な資料である。中でも先土器時代については多くの研究